Ｌ類（570～573）８点＜細分不明３点含む＞

Ｌ類は，脚部に大型の長方形透かしを配する小型高杯で，さらに細部形態により細分される。

Ｌ－１類（570）１点

丸みを帯びた底体部から，口縁部は外反しながら上方にのびる。体部との境界に巡る稜は鋭く，境界から底部には板状の把手が片面に付く。脚部の透かしは方形に近く，５方に配している。

Ｌ－２類（571・572）３点

口縁部は底体部からそのままのびる。口縁部と体部の境界には凸帯が巡り，体部には刺突紋を施す。把手は残存していないが，残存部の状況から断面円形のものが片面に付くと考えられる。脚部は直接接合しないが，570と類似する572が伴うと推定される。

Ｌ－３類（573）１点

杯部の器形はＬ－２類と似るが，底部がやや扁平である。脚部は完存していないが，４本の細い脚柱がのびている。また，脚柱は外内面とも面取りが施されている。

Ｍ類（567・568）３点

杯部内面の底部に円形の段を有するものである。外面は波状紋や鋸歯紋で飾られ，段の中心部は環状に脚柱部まで貫通していた可能性が高い。高杯よりも器台のような用途が考えられる。

Ｎ類（574・575）３点

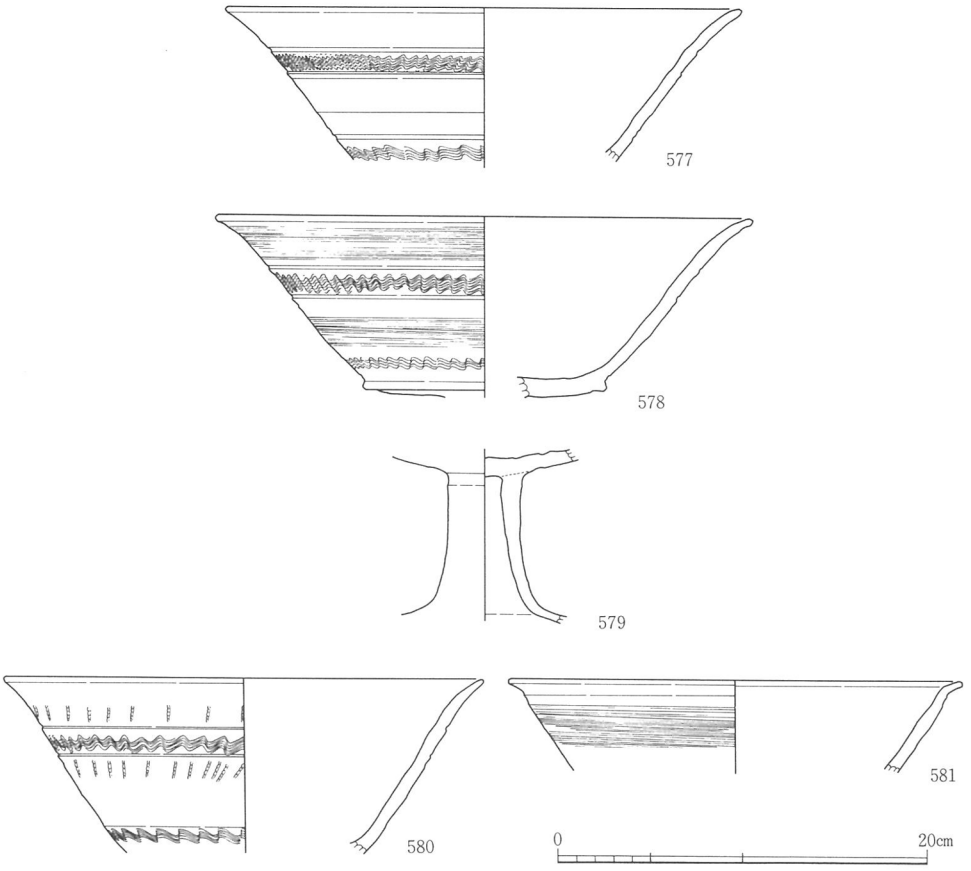
高杯の中に含めたが，脚台付鉢と呼称されるものである。

Ｏ類（576）１点

高杯の中に含めたが，脚台付鉢と考えられる。小破片のため全体器形は把握できないが，鉢部は丸みをもち外面には低い凸帯を数条巡らせる。

Ｐ類（577～581）15点

大型高杯である。杯部は刺突紋，波状紋，カキ目など須恵器にみられる紋様で飾られているが，器形は扁平な底部から口縁部が直線的に大きくのび土師器と酷似する。さらに，焼成も窖窯で焼成されているにもかかわらず，すべての破片は赤焼けである。つまり，Ｐ類は器形だけでなく，意図的に酸化焔焼成のみで赤焼けに仕上げている可能性が高く，土師器を強く意識した製品と言える。



第78図　ＴＧ232号窯出土須恵器（無蓋高杯４）Ｓ＝1/4

高杯脚部（第79～81図－582～627，図版86～89）197点＜分類不明８点含む＞

Ａ類（582～587）64点＜細分不明14含む＞

長方形の多窓透かしのもので，透かし孔や脚裾端部の形態により細分される。杯部形態は有蓋高杯Ｂ類と考えられる。

Ａ－１類（582～584）21点

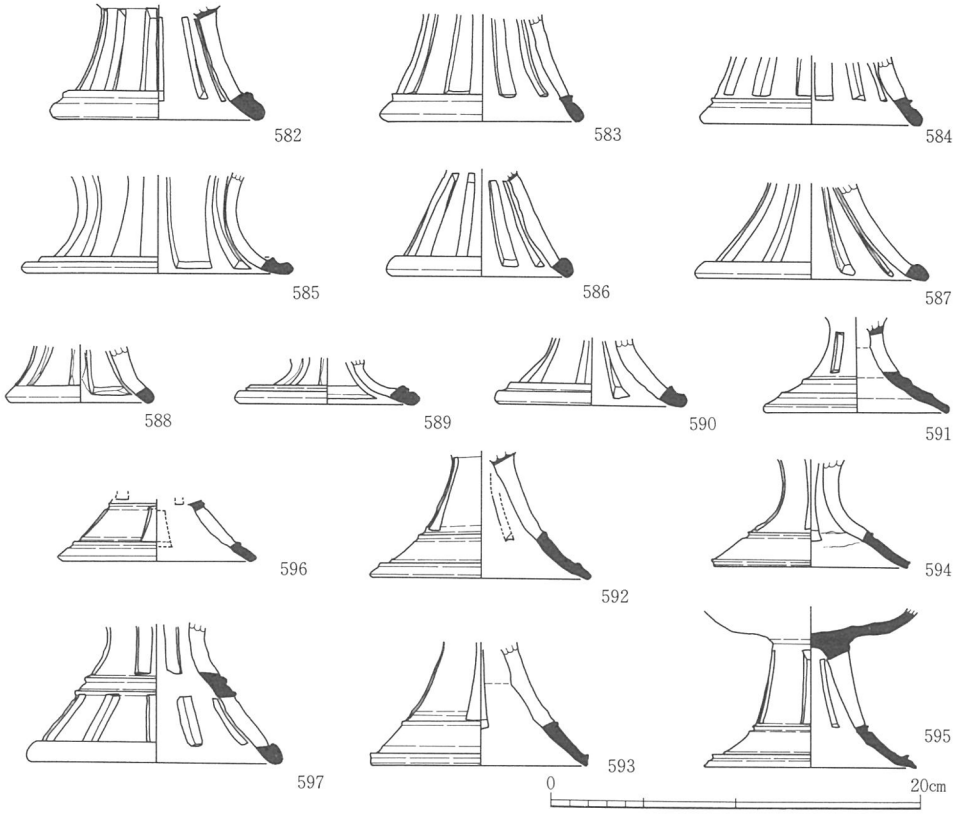
裾端部のやや上方に凸帯を巡らすものである。透かし孔は細長く，数は10～12方と多い。

Ａ－２類（585）11点

裾端部はＡ－１類と共通するが，透かし孔がやや広くなり，数も9方と少ない。

Ａ－３類（586・587）18点

裾端部を単に丸く肥厚させるものである。透かし孔はＡ－１類と共通し，細長く数は10～11方と多い。



第79図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯脚部１）Ｓ＝1/4

Ｂ類（588～590）35点＜細分不明４点含む＞

小型高杯の脚部で，無蓋高杯Ｌ類に伴うと考えられる。幅広方形の透かしが特徴で裾端などの形態により細分される。

Ｂ－１類（589・590）10点

裾端部のやや上方に凸帯を巡らすものである。

Ｂ－２類（588）21点

裾端部を単純に丸く仕上げるものである。

Ｃ類（591～595）25点＜細分不明９点含む＞

裾の上端に凸帯を巡らし，柱部に長方形透かしを３～５方に配するものである。有蓋高杯Ｃ類に伴うと考えられる。

Ｃ－１類（592・595）２点

裾端部は口唇状に丸く仕上げ，そのやや上方に凸帯を巡らせるものである。

Ｃ－２類（593・594）13点

裾端部を平らな面をもって仕上げるものである。Ｃ－１・２類とも有蓋高杯Ｃ類に伴うと考えられる。

Ｃ－３類（591）１点

Ｃ－１・２類に比べ透かし孔が短く，裾部の凸帯の位置も異なる。また，凸帯の稜も鈍い。伴う杯部形態については不明である。

Ｄ類（596・597）２点

長方形透かしを千鳥状に数段配するものである。有蓋高杯Ｄ類に伴うと考えられる。

Ｅ類（598～616）44点＜細分不明18点含む＞

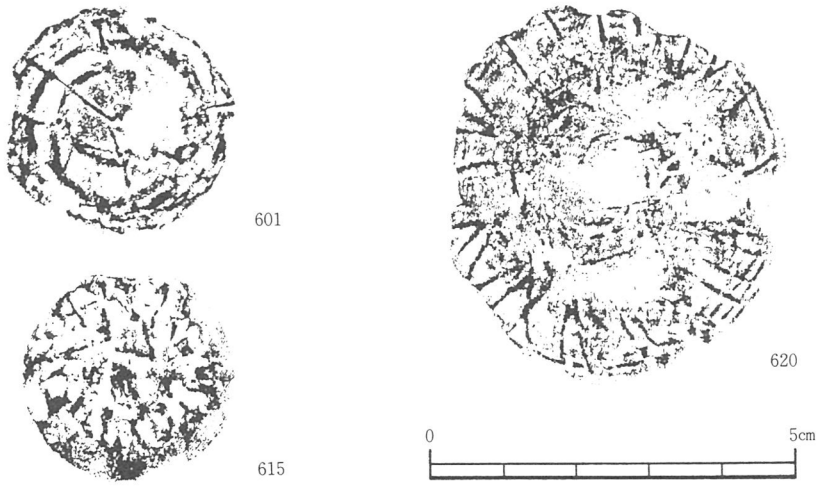
脚柱部は細く，脚裾の上端付近に凸帯を巡らせるものである。裾の形態，透かし，凸帯の位置などにより細分される。無蓋高杯Ａ類・Ｂ－１類に伴う可能性が高い。

Ｅ－１類（598～606）16点

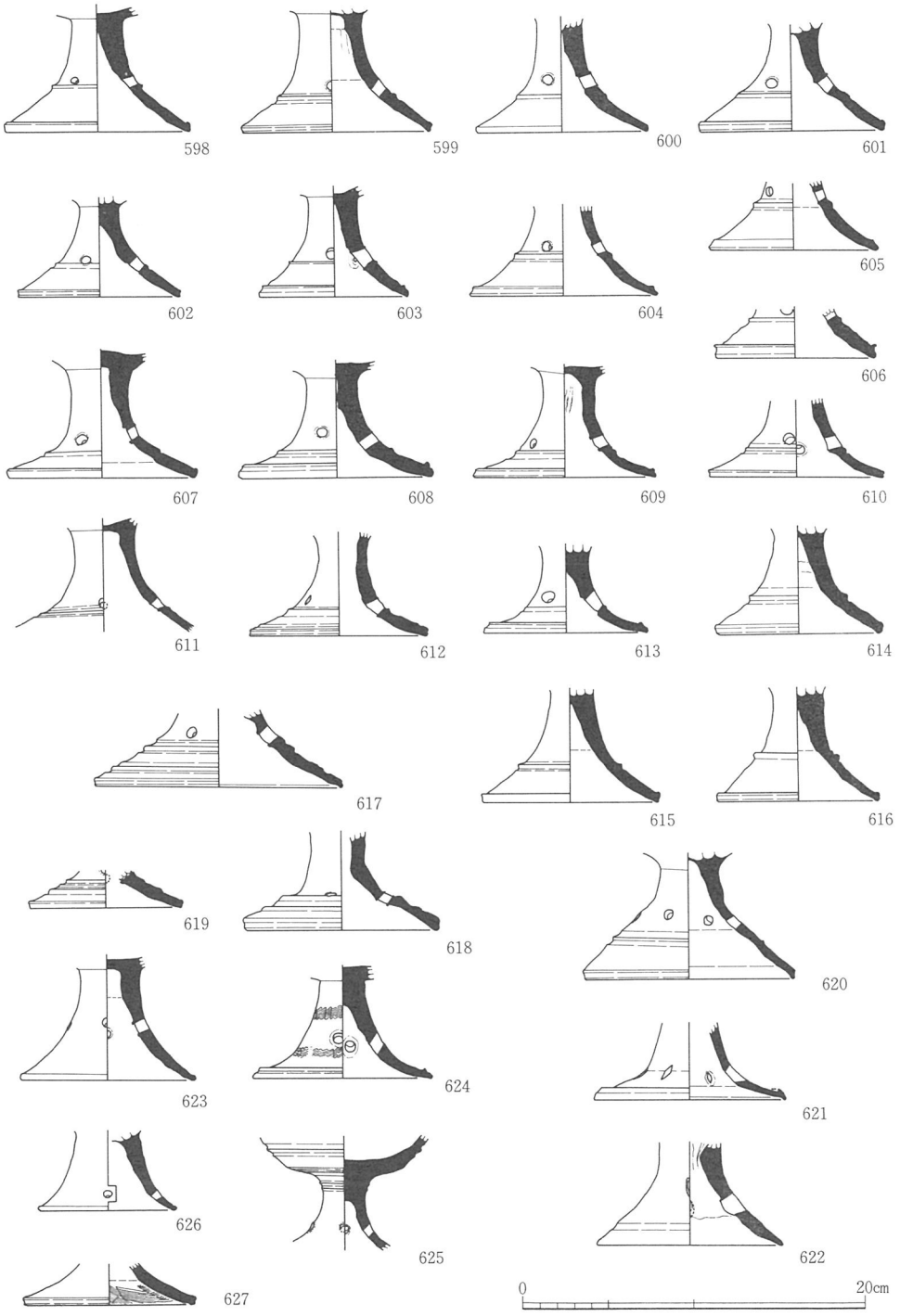
脚裾上端部付近の凸帯が比較的高い位置にあるものである。脚端部は，丸く仕上げすぐ上方に凸帯を巡らすものと平らな面をもって仕上げるものがある。透かしは円形のものを３～４方に配する。また，脚柱部で特に細いもの（600）の内面には，棒状の工具で突いたような小孔が観察されるものがある。

Ｅ－２類（607～613）10点

Ｅ－１類に比べ，裾の開きが大きく，上端付近の凸帯も低い位置にあるものである。脚



第80図　高杯接合部拓影（脚部）



第81図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯脚部２）Ｓ＝1/4

端，透かし，脚柱内面の特徴はＥ－１類と共通している。

Ｅ－３類（614～616）４点

透かし孔の無いものである。裾の広がり，凸帯の位置などその他の諸特徴はＥ－１類と共通する。

Ｆ類（617～619）３点

大きく開く脚裾部に，数条の凸帯を巡らすものである。凸帯はＥ類に比べ稜は鈍い。

Ｇ類（621）２点

屈曲して開く裾部の端部が凸帯状に上方にのび，裾部には菱形の透かしを配する。無蓋高杯Ｄ類に伴うものである。

Ｈ類（620・622～627）10点

その他の形態である。620は短い柱部から裾部が大きく開く。622は裾の形態に差異はあるが，菱形透かしを配し無蓋高杯Ｄ類に類似する可能性がある。623・624は裾上端部に凸帯を巡らさないものである。626は小型で裾があまり開かないものである。627は裾部の小破片であるが，内面に土師器によくみられるハケ目調整が認められる。

小型壺（第82・83図－628～683，図版90～93）146点

小型壺は154点（口縁～体部９点，体部51点，口縁部94点）出土している。しかし，小型器種の中でも，特にこの小型壺は全体の器形が把握されるものが少ない。ここでは，全体の把握できるものを基準にし，口縁，体部に分けて分類を行っている。

Ａ類（628～630・633～635）20点＜細分不明３点含む＞

瓌をＡ類としたが，全体が把握されるものは２点しかない。体部片の633～635も円孔がなく確実ではない。

Ａ－１類（628）１点

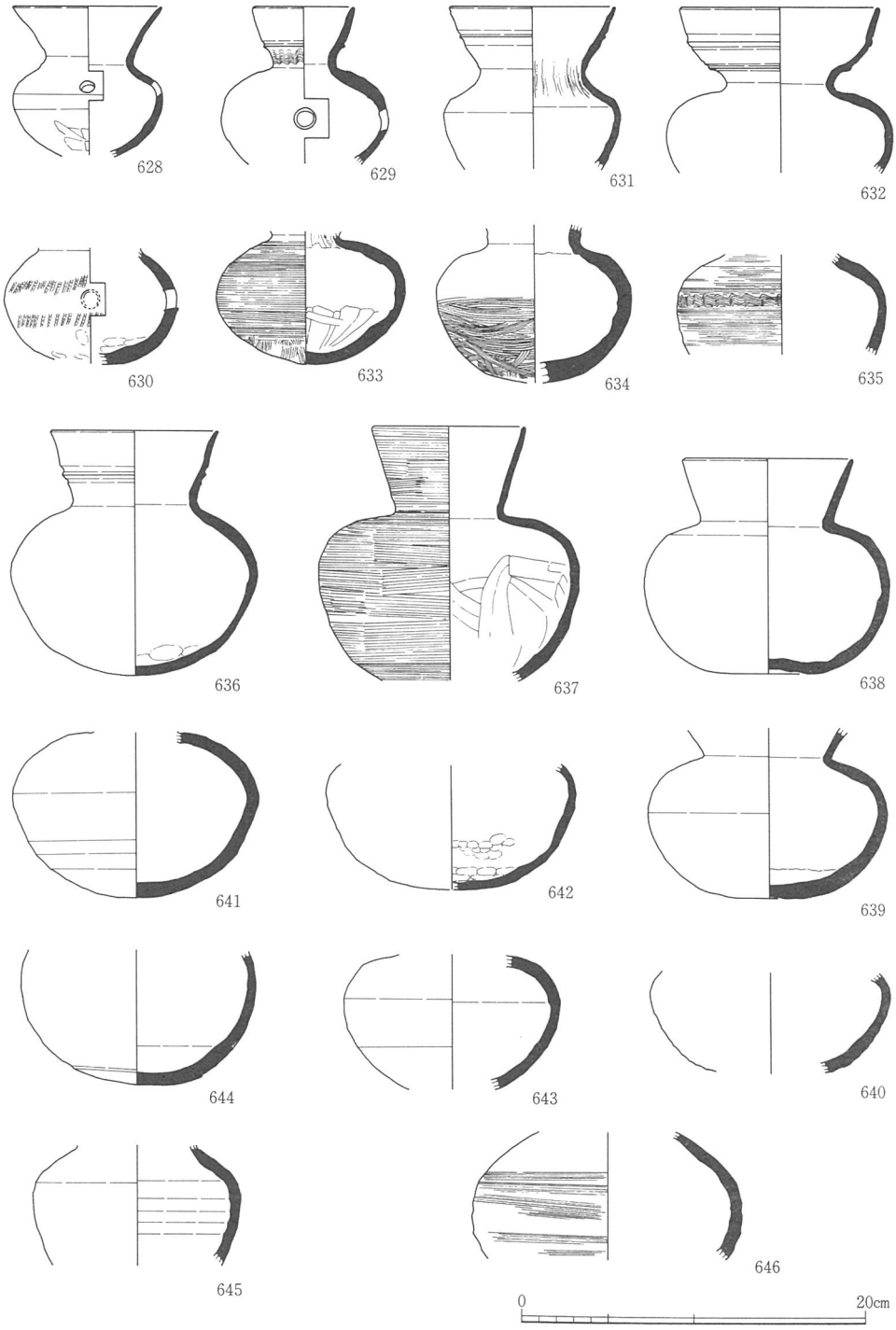
直線的に開く口頸部のものである。円孔は体部の上方に位置している。

Ａ－２類（629）１点

口縁部は細く直線的にのび，口縁部と頸部の境界には段状に凸帯が巡る。頸部は波状紋で飾られる。体部は最大径がほぼ体部中央にあり，円孔も体部中央に配する。

Ａ－３類（630）１点

口頸部は欠損するが，体部は肩部に張りがなく下膨れの感を受ける。円孔は体部中央に配し，底体部には円孔を挟んで刺突紋が２列に巡る。



第82図　ＴＧ232号窯出土須恵器（甕・小型壺）Ｓ＝1/4

Ａ－４類（633～635）16点＜Ａ－３類と細分不明の13点含む＞

底体部の肩部が張る形態である。

Ｂ類（631・632）２点

小型の広口壺で，口径が底体部の割に大きいものである。体部が完存していないので確実ではないが瓌の可能性もある。

Ｂ－１類（631）１点

口頸部は直線的に開き，口縁部と頸部の境界には凸帯が巡る。頸部と体部の境界には接合時の絞り目が残り，体部の肩部は直線的な張りをもつ。

Ｂ－２類（632）１点

大きく開く頸部から，口縁部は屈曲して直立気味にのびる。凸帯は口縁部と頸部の境界の他に頸部の下方にも巡る。

Ｃ類（636）１点

直口壺である。口頸部は口縁と頸部の境界に凸帯を巡らし，若干の段を有する。体部は肩部の張りが小さく，なで肩である。

Ｄ類（637・638）４点

直口壺である。口頸部は直線的に開きながらのびる。

Ｄ－１類（637）２点

口頸部は細長くのび，体部は肩部が大きく張る。なお，637は全体にカキ目を施すが通有ではない。

Ｄ－２類（638）２点

口頸部は口径の割に短い。体部は中央付近が大きく張り出し，やや扁平な感を受ける。

小型壺底体部（639～646）34点

口頸部の形態が不明のため分類を行っていないが，体部の形態からは639・640はＤ－２類，642はＤ－１類，641はＣ類の可能性が高い。その他については不明である。

小型壺口縁部（647～681）

小型壺は口縁部の出土量が多く，ここで，口縁部形態の特徴から分類を行っておく。

Ａ類（647）４点

頸部から口縁部が屈曲して直立気味にのびる。底体部の残存しているＢ－２類（632）

第83図　ＴＧ232号窯出土須恵器（小型壺口縁部）Ｓ＝1/4

と同形態と考えられる。

Ｂ類（648～656）27点＜細分不明２点含む＞

口縁部がラッパ状に大きく開き，口縁部と頸部の境界に凸帯を巡らすものである。境界で小さな段を有するものと無いもの，有紋と無紋のものに細分される。Ｂ類は法量，器形の特徴から全体器形が復元されたＣ類の口縁部と考えられる。

Ｂ－１類（648～650）７点

頸部からそのまま口縁部がのびる形態である。

Ｂ－２類（651～654）16点

頸部と口縁部の境界に段を有する形態である。

Ｂ－３類（655・656）２点

頸部と口縁部の境界に段を有し，口縁部を紋様で飾る形態である。

Ｃ類（657・658）12点

Ｂ－２・３類と同様に，頸部と口縁部の境界に小さな段を有するが，口縁部の開きは小さく，紋様も口縁部だけでなく頸部にも施す。法量などからは瓹（小型壺Ａ類）の口縁部の可能性がある。

Ｄ類（659～662・666）６点

口頸部は細長く直線的にのび，凸帯によって区画された紋様帯には波状紋を巡らす。この形態の口頸部は，参考になる完形品が出土していないため不明な部分が多いが，頸部径からは，小型壺の中でも小振りの製品であることがうかがえる。

Ｅ類（663～665）５点

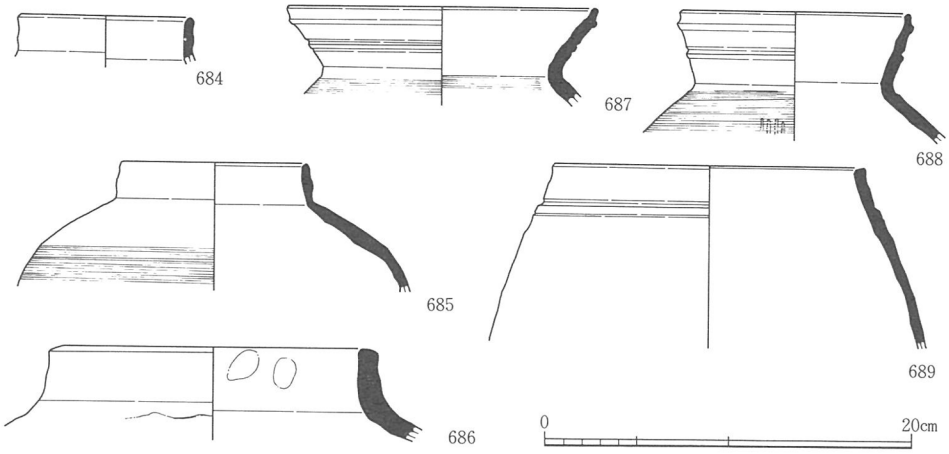
口縁部は大きく開いてのび，頸部の境界には明確な段をもつ。また，口縁部には，波状紋を巡らせ，紋様帯は凸帯によって区画されている。この形態も全体が復元されるものは出土していない。

Ｆ類（670～681）32点＜細分不明３点含む＞

直線的に開きながらのびる直口壺の口頸部で，ほとんどのものは完形品のＤ類の口縁部と考えられる。また，Ｆ類は法量，細部の特徴から細分される。

Ｆ－１類(670～673) ９点

口径７㎝前後の小型品である。671・672が通有の形態と考えられるが，口縁端部を外反させるもの（670），細長いもの（673）もある。なお，Ｆ－１類の全体器形の参考となる製品は出土していない。



第84図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺）Ｓ＝1/4

Ｆ－２類（674～677）10点

口径10㎝前後の中型品で，全体が復元されるＤ－１類の口縁部と考えられる。なお，674は口縁端部を外反させ，頸部を波状紋で飾るなどの特徴を有し，675～677とは異形態の可能性もある。

Ｆ－３類（680～683）７点

口径12㎝前後の大型品で，全体器形の復元されるＤ－１類の口縁部と考えられる。

Ｆ－４類（678・679）５点

口径10㎝を越える大型品で，Ｆ－３類に比べ口縁部の開きが大きい。

Ｇ類（667～669）３点

その他の形態である。667は頸部が短く直立する。668は短い口縁部が外反しながら大きく開き，甕の口縁部の可能性が高い。669は短く直立する口縁部に波状紋を巡らしている。

壺・その他（第83図－684～689）

短頸壺（684～686）７点

口径10㎝前後の小型品と口径18㎝の大型品がある。686は全体の成形や調整が粗い。

壺（687・688）２点

口頸部が外方向に短くのび，頸部中央付近には凸帯を１条巡らす。

異形鉢（689）１点

残存部の体部は樽状を呈し，口縁部との境界には小さな段がある。

器台（第85～107図－690～735，図版94～105）

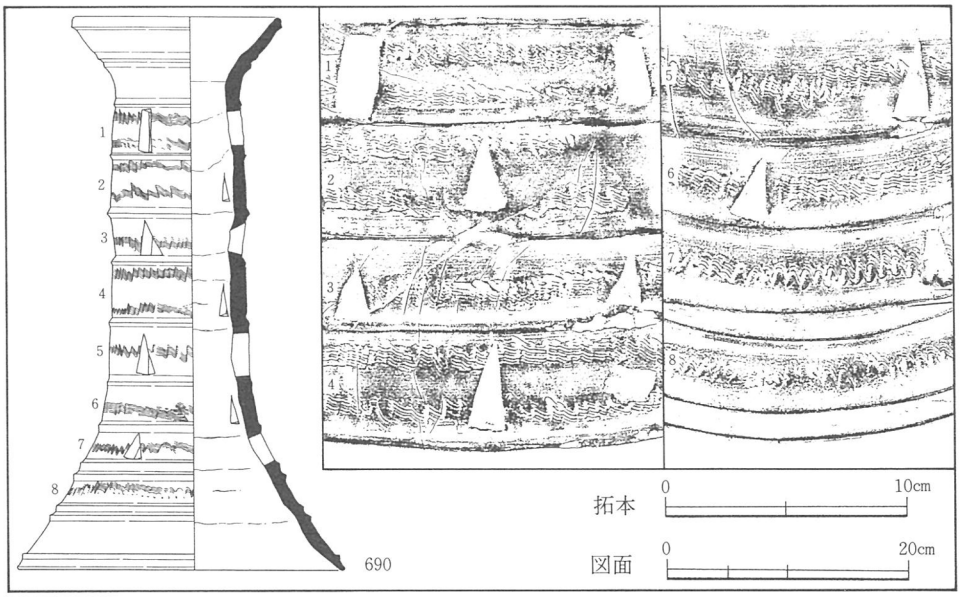
器台には筒形器台と高杯形器台がある。筒形器台と認識できたものは図示した５点のみで，他は高杯形器台と考えられた。なお，高杯形器台の出土点数は，総数で232点（杯～脚10点，杯114点，脚107点）である。以下筒形器台，高杯形器台，脚部の順で分類を行う。

筒形器台（第85・86図－690～693，図版94）５点

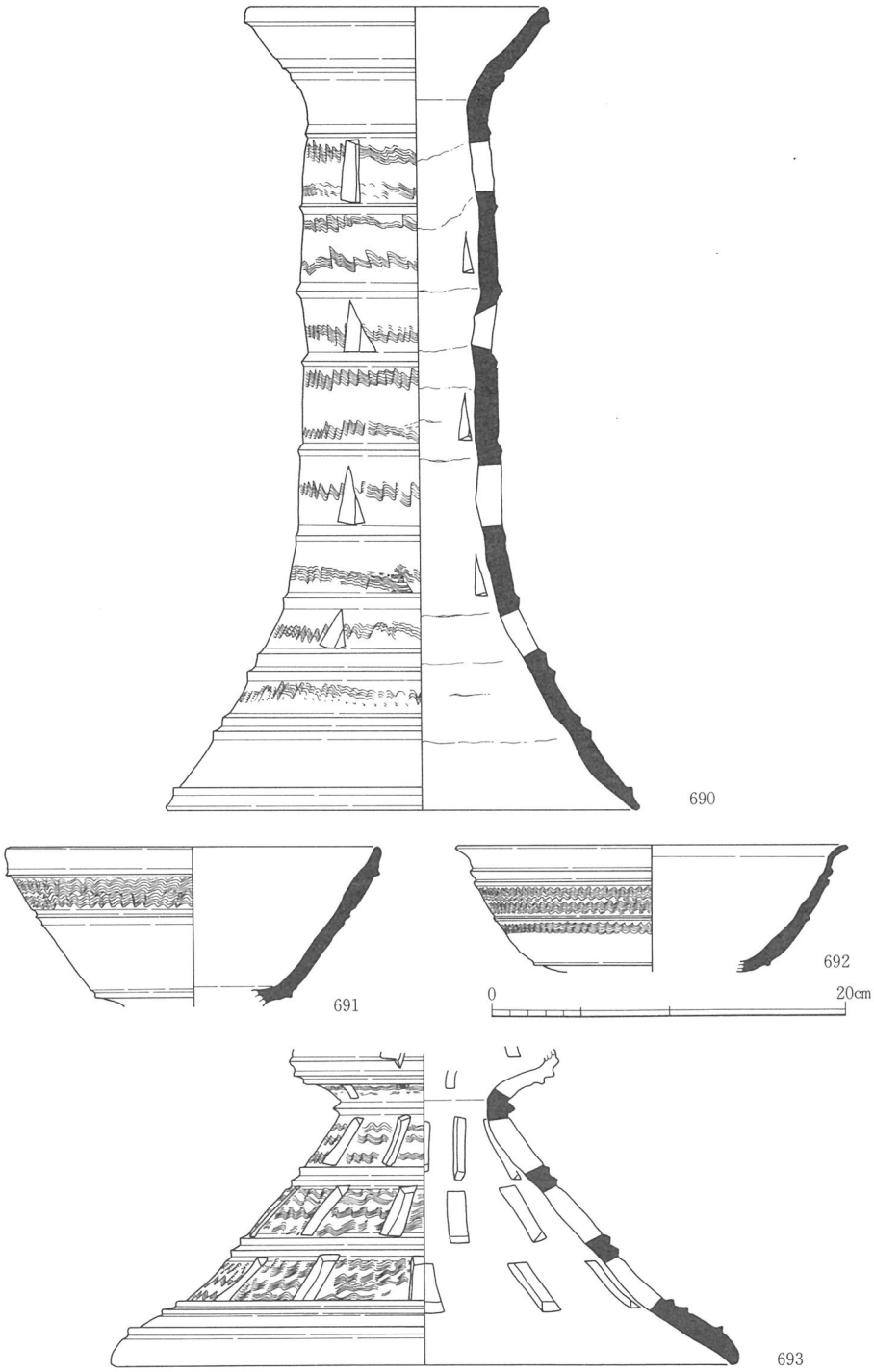
筒形器台には２形態のものが存在する。

Ａ類（690）１点

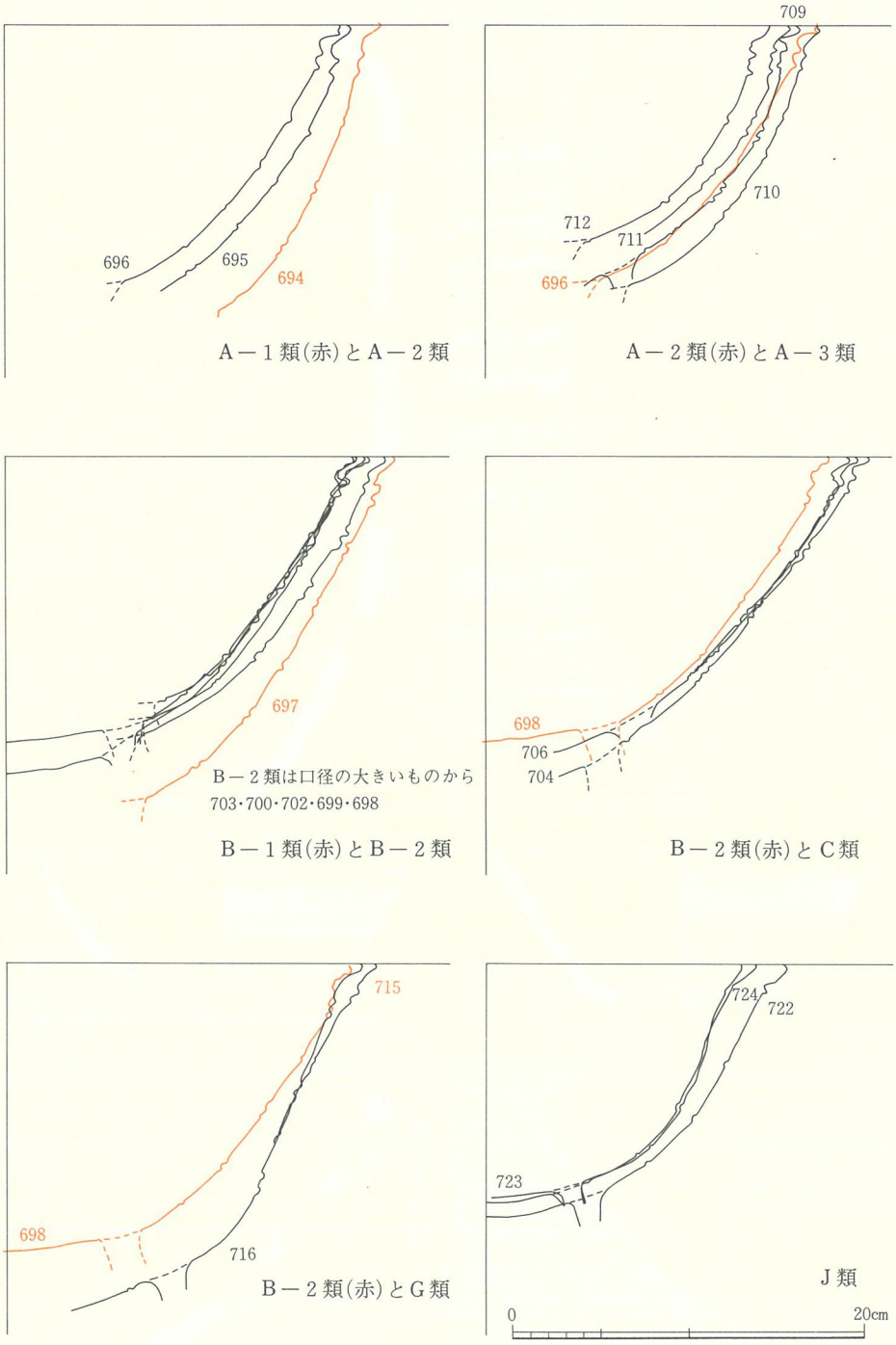
受部は筒部から屈曲しラッパ状に開き，脚部は筒部から下方に向かい徐々に開く形態である。ラッパ状に開く受部は，頸部付近に凸帯を巡らせ口縁端部はやや下方に垂下させたような平らな面をもっておさめる。円筒状の筒部から脚部にかけては，凸帯により９段に区画され，１から８段目までに波状紋が施される。施紋状況は乱雑である（第85図拓本参照）。透かしは，最上段は長方形透かしを５方に，以下２～７段目までは三角形透かしを５方に千鳥状に配し，脚部に当たる８段目以下には透かしは入れられていない。また，凸帯は筒部では１条であるが，脚部では２条を一単位として巡らせている。脚端は口唇状に丸みをもち，稜の鋭い凸帯を巡らせる。



第85図　器台紋様拓影（１）



第86図　ＴＧ232号窯出土須恵器（筒形器台）Ｓ＝1/4



第87図　高杯形器台分類図

Ｂ類（691～693）４点

受部は鉢状を呈し，脚部は筒部から明確に屈曲して裾部が大きく開く。筒部については，完形に復元できるものがなく不明であるが，凸帯によって数段に区切られ，透かしや波状紋などの紋様によって飾られていたと推定される。

高杯形器台（第87～105図－694～724，図版95～104）128点＜分類不明70点含む＞

杯部から脚部までの完形品に復元できるものは数が限られるため，ここでは杯部の断面形態を基本とした分類を行っている（第87図分類図参照）。

Ａ類（694～696）19点＜細分不明12点含む＞

底体部に丸みを帯びる形態である。

Ａ－１類（694）１点

杯部は深く，底部付近の張りが大きい。口縁部は「く」の字状に外反させ，端部は口唇状に丸くおさめる。紋様帯は凸帯によって４段に区画され，上から波状紋，鋸歯紋，斜格子紋，刺突紋で飾られる。施紋状況（第98図拓本参照）は，波状紋は他に比べて大胆に施され，鋸歯紋や斜格子紋はヘラによって深く刻まれている。

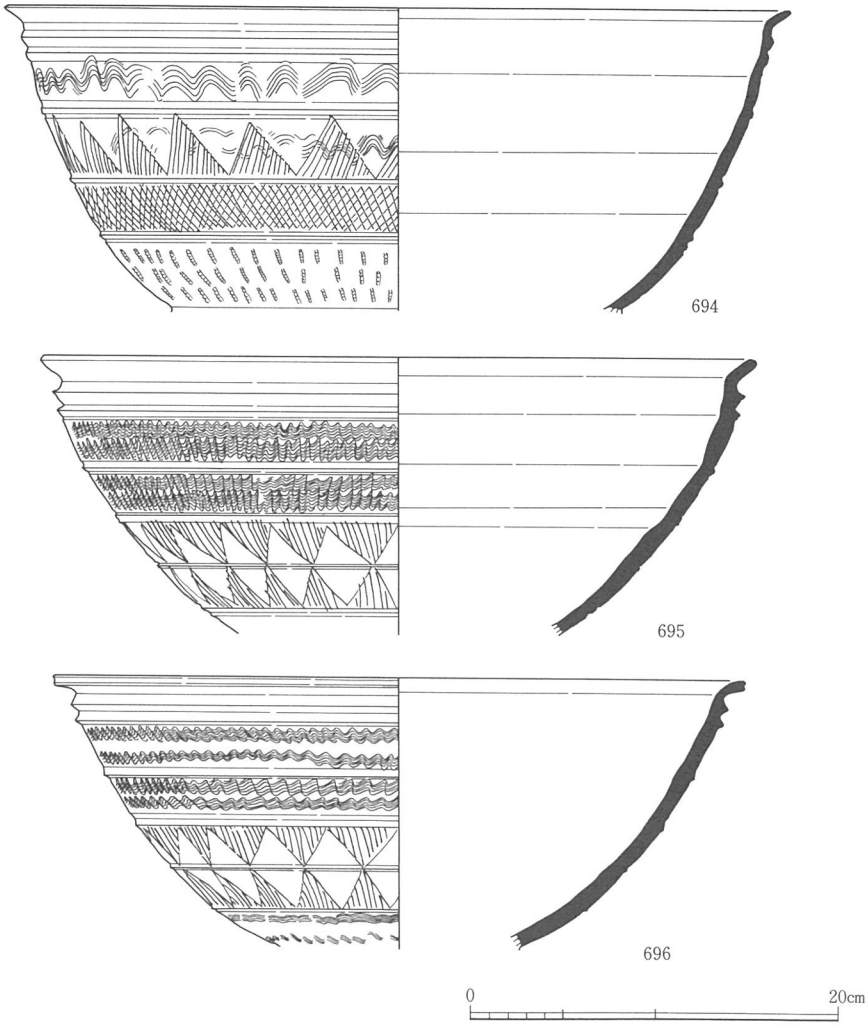
Ａ－２類（695・696）２点

全体的に丸みを帯びるが，Ａ－１類より底体部の張りは小さく，杯深も浅い。口縁部はいずれも「く」の字状に外反させ，内面には稜が認められるが，695は鋭く，696はやや鈍く丸みを帯びる。端部も差異があり，695は口唇状に丸く，696は面をもっておさめる。紋様構成は，いずれも波状紋と対向鋸歯紋を配し，施紋状況，凸帯の表現も共通している（第98図拓本参照）。

Ａ－３類（709～712）４点

杯部の深さは浅いが，下半部の張りが比較的大きく，全体では半球状を呈する。口縁部は，いずれも「く」の字状に外反し内面には稜が認められるが，外反の角度には差異がある。口縁端部も口唇状に丸く仕上げるものと，面をもって仕上げるものが混在している。さらに，杯部を飾る紋様（第103図拓本参照）は波状紋（709・712），下向きの鋸歯紋（710），組紐紋（711）など様々で，凸帯の形態も各段に２条巡らすもの（709）も存在し一様ではない。

このように，Ａ－３類は杯部の断面器形は類似するが，他の特徴には差異が多く認められ細分される可能性が高い。



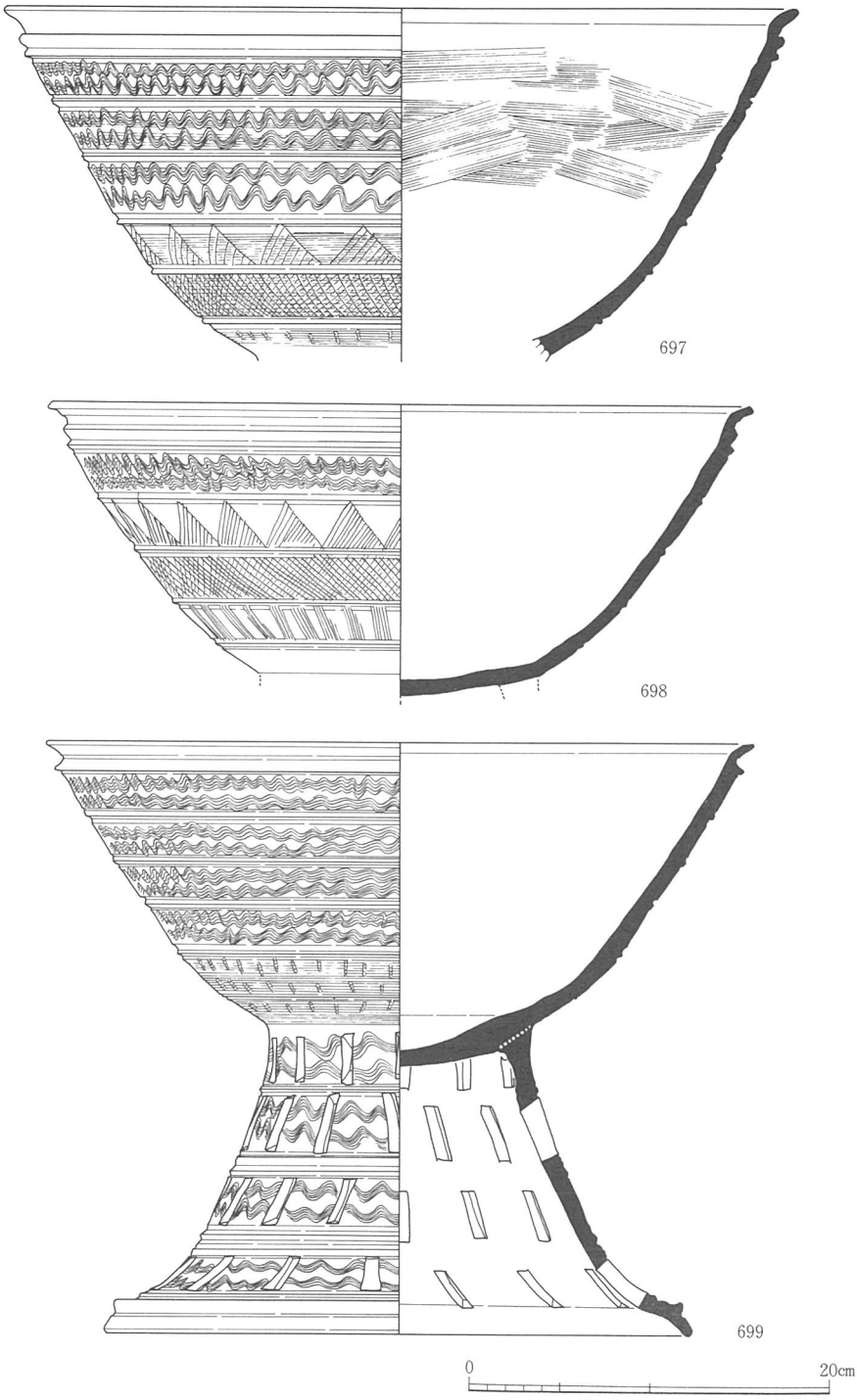
第88図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台１）Ｓ＝1/4

Ｂ類（697～703）15点＜不明７点含む＞

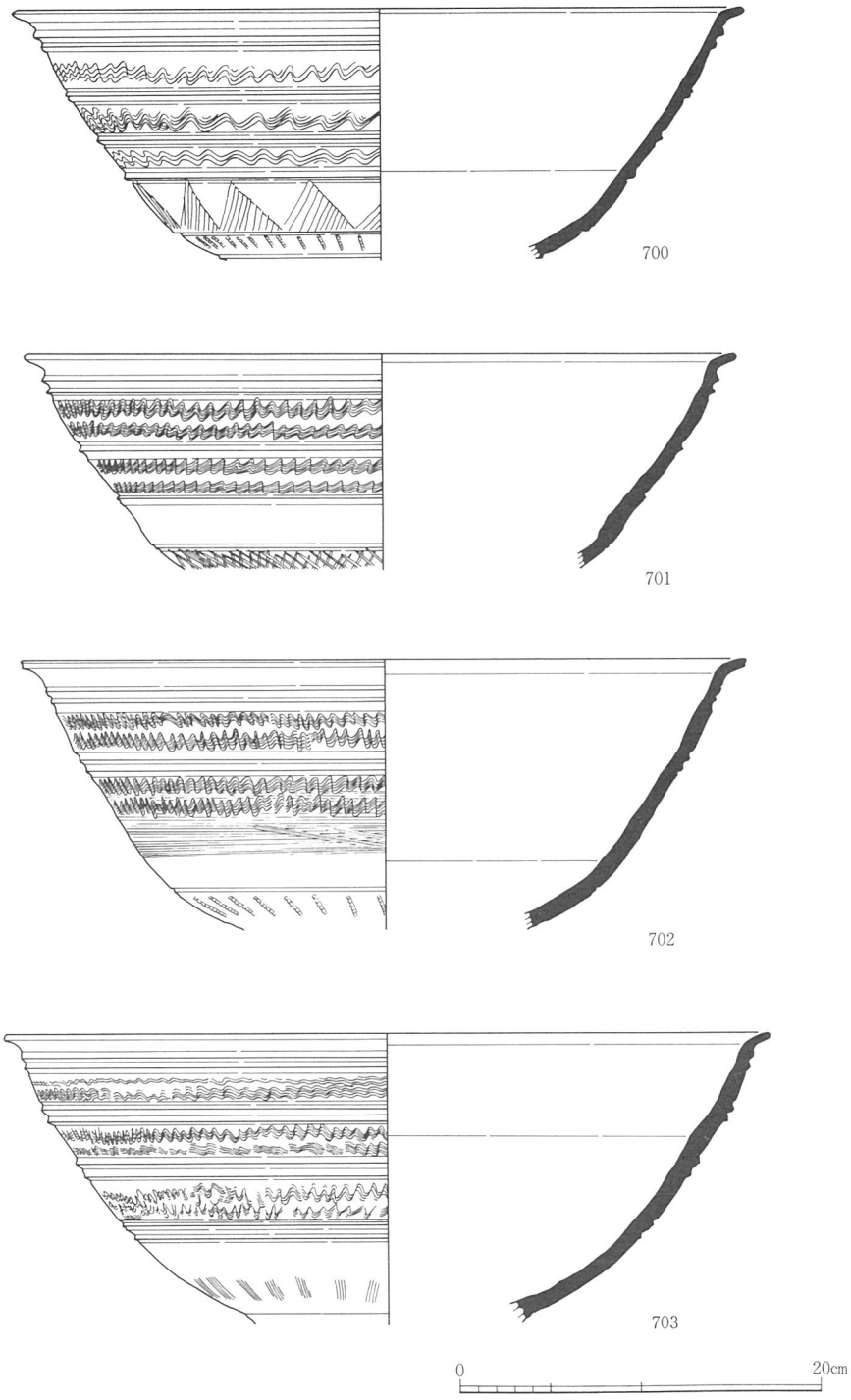
体部が杯底部から屈曲して直線的にのび，断面形がおおむね逆台形状を呈する形態である。

Ｂ－１類（697）２点

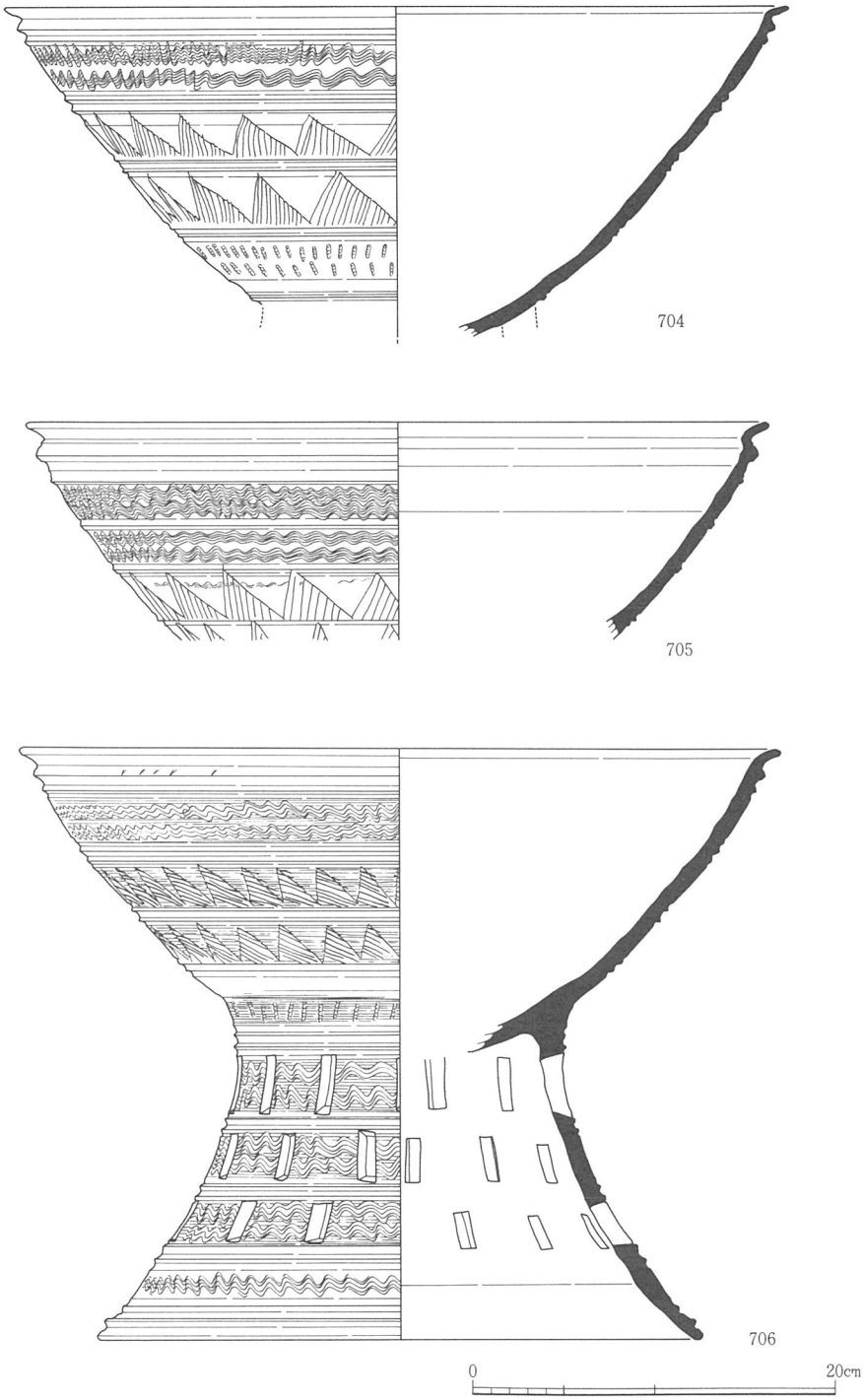
口径が44㎝，現存の深さは18㎝を測る大型品である。口縁部は屈曲して外反し，端部は口唇状に丸く仕上げる。大型品のためか紋様帯は他類より多く，６段に区画される。紋様は（第99図拓本参照）波状紋，鋸歯紋，斜格子紋，刺突紋が配され，Ａ－１類と似た紋様構成をなす。



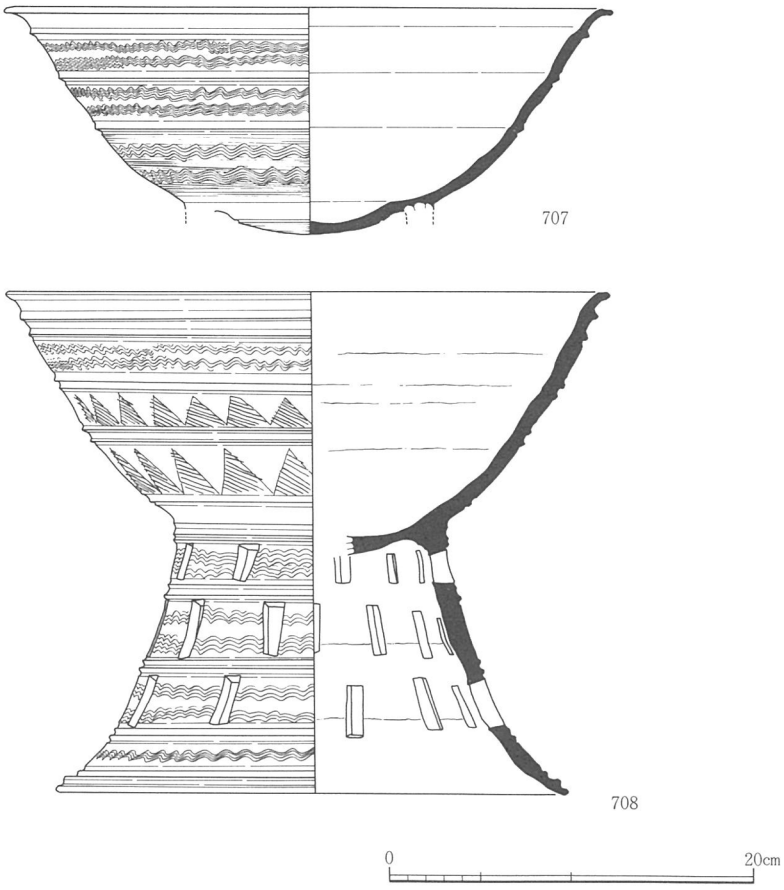
第89図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台２）Ｓ＝1/4



第90図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台３）Ｓ＝1/4



第91図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台４）Ｓ＝1/4



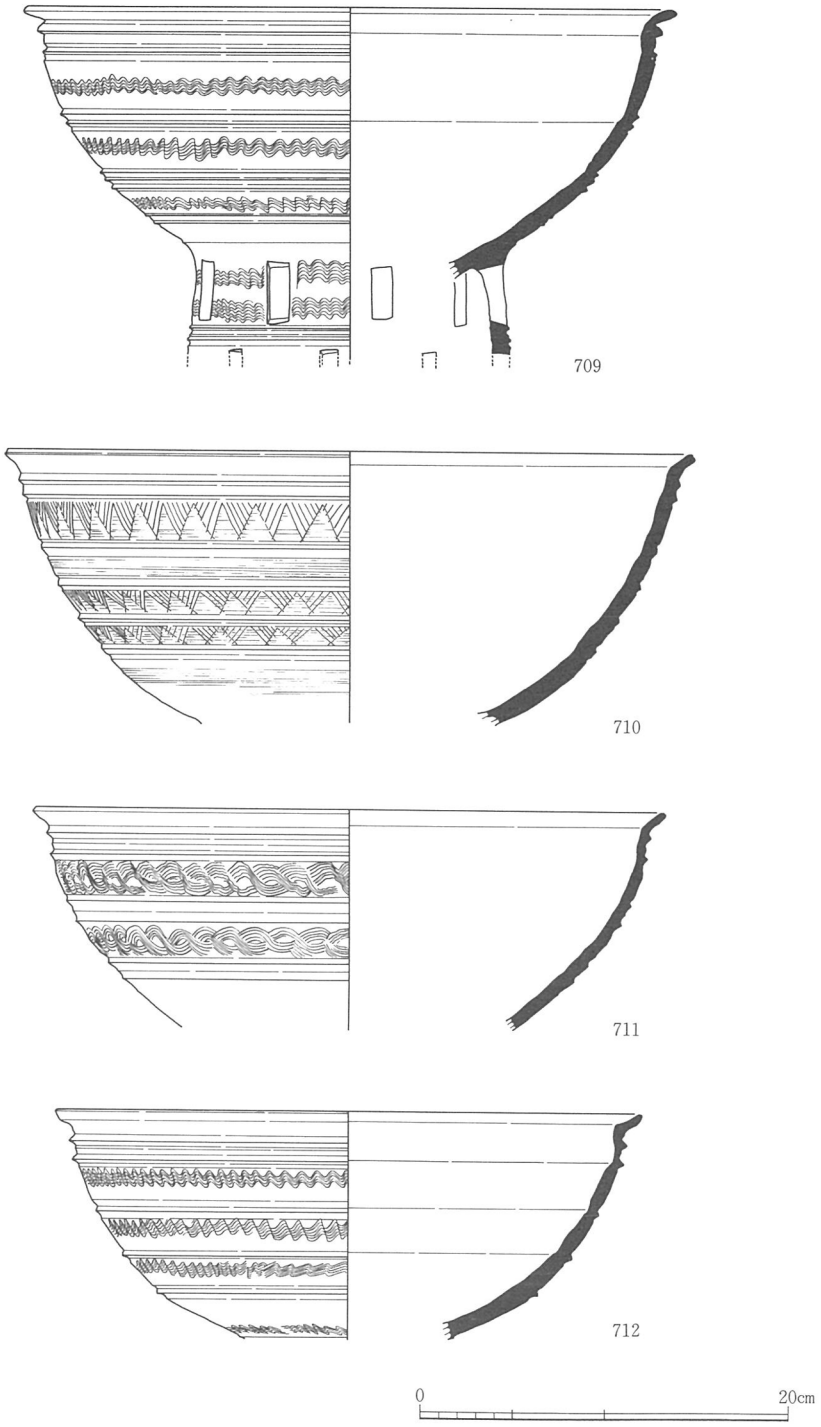
第92図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台５）Ｓ＝1/4

Ｂ－２類（698～703）６点

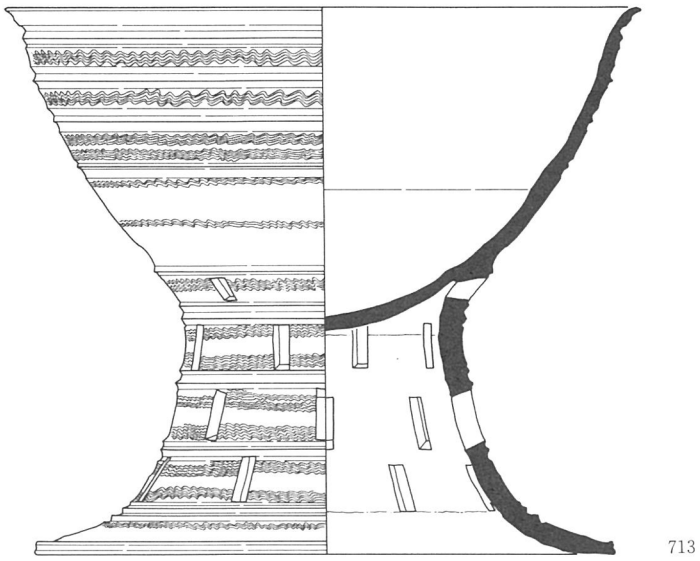
Ｂ－１類より小型で，体部の傾きの角度も緩い。口縁部は「く」の字状に大きく外反するものがほとんどであるが，中には内面の稜のあいまいなもの（699）もある。口縁端部は口唇状に丸く仕上げるものと，平らな面をもって仕上げるものが混在するが，前者の形態が多い。紋様は波状紋，鋸歯紋，斜格子紋，刺突紋，集線紋などが用いられているが，その構成は様々である。特に698は上段から各段に波状紋・鋸歯紋・斜格子紋・集線紋が施され，バラエティーに富んでいる（第99図拓本参照）。

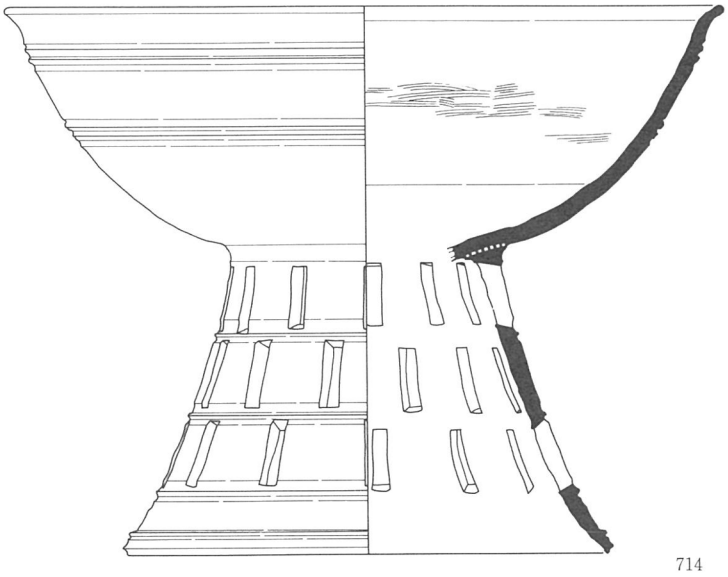
Ｃ類（704～706）５点

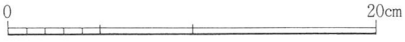
杯部は，底部から体部にかけて直線的にのびる形態である。口縁部はいずれも「く」の字状に外反させ，端部を口唇状に丸く仕上げるが，706の口縁部の外反は他より若干緩や



第93図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台６）Ｓ＝1/4







第94図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台７）Ｓ＝1/4

かである。紋様は上段から波状紋，鋸歯紋，刺突紋が配されるが，いずれの製品も鋸歯紋は２段に巡らされるなど紋様構成には共通点が認められる。しかし，鋸歯紋の施紋状況には差異がある。704・705はヘラで深く刻み込まれるが，706はヘラで線状に描いたような方法で表現されている。他にも鋸歯紋の一単位の大きさ，傾き，鋸歯内区の斜線の方向にも差異がみられ，前者のほうがていねいに施紋されていることが看取される。

Ｄ類（707・708）２点

口径32㎝前後の小型器台である。707はＣ類と，708はＢ－２類と断面形は似る。また，708は口縁形態，紋様構成，施紋方法，脚部の形態はＣ類の706と共通している。小型品のためか，杯の断面形は異なるが，外観の全体形状や細部の特徴からは，708は706（Ｃ類）の小型品と理解される。

Ｅ類（713）１点

体部の張りは小さいが，全体的には丸みを帯び，杯深は深い。口縁部の外反は緩やかで，端部は口唇状に丸く仕上げる。脚部は裾が大きく開く形態で，短冊形の透かしを千鳥状に配する。紋様は杯，脚部とも波状紋が施されているが，他に比べ波の単位は細かい。

Ｆ類（714）１点

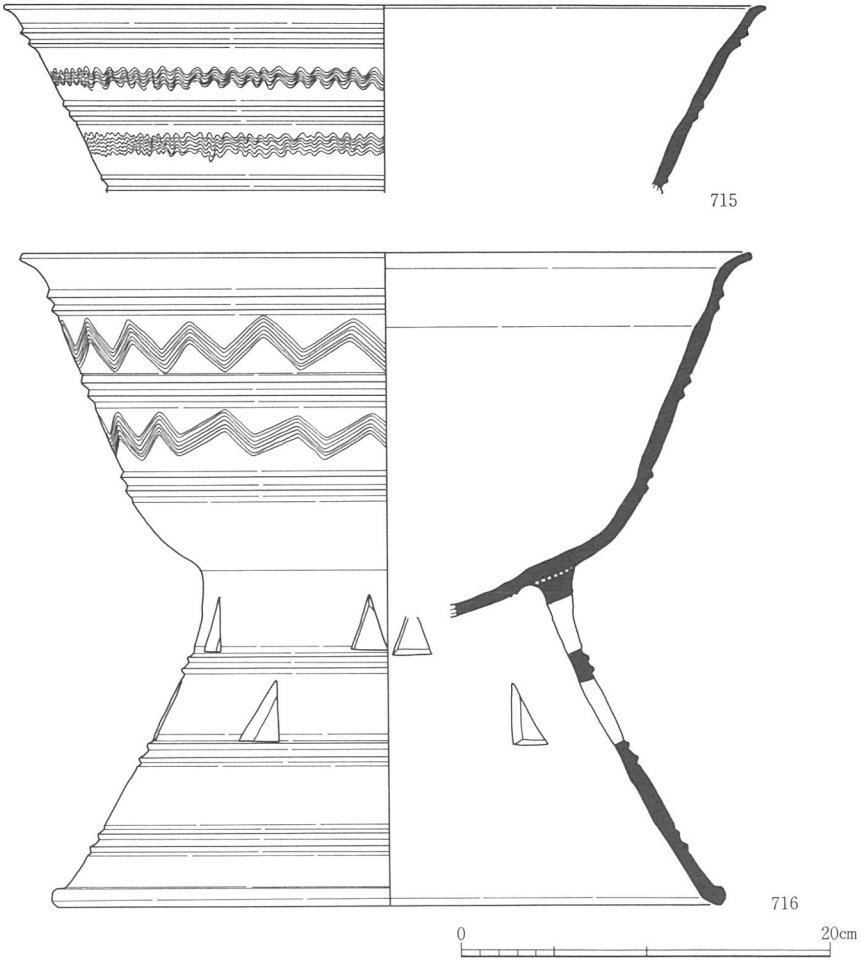
櫛描紋やヘラ描き紋が施されない無紋の器台である。杯部は丸みを帯び半球状を呈するが，杯深が極端に浅い。口縁部の外反は緩やかで，端部は丸く仕上げる。脚部は脚上部から裾部まで直線的にのび，透かしは短冊形のものを千鳥状に配する。

Ｇ類（715・716）５点

杯部は，体部が底部から屈曲し直線的にのび，口縁部を緩やかに外反させる。Ｂ類と似た断面形を呈するが，体部はより直線的で，傾きも急で，杯深も深い。脚部は「ハ」の字状に開きながら直線的にのび，裾端部は肥厚させたように丸く仕上げる。紋様は715には通有の波状紋が，716には櫛描きによる山形紋が施されている。この，山形紋は他類にはみられず，Ｇ類特有の紋様と言える（第104図拓本参照）。またＧ類は，脚部の透かしにも他類ではあまり採用されていない三角形透かしを千鳥状に配する（716の透かし数については不正確である）特徴を有する。

Ｈ類（717）１点

口径32.6㎝の小型品で，口縁部が直立する特徴をもつ。体部の断面形はＢ－２類と似ている。紋様は口縁部と体部最上段に波状紋を，体部下段に対向鋸歯紋を配する。対向鋸歯紋はＢ－２類と共通した紋様である（第104図拓本参照）。



第95図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台８）Ｓ＝1/4

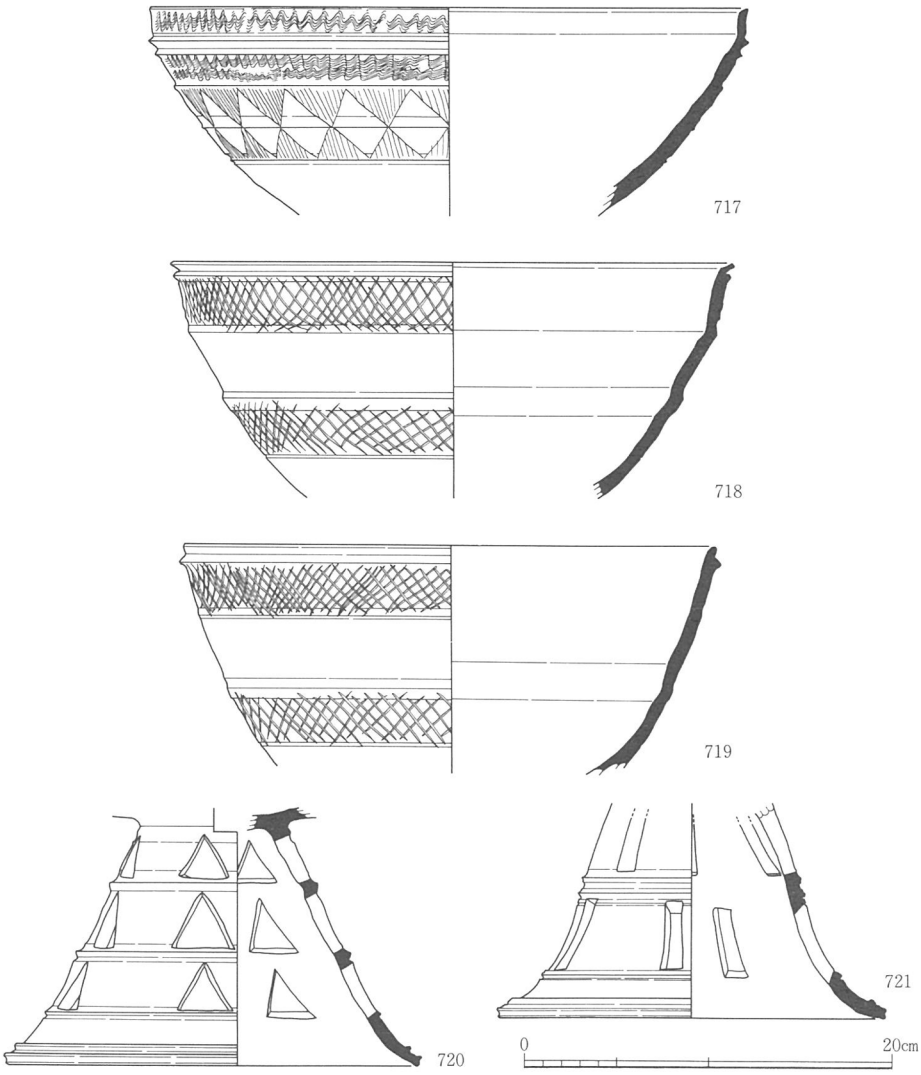
Ｉ類（718～721）４点

口径30㎝前後の小型品である。体部の下方に膨らみがあり，口縁部は短く外反するもの（718）と直立するもの（719）がある。紋様はいずれも斜格子紋のみで飾られ共通する。

720・721は脚部であるが，法量・焼成などからＩ類に伴う可能性の高いものである。いずれも無紋であるが，720は三角形透かしを直列に，721は短冊形透かしを千鳥状に配し，差異がある。

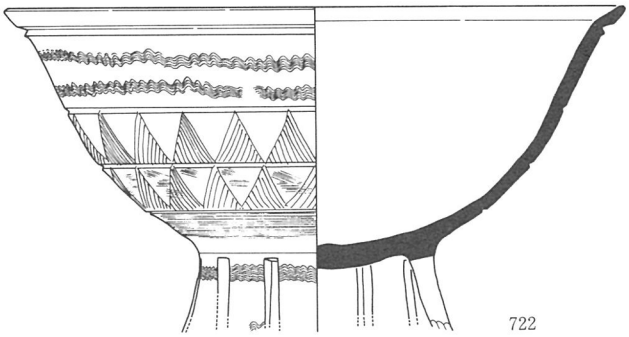
Ｊ類（722～724）５点

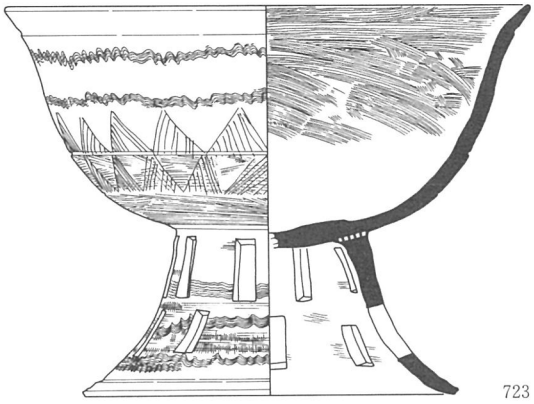
口径30～33.5㎝の小型品で，全体的につくりの粗い感を受ける器台である。杯部は体部下方に丸みを帯び，上方は直線からやや外反気味にのびる。口縁部は小さく外側に屈曲し，

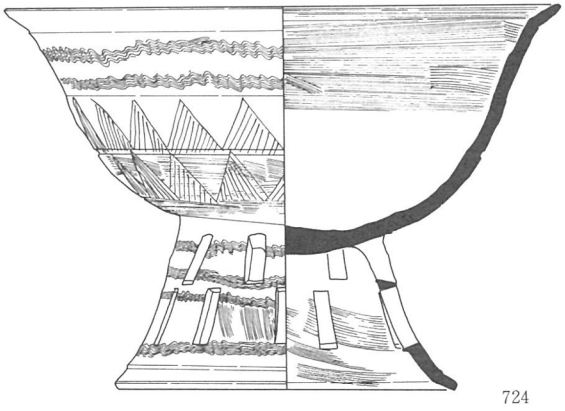


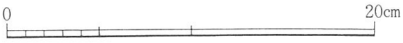
第96図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台９）Ｓ＝1/4

端部は口唇状に丸く仕上げている。脚部は全体的に短く，裾は大きく広がる。透かしは，短冊形のものを千鳥状に２段配するが，凸帯などによる区画はみられない。紋様は杯部に波状紋と鋸歯紋，脚部に波状紋を２段に巡らすが，その施紋状況は他類に比べると極端に乱雑である。さらに，杯部における口縁部と体部の境界や紋様帯の区画は，凸帯ではなく沈線によって表現され，簡略化が看取される（第105図拓本参照）。

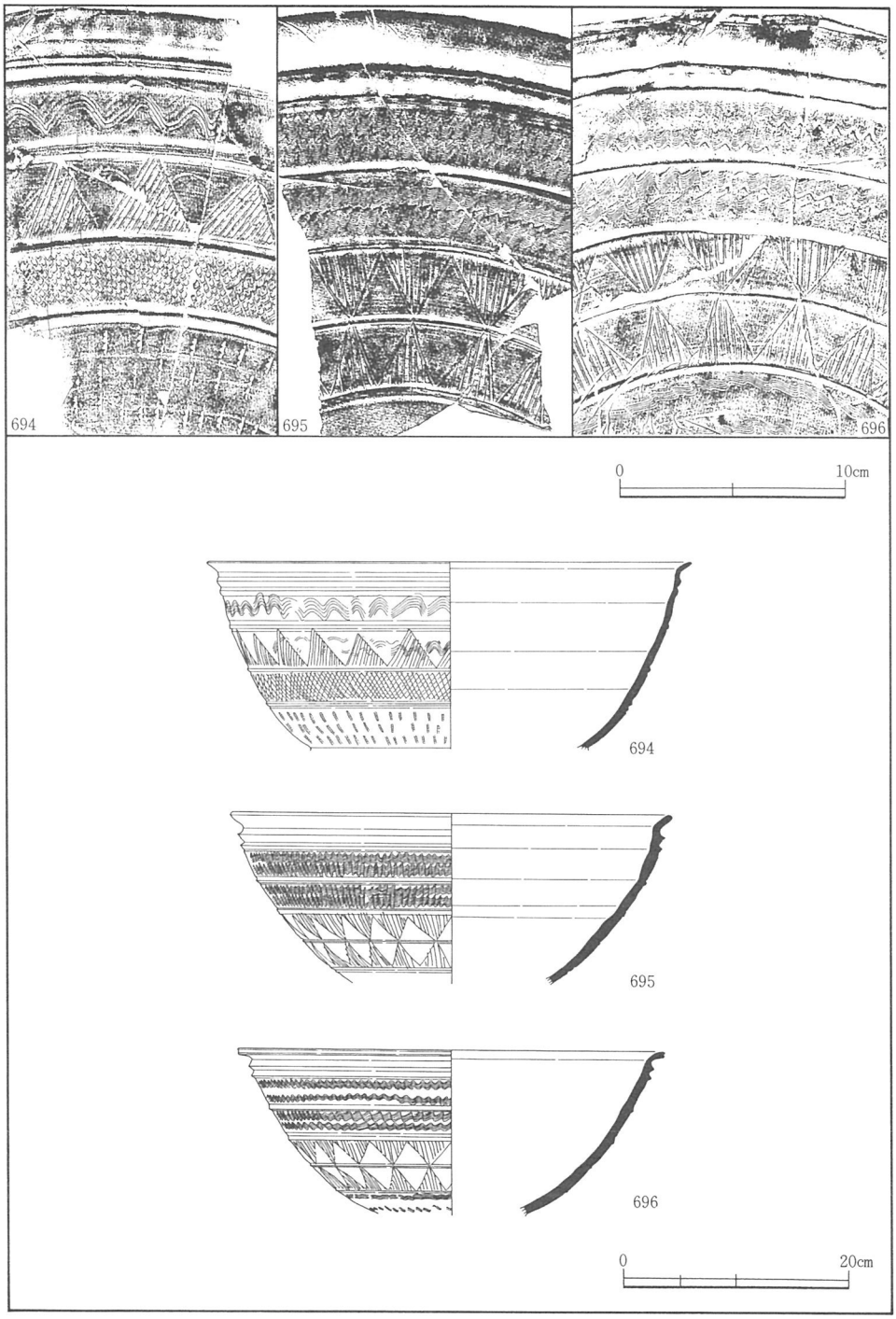




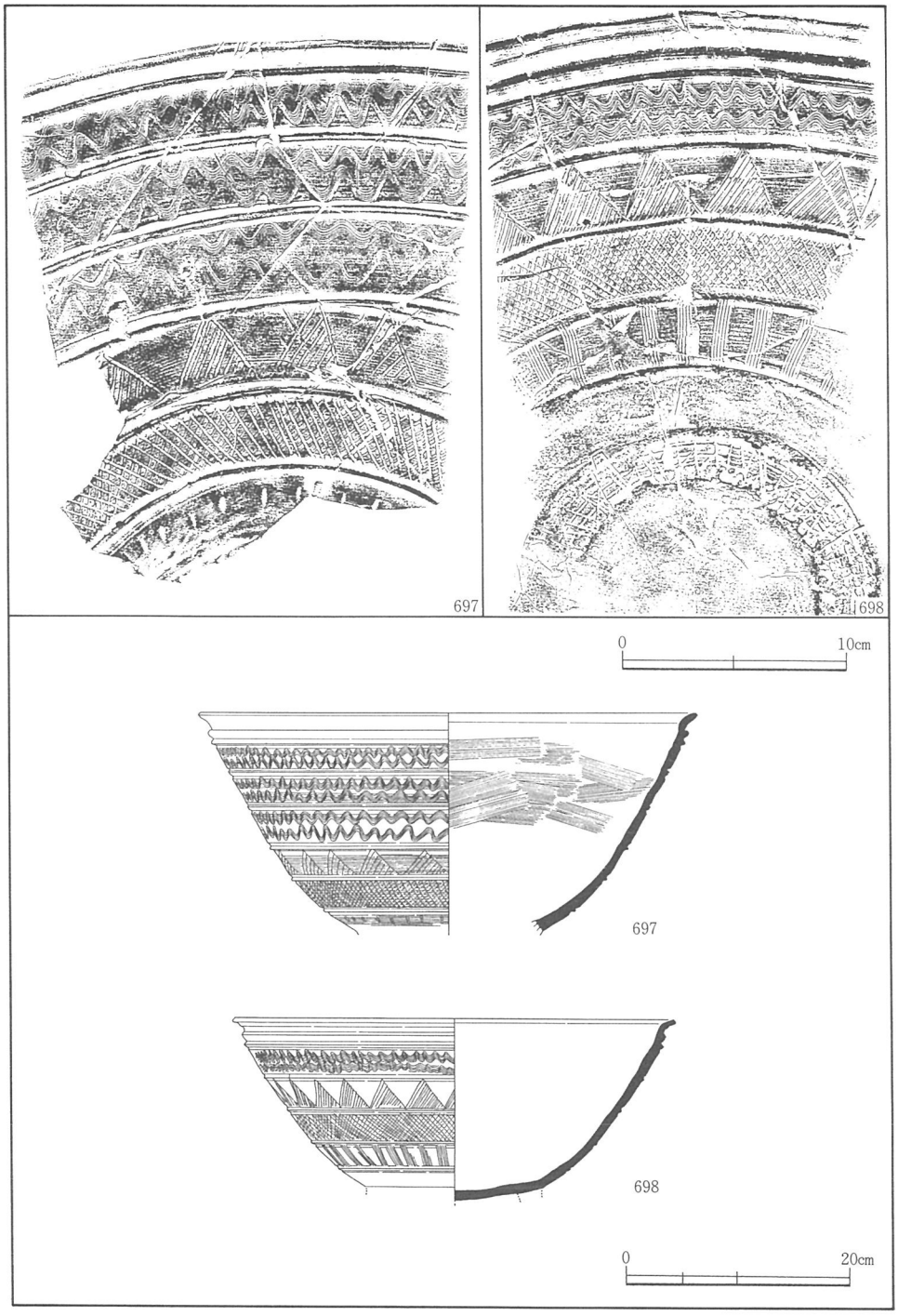




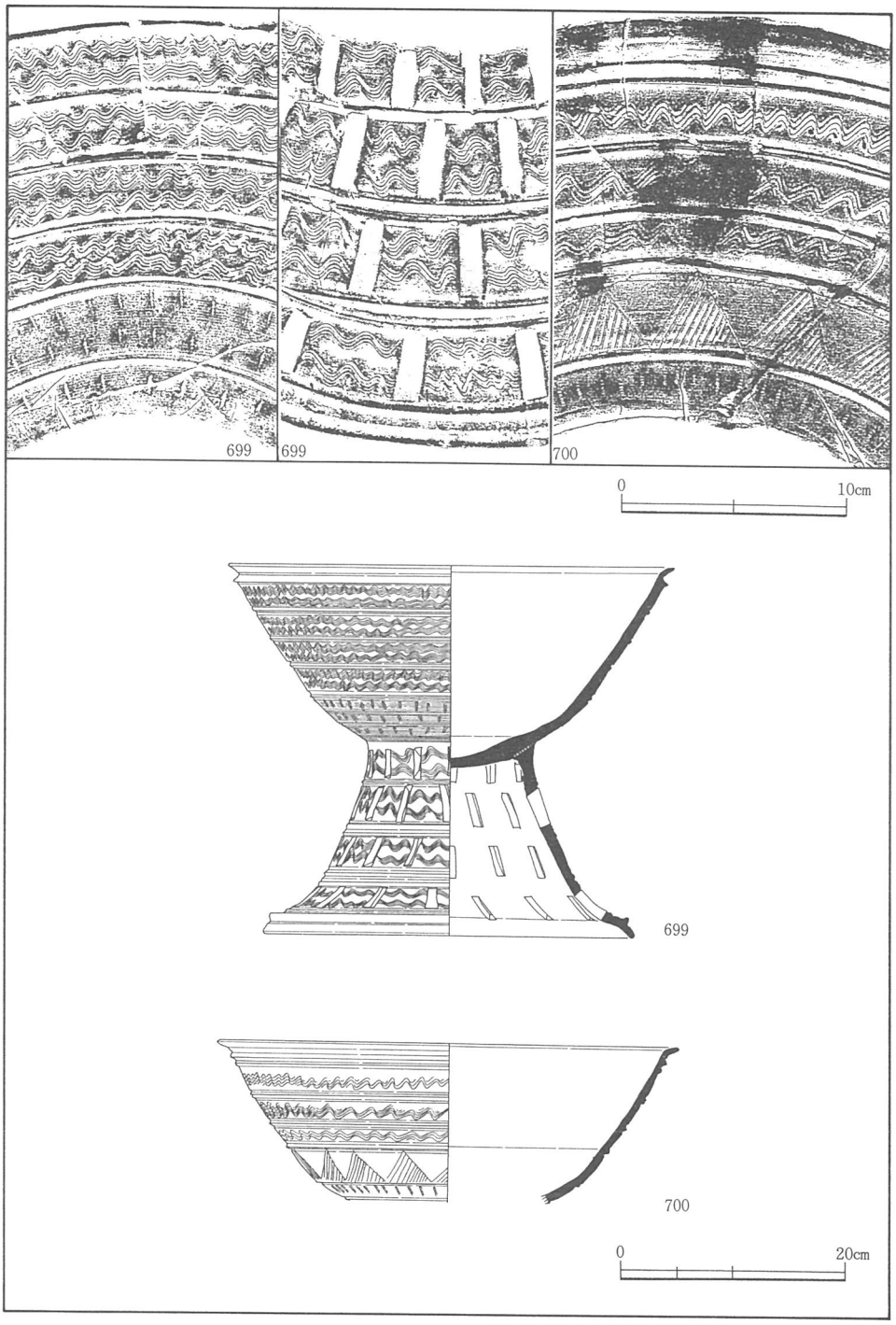
第97図　ＴＧ232号窯出土須恵器（高杯形器台10）Ｓ＝1/4



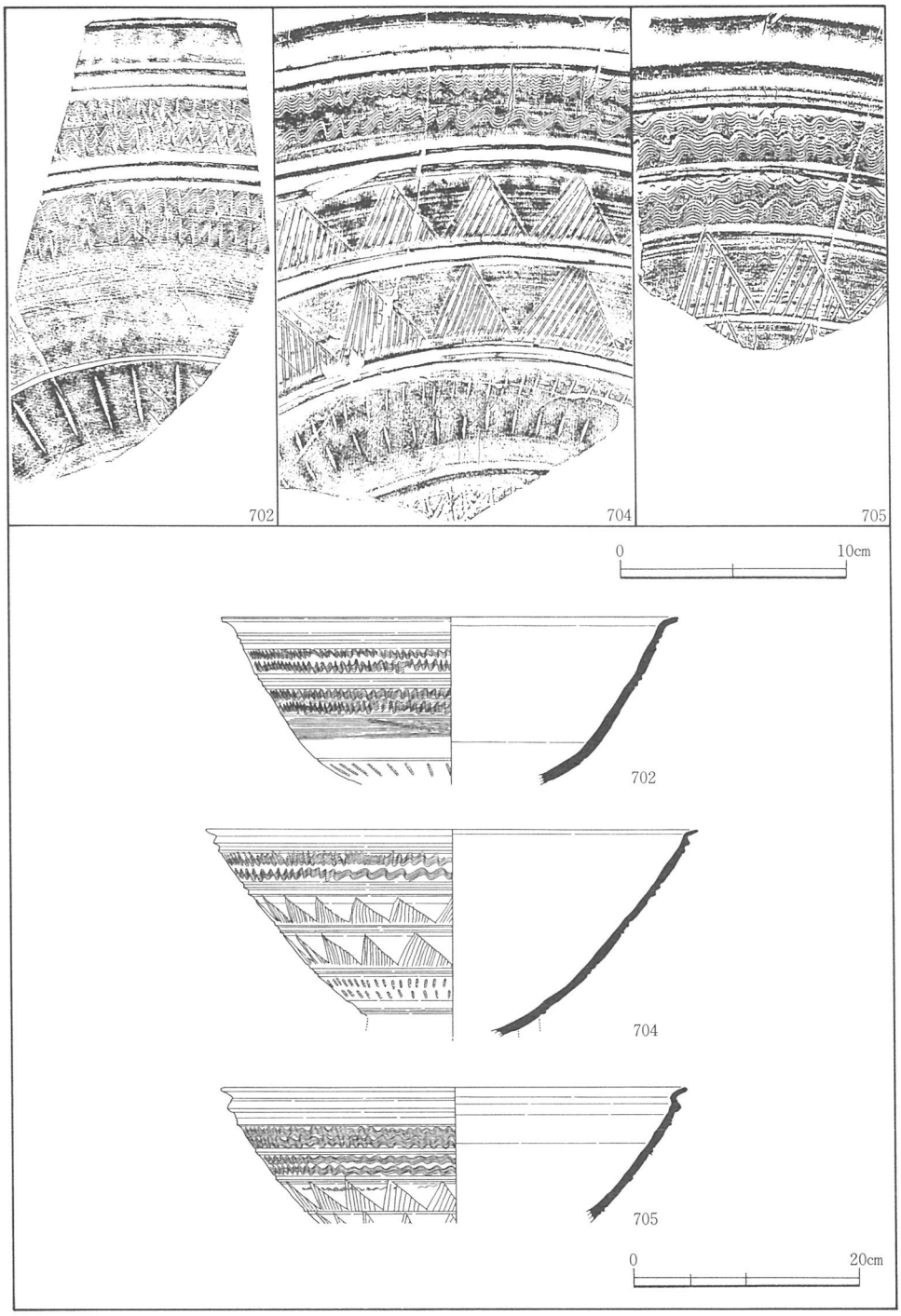
第98図　器台紋様拓影（２）



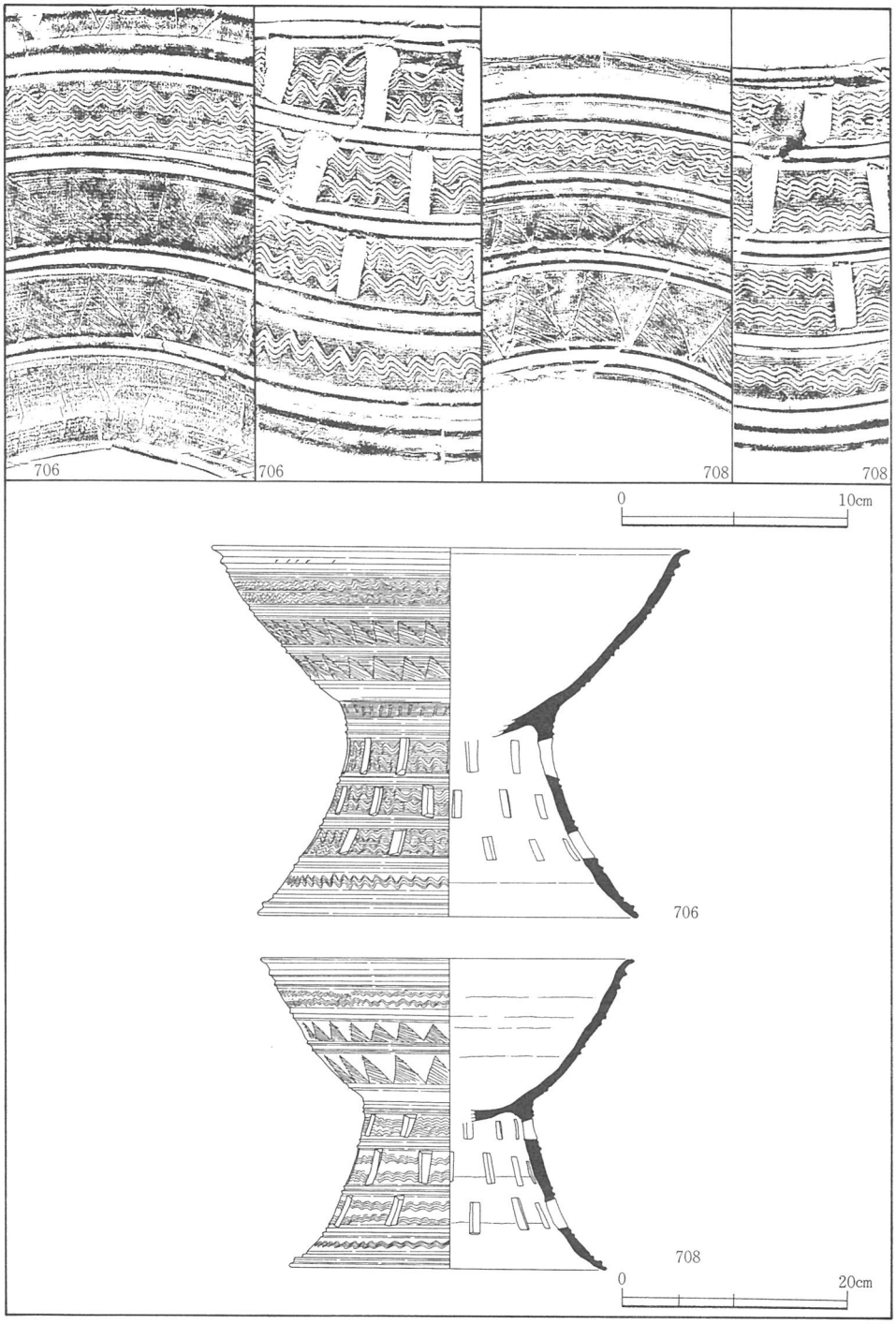
第99図　器台紋様拓影（３）



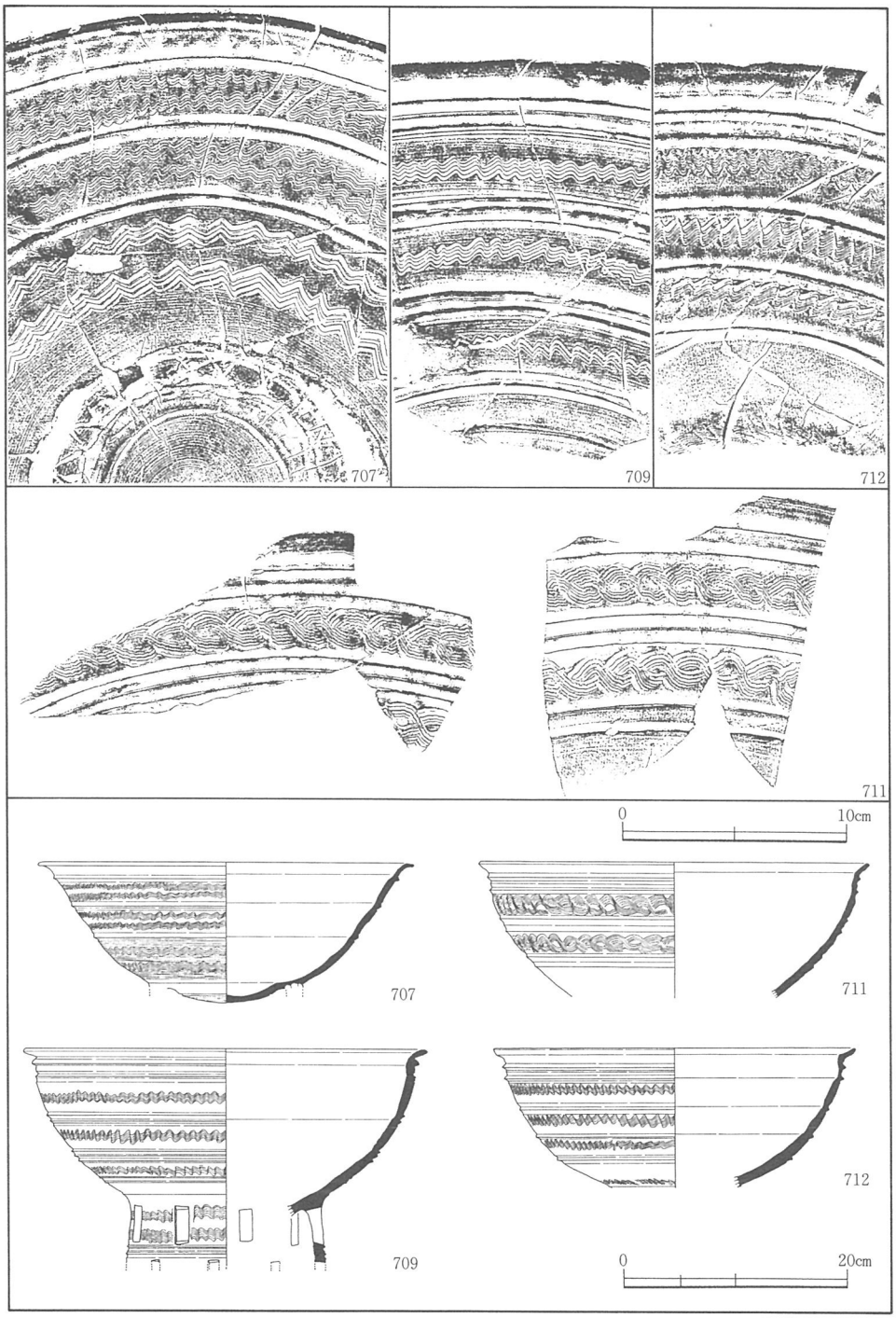
第100図　器台紋様拓影（４）



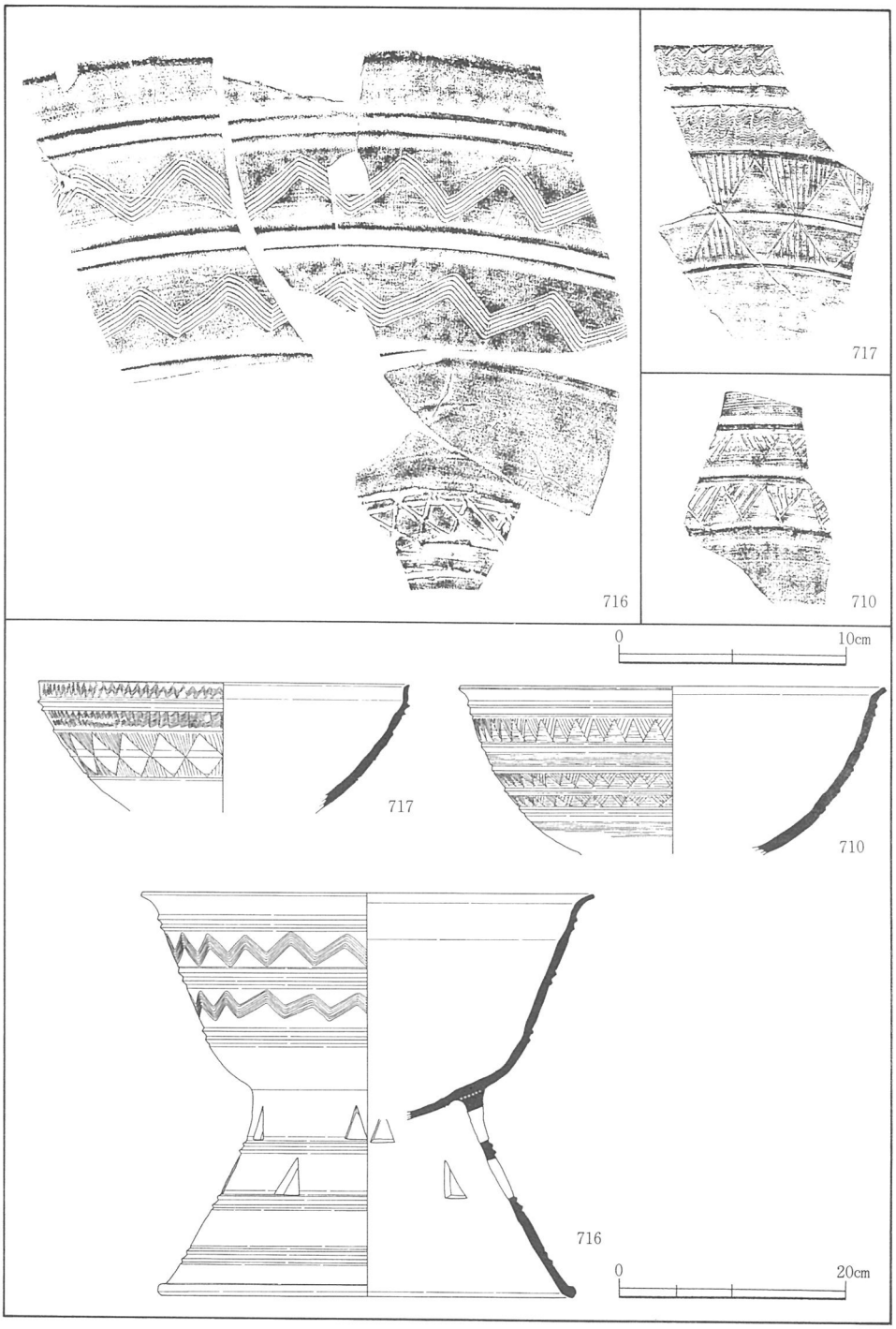
第101図　器台紋様拓影（５）



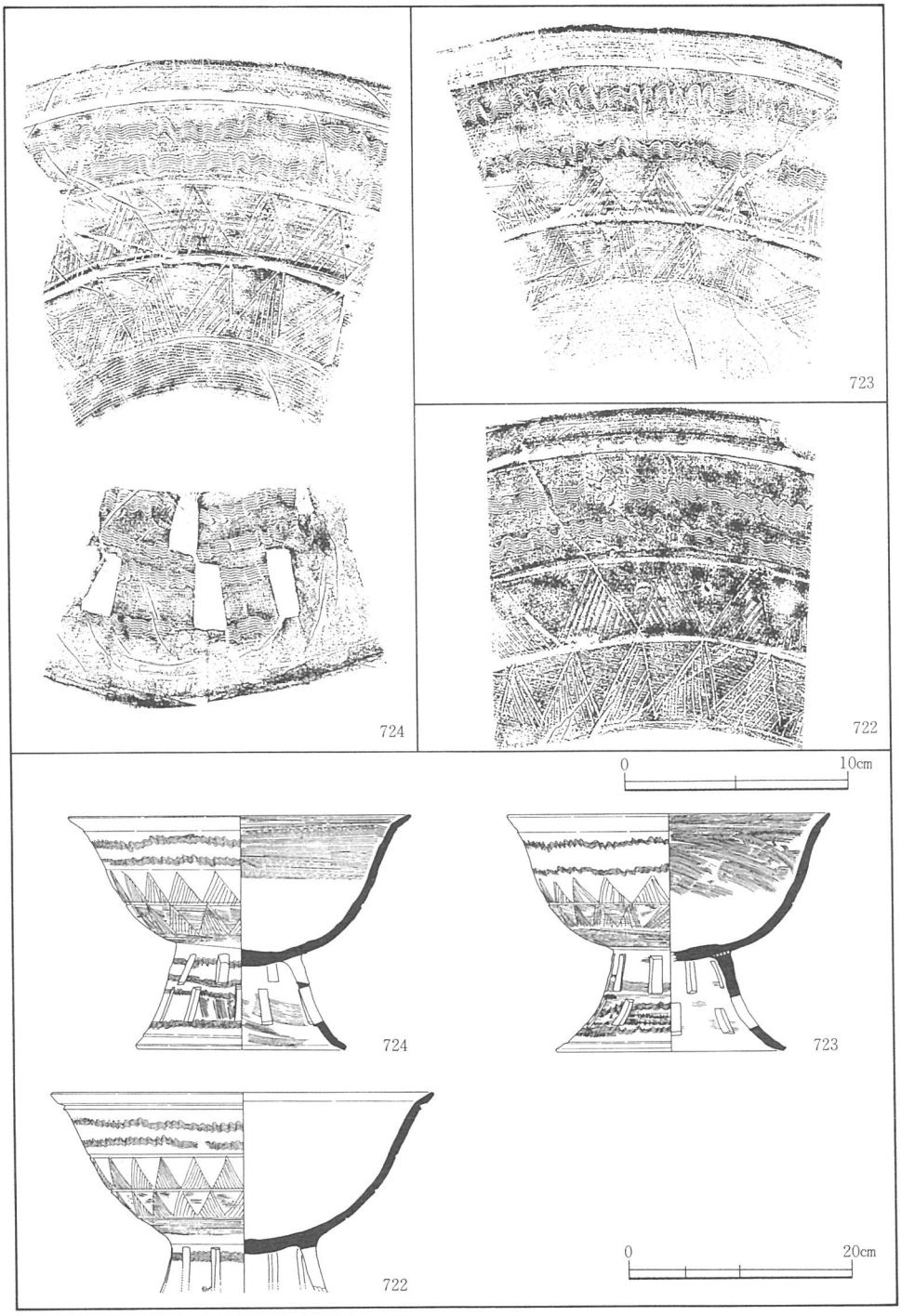
第102図　器台紋様拓影（６）



第103図　器台紋様拓影（７）



第104図　器台紋様拓影（８）



第105図　器台紋様拓影（９）

脚部（第106～107図－725～735，図版105）脚裾40点，脚柱63点

脚部は細片も含め約100点出土しているが，代表的なものをここに図示した。これらは杯部のＡ～Ｄ類に伴うものと考えられ，裾部が大きく開くもの（Ａ類）と直線的にのびるもの（Ｂ類）に分けられる。

また，図示したものは透かしの形態，紋様構成は共通するが，その他杯部Ｇ類に伴う三角形透かしを配するものも出土している。

Ａ類（725～727・729～731）

基本的に脚裾が大きく開くものである。裾端の形態によって細分される。

Ａ－１類（725～727）

裾端部を直立気味に屈曲させるもので，裾端のやや上方に凸帯を巡らせる。紋様帯は４段に区画し，短冊形透かしを千鳥状に配する。完形復元ができた699（Ｂ－２類）の脚部は当類である。

Ａ－２類（729～731）

裾端部が上部からそのままのびて終わらせるもので，裾端の直上に凸帯を巡らせる。紋様帯は２段分しか残存していないが，Ａ－１類と同様と考えられる。透かしもＡ－１類と同様で，短冊形透かしを千鳥状に配する。

Ｂ類（728）

裾部の開きはＡ類に比べ小さく，直線的に開く形態である。４段に区画された紋様帯の最下段は，幅も狭く，透かしも配されない。

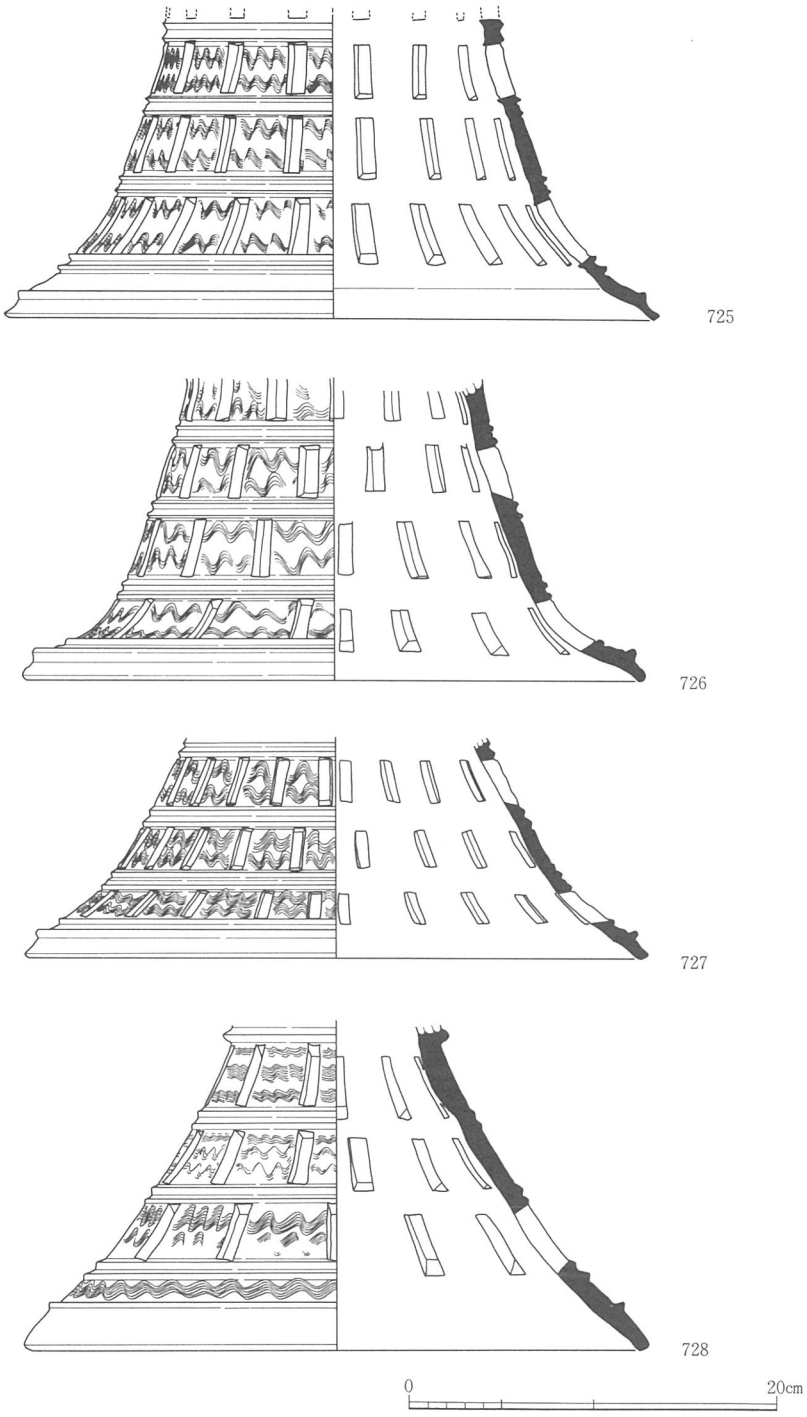
端部の形態には差異があるが，完形復元のされた706（Ｃ類）・708（Ｄ類）は当類の範疇に含まれる。また，図示した728はもう少し上端径が大きく，傾きも急角度になる可能性もある。

その他（732～735）

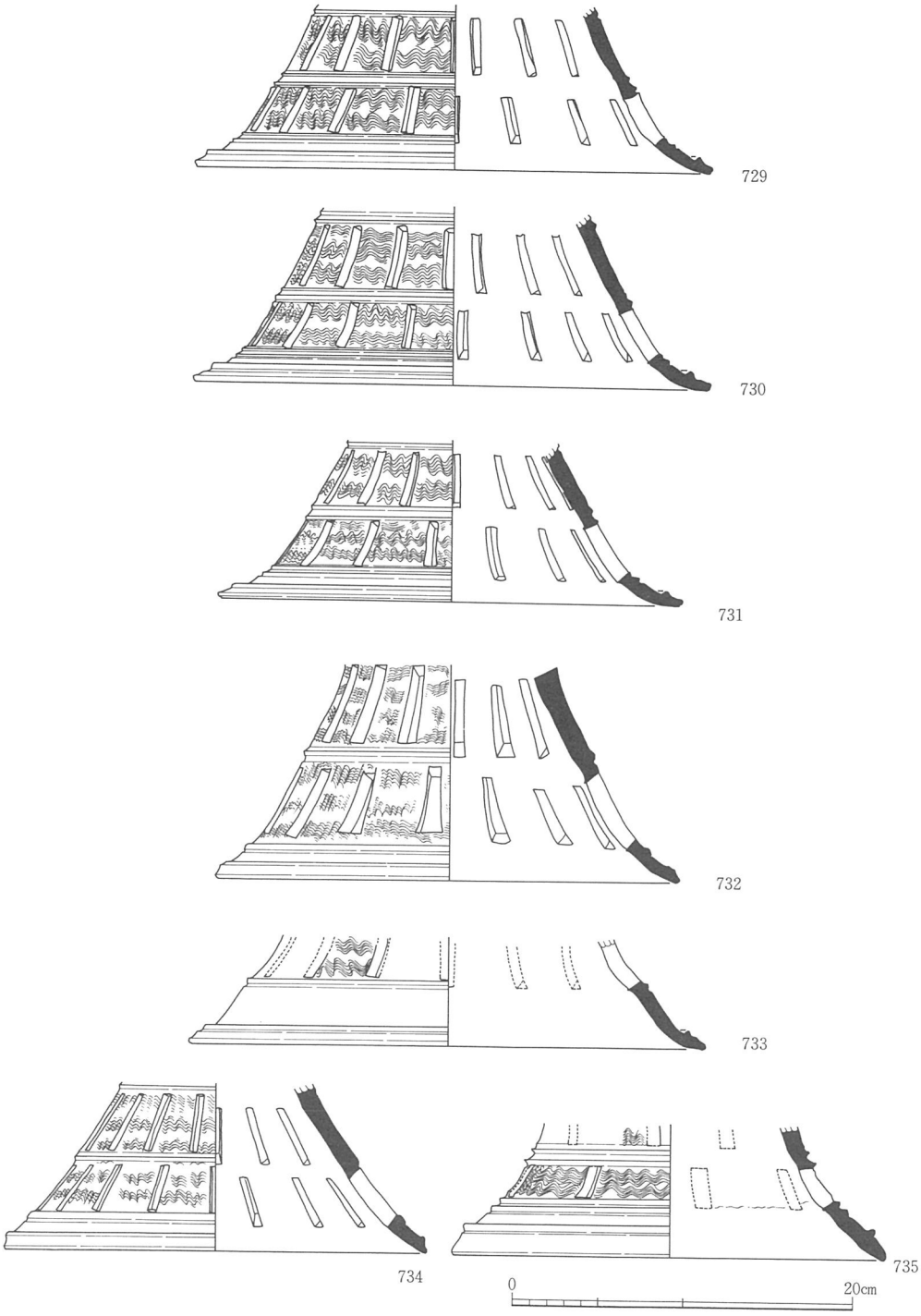
小破片のため不明なものである。

732は紋様帯の幅が他に比べ広い。733は脚裾が大きく開くＡ類の可能性が高いが，最下段には透かしが配されていない。

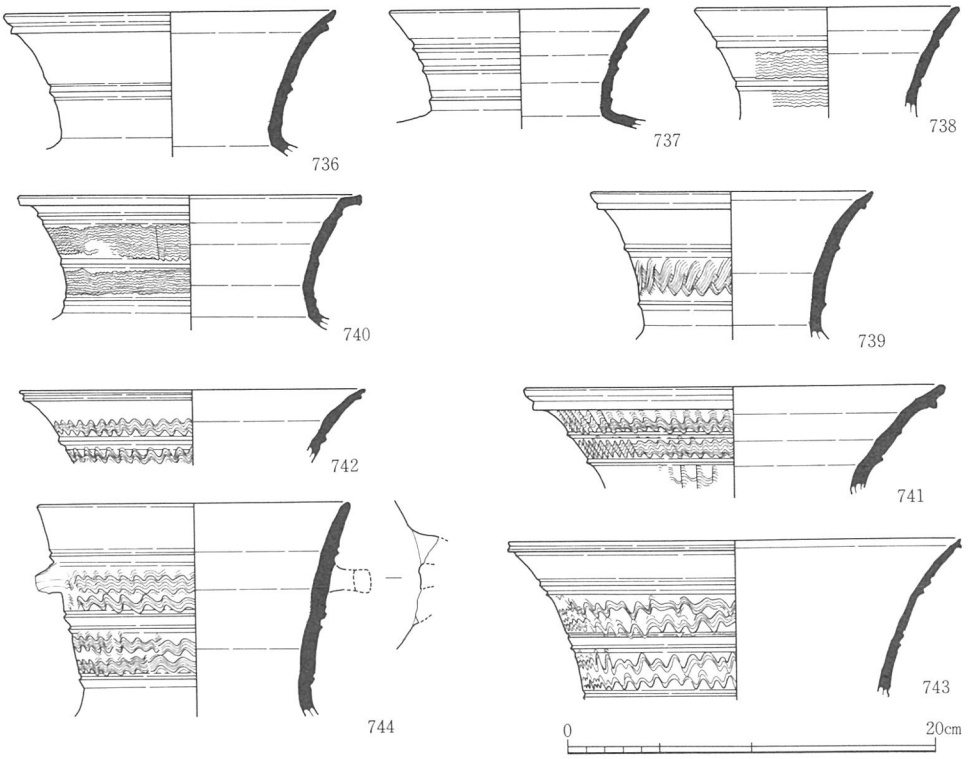
735・734は脚裾径25㎝前後で，他に比べやや小振りである。紋様帯は734が広く，735は狭い。



第106図　ＴＧ232号窯出土須恵器（器台脚部１）Ｓ＝1/4



第107図　ＴＧ232号窯出土須恵器（器台脚部２）Ｓ＝1/4



第108図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺１）Ｓ＝1/4

壺（第108～130図，図版106～116）

壺としたものの中には，甕との判別基準の難しいものが存在する。そのため，ここでは小型甕や中型甕と呼称されるものなども含め，口径30㎝以下の壺・甕を総称して壺として扱っている。

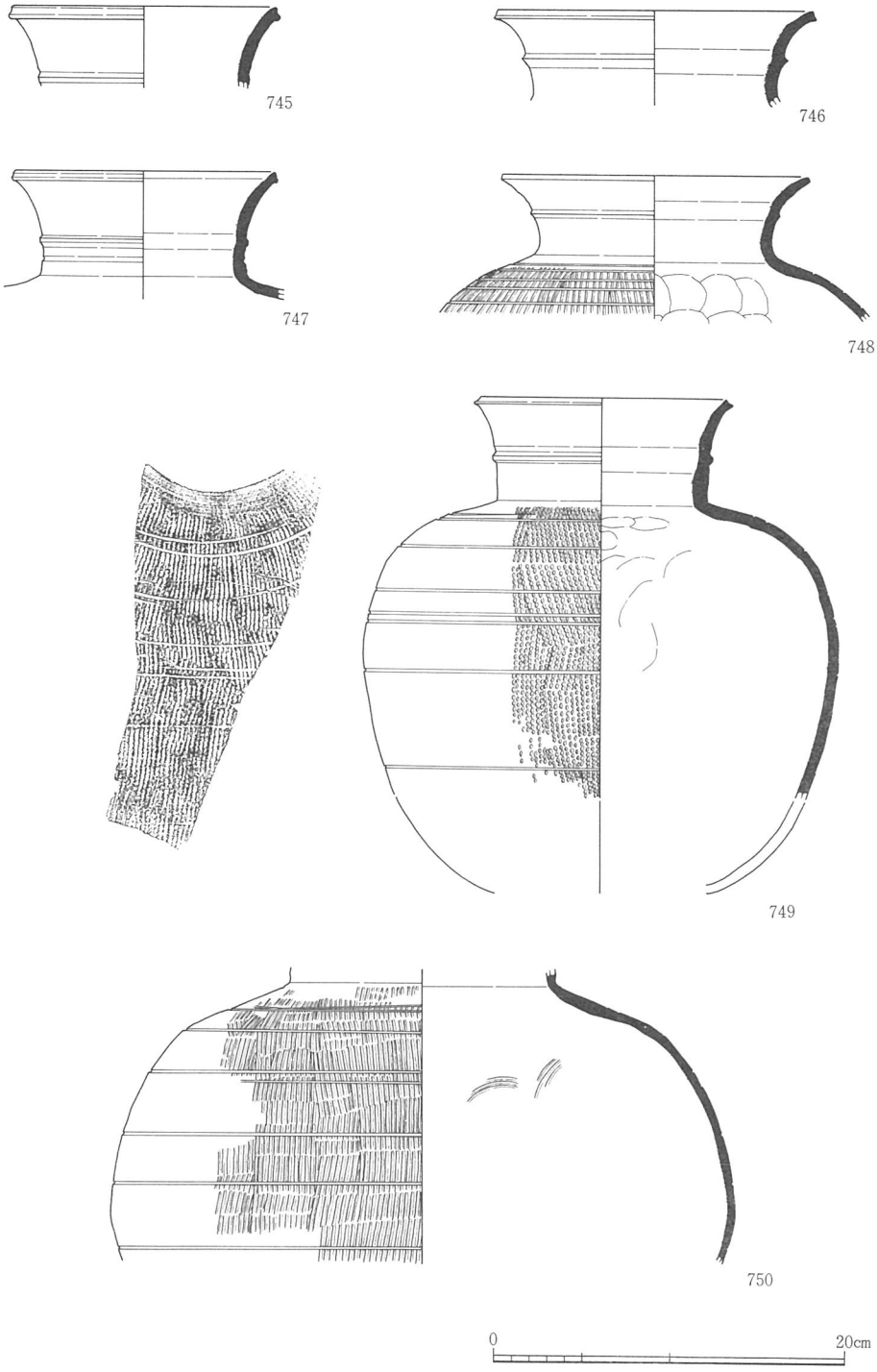
この壺とされるものは完形品の出土は少ないが，口頸部は破片数で215点出土しており，形態によってＡ～Ｏ類に分類される。

Ａ類（736～743）16点

装飾性の強い広口壺で，多くのものは頸部に波状紋や組紐紋などが施される。また，法量・頸部の形状からは３類に細分される。

Ａ－１類（736～739）７点

頸部がラッパ状に開く形態で，口径15㎝前後のものが多い。なお，739は他に比べやや細首で他類の可能性もある。



第109図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺２）Ｓ＝1/4

Ａ－２類（741～743）８点

頸部から口縁部が大きく開く形態である。数は少ないが，Ａ類の中では大型品となる口径24.6㎝の743がある。

Ａ－３類（740）１点

口径の割に頸部が短く，直立気味にのびるものである。

Ｂ類（744）１点

頸部の長い直口壺で，口縁端部は丸くおさめる。頸部の上端付近には，環状と推定される把手の一部が残存している。またこの把手は，波状紋を施紋した後に貼り付けによって完成させている。

Ｃ類（745～747・749・750/748）７点

口径は15㎝前後と壺の中では細口である。凸帯を巡らせた頸部はほぼ直立してのび，口縁部は緩やかに外反し端部は面をもっておさめる。体部は残存しているものは少ないが，縄蓆タタキ目や平行タタキ目をそのまま残し，その上から螺旋状沈線を巡らせ，紋様化しているものが多い。

なお748は，口縁形態が異なり他類の可能性が高い。しかし，この口縁形態で螺旋状沈線を巡らすものは他類では確認されておらず，ここではＣ類として扱っている。

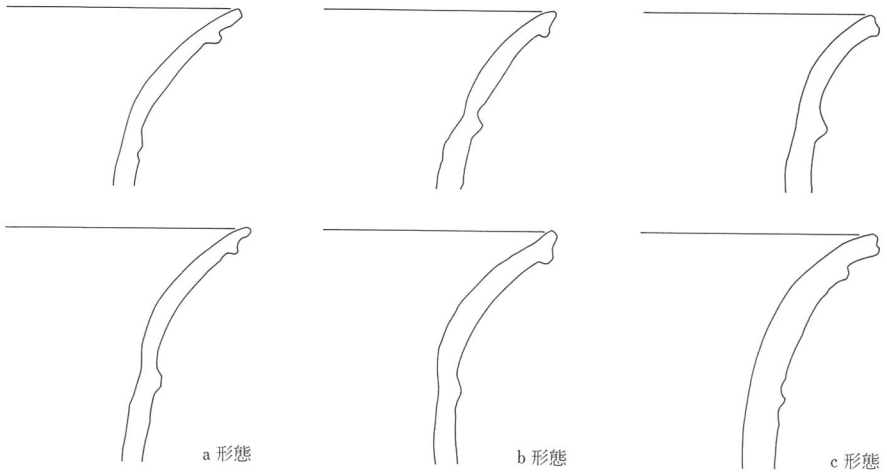
Ｄ類（751～775）45点＜細分不明12点含む＞

短く直立する頸部に凸帯を巡らし，口縁部が大きく開く形態である。

Ｄ－１類（751～768）23点

口径20㎝前後とやや広口の25㎝前後を測るものがある。口縁端部の形態は様々で，ａ形態－口唇状に丸く仕上げ，そのやや下方に凸帯を巡らすもの（751～754・760～763・765・768），ｂ形態－端部直下に凸帯を巡らすことによって，くぼみをもった面を作り出したもの（755・757～759・764・766），ｃ形態－完全に面をもって仕上げ，端面は強いナデ調整により凹線状にくぼむもの（756・767）などが混在している。量的には，ａ形態のものが多いようである（第110図参照）。

底体部については残存例が希少で全体器形は把握できないが，759は体部径が50㎝を越えるものであり，いわゆる中型甕の範疇で捉えられよう。他に図示したものも多少の差はあるが，759とほぼ同様の法量と推定される。外面調整は縄蓆・平行・格子などのタタキ目を残存させるもの，ていねいにナデ消しているもの，ナデ消すが部分的にタタキ目の残存したものが混在している。内面の当て具痕跡は基本的にはナデ消すが，部分的に残存し



第110図　壺の口縁形態

たものもある（757）。また，当て具痕跡には無紋のもの（759），細かい同心円状（757）の二者が観察される。当て具については，これまでに行われた調査で陶製のものが数点出土しているが，ほとんどは無紋のものである。759の痕跡については陶製当て具の可能性が指摘されよう。一方，細かい同心円状のものは，同心円紋が樹木の年輪痕跡の可能性があり，本遺跡では出土していないが木製当て具の存在も考慮されよう。

D－2類（769～774）9点

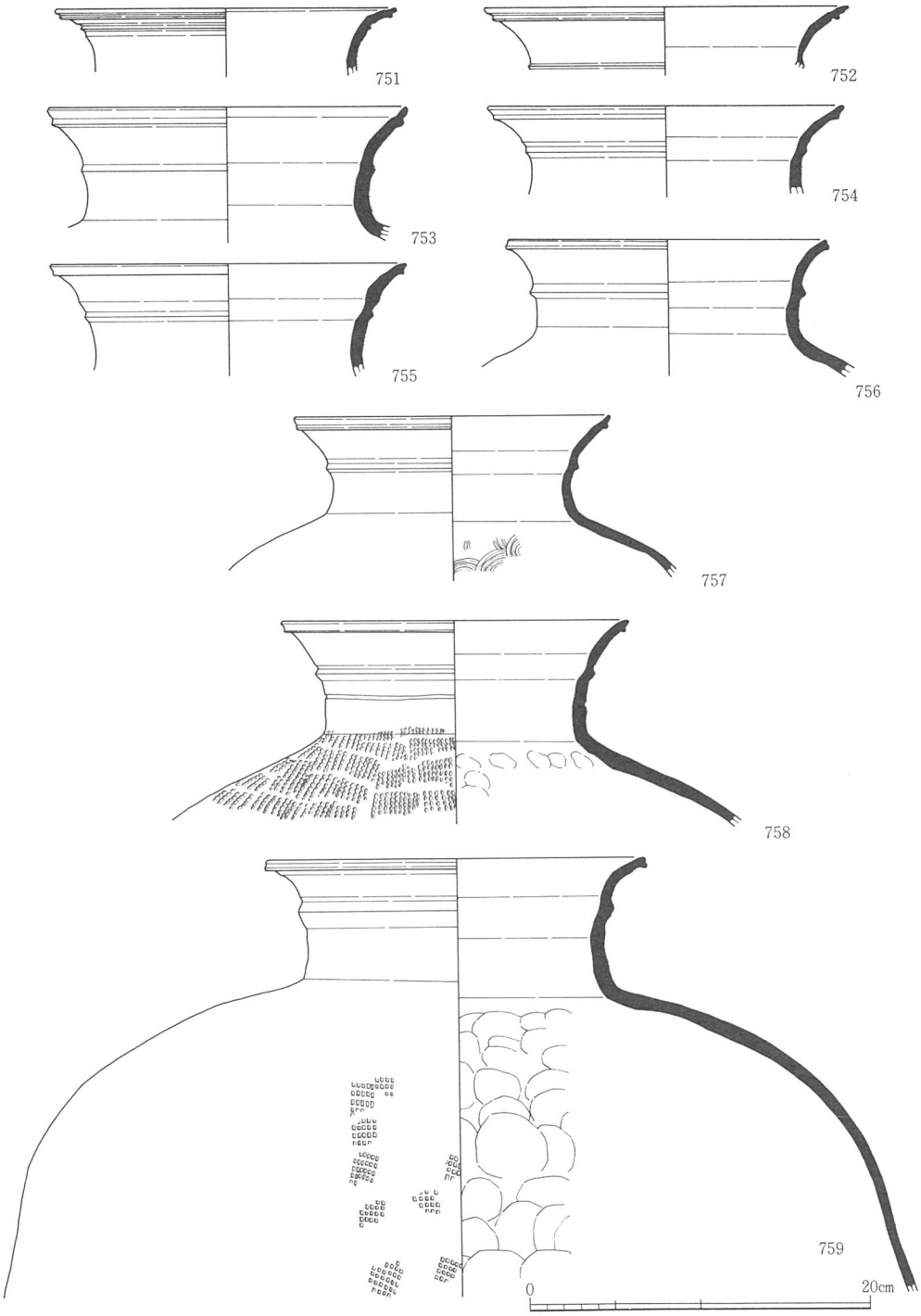
D－1類に比べ，頸部が短い。さらに，D－1類と比べると小型品で，口径が25㎝，底体部最大径も40㎝を越えるものはない。特に772～774は口径17㎝前後とD－2類の中でも小型品である。口縁端部形態もb・c形態のものはあるが，D－1類で顕著にみられたa形態のものはみられない。体部は全体に丸みをもち，外面はていねいにナデ消すもの，カキ目を施すものがある。内面には同心円状の当て具痕をそのまま残すもの（769），部分的に残すもの（770）の他に，ハケ調整を施すもの（772）もある。

D－3類（775）1点

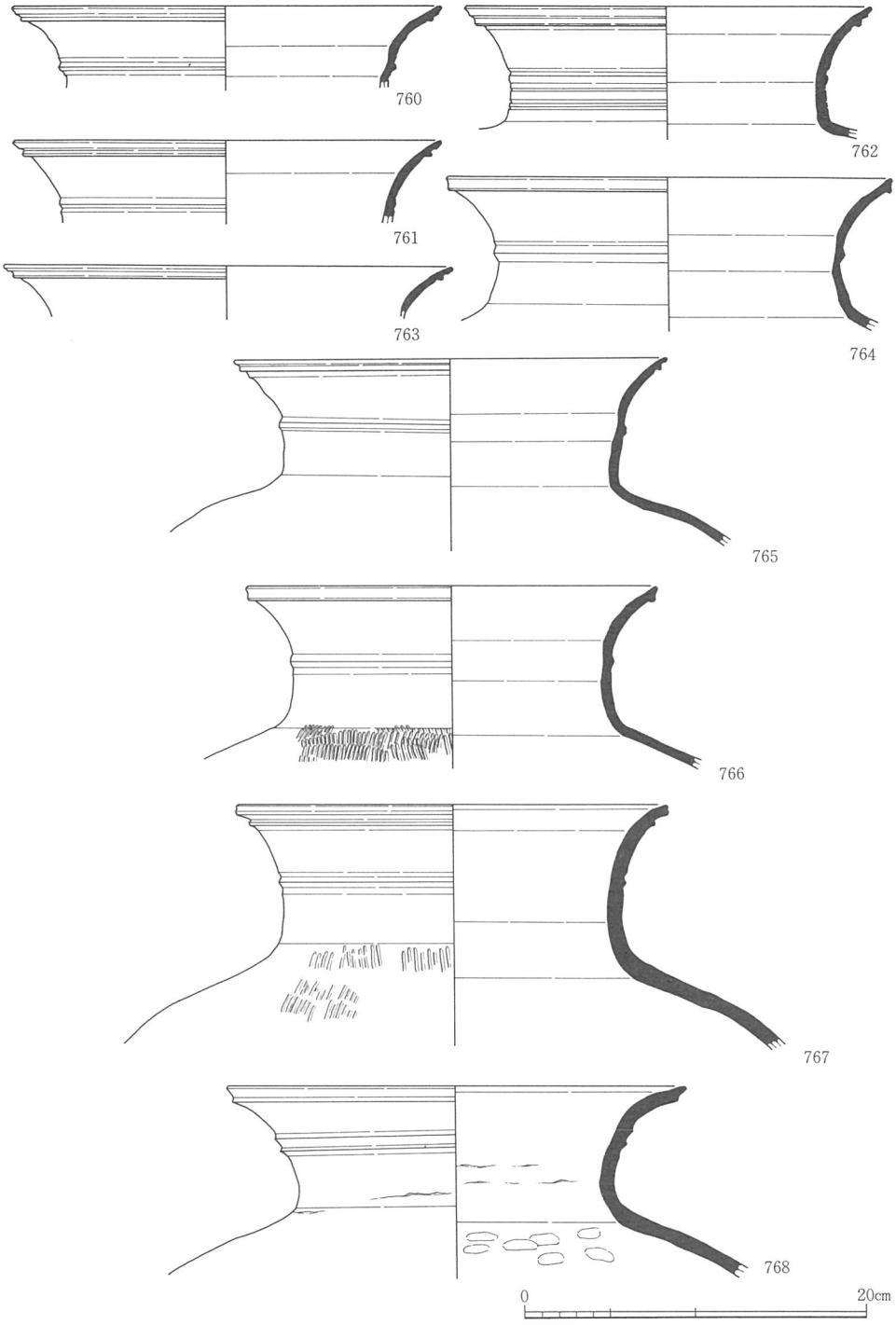
他類に比べ口縁部は大きく開かず，短く緩やかに外反する形態である。775以外に確認されていない。

E類（776～783）9点

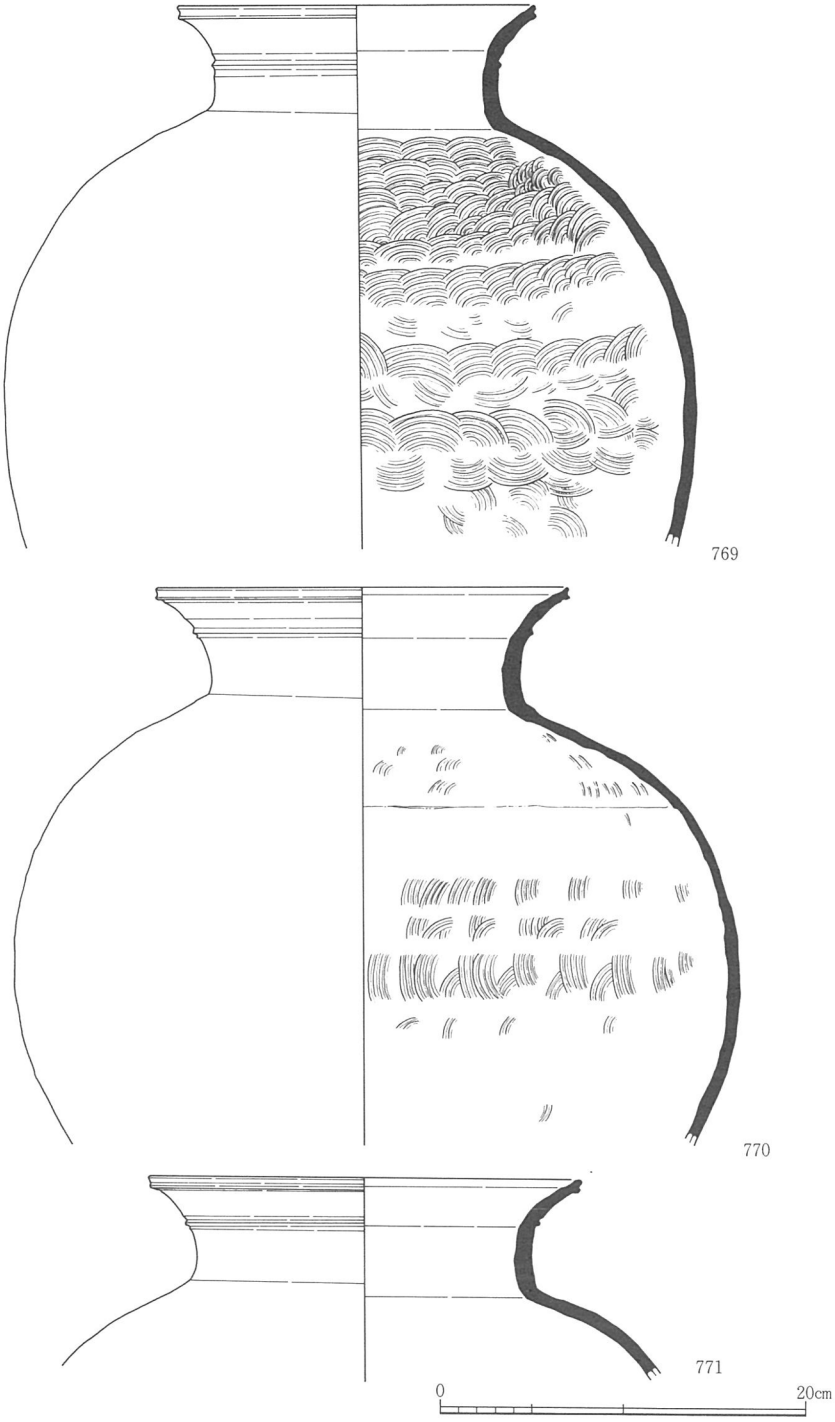
口頸部は大きく外反しながら直線的に短くのびる。頸部には凸帯が巡り，口縁部にはb・c形態のものが混在し，a形態はみられない。底体部は，肩部残存状況からほとんどのものは最大径が40～50㎝程度と推定されるが，大きく肩部が張り50㎝を越えると推定される



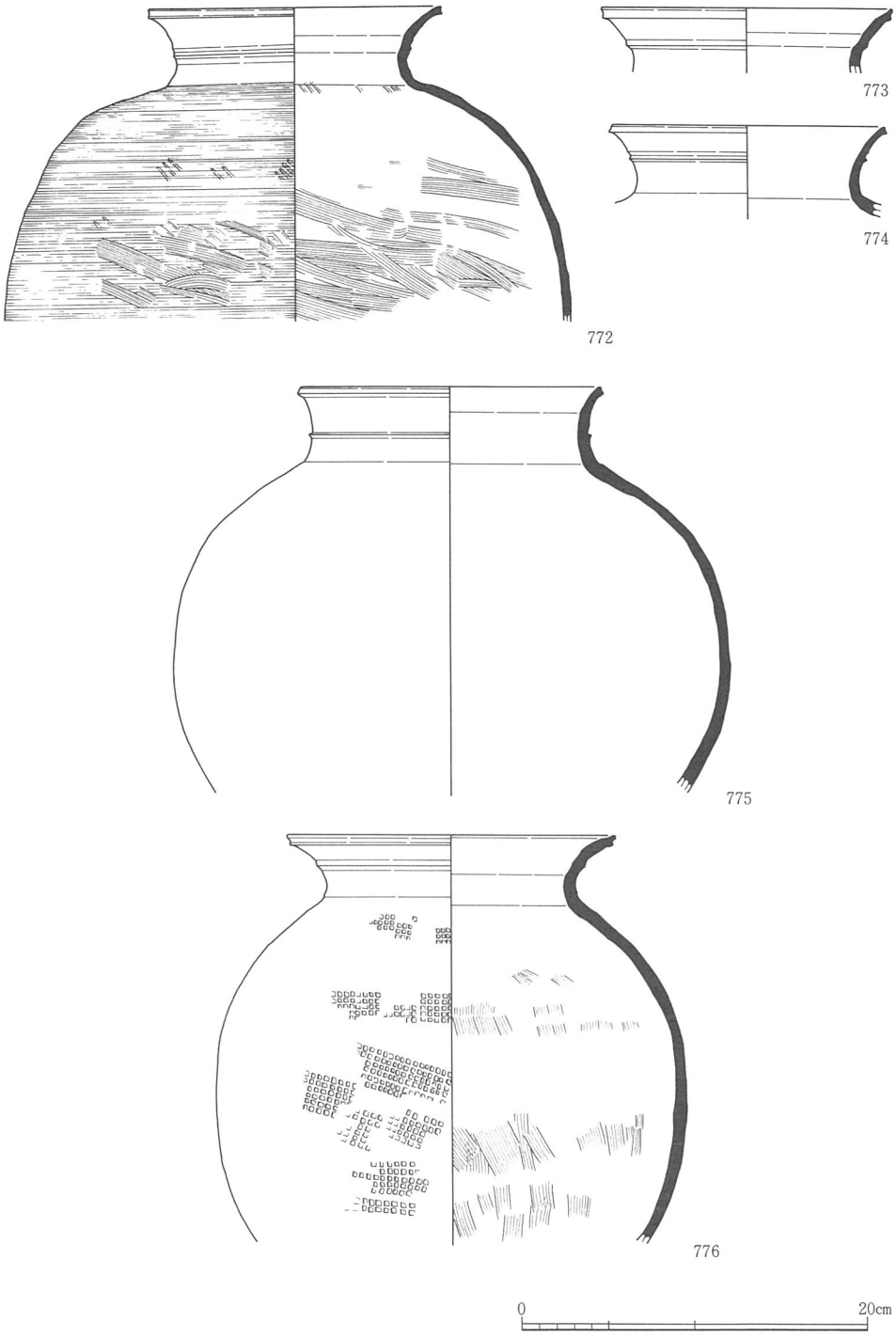
第111図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺３）Ｓ＝1/4



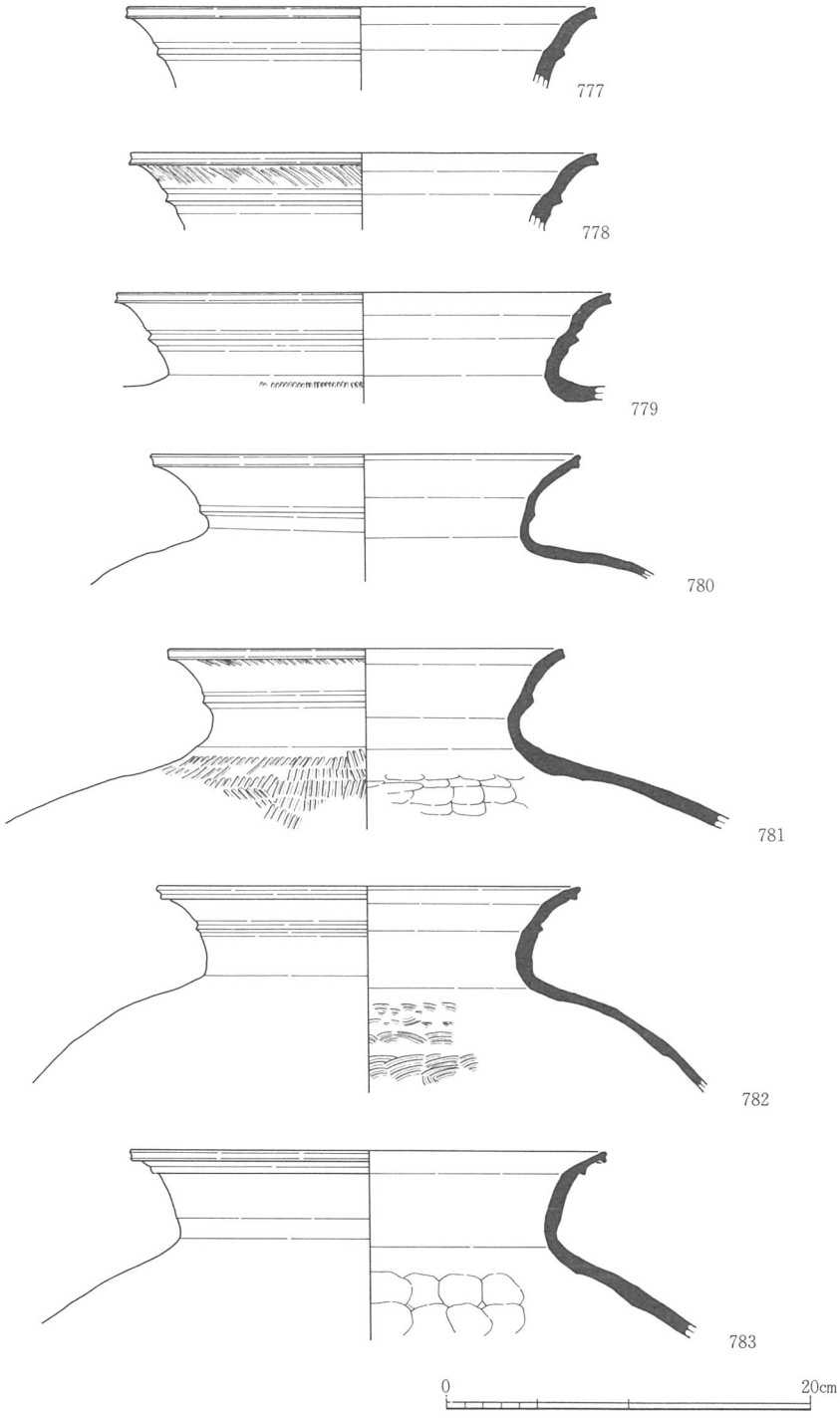
第112図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺４）Ｓ＝1/4



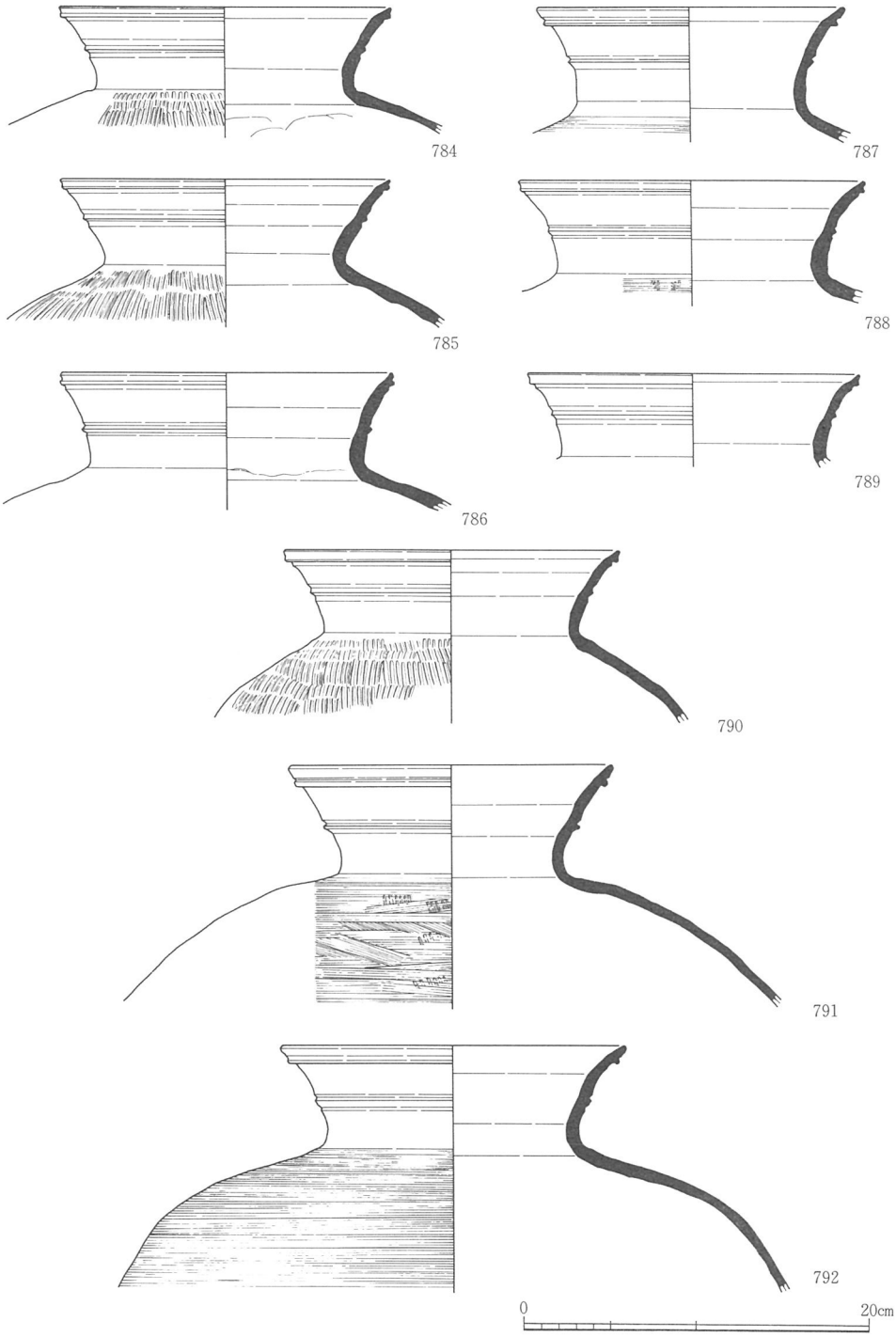
第113図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺５）Ｓ＝1/4



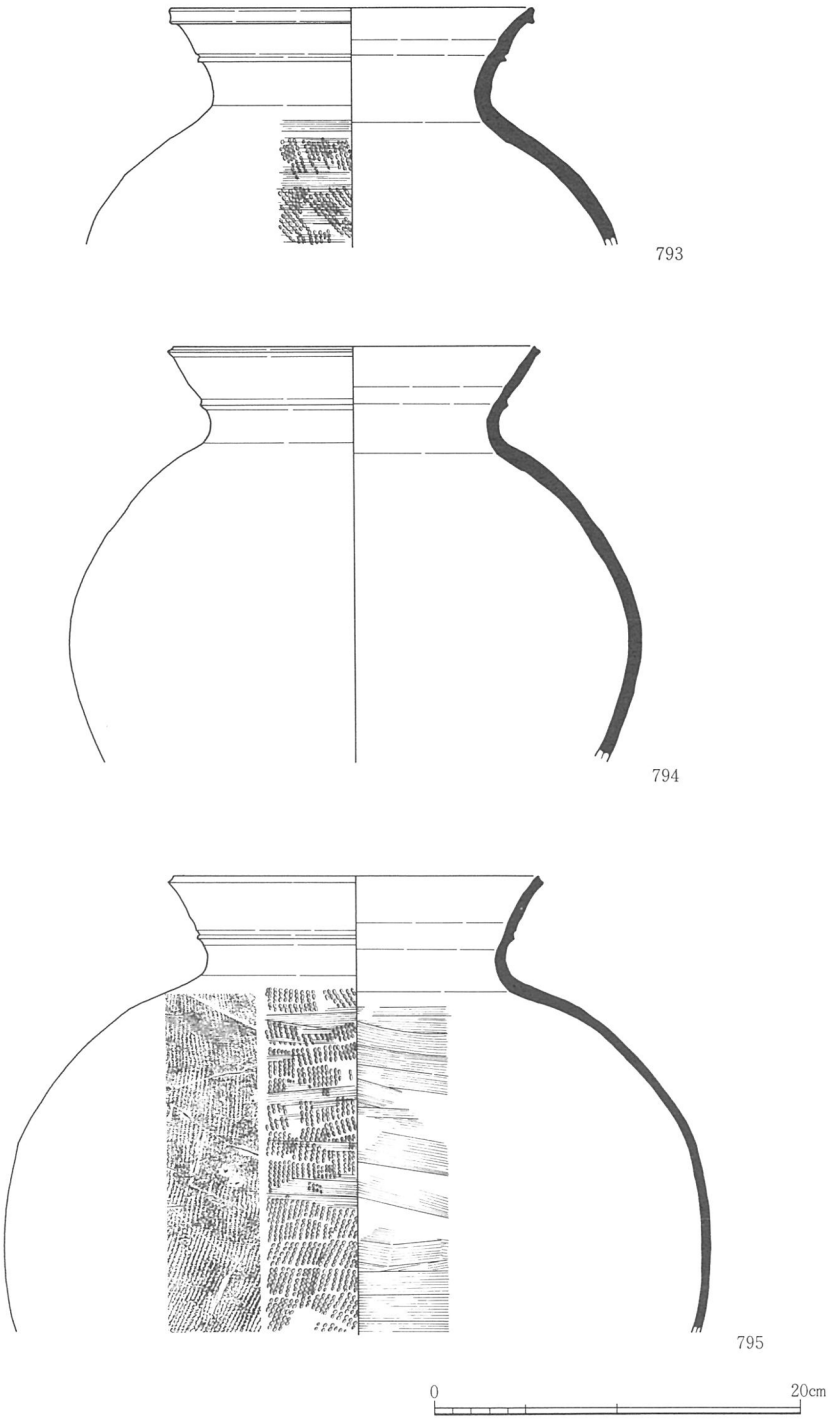
第114図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺６）Ｓ＝1/4



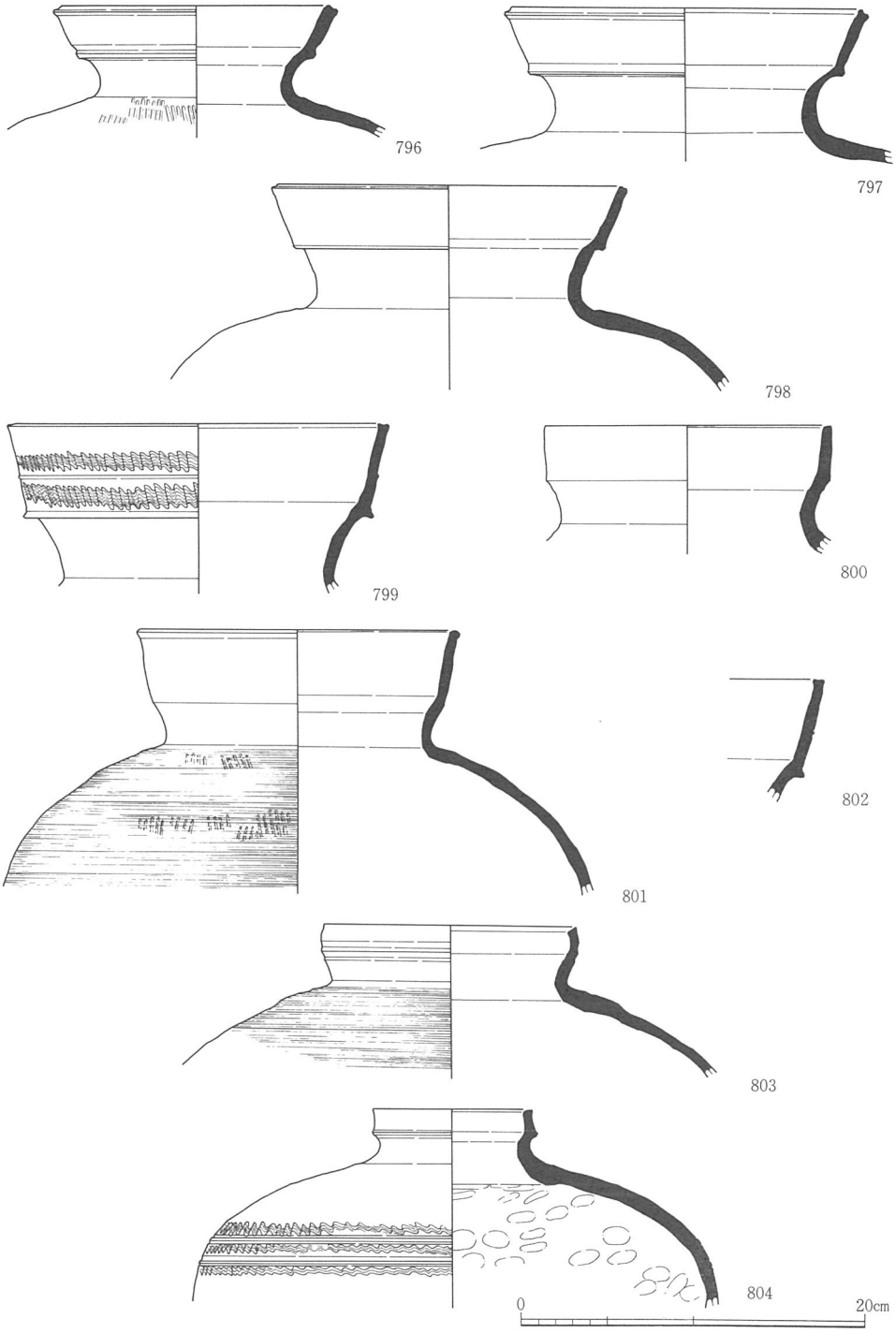
第115図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺７）Ｓ＝1/4



第116図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺８）Ｓ＝1/4



第117図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺９）Ｓ＝1/4



第118図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺10）Ｓ＝1/4

もの（781）もある。

なお，783は凸帯が他に比べ口縁よりの高い位置にあり，他類に含まれる可能性もある。

Ｆ類（784～795）15点

口頸部は外方に向かって直線的にのび，頸部のほぼ中央に凸帯を巡らせる。口縁端部はａ・ｂ・ｃ形態のものが混在するがａ形態のものが多い。底体部は肩部の残存から最大径が30～40㎝のものとやや大型で40～50㎝の二者があるが，50㎝を越えるものはないようである。また，Ｆ類は底体部の外面に，タタキ目を残存させるものやカキ目を全体に施すものが多くみられ，Ｃ～Ｅ類などに比べ装飾性は高いと言える。

Ｇ類（796～802）13点

いわゆる二重口縁形態の壺である。口縁部や頸部の細部形態により，１～４類に細分される。

Ｇ－１類（796～798）４点

口縁部は外方に短く開き，頸部との屈曲部には凸帯が巡る。

Ｇ－２類（800・801）６点

口縁部は直立気味にのび，頸部との屈曲部には凸帯は認められない。また，口縁端部，屈曲部の稜など総じて鈍い感を受ける。

Ｇ－３類（799・802）２点

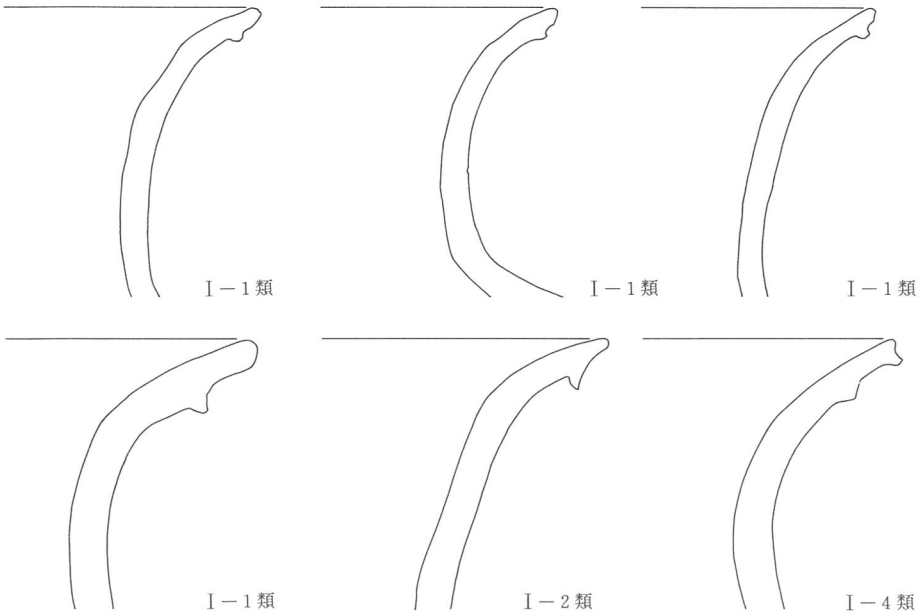
口縁部は直立気味にのび，頸部との屈曲部には稜の鋭い凸帯が巡る。口縁端部の稜も鋭く，全体をシャープに作り出している。また，口縁部を波状紋で飾るものはＧ－３類のみである。

Ｇ－４類（803）１点

口頸部は低く，直線的な頸部から口縁部は短く直立する。頸部から屈曲して口縁部が直立する特徴からＧ類の中に含めたが，Ｇ－１～３類と比較すると明確な二重口縁形態の壺とは言い難いものである。

Ｈ類（804）３点

狭口の短頸壺である。口縁部は短く直立し，頸部との屈曲部には凸帯状の鋭い稜が認められる。底体部は肩部が大きく張りだし，体部の中央よりやや上方は，３条の波状紋と低い凸帯で飾られる。また，明確ではないがこの壺には脚が伴う可能性が高い。脚については，同一器形ではないが393－ＯＬ（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』で報告）出土の344と似た形態と推定されよう。



第119図　壺Ⅰ類の口縁形態

Ⅰ類（805～833・842）41点

口頸部は，直立気味の頸部から口縁部が大きく開き，口縁端部のすぐ下方に凸帯を１条巡らすだけのシンプルなものである。いわゆる中型甕と呼称されるもので，口頸部の諸特徴は大型甕と共通している。ここでは，まず大型甕の口縁端部による分類基準によって細分を行っておく。

Ⅰ－１類（805～809・814～818・820～822・824～827・830～833）

大型甕Ａ－１類に相当する。出土数はＡ類の中で最も多い。また，Ⅰ－１類の口縁形態には，口縁端からやや下方に凸帯を巡らすものと，端部直下に巡らすものの二者が混在している。

Ⅰ－２類（810～813・823・829）

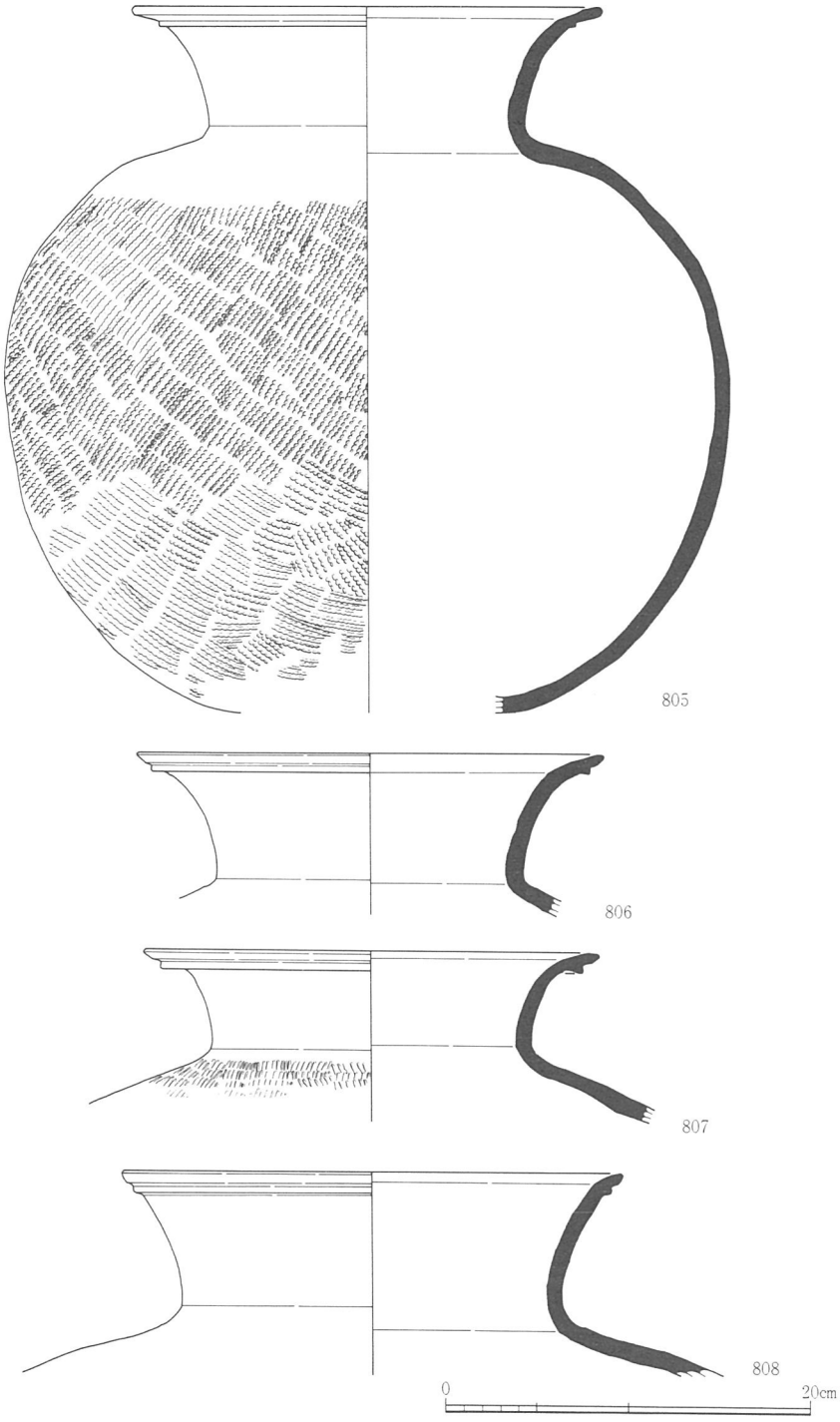
大型甕Ａ－２類に相当する。

Ⅰ－３類（819）

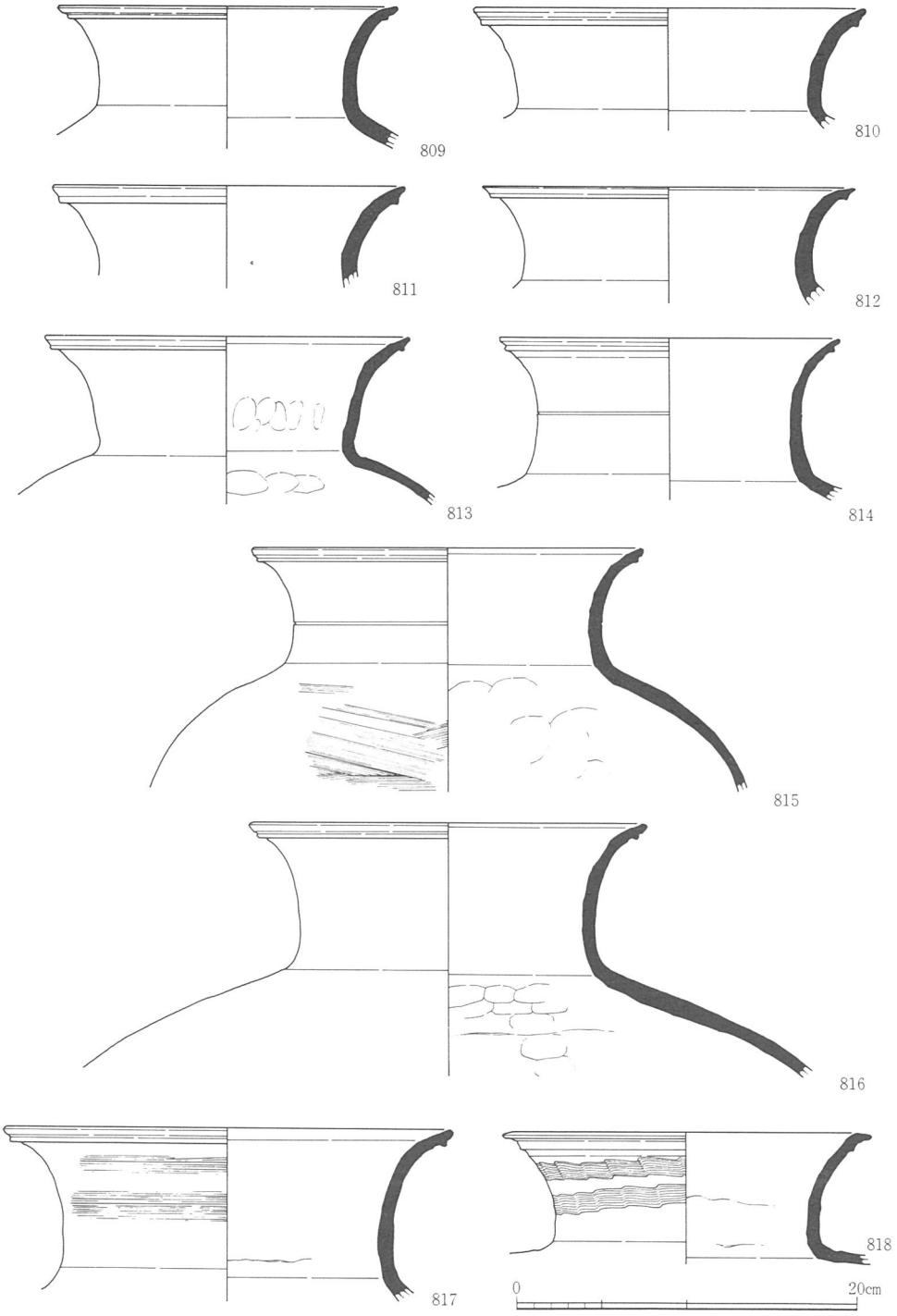
大型甕Ａ－３類に相当する。

Ⅰ－４類（828）

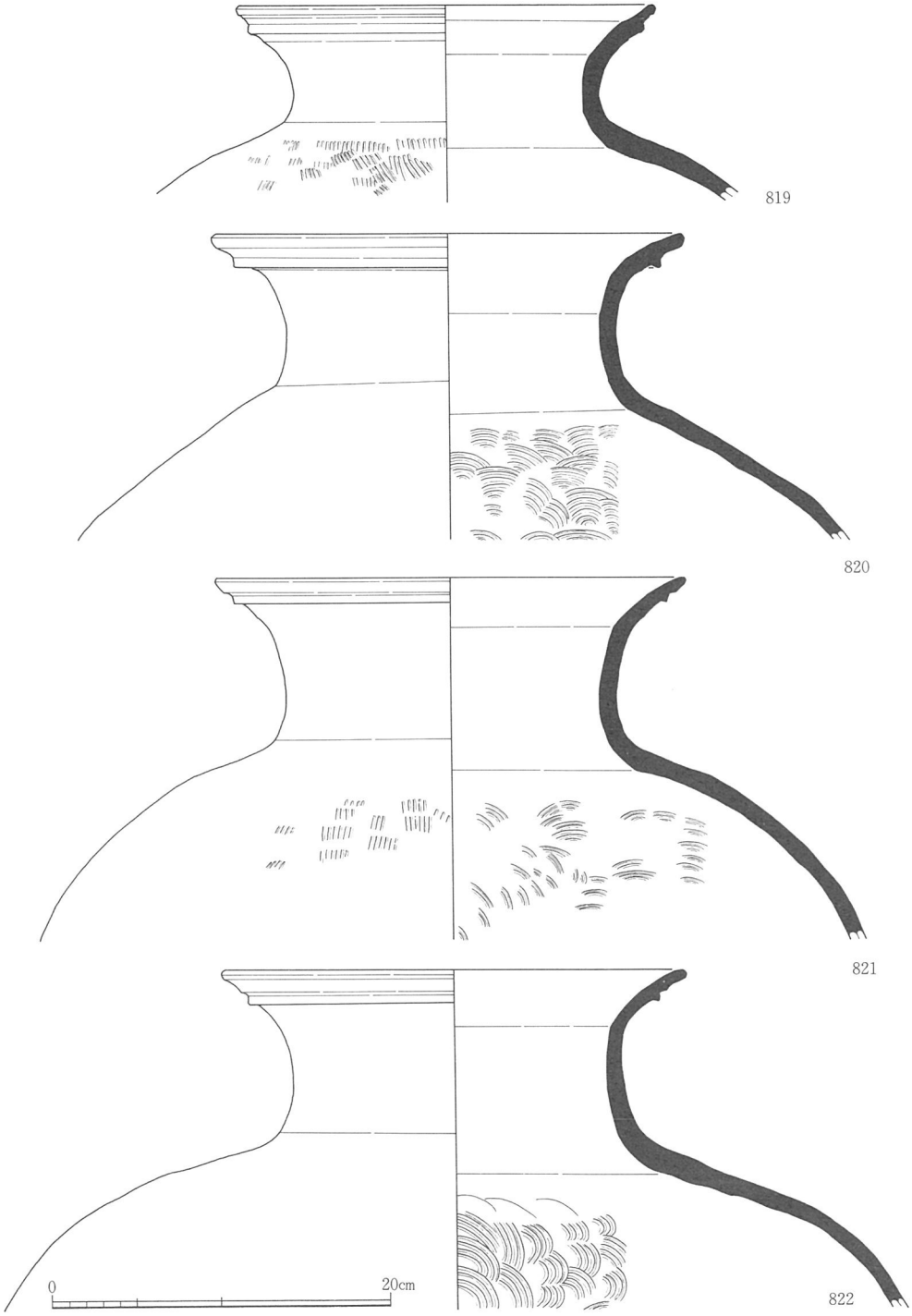
口縁端部に面をもつもので，大型甕Ｂ－１類に相当する。



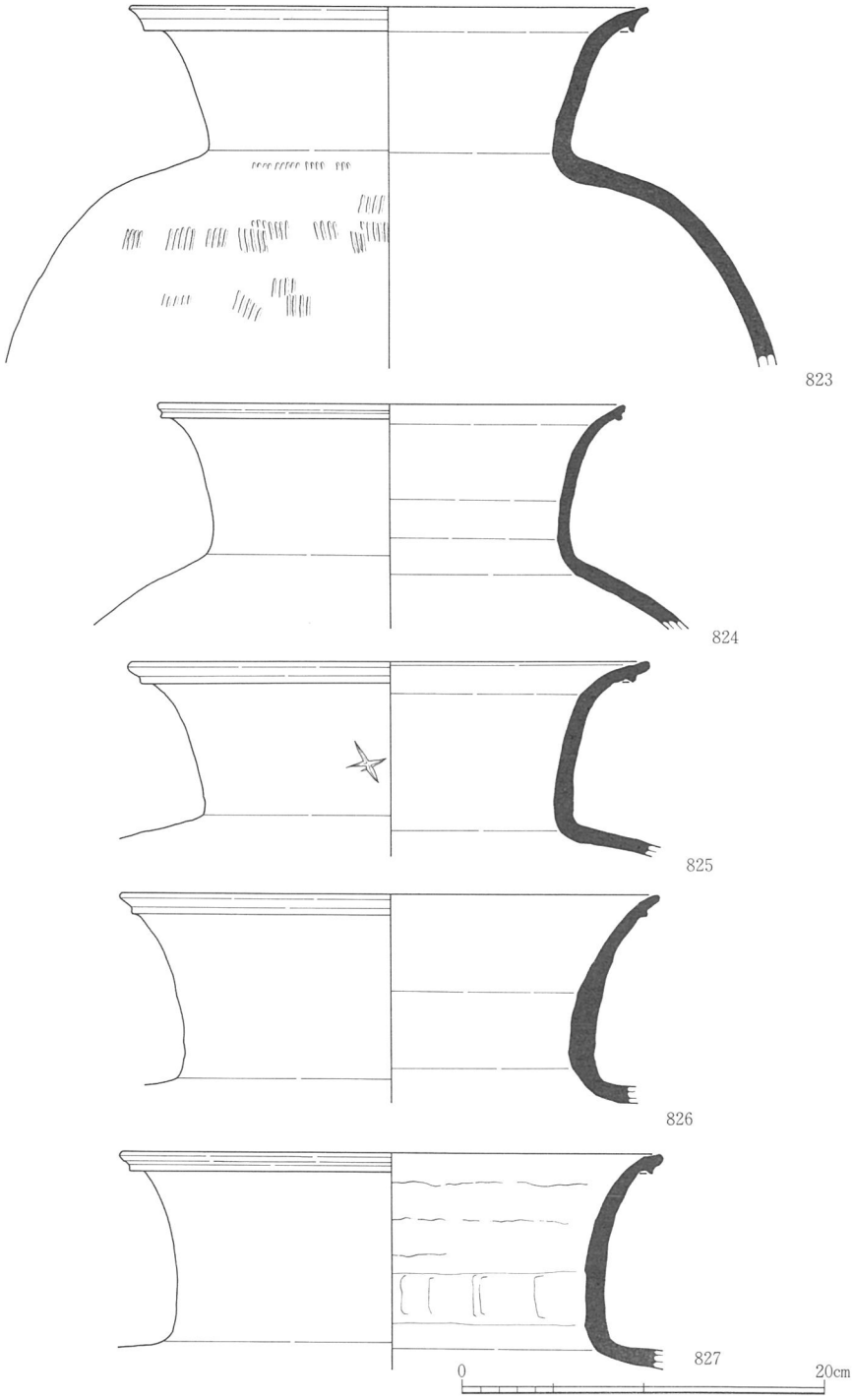
第120図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺11）Ｓ＝1/4



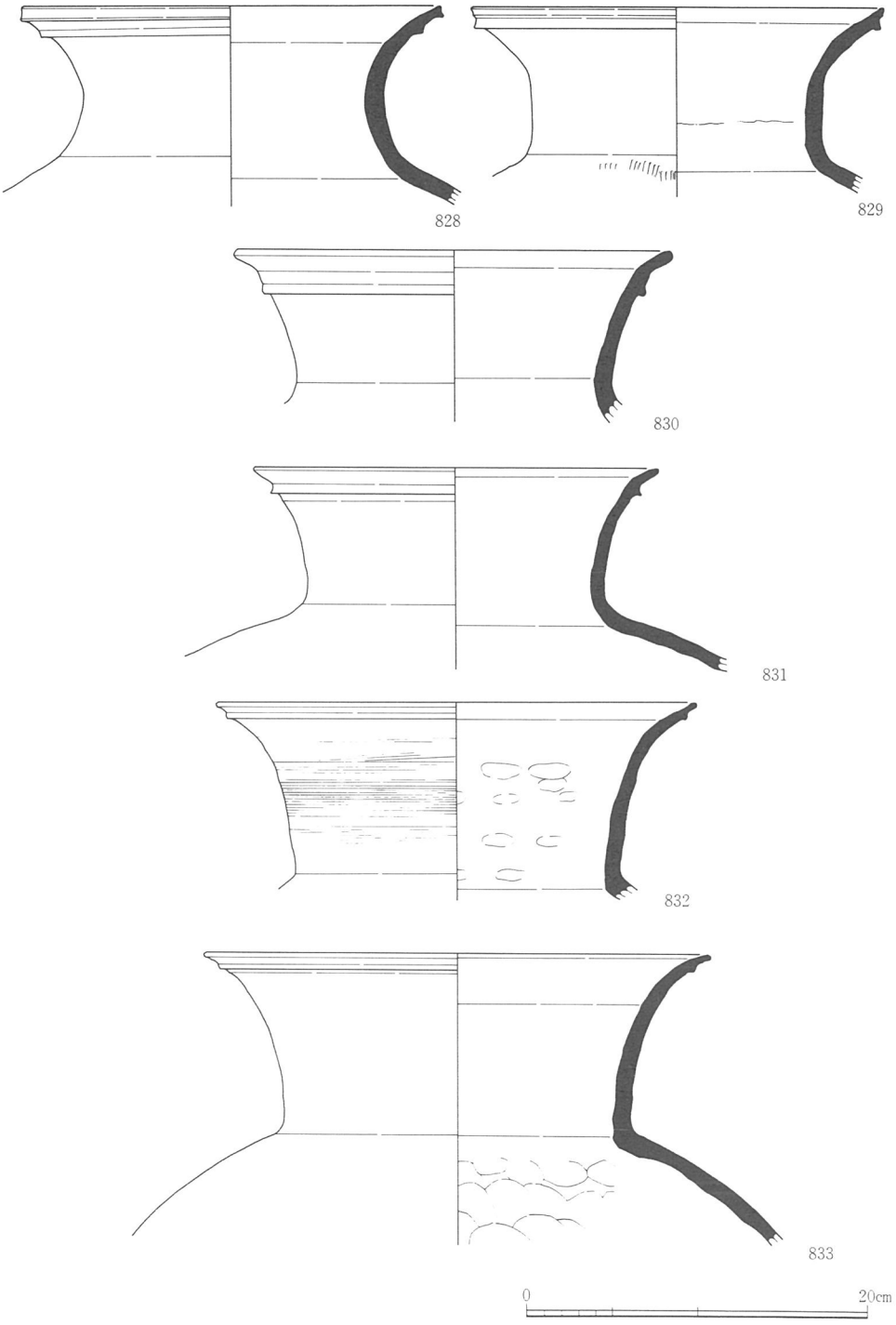
第121図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺12）Ｓ＝1/4



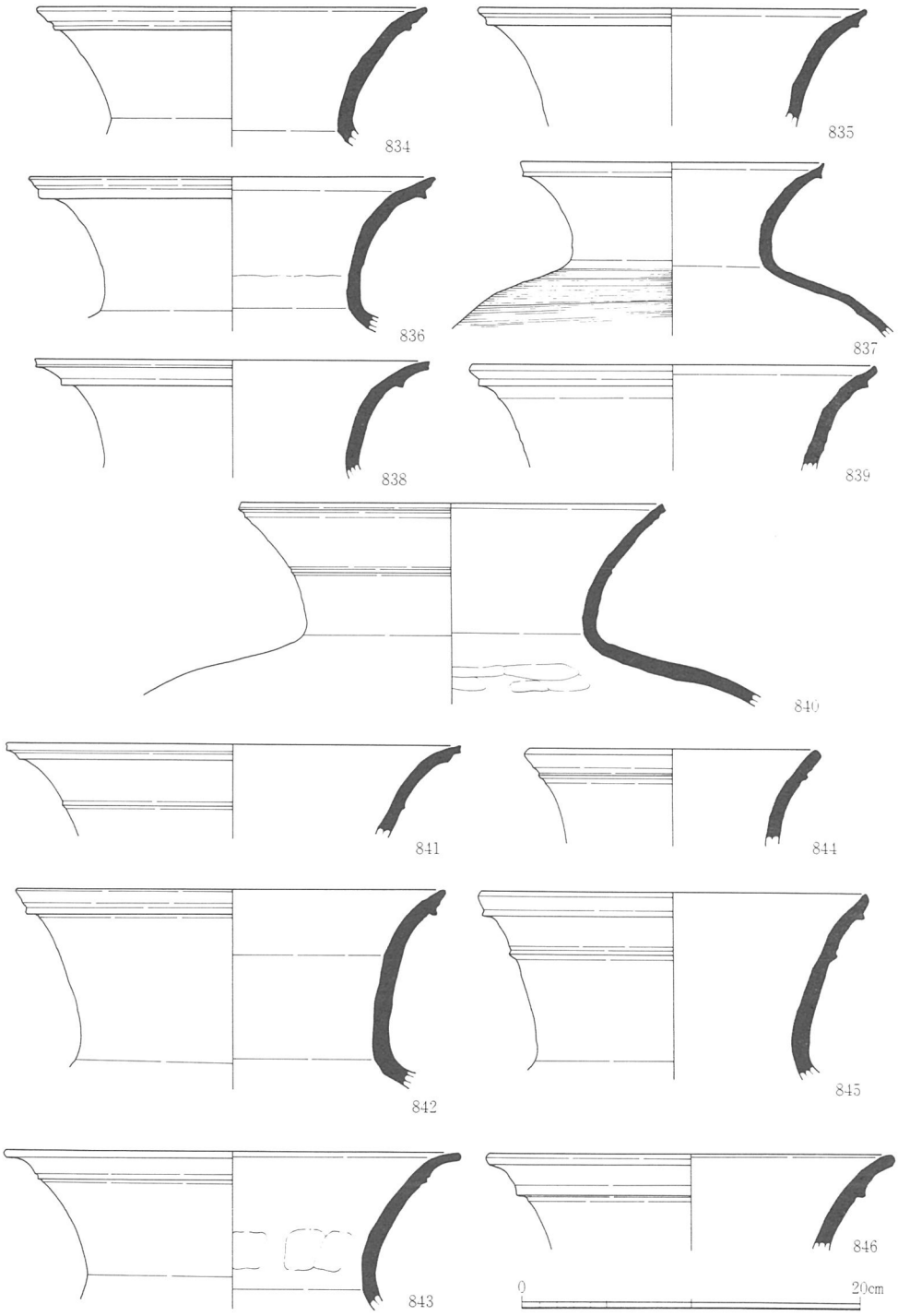
第122図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺13）Ｓ＝1/4



第123図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺14）Ｓ＝1/4



第124図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺15）Ｓ＝1/4



第125図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺16）Ｓ＝1/4

口縁部の形態からは４類に分類されたが，口頸部の全体形状からは３形態に分けられる。ａ－口径の割に頸部の短いもの，ｂ－頸部は比較的細く，直立気味にのび，口縁部が大きく開くもの，ｃ－開きながらのびる頸部から，口縁部がさらに大きく開くものである。量的にはｃが最も多く，次いでａ・ｂの順となる。大型甕も同様でａ・ｂ・ｃいずれも存在するが，ｃが圧倒的に多いようである。ただ，ｃには便宜上壺と甕を分ける基準とした口径30㎝に近いものがあり，大型甕と区別できないものが他形態に比べ比較的多く含まれている。つまり，Ｉ類では大型甕に比べａ・ｂ形態の占める割合が高くなる傾向が指摘できよう。

Ｊ類（834～840）15点

ラッパ状に口頸部が開く形態である。また，基本的にはＪ類もＩ類同様中型甕と呼称されるもので，口頸部の諸特徴は大型甕と共通したものが多い。Ｊ類もまず大型甕の分類基準にそって細分しておく。

Ｊ－１類（834・836・843～846）

大型甕Ａ－１類に相当する。

Ｊ－２類（835・837）

大型甕Ａ－２類に相当する。

Ｊ－３類（838）

大型甕Ｂ－１類に相当する。

Ｊ－４類（839～841）

大型甕Ｂ－３類に相当する。

上記のように口縁部の形態からは４類に分類されるが，Ｊ類も口頸部の全体形状からは２形態に分けられる。

ａ－ラッパ状に大きく開くもの（834～841・843）

ｂ－ａに比べ開きの小さいもの（844～846）

ａは大型甕の中に類似したものがみられ，大型甕を縮小した中型甕の範疇で捉えられるが，ｂは壺に限られるものである。ここでは，ｂもＪ類としたが，他類として捉えられる可能性もある。

Ｋ類（847～862）36点

口頸部が短く外反する短頸の壺である。法量・頸部の細部形態により１～４類に細分される。

Ｋ－１類（847～851）

口頸部が弧を描くように外反し，底体部は球形を呈する。法量には大・中・小３種があり，それぞれ，口径20㎝（851），口径16㎝・器高約28㎝（850），口径13㎝・器高19㎝（849）を測る。口縁端部はａ・ｂ形態のものもあるが，多くはｃ形態のものである（第110図参照）。底体部はナデ消しにより仕上げるものは少なく，外面全体にカキ目を施したもの（849）や縄蓆タタキ目をそのまま残存させたもの（850・851）がみられる。

847・848は口頸部のみの残存であるが，底体部は849・850同様球形を呈すると考えられ，当類に含めた。

Ｋ－２類（852）

口頸部の器形はＫ－１類と似るが，底体部の形態は異なっている。肩部が大きく張り出しＫ－１類の大型品よりもひとまわり大きい，全体的に器壁が厚い，外面はていねいなナデ消しで仕上げるなどの特徴がある。

Ｋ－３類（853～858）

口頸部が，直線的に短く外反する形態である。口縁端部の形態は，ｂ形態のものも若干みられるが，ほとんどのものはｃ形態である（第110図参照）。底体部については，完存したものが皆無で把握できないが，最も残存状況の良好な853からは球形からやや胴長の器形が推定されよう。

Ｋ－４類（859・860）

直立気味の頸部を有するものである。底体部の器形は球形を呈する。

Ｌ類（861・862）６点

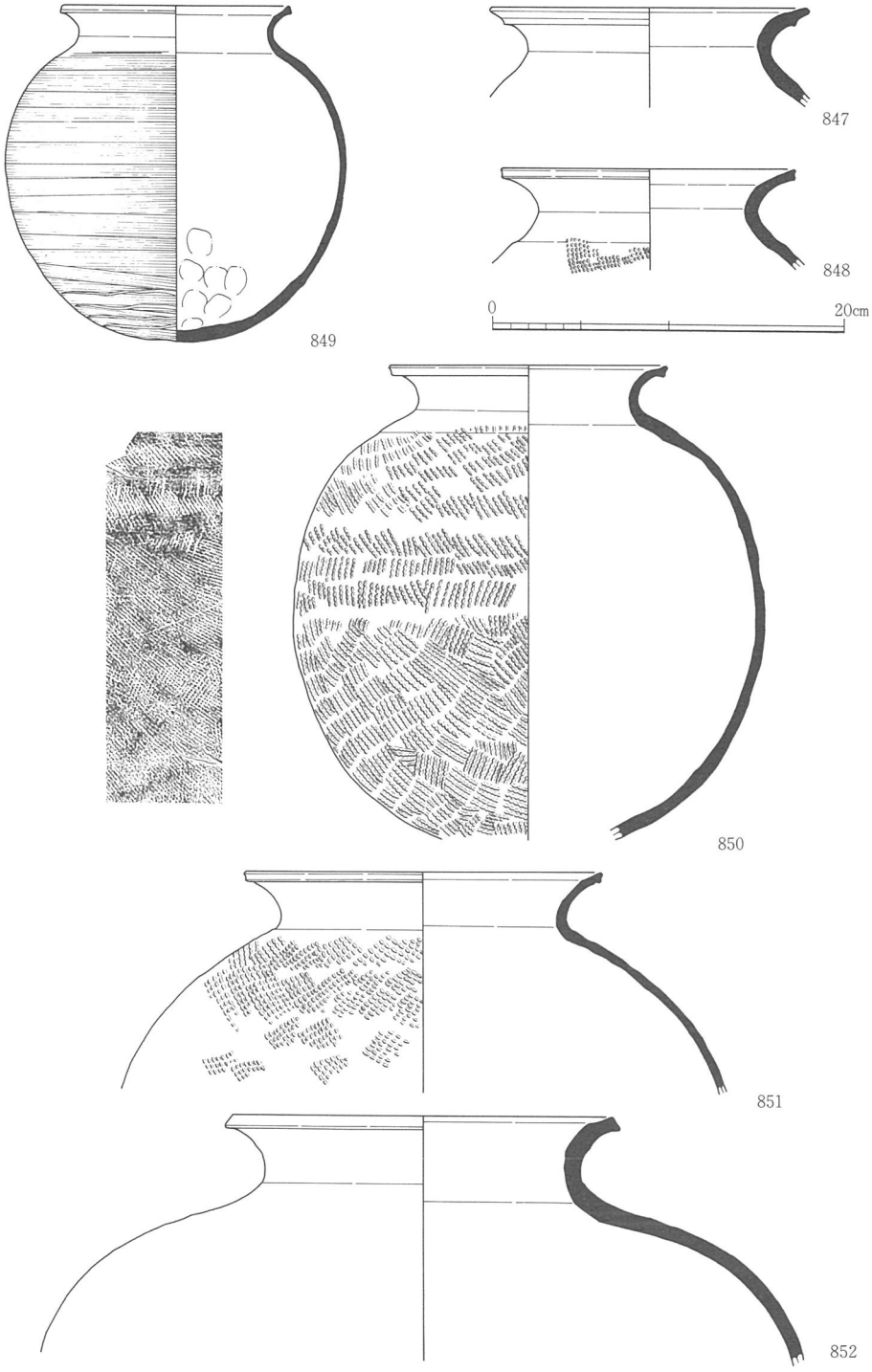
短く直立する頸部から，口縁部は大きく外反する。底体部の肩部が大きく張り出し，器形・調整の特徴はＫ－３類と共通する。口縁端部は，ほとんどが大型品によくみられるａ形態のものである（第110図参照）。

Ｍ類（863・864）４点

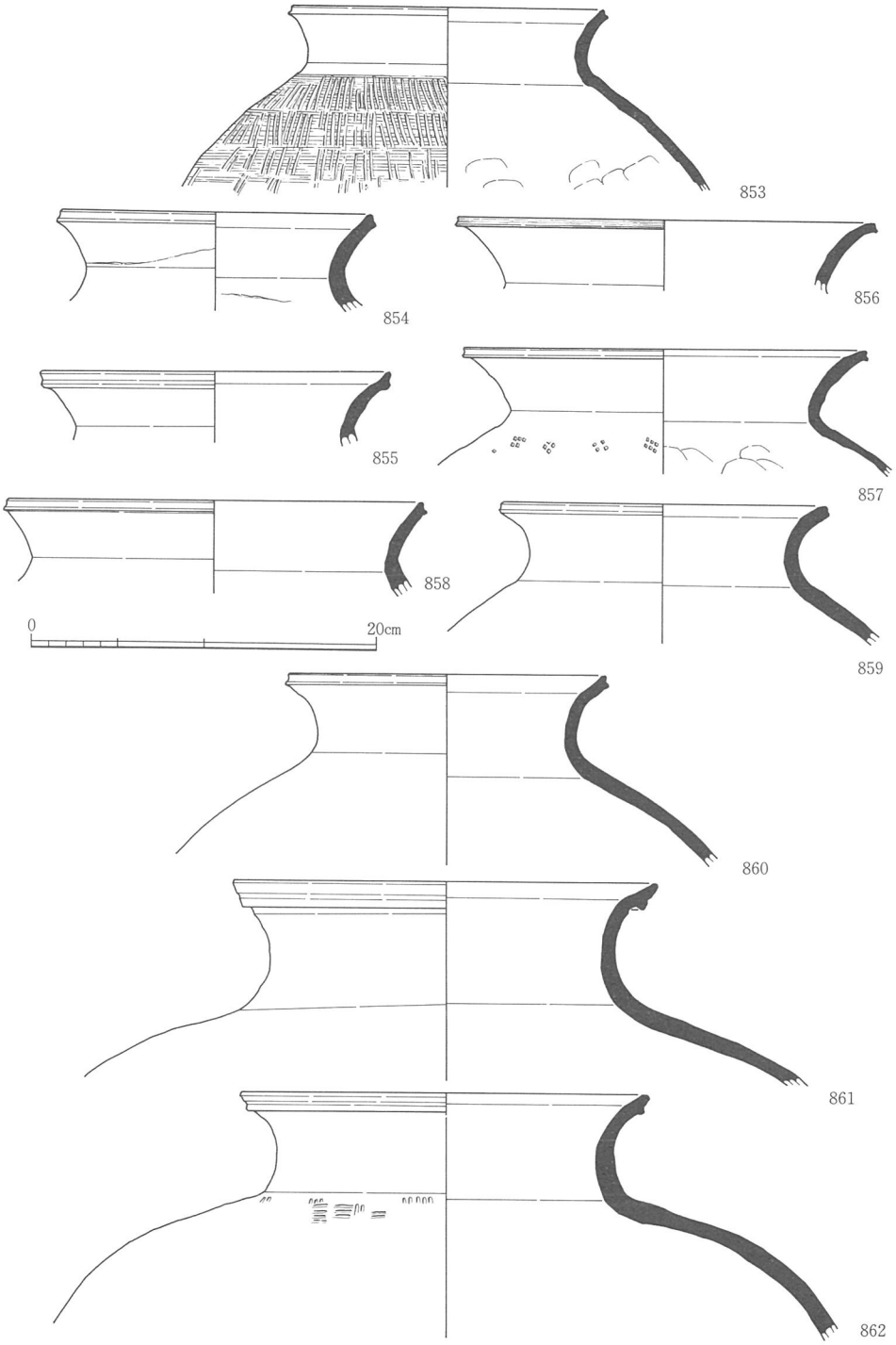
Ｋ類に比べ，口頸部が直線的に長くのびるものである。口縁端部は面をもっておさめるｂ形態である（第110図参照）。

Ｎ類（865・866）２点

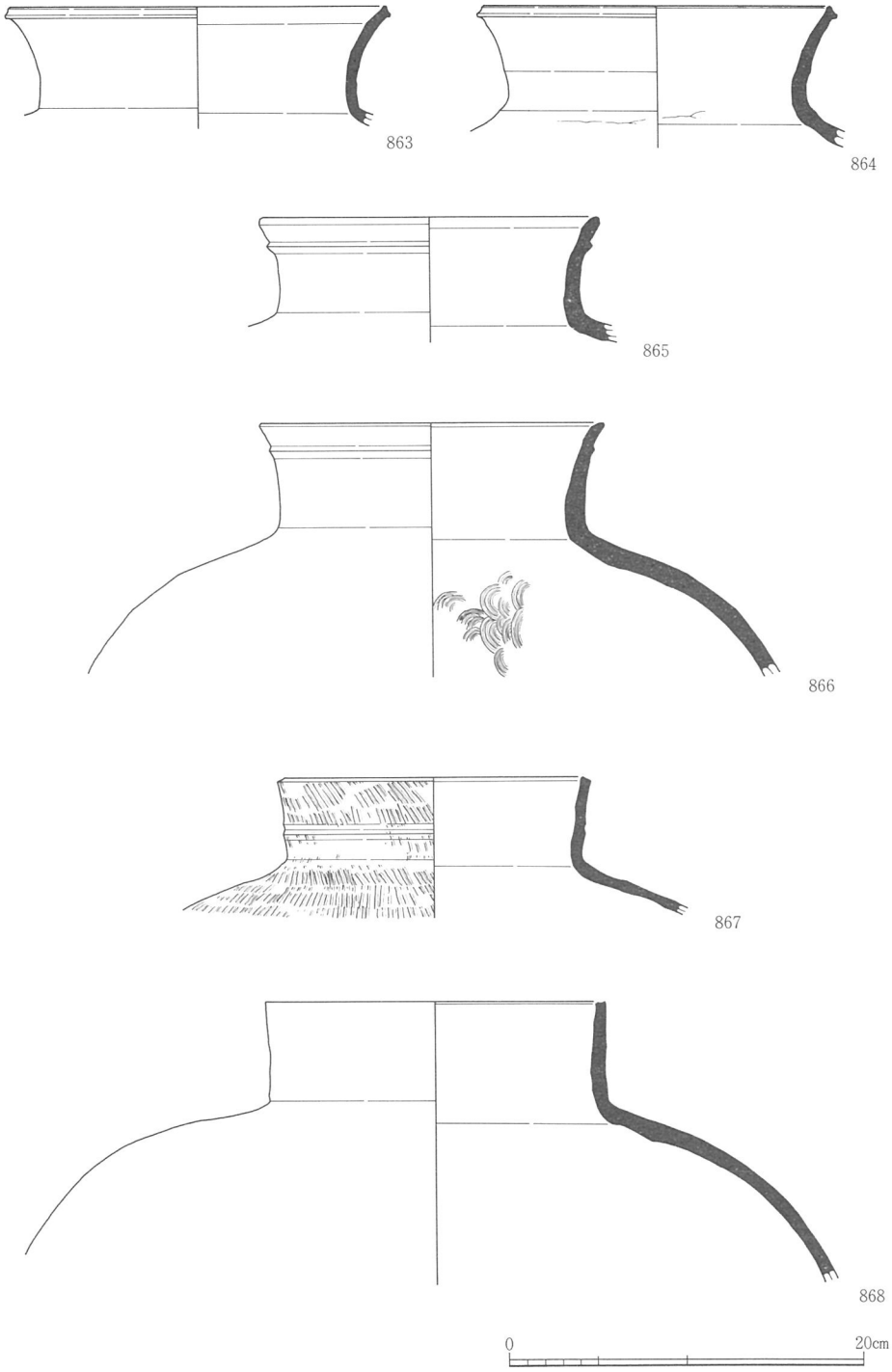
口頸部はほぼ直立し，口唇状におさめた口縁端部のやや下方に，凸帯を１条巡らせる特徴を有する。本灰原出土品には全体を把握できるものはないが，393－ＯＬで完形品が出土している（『陶邑・大庭寺Ⅲ』土器番号486）。



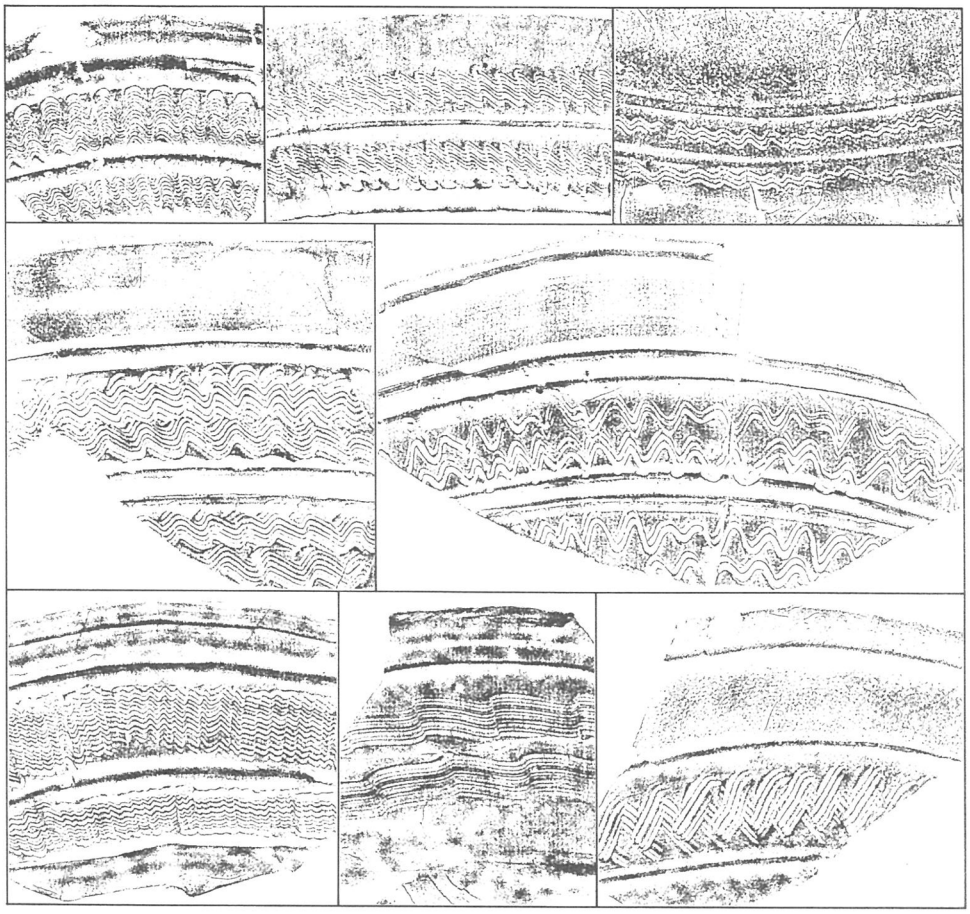
第126図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺17）Ｓ＝1/4



第127図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺18）Ｓ＝1/4



第128図　ＴＧ232号窯出土須恵器（壺19）Ｓ＝1/4

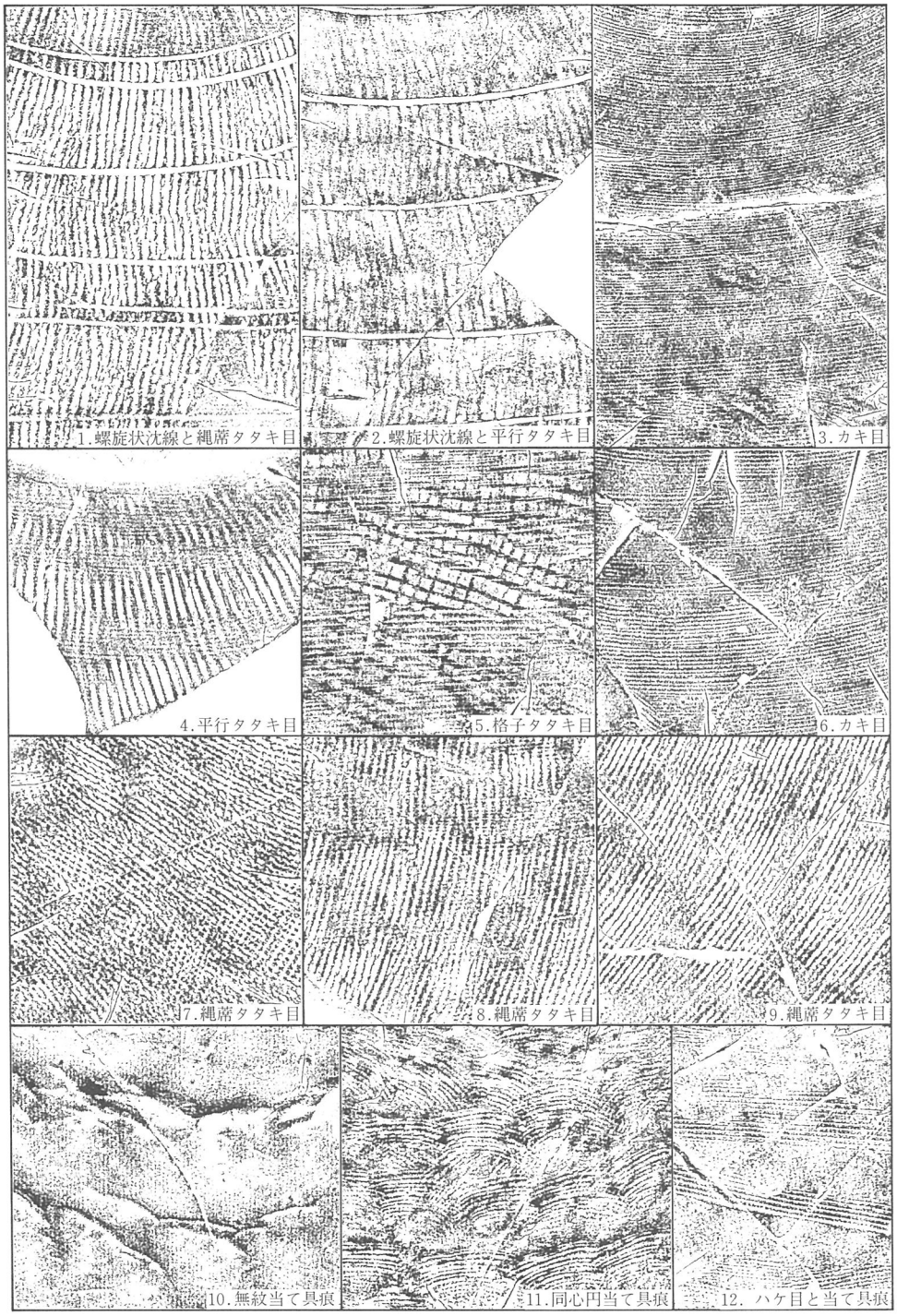


第129図　壺の紋様

Ｏ類（867・868）２点

口頸部が直立する直口壺である。大型甕Ｅ類1019～1023もＯ類と類似するが，ここでは別形態としている。

これは，大型甕Ｅ類としたものは，口縁端部をヘラ切りで整え，口径も大きく，大型甕製作途上で器種の変更が行われた可能性が高いのに対し，壺Ｏ類としたものは口縁の端部は回転ナデで整えられ，口径も小さく，製作当初から直口壺として製作されたことがうかがえるためである。（岡　戸）


1.螺旋状沈線と縄席タタキ目
2.螺旋状沈線と平行タタキ目
3.カキ目
4.平行タタキ目
5.格子タタキ目
6.カキ目
7.縄席タタキ目
8.縄席タタキ目
9.縄席タタキ目
10.無紋当て具痕
11.同心円当て具痕
12. ハケ目と当て具痕

第130図　壺の調整

大型甕（第131～182図，図版117～151）

概　要

ＴＧ232号窯出土遺物量の大多数を占めるものが大型甕である。灰原のほぼ全域からまんべんなく出土している。ＴＧ231号窯と比べると長さ20～30㎝を超える大型の破片が多数を占めているのが特徴である。一部は上層のＴＧ233号窯の灰原にも含まれており，接合関係も多いことからこの層中の大型甕にはＴＧ232号窯の灰原に伴う遺物として扱ったものがある。直近する遺構や周辺出土の遺物にも同形式の大型甕がかなりあるが，ＴＧ232号窯灰原出土遺物との接合関係がなく，同一個体の識別のつかなかったものは，厳密を期するためＴＧ232号窯出土遺物として扱っていない。

大型甕は一部ＴＧ233号窯出土を含め，ＴＧ232号窯の灰原に伴ったものについては，すべての口縁部片について個体分離と接合関係を検討した。その総数は674個体分に達する。小片や個体分離にやや疑問の残るものを除外しても，600個体を確実に超える。ただし，各土器片の接合作業が，全体復元を試みた数点を除き口縁部から頸部付近の土器片に重点をおいたこともあり，周辺出土の遺物との接合関係を充分把握できていない。体部片の接合関係を媒介にして，対象外にした口縁部が加わる可能性はある。したがってここでＴＧ232号窯灰原に伴うとした大型甕の個体数は，最少限に見積もった失敗品の数である。

分布の傾向

口縁部付近の接合作業に限られるが，大型甕の接合関係についてみると上層のＴＧ233号窯に伴うもののほかでは，層位は異なるものの灰原周辺にある19－ＯＳ，38－ＯＳ出土遺物と接合するものが多く，直上のＴＧ233号窯灰原のさらに上層で，灰原から20数ｍ離れた包含層中の遺物と接合するものもある。特筆するものとして約50ｍ西に離れた１－ＯＬ出土遺物と接合したもの（922・976），南に10数ｍ離れているＴＧ231号窯灰原から出土した土器との接合関係をもつ（954）ものも数個体ある。

各個体の灰原内の分布関係を見ると，体部の接合関係を別にすると，一定の範囲内に集中する傾向にある土器と，灰原の各所に広範囲に散らばっている土器とがある。例えば，906・927・933・947～950などは灰原の北寄りに，896・957・959などは灰原の中央付近に，923・925・941・963・926・895・1006などは灰原の南寄りの一定の部分にそれぞれ集中している。一方，876・908・910・917・956・967・1011などは灰原各所の広範囲にわたって接合関係をもっている。

大量の遺物を短期間に取り上げざるを得なかったため，出土位置を厳密に固定できた訳ではないので，この分布傾向からそれぞれの形態的特徴と出土地区に相関関係があるかどうかは，はっきりさせられない。それでも，後述する分類のＢ群に属するものの方が広範囲に接合関係をもつように見受けられる。

全体形状と各部の調整手法（第131図）

灰原出土資料の大型甕は焼き損ないの品であるため，当然のことながら各部位の歪みがあり，標本的な全形復元はほとんど行わなかった。そこで本灰原と関連する既報告の393－ＯＬ出土資料を参考にすると，口径30㎝弱，器高50㎝，胴径50㎝前後を測り器高と胴径が1：1になる小型のものと，口径40㎝未満，器高60㎝，胴径55㎝前後を測り1：0.9になる中型のもの，口径40～60㎝，器高80～100㎝，胴径65～80㎝前後を測り1：0.8前後になる大型のものとがある。報告資料の10余点とも口径と器高，胴部径にかなりの相関性があるようなので，今回の報告資料も似た形状を想定してよいであろう。前二者は口頸部の形態が壺的な要素をもっており，小型のものは壺として扱っている。

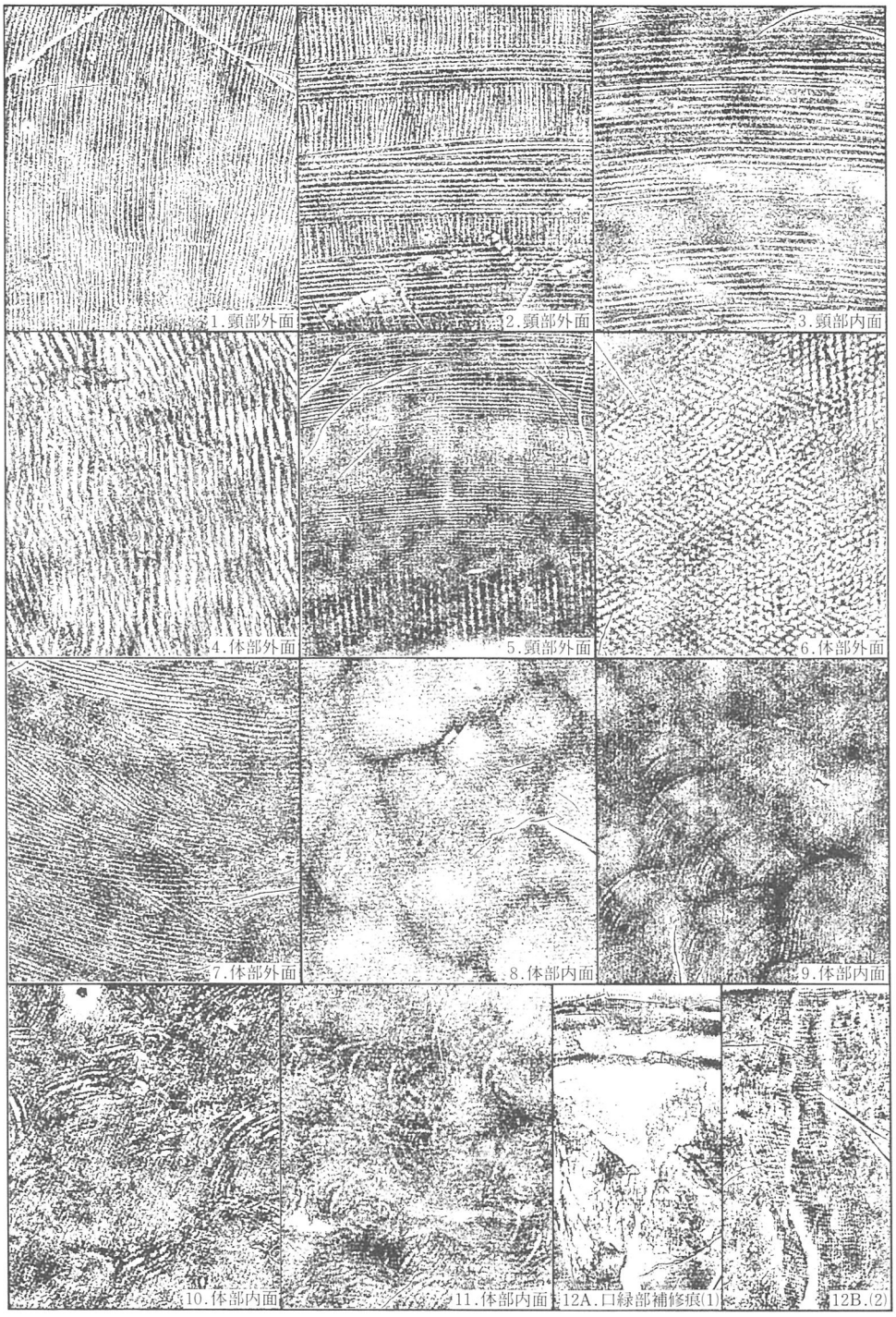
今回甕として扱った中・大型の口径は，復元推定の確実なもので見ると40～55㎝前後のものがもっとも多く，大型甕全体の約90％弱を占める。机上の推定復元の関係か，中でも45㎝前後と50㎝前後のものが多数を占め，40㎝前後，55㎝前後のものが続いている。既報告を参考にすると，大型のものが圧倒的に多い（第Ⅶ章表３参照）。

口頸部の高さで見ると，小型および中型の口径30㎝未満のものは口頸部の高さが９㎝以下で，口径が30㎝を越えるものの多くは口頸部の高さが12㎝以上である。かりに口頸部の高さ10㎝を目安にして，10㎝未満のものをＴＧ232号窯甕資料で見ると４％に満たない。14～15㎝以上のものが80％以上を占めている。口頸部の高さが10㎝未満のものは壺を意識したと見てよいかも知れない（第Ⅶ章表５・６参照）。

口頸部の形状では，既報資料と同様にＴＫ73号窯など陶邑の一般的な形とされていた，口縁部が開き気味のタイプと北部九州の特徴のように見られていた頸部が直立気味のタイプの両者が存在する。これについては改めて記したい。

体部・口頸部は別々に成形して上下に継ぎ足しており，口頸部側の接合面にヘラで斜格子を刻んで体部との接合の際の粘土の圧着を強める工夫がなされている（図版147－1001）。体部側に貼り足された接合面では凹凸が反転した斜格子が認められる。

各部の整形・調整手法をみると，ともに各種のタタキ工具や指押さえによって粗い整形がなされ，その後に最終調整として整形時の痕跡を消すように器表をナデている。



第131図　大型甕の調整

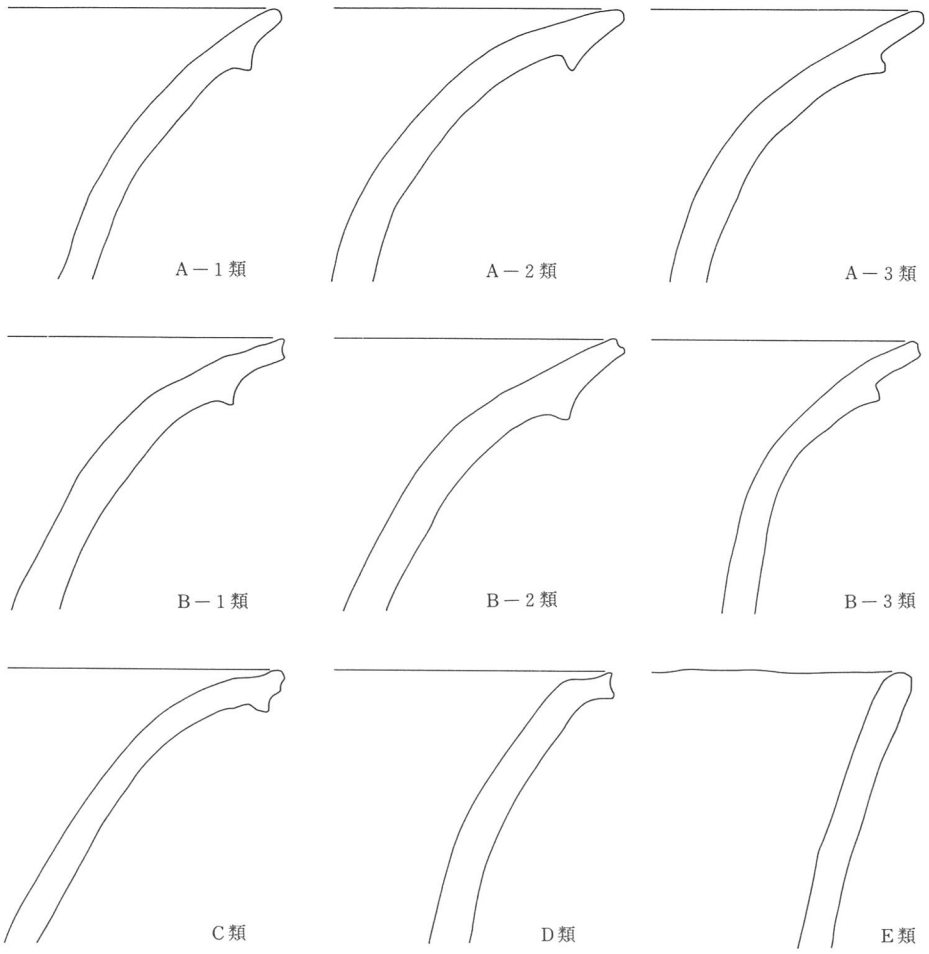
口縁部付近の最終調整は，多くが回転ナデ調整による。静止ナデ（縦・斜め方向のナデを含む）による調整痕も認められたが，むしろ部分的な調整痕と思われ，全体的には回転ナデによって最終調整を行ったと考えられる。回転ナデの際にハケ目状の工具を用いた調整痕（第131図2・3－以下，回転力を利用したハケ目痕をカキ目と呼び，縦・斜め方向のハケ目痕と便宜的に区別して呼ぶ）もかなりの数認められる。カキ目は内面に残されるケースが多いようである。相前後して回転ナデと併用されている場合が多い。

頸部では上半には回転ナデが多用され，次いで静止ナデ，カキ目，縦方向を主とするハケ目（第131図1・2）が続く。カキ目とハケ目はともに，回転・静止ナデの最終調整の前の器面調整として用いられたと考えられるもので，カキ目とハケ目の調整順序は一定していない。縦ハケが先に施されている場合と，カキ目が先に施されている場合が相半ばしている。口縁部上寄りや内面ではカキ目痕がよく残り，外面の下寄りではしばしば縦ハケの痕を残している。これは部位による恣意的な使い分けあるいは作業者の個人的なクセによるものではなく，単なる作業手順の偶然の結果と考えている。

頸部下半も回転・静止ナデ，カキ目，ハケ目が主に用いられている。上半に比べ，調整は雑になり，とくに内面下半は作業の難しさもあってか，整形時のものと思われる指ナデ痕や押圧痕，あるいはシボリ目を顕著に残した，最終調整の粗いものが多い。また，頻度は少ないながらも平行タタキ目（第131図４）や同心円タタキ目（同図9～10），縄蓆紋タタキ目（同図５下半），格子タタキ目（同図６）を残しているものがある。平行タタキ目，縄蓆紋タタキ目は外面に，同心円タタキ目は内面の一部に残っている。

頸部下端から体部にかけては，静止ナデを主体に最終調整を行い，指押えないしシボリ目，タタキ目痕・当て具痕・押圧痕などを残したものがかなりの頻度で見受けられる。体部は各種のタタキ手法によって整形ないし二次調整を行い，最後に主に静止ナデによってタタキの痕跡を消している。数は少ないが，カキ目やハケ目を体部上半に施すものもある。外面のタタキは平行タタキが主体で縄蓆紋タタキと格子目タタキがわずかにある。内面は同心円タタキが主で，無紋の当て具の痕跡も見られる（同図８）。

この他，補修痕のあるものも30個体分ほど確認している。焼成前の乾燥時にひび割れした部位に粘土を充塡し，さらに布で補強して粘土を上塗りしているもので，ひび割れした部分の両側に小穴をあけて粘土を詰めて布を重ねた念の入ったものもある（同図12）。補修痕はほとんど口頸部について行われており，体部の肩口になされているものは，１個だけであった。製作過程に労力を要する大型品では，器としての機能を失わない部分であれ



第132図　大型甕口縁分類図

ば，乾燥時の局部的な亀裂を補修して利用を図ったようである。

分類の基準（第132図）

ここで大型甕として扱ったものは，基本的に口頸部の形や体部の形状・胴径と関係なく，口縁部直径30㎝以上のものに限っている。灰原出土遺物については，可能な限り個体判別を行ったものの，１・２の特徴的な口縁部をもつもの（壺Ｃ～Ｆ類の一部など）以外では，壺と甕の明確な判別基準を設けることはできなかった。このため，口縁部の直径を目安にして，壺・小型甕と大型甕を便宜的に区分しただけである。ただし端面を切り放して，簡単な調整を加えただけの直口の口縁部をもつもの（Ｅ類）については，口径に関係なく大型甕として分類した。

分類の指標は，口縁端部の形状によってＡ～Ｅ類に５大別し，その直下に凸帯が付くＡ・Ｂ類では，凸帯の形状によってさらに３細別を行った（第132図）。

Ａ類は口縁端部を丸くおさめ，端部の外下１～２㎝の所に凸帯をもつものである。大型甕全体の63％を占める。凸帯の形状によってＡ－１～Ａ－３類に細分される。

Ｂ類は口縁端部にナデによる面をもつもので，Ａ類と同様に口縁端部の外下１～２㎝の所に凸帯をもつ。大型甕全体の34％弱を占める。凸帯の形状によってＡ類同様にＢ－１～Ｂ－３類に細分される。

Ｃ類は口縁端部と凸帯部とが明確に分離できないタイプで，壺Ｄ－２，Ｅ類の口縁に似る一群である。Ａ・Ｂ類の各３細分に分類できない凸帯をもつ一群を含めても16個体，大型甕全体の2.4％である。

Ｄ類は口縁部付近には凸帯をもたず，口縁端部をナデによってていねいに面取りしたものである。壺Ｃ類に近似する。２個体認められた。

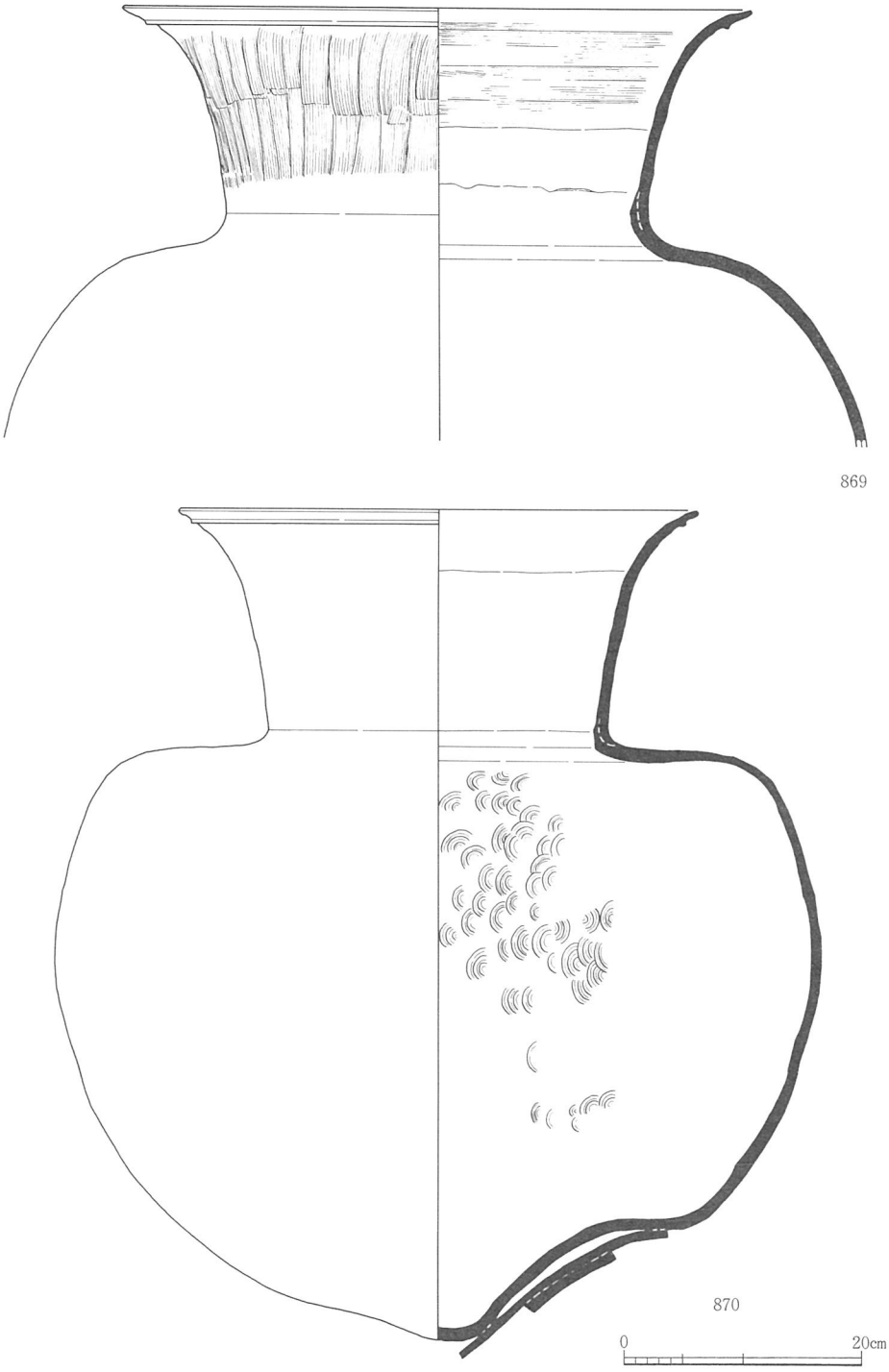
Ｅ類は壺Ｏ類に似た形で直口の口頸部を成し，端面をヘラで切り取ったままになったものである。口径部の大きさに関係なくここに分類した。７個体分を確認した。

この分類はあくまでもＴＧ232号窯出土大型甕口縁部の外見的な形態分類であって，凸帯の成形手法や器面の調整手法，口径部の大きさ，頸部の立ち上がりの形状，頸部に施される波状文や凸帯・沈線などの紋様は分類基準に含めていない。その意味では壺の分類基準とは根本的に手法が異なっており，型式分類として有効な分類とはいえない面もあるが，以下，この分類にしたがって灰原出土の大型甕について概説する。頸部の形状を含めた分類のイメージがなお定まらない段階で判組を行ったため，組み合わせや類別に適正を欠いた分かりづらい編集になっていることを断っておきたい。

Ａ－１類（第133～156図，図版118～134）

口縁端部を丸くおさめその外下１～２㎝の所に断面三角形の凸帯をもつ一群である。Ａ類の基本的な形であるが，口縁部の傾きやナデ調整の具合いによって，Ａ－２・３類と区別の困難なものも少なくない。937はＡ－２類的で，911・916はＡ－３類と考える方がよいであろう。ＴＧ232号窯灰原出土大型甕の中で最も数が多く，Ａ類中の約80％，大型甕全体の52％を占める。口径50㎝・45㎝・40㎝前後になるものが多い。口頸部の高さは７～８㎝から22㎝まで差が大きい。口頸部の短いものは（880・927・935）壺の形状に似る。

端部や凸帯の形状の変化が多く，その成形手法と形態，頸部の形態によってさらに細かく区分することも可能である。



第133図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕１）Ｓ＝1/6

口縁端部のおさめ方は３種類に分けられる。ａは端部の器壁が薄く先端が尖り気味になるもの（869・874など）である。869・906のように口縁部がラッパ状に開き気味になる傾向にある。端部と凸帯頂部との間が２㎝近くある場合は，外面に横ナデによる擬凹線風の凹凸がつくことがある（885）。ｂは端部付近の器壁が厚く先端が尖り気味になるもの（883・888）で，915・919のように口縁部の近くの反り返りが少ない傾向にある。ａと同様に端部と凸帯との間が離れているものでは，外面に横ナデによる擬凹線風の凹凸がつくことがある（946）。ｃは端部が丸みを帯び，Ｂ類口縁の一部（968・975・982）と似ているもの（875・877など）である。908・918などは部分的なナデの具合いによって，一部の口縁部片しかなかった場合，Ｂ類として扱ったかも知れない。

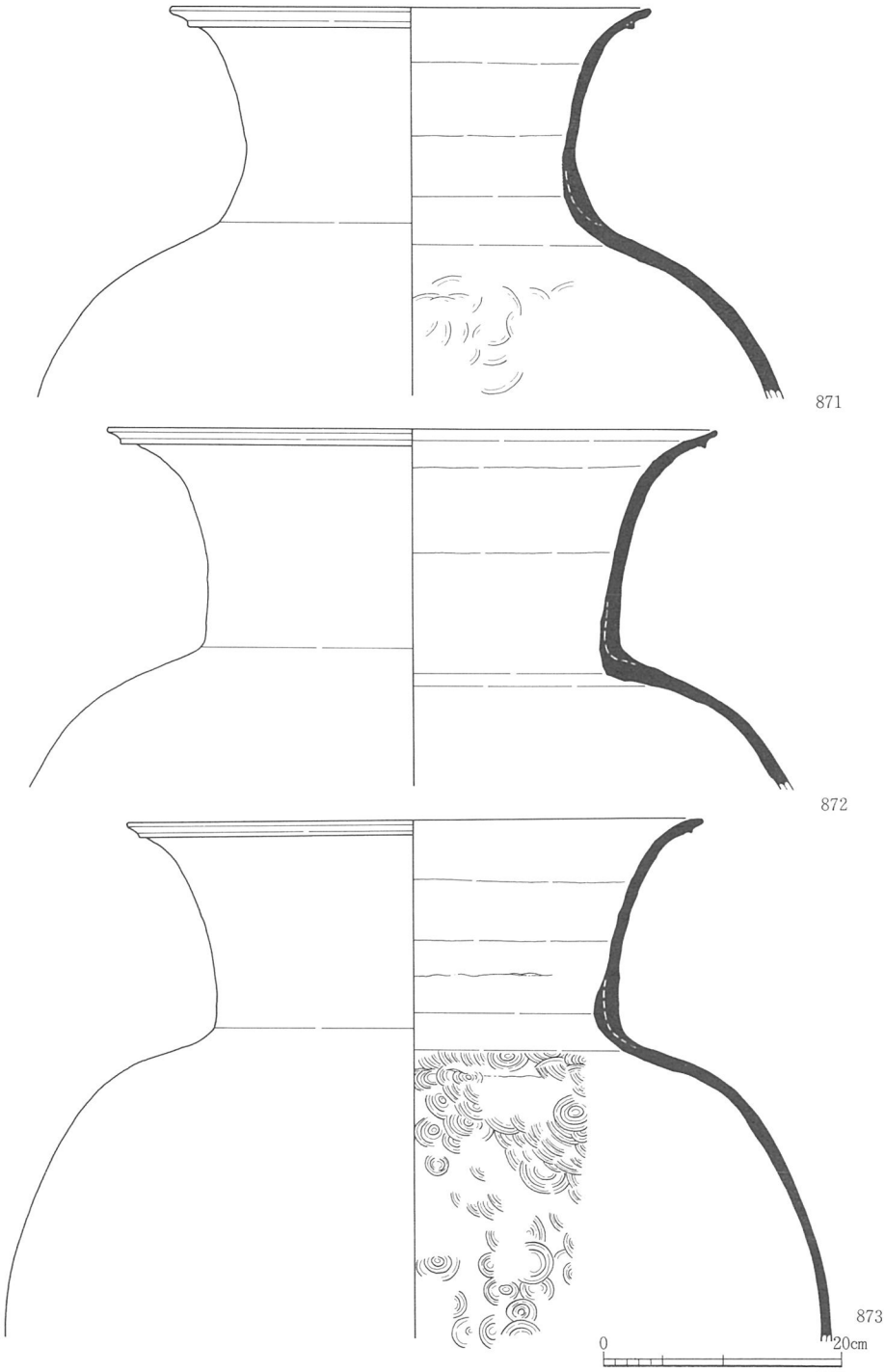
凸帯部の形状はさらに複雑である。凸帯の成形手法からみれば，凸帯１類は貼り付けによる凸帯成形を基本とすると考えられるもので，断面二等辺三角形をなし本類の多数を占めている（872・874・879・884など）。しかし貼り付けでない凸帯もかなりあり，①回転力を利用したナデによって小さく凸部をつまみ出したと考えられるもの（903・913・915など）もある。この凸帯はふたつの指の間（おそらく人差指と親指の間の隙間）に形作られるためか，なべて扁平な形になっている。

また，貼り付け凸帯のように高さのある凸帯でも，先端が断面三角形に鋭く尖っているものと，②円弧状に丸くおさめられているもの（892・928など）があり，その頂部がナデられて平坦な面をもつもの（912・892など）や，③凸帯の幅が細く，高く飛び出して断面三角形とはいえないもの（890・904）さえある。円弧状の断面形の凸帯以外は，断面形の上下２辺がやや内反りになり，同じ指によるナデ調整でも，できあがりの凸帯の形をあらかじめ予測した力の加え方であったと思われる。

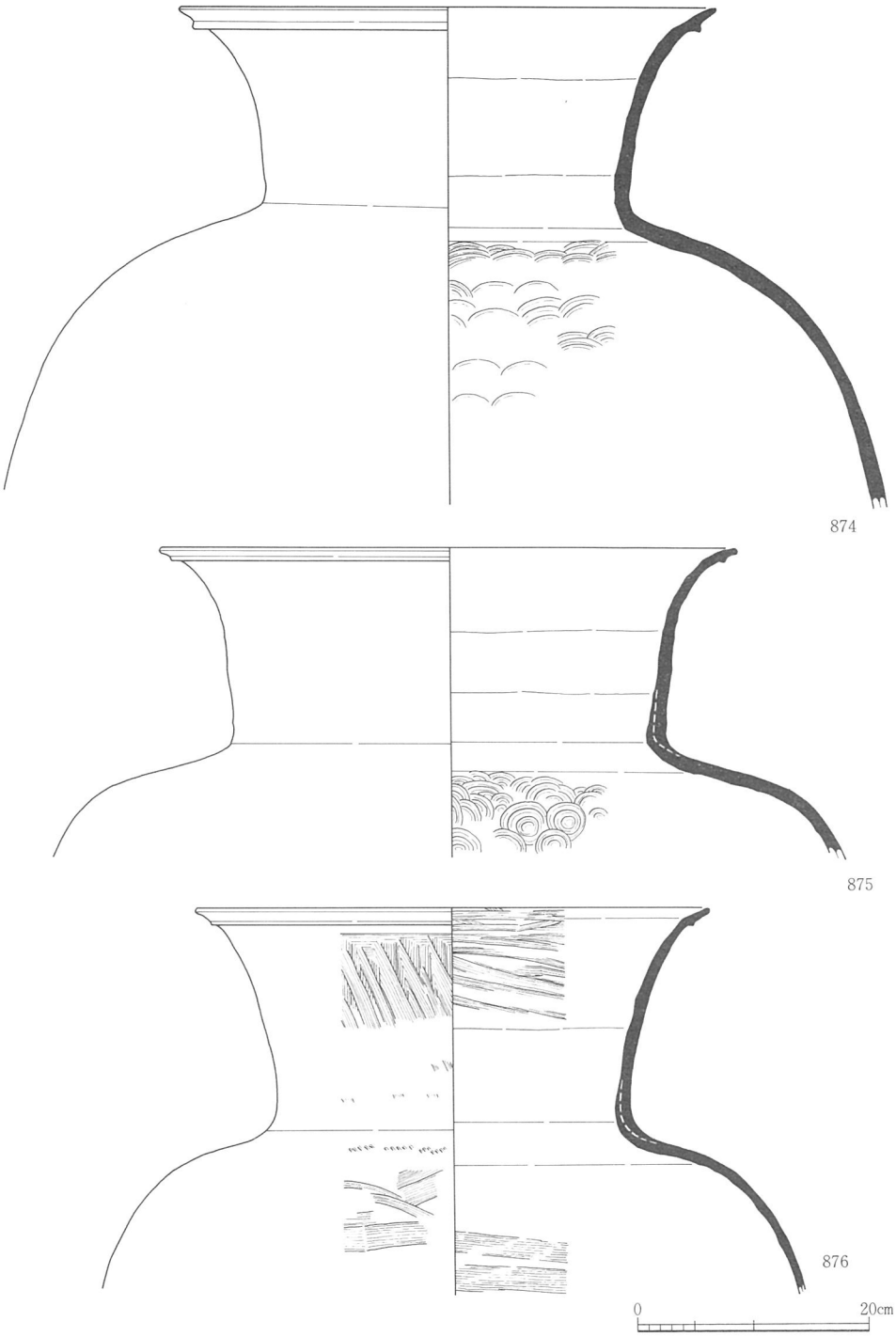
①～③は，調整段階で仕上げの凸帯の形を認識できずに行った偶然の結果ではなく，凸帯の形を充分意識していた上で調整がなされたと思われるもので，本来は凸帯１類の中でも別に分類すべき一群なのかも知れない。ただ，円周長が150㎝に達する大型甕では，口縁部の変化も多く，全てを確定的に区分するのは主観的になってしまう。

特異な凸帯をもつものでは，Ｃ類のところで図示している1009・1010がある。いずれも口縁端部の特徴はＡ類に属する。これについては後述する。

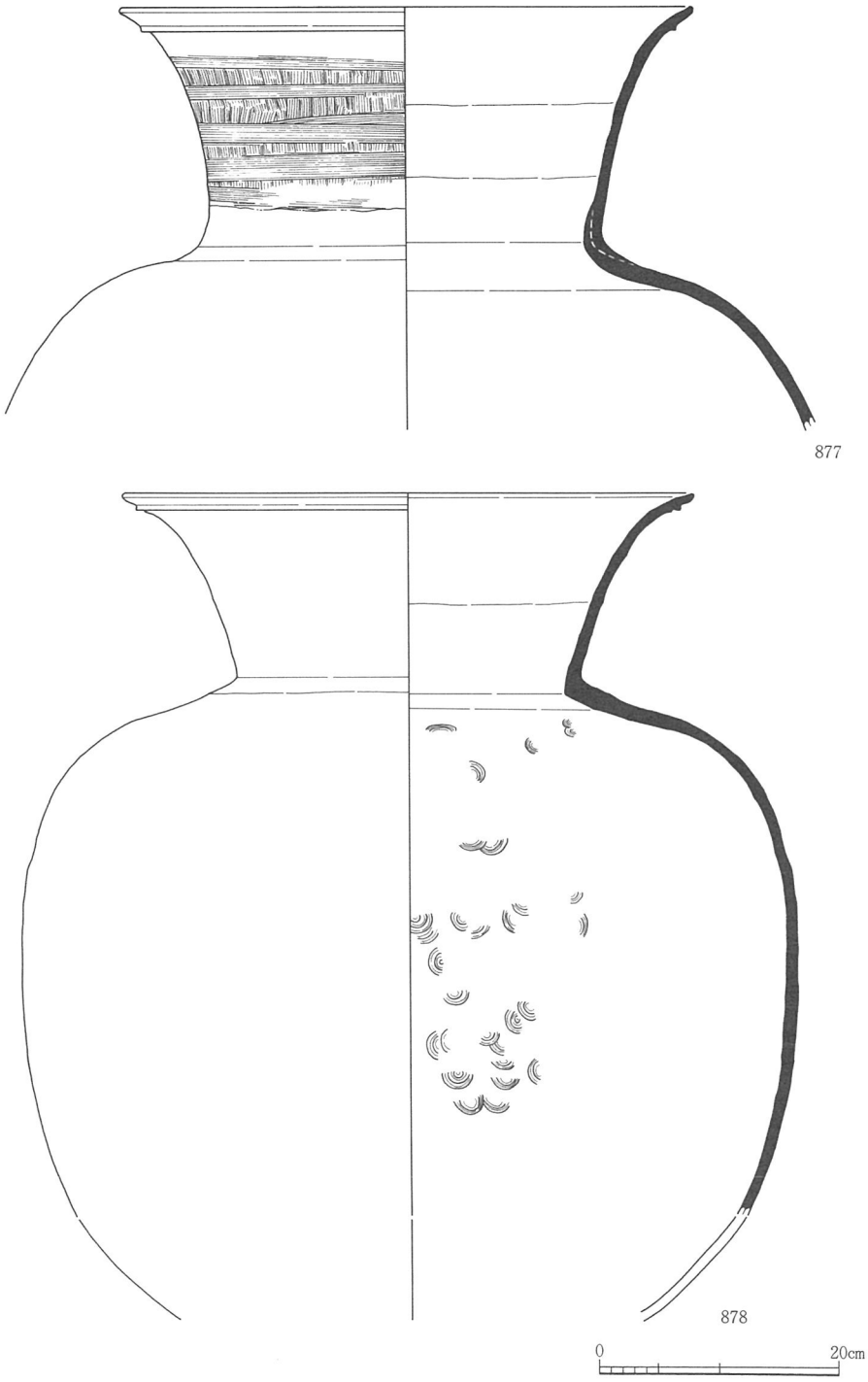
口縁端部付近の最終調整は，多くが回転ナデ調整による。回転ナデの際にハケ目状の工具を用いた調整痕も１割ほど認められ，内面にカキ目が残されるケースが多いようである。相前後して回転ナデと併用されている場合が多い（876・887・901など）。



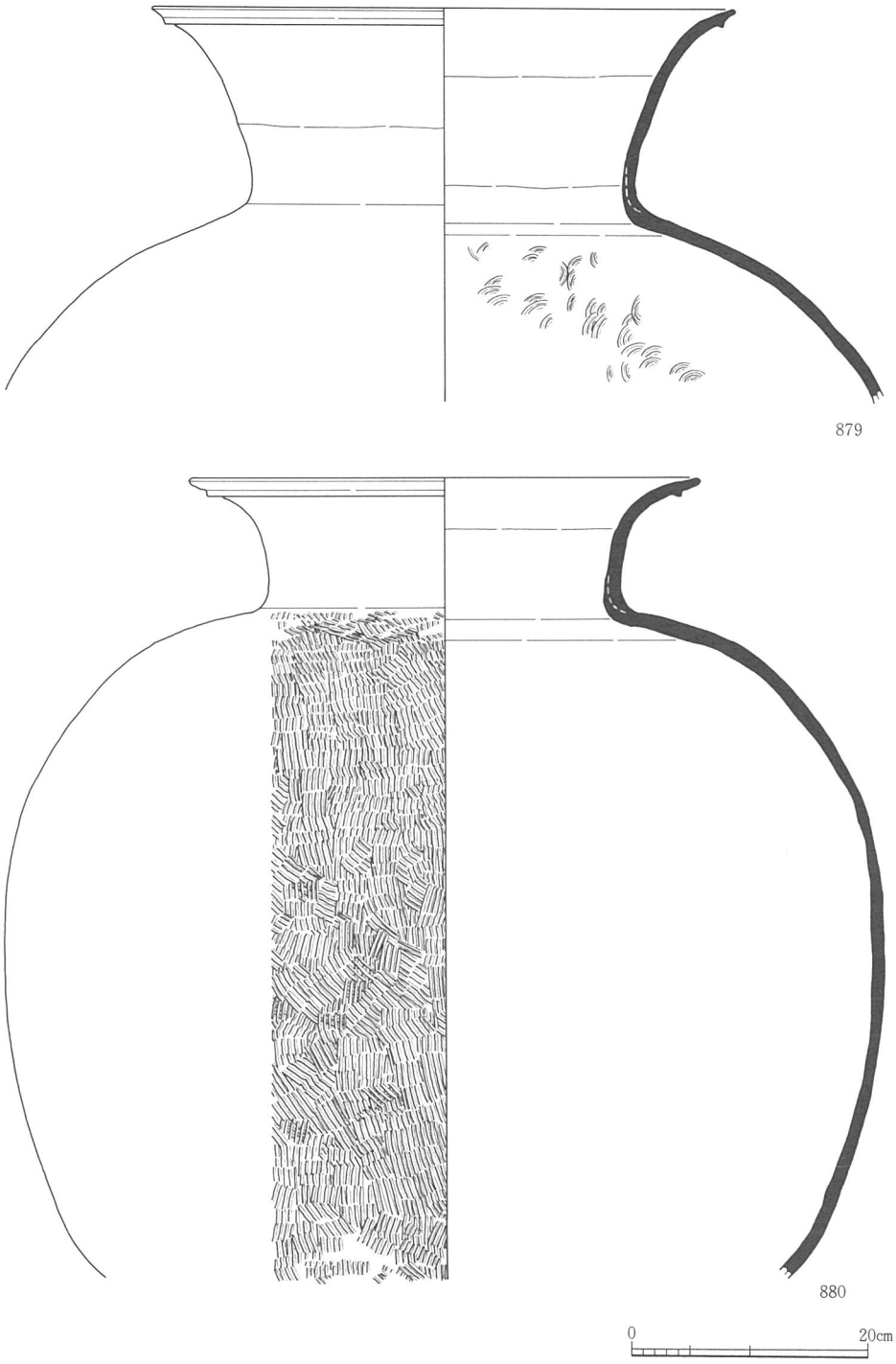
第134図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕２）Ｓ＝1/6



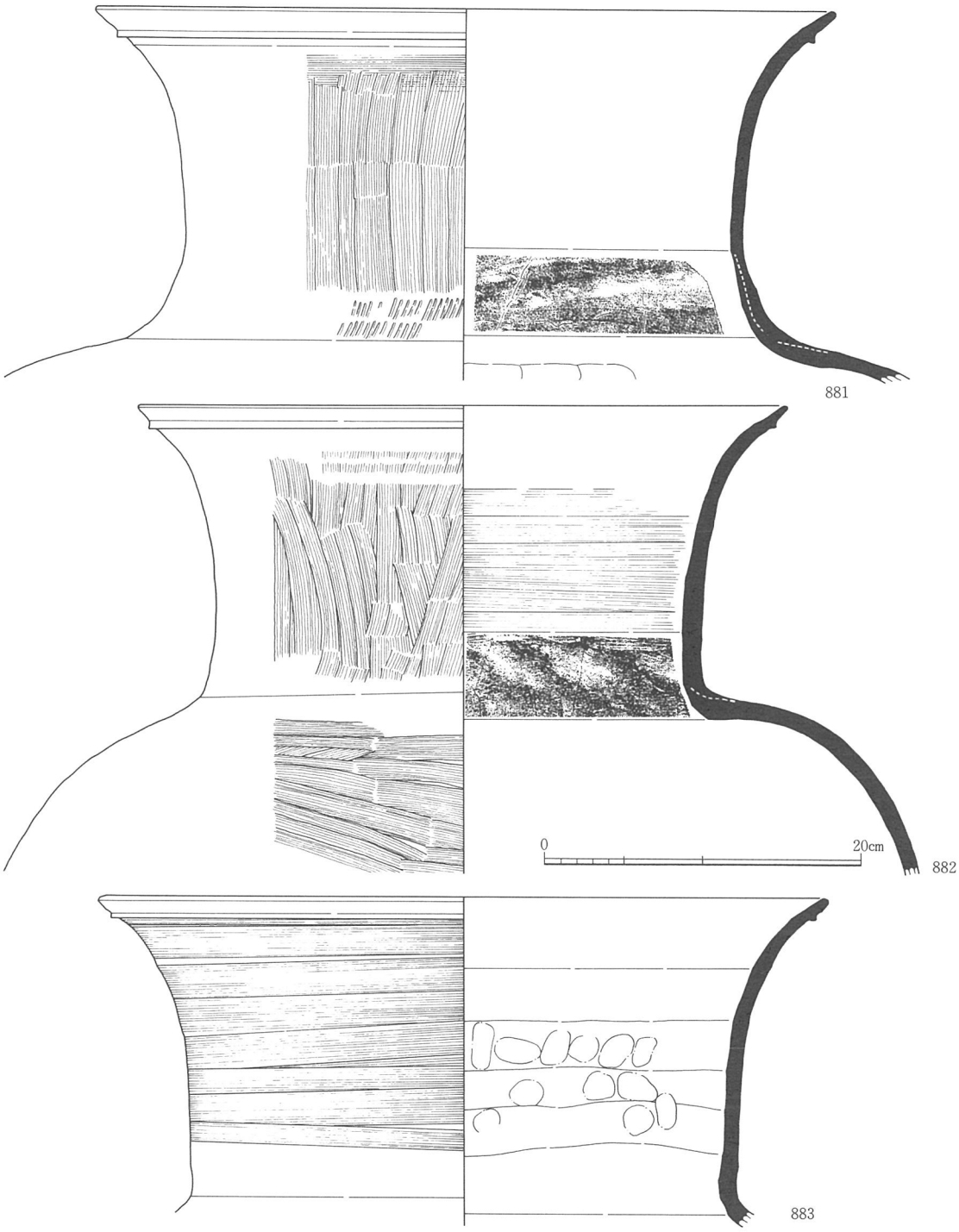
第135図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕３）Ｓ＝1/6



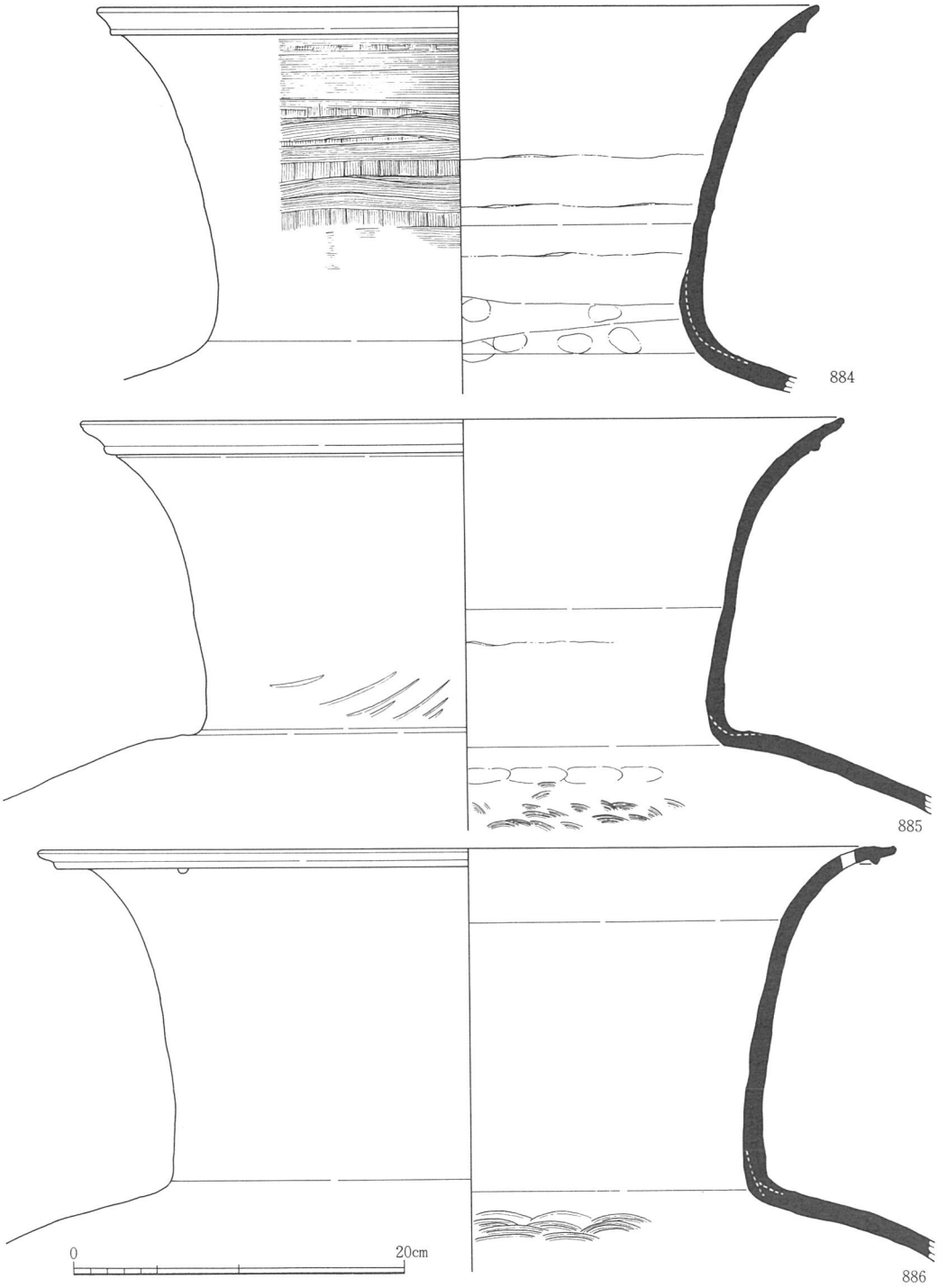
第136図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕４）Ｓ＝1/6



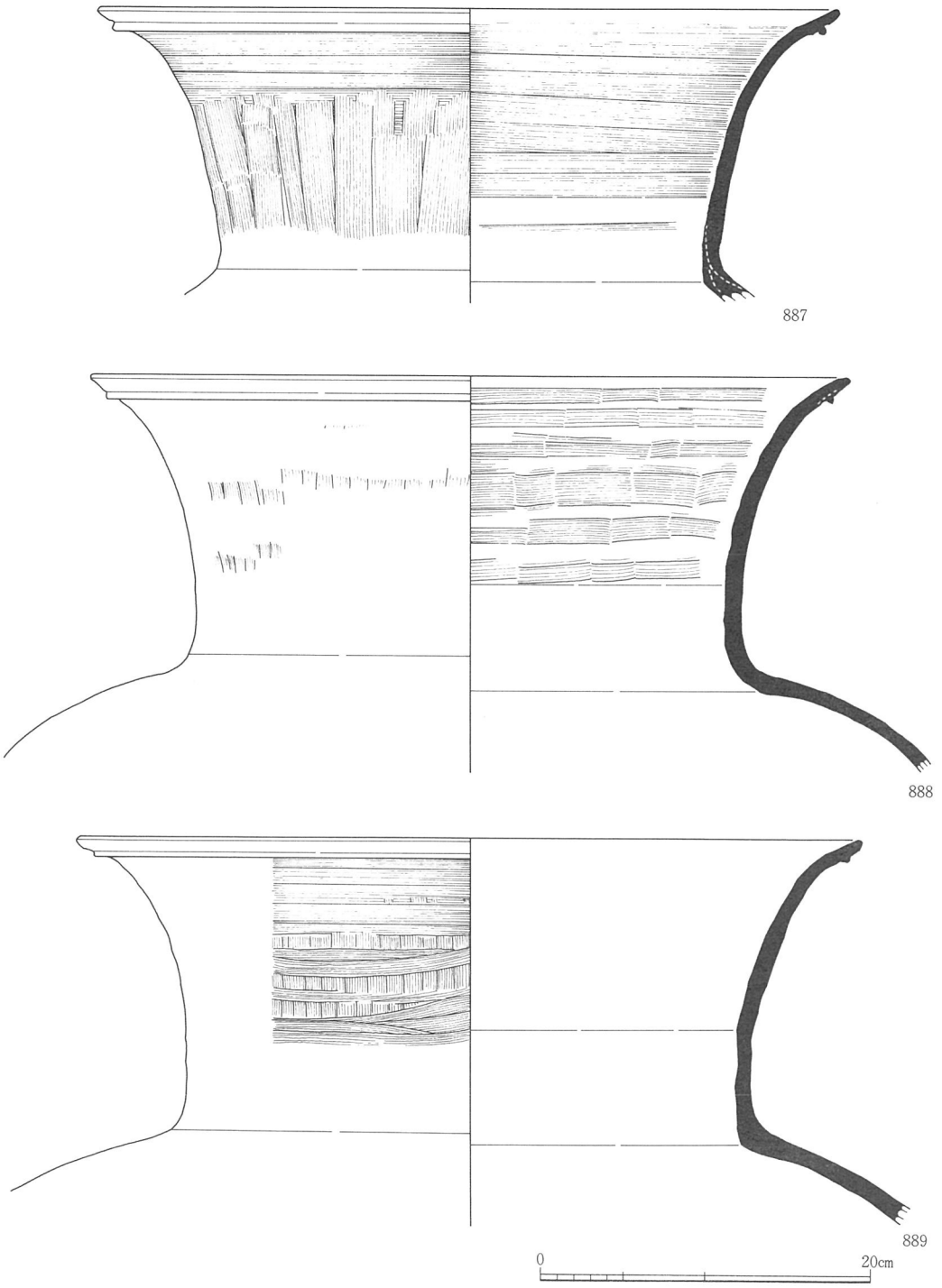
第137図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕５）Ｓ＝1/6



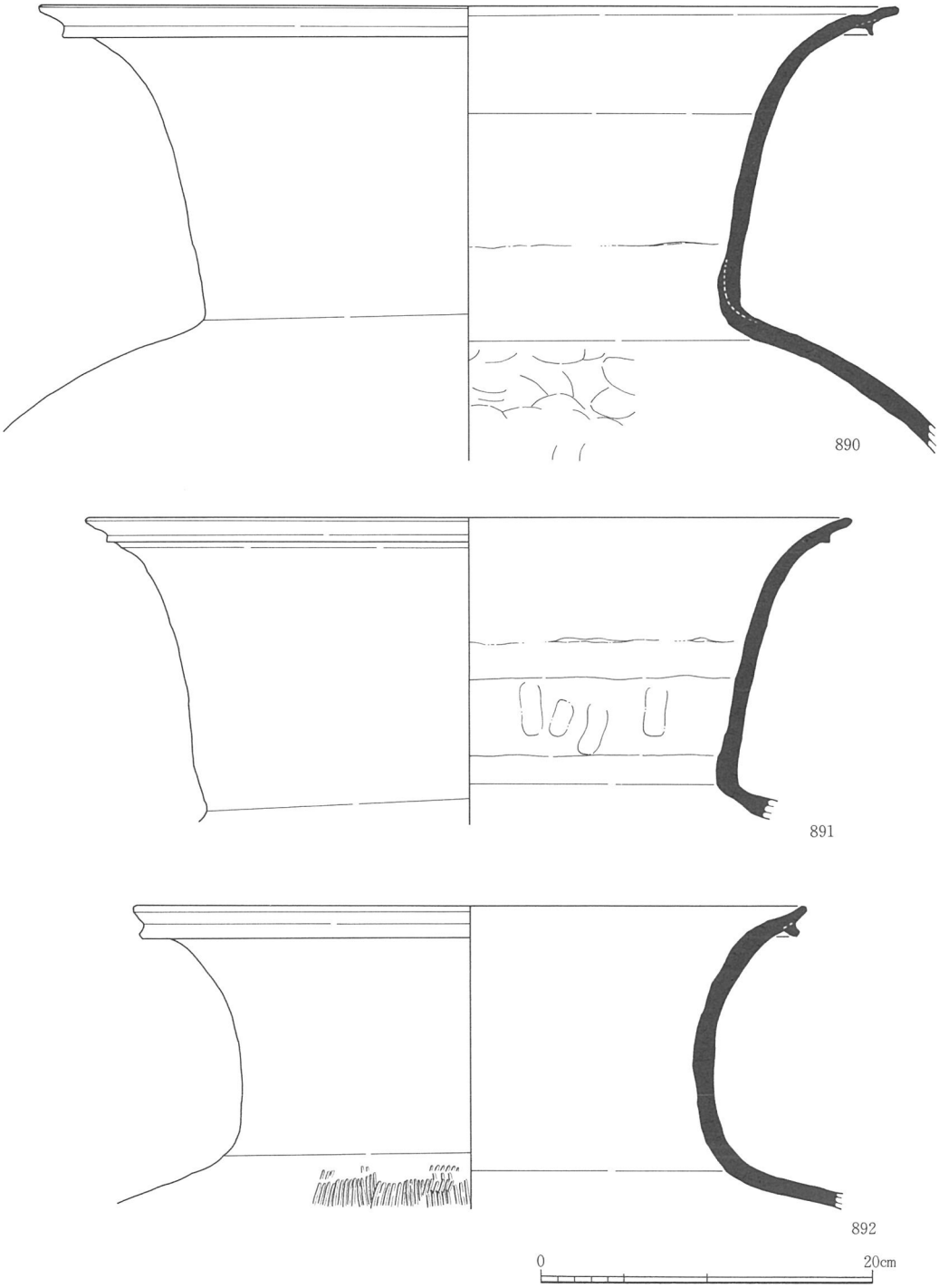
第138図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕６）Ｓ＝1/4



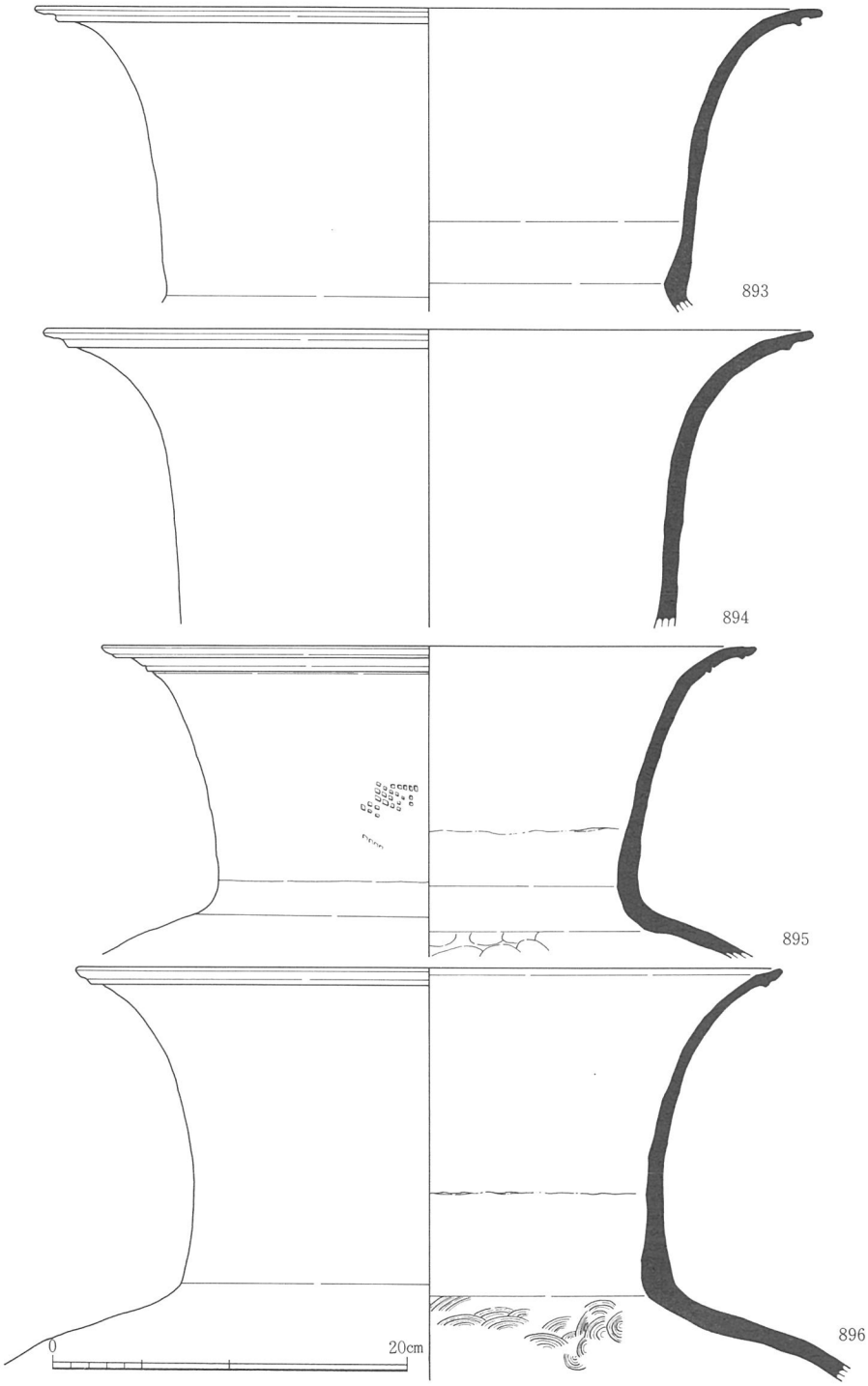
第139図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕７）Ｓ＝1/4



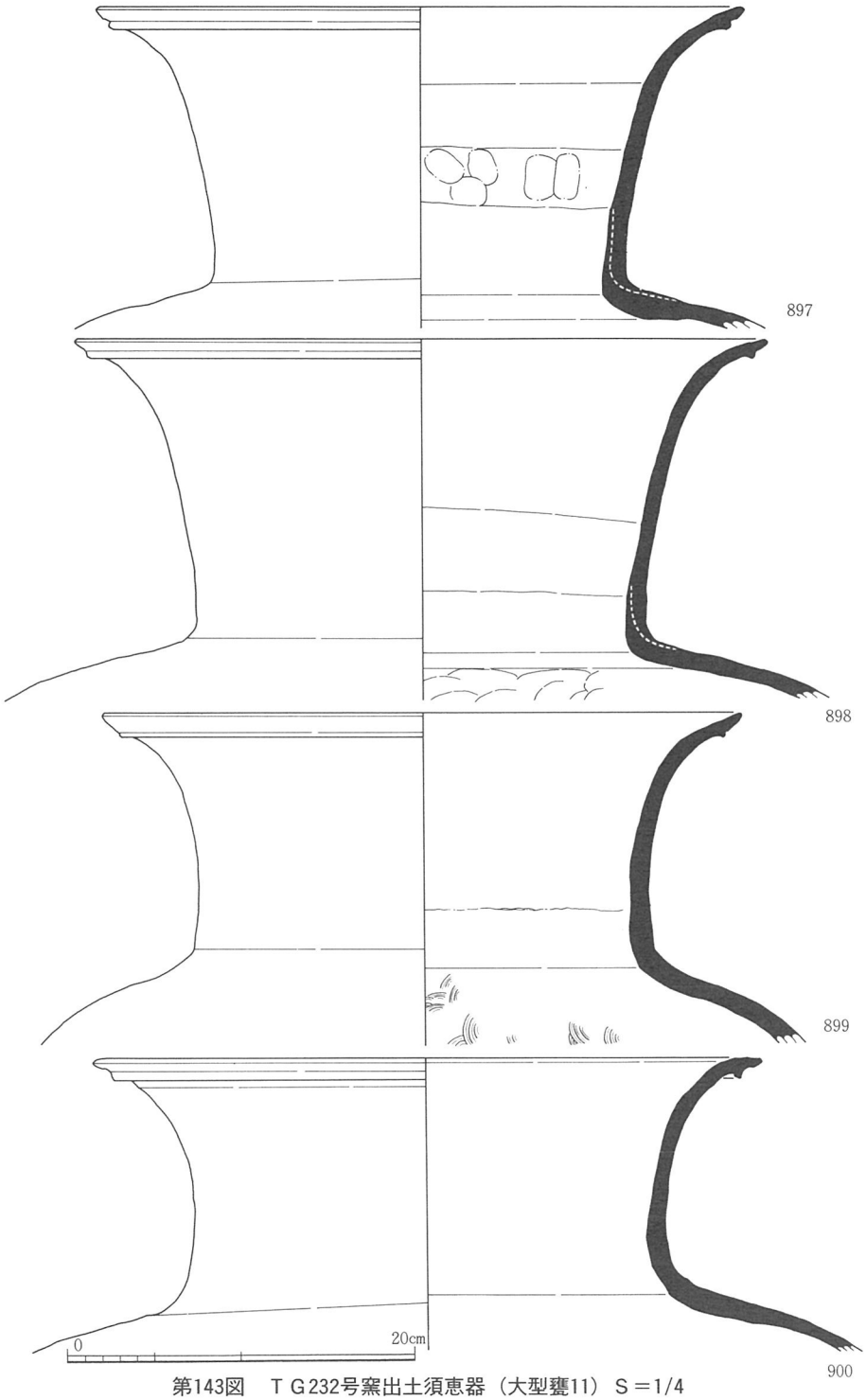
第140図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕８）Ｓ＝1/4



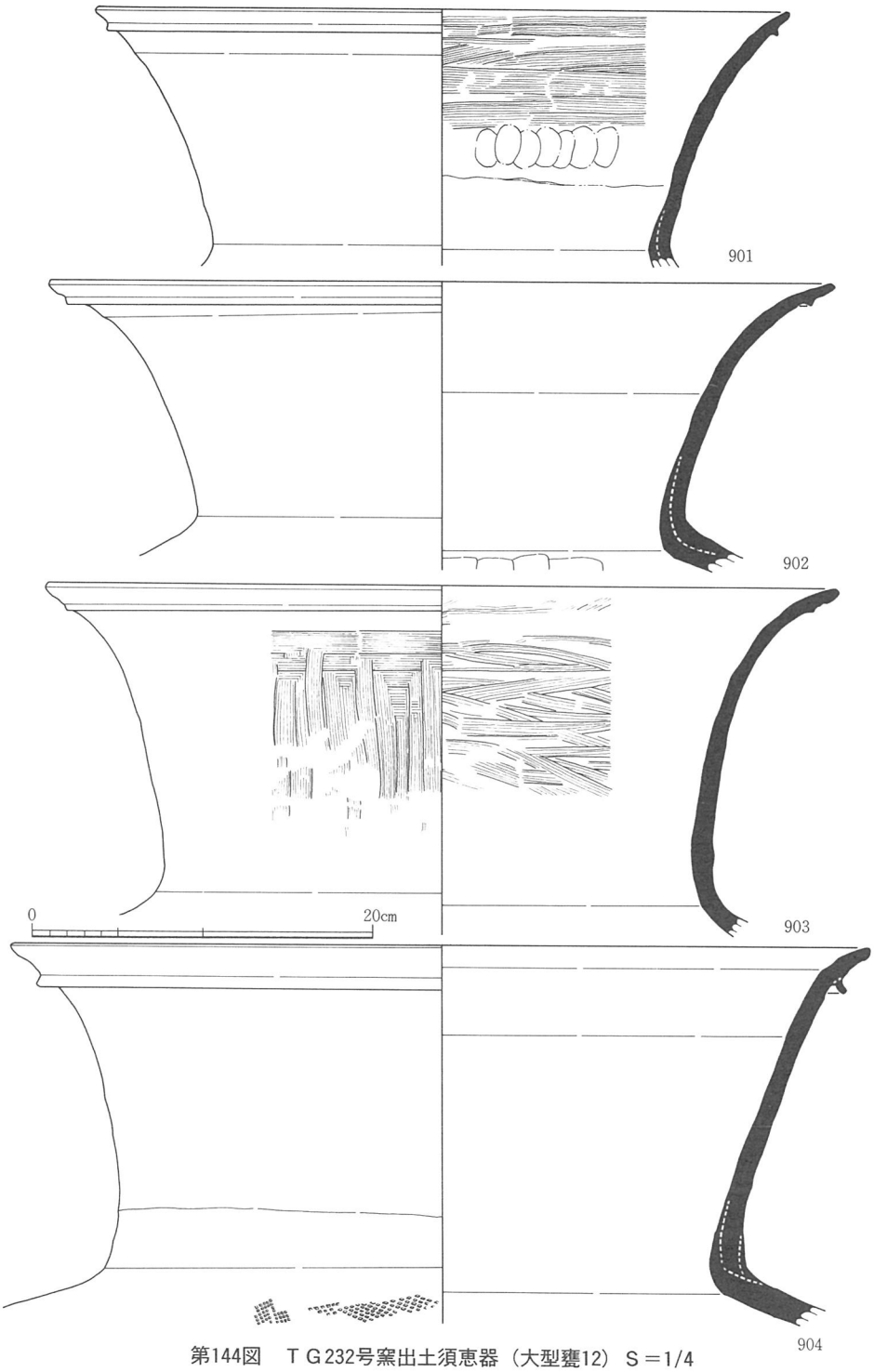
第141図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕９）Ｓ＝1/4



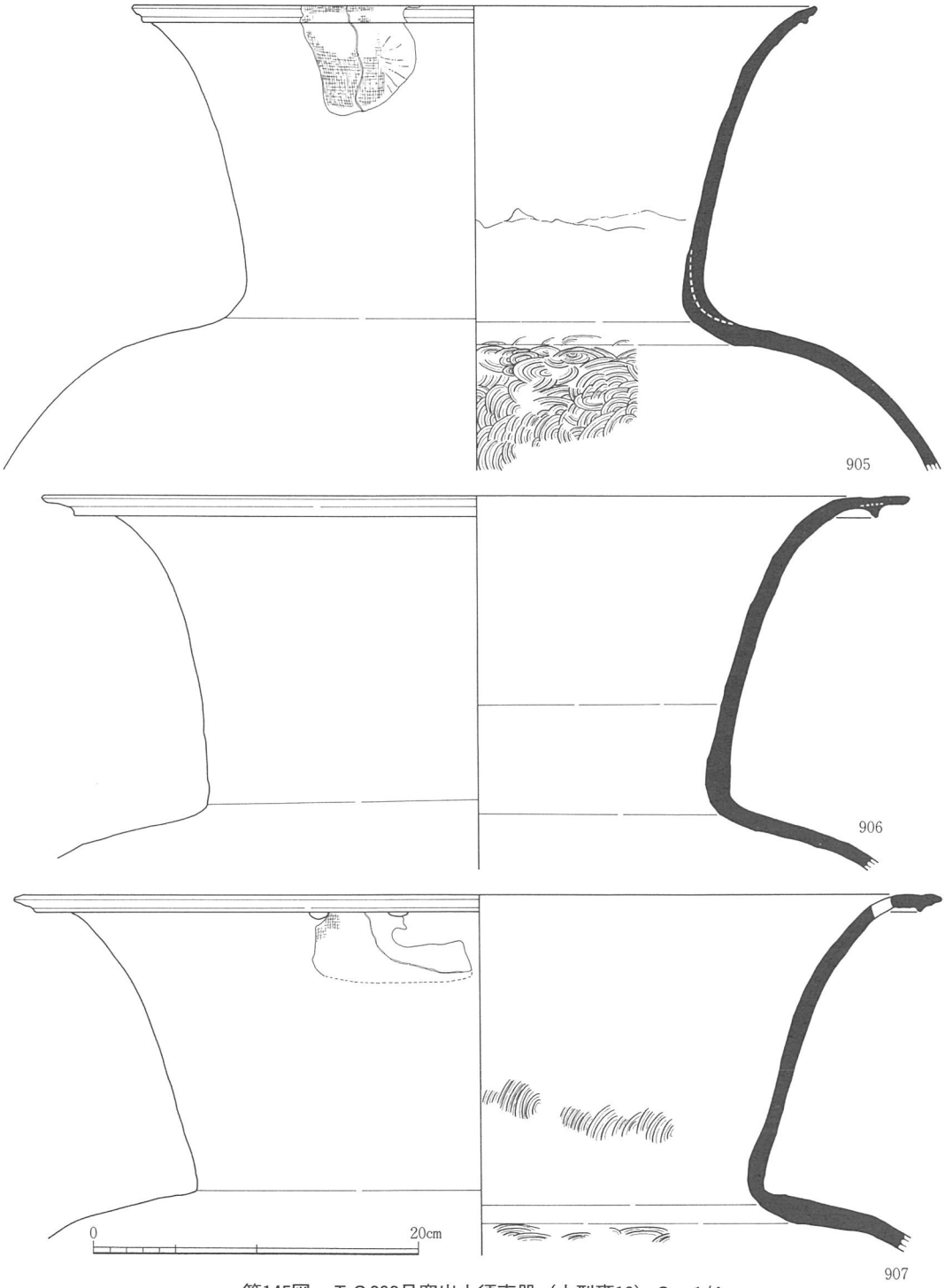
第142図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕10）Ｓ＝1/4



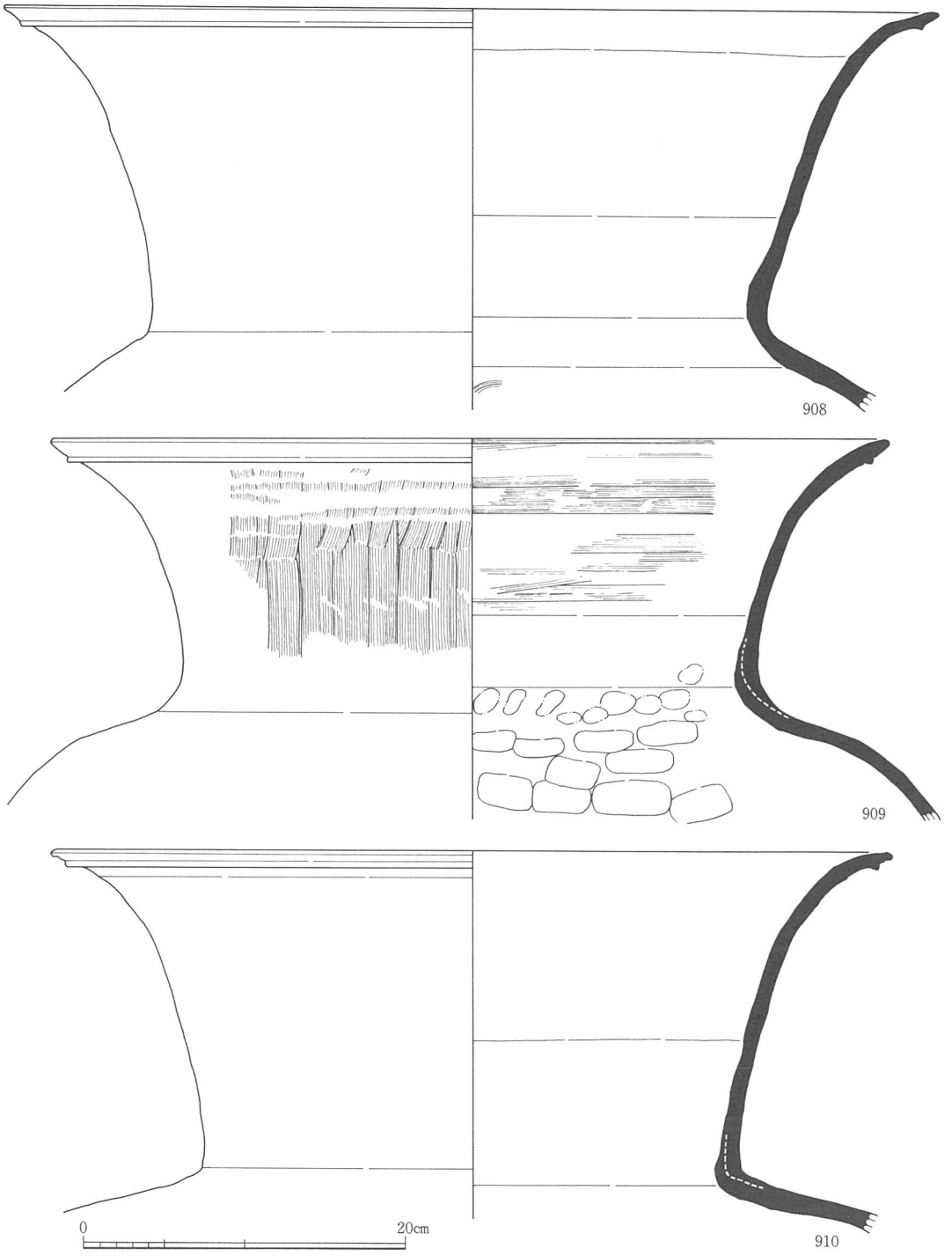
第143図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕11）Ｓ＝1/4



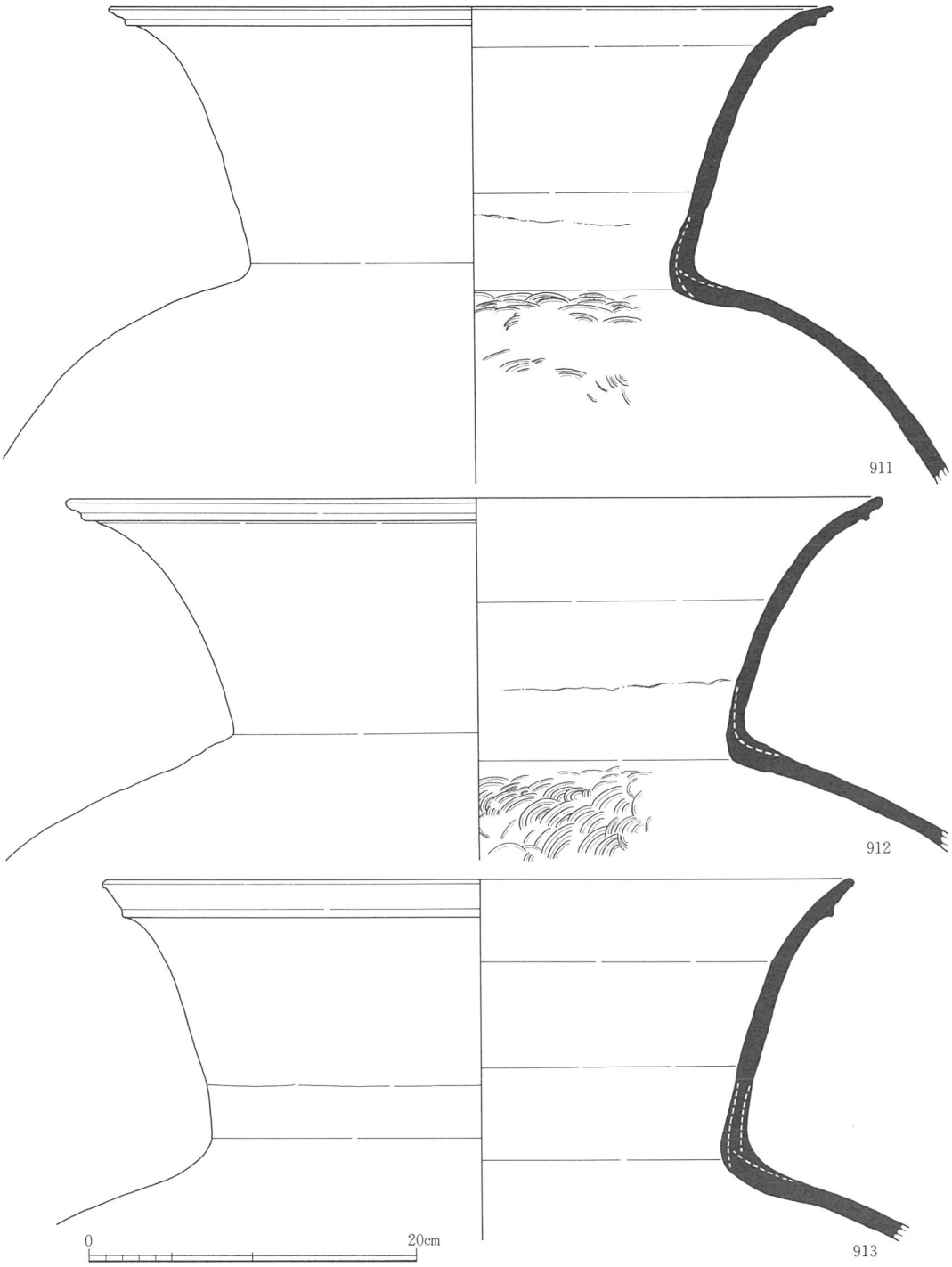
第144図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕12）Ｓ＝1/4



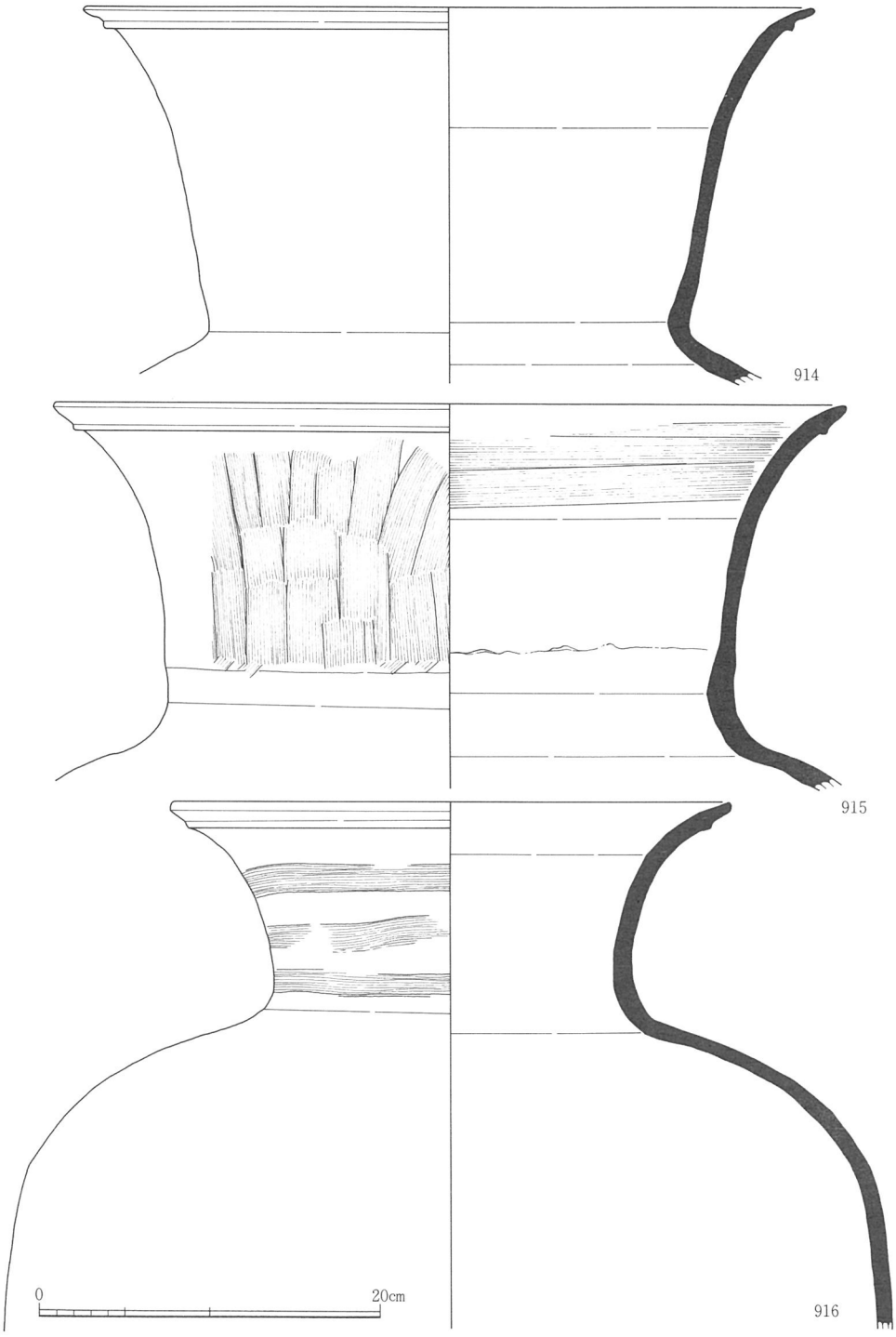
第145図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕13）Ｓ＝1/4



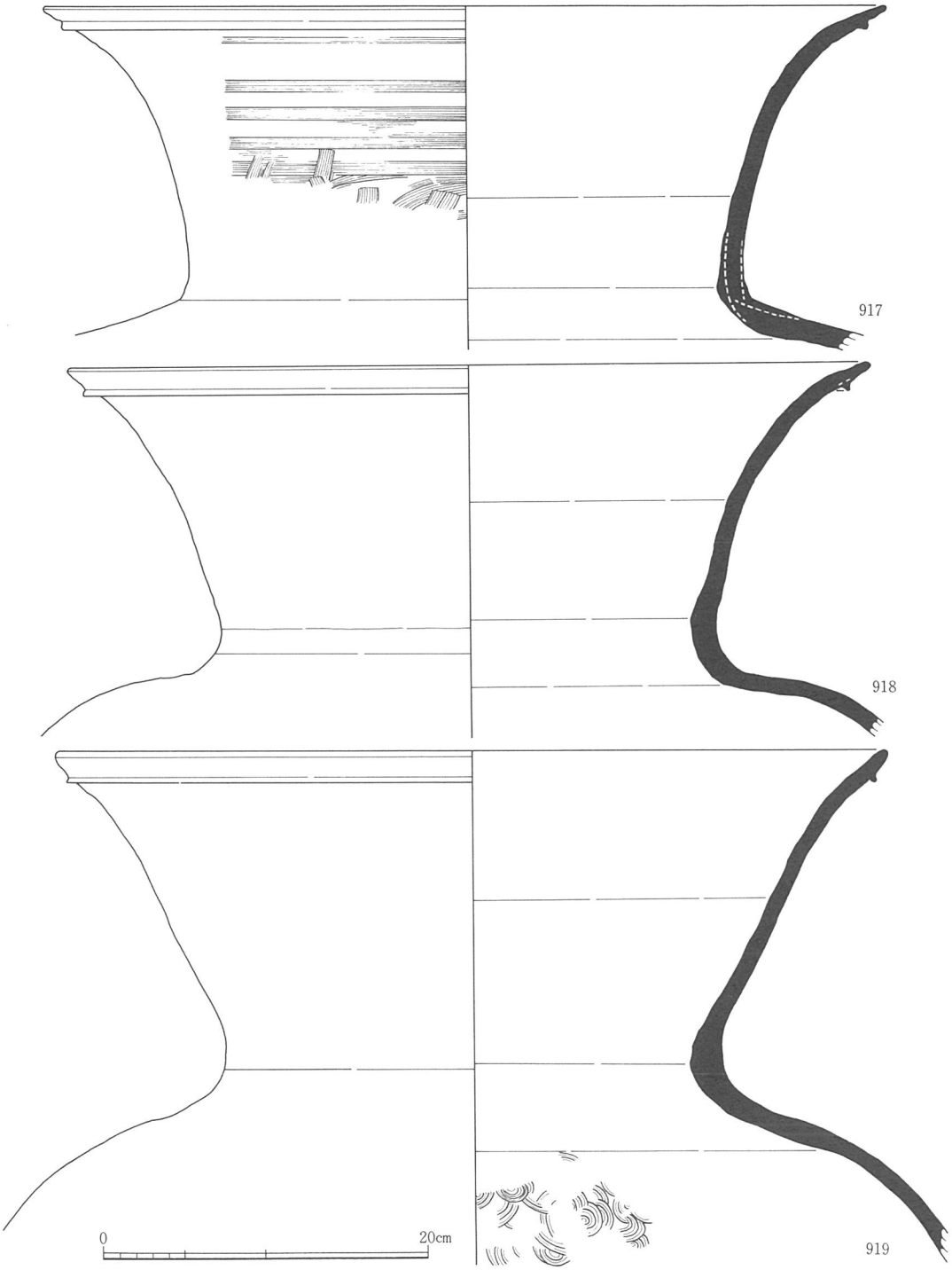
第146図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕14）Ｓ＝1/4



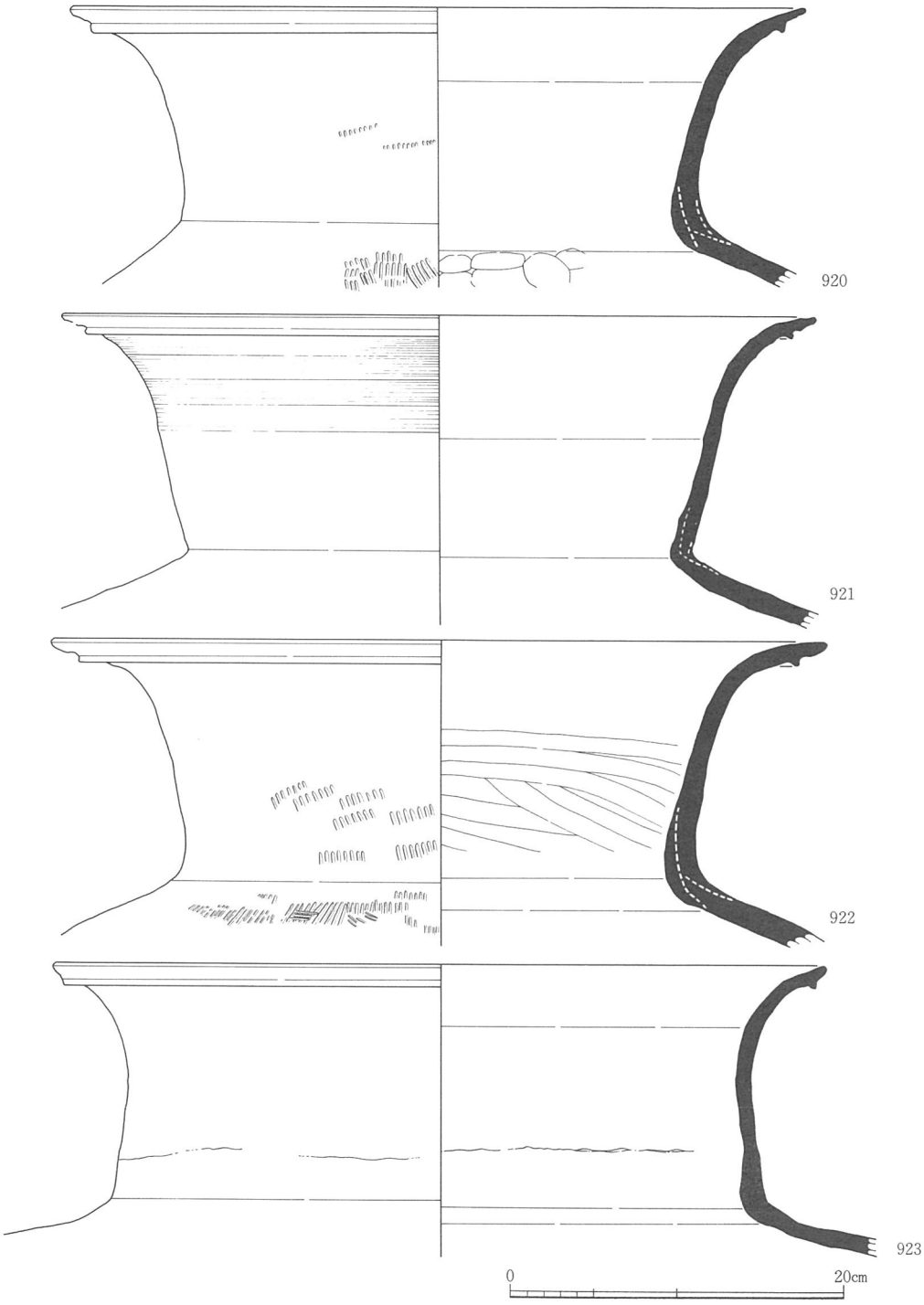
第147図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕15）Ｓ＝1/4



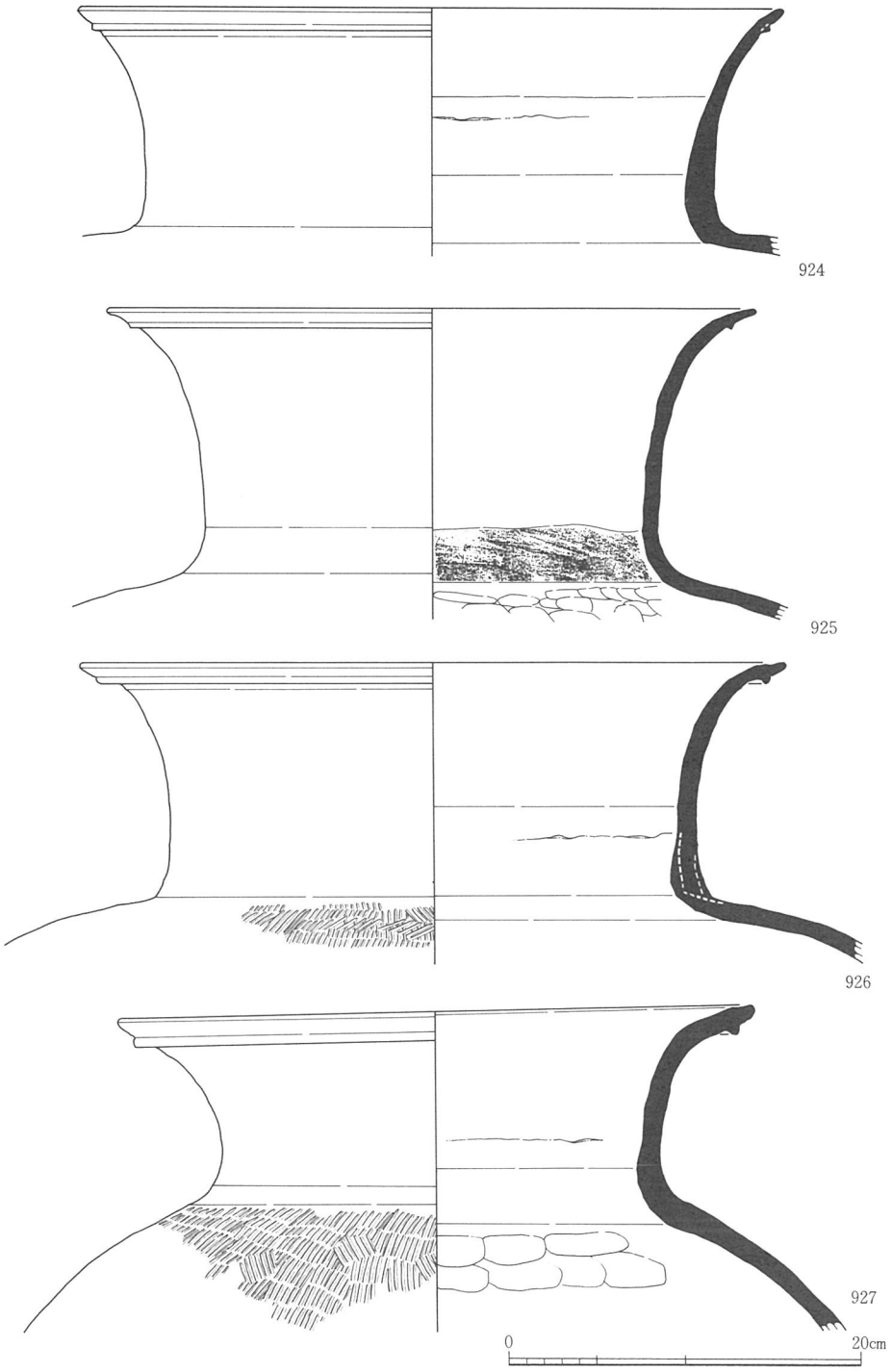
第148図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕16）Ｓ＝1/4



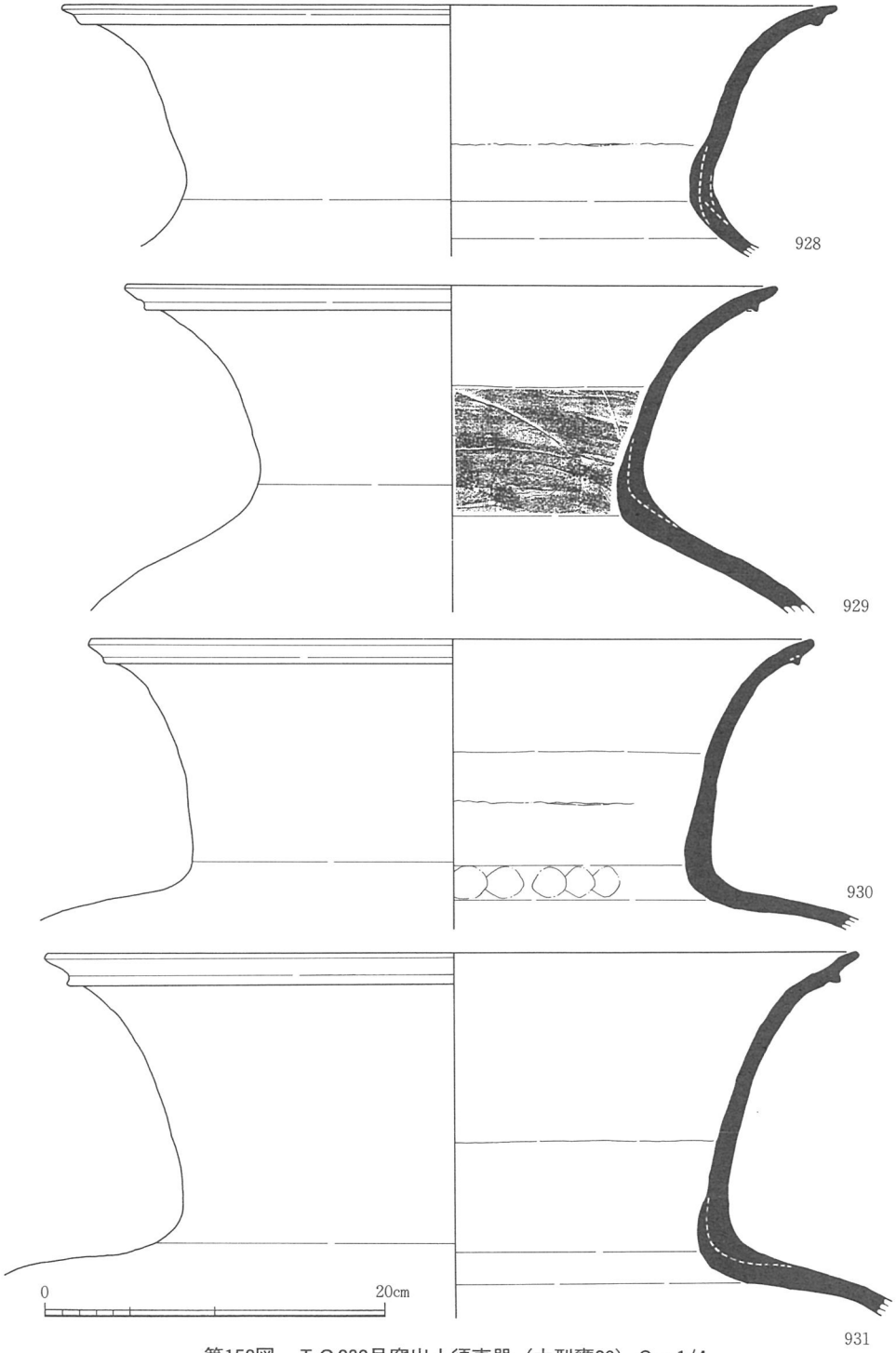
第149図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕17）Ｓ＝1/4



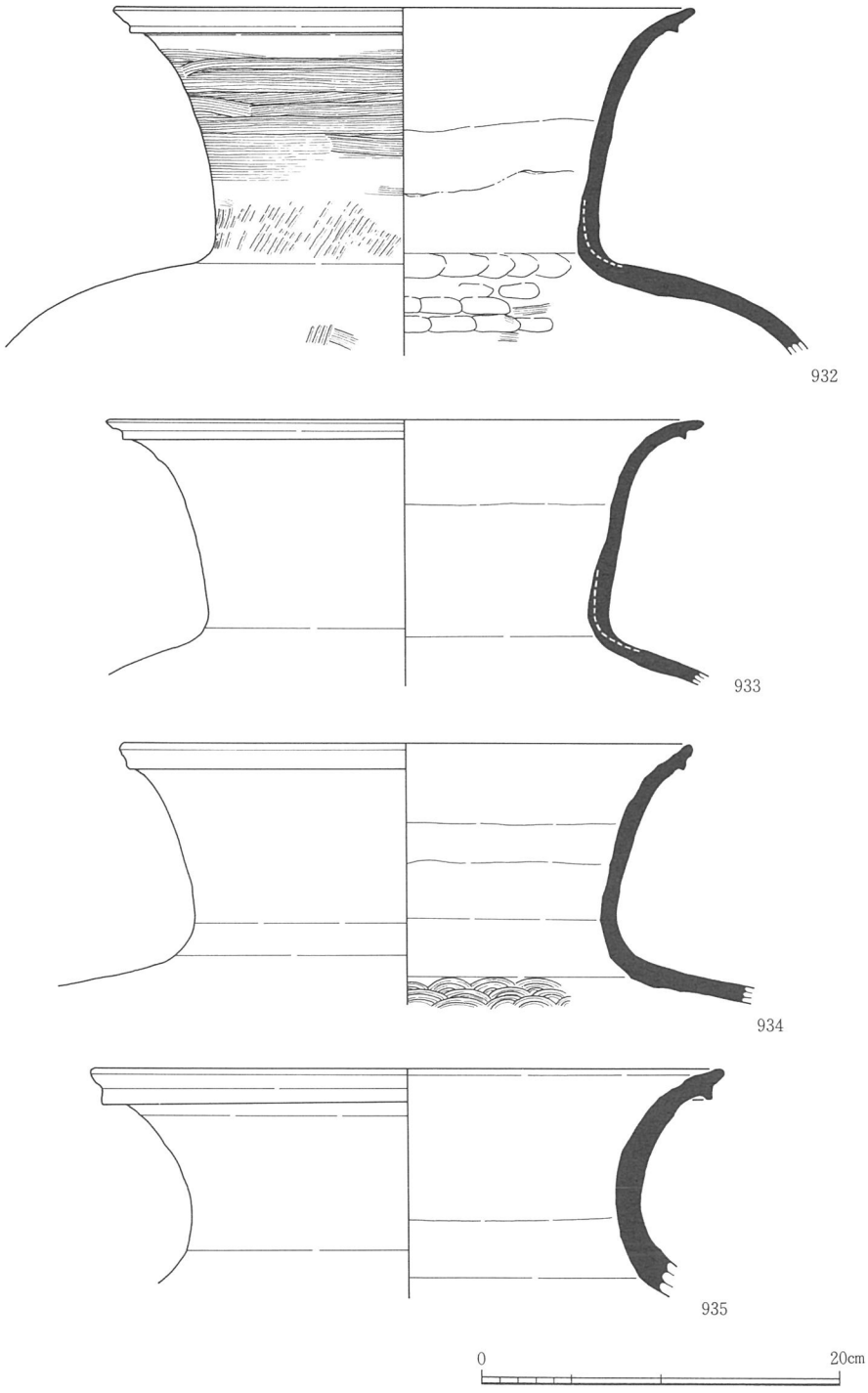
第150図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕18）Ｓ＝1/4



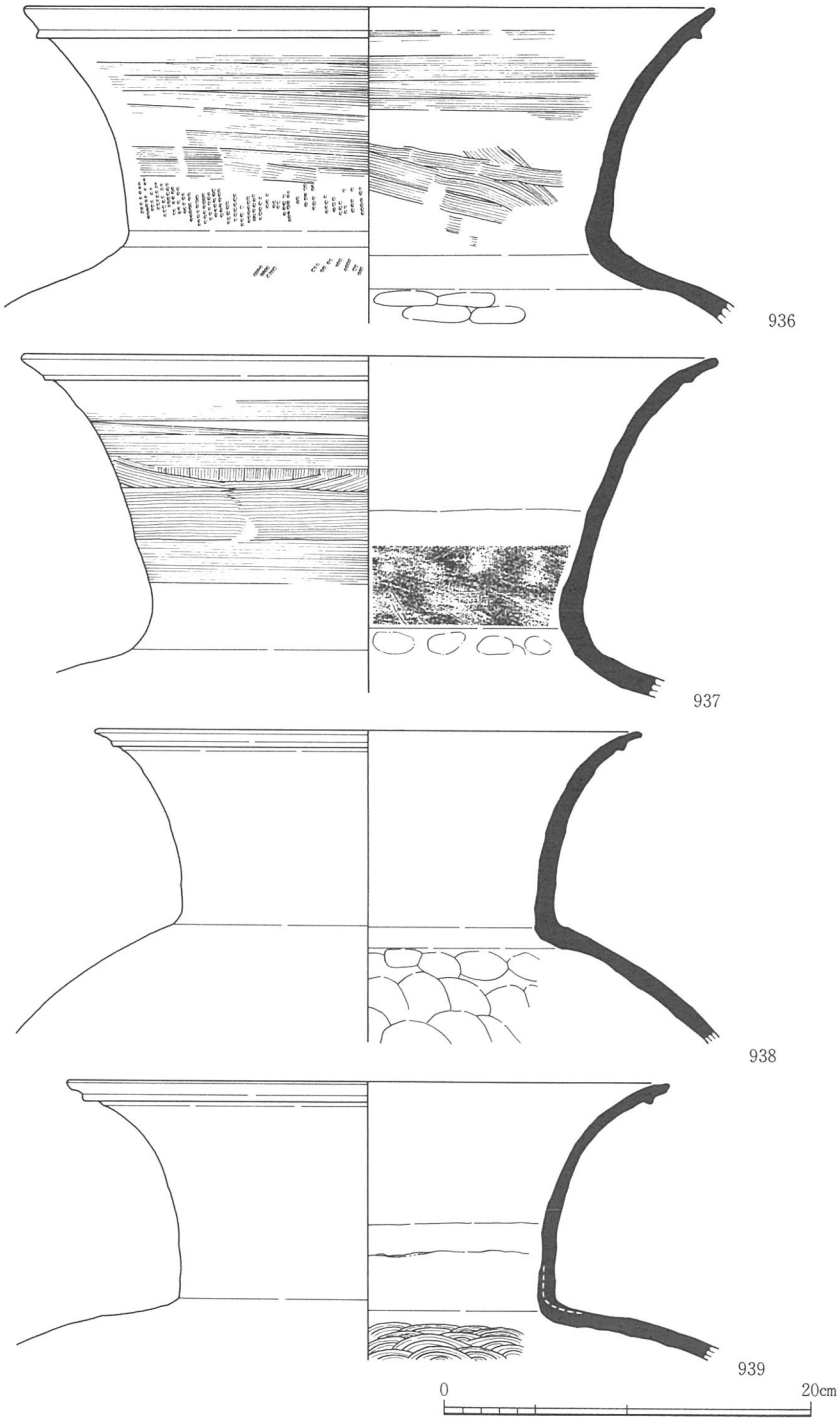
第151図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕19）Ｓ＝1/4



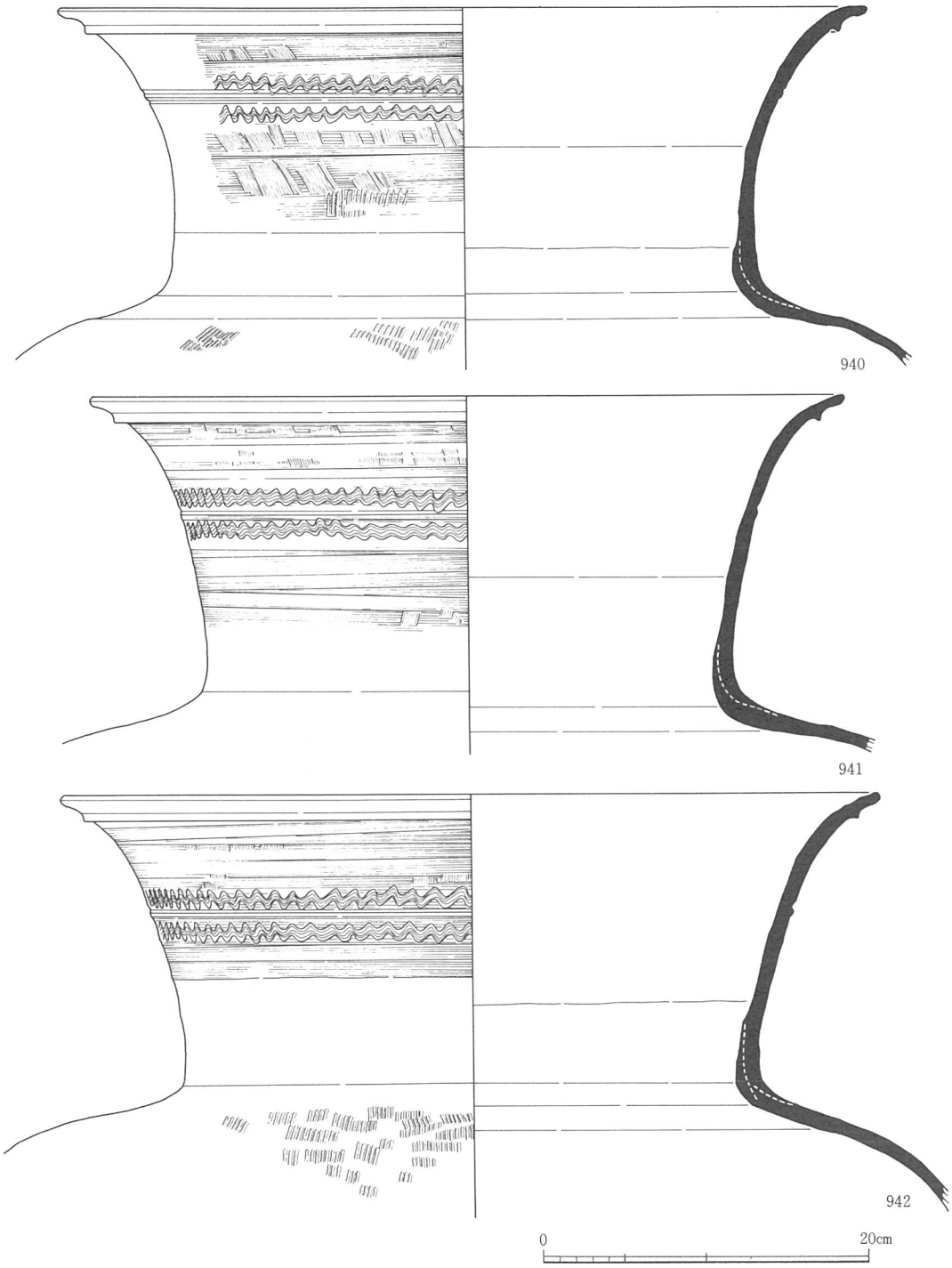
第152図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕20）Ｓ＝1/4



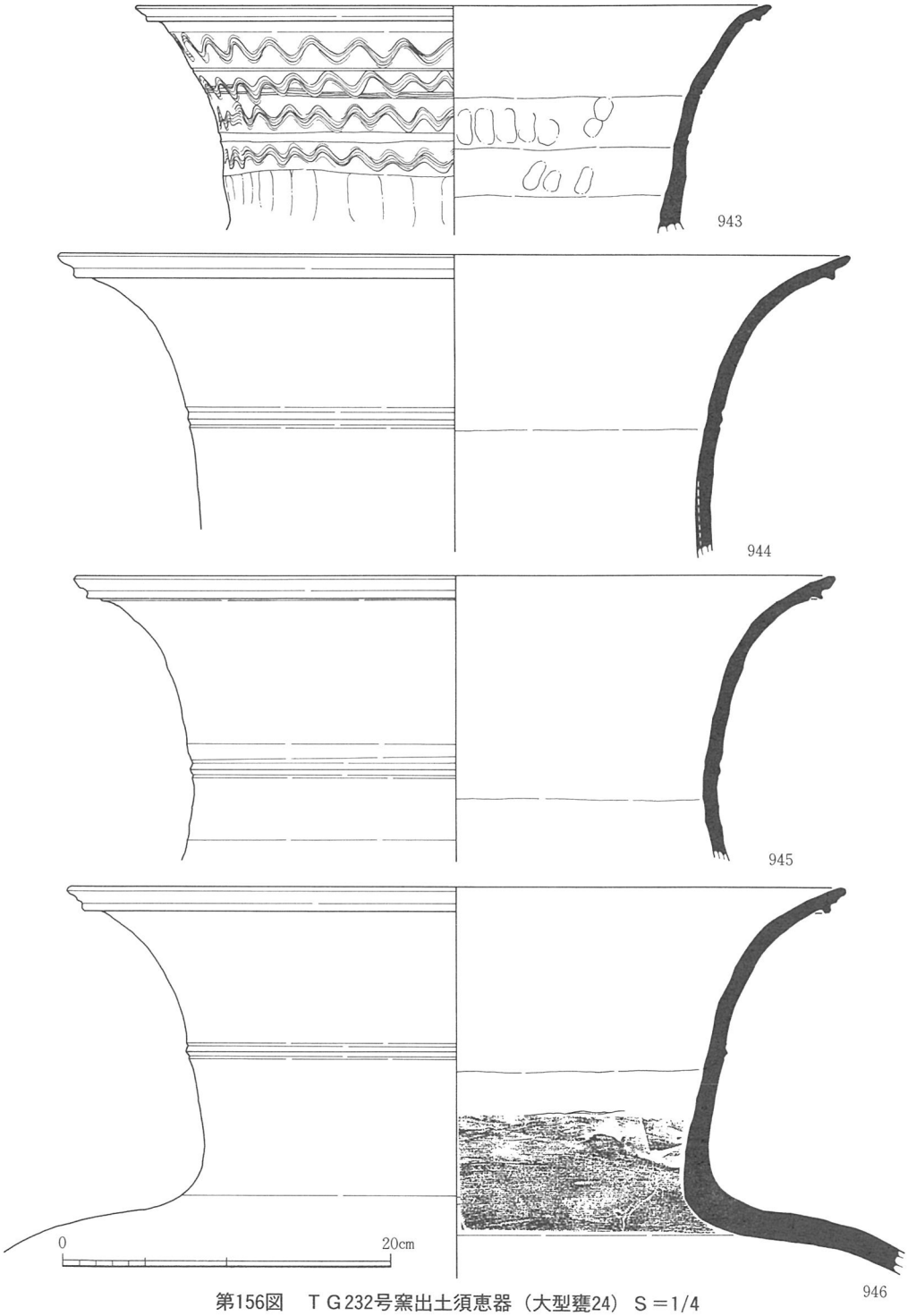
第153図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕21）Ｓ＝1/4



第154図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕22）Ｓ＝1/4



第155図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕23）Ｓ＝1/4



第156図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕24）Ｓ＝1/4

凸帯より下の頸部上半でも回転ナデが多用され，次いで静止ナデ，カキ目，縦方向を主とするハケ目が続く（884・889・881・904）。

頸部下半も回転・静止ナデ，ハケ目が主に用いられている。カキ目が下端まで及ぶ例はほとんどない。上半に比べ調整は粗雑である。このためか内面に押圧痕ないしシボリ目の跡を顕著に残すもの（897・922），外面に平行タタキ目や格子タタキ目，縄蓆紋タタキ目（881・895・920・922・932・936），内面に同心円タタキ目（907）を残しているものがある。この他ヘラの力加減によるためか，削りの痕跡に似ているものやヘラの圧痕が規則的に並んでいる（885）のが認められるものもある。

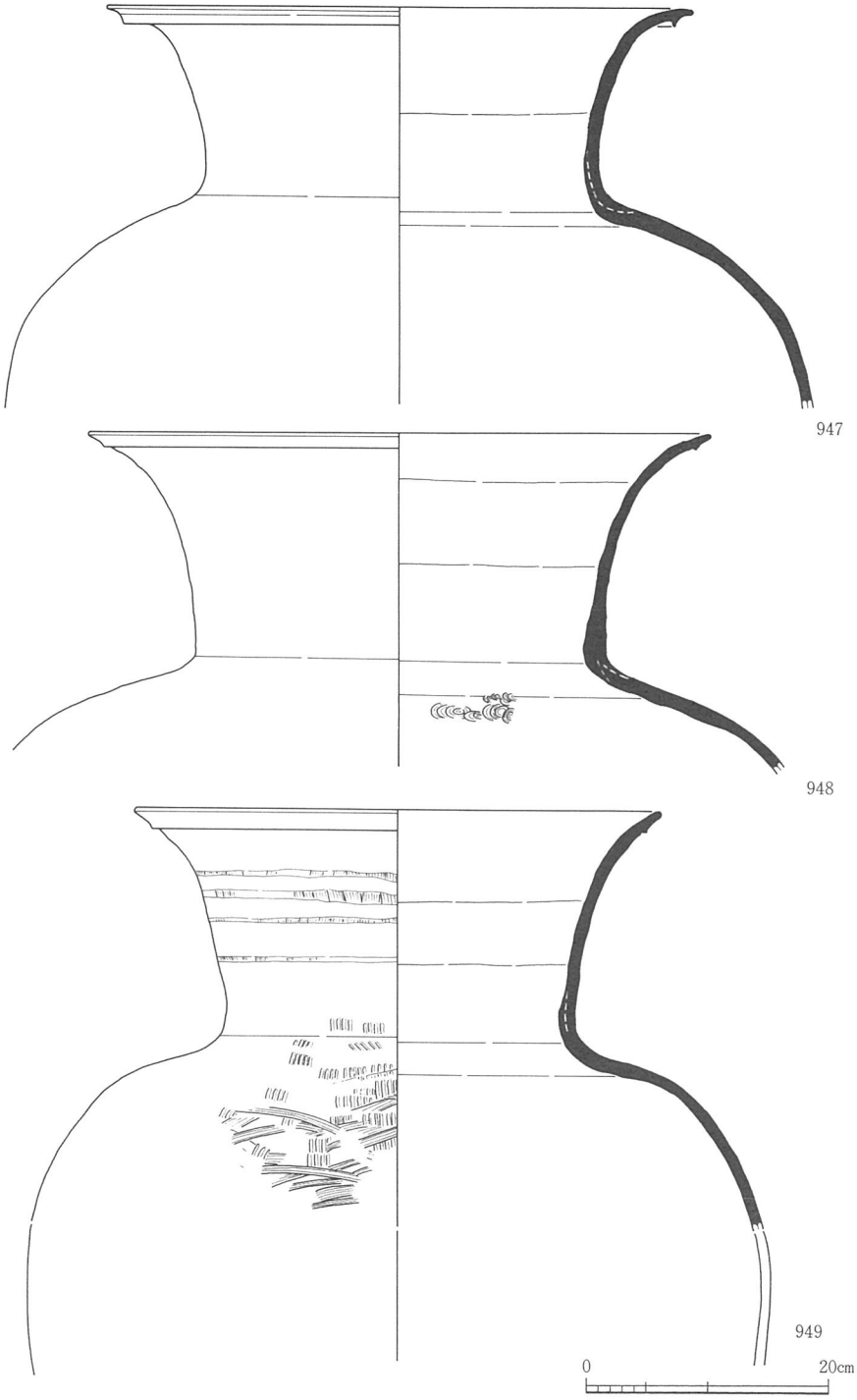
体部は主に静止ナデによってその前の整形痕ないし調整痕をナデ消しているが，まれに876・882のようにカキ目ないしハケ目の調整を行っているものもある。876は内面にもカキ目調整が施されている。870・873・875のように内面の第一次調整痕である同心円タタキは比較的よく観察されるが，外面のタタキの痕跡はほとんどナデ消されている。880のように全面に平行タタキ目が残るものはわずかである。これは口頸部の高さが低く壺を意識したものであろう。904の格子タタキ目，936の縄蓆紋タタキ目はさらに少ない。

頸部の紋様は少なく，頸部の中間から上寄りに波状紋をもつもの（940～943）や，凸帯をもつもの（895・944～946）がある。波状紋をもつものはＢ類に比べると少なく，櫛描きによる波状紋２帯一組を原則とし，波状紋帯の間には２条の浅い沈線を施すことによってその間を浮かび上がらせた凸帯状の帯が巡らされている。施紋が最終工程になるためか，外面の器面調整はクシ目，縦ハケであることが多い。943は器面調整も粗く指ナデ痕や押圧痕を残し，４帯の雑な櫛描き波状紋をもつ。波状紋帯の間は１条の沈線で区切られている。波状紋は沈線の後に施され，一部では沈線の区画を越えて上書きされている。

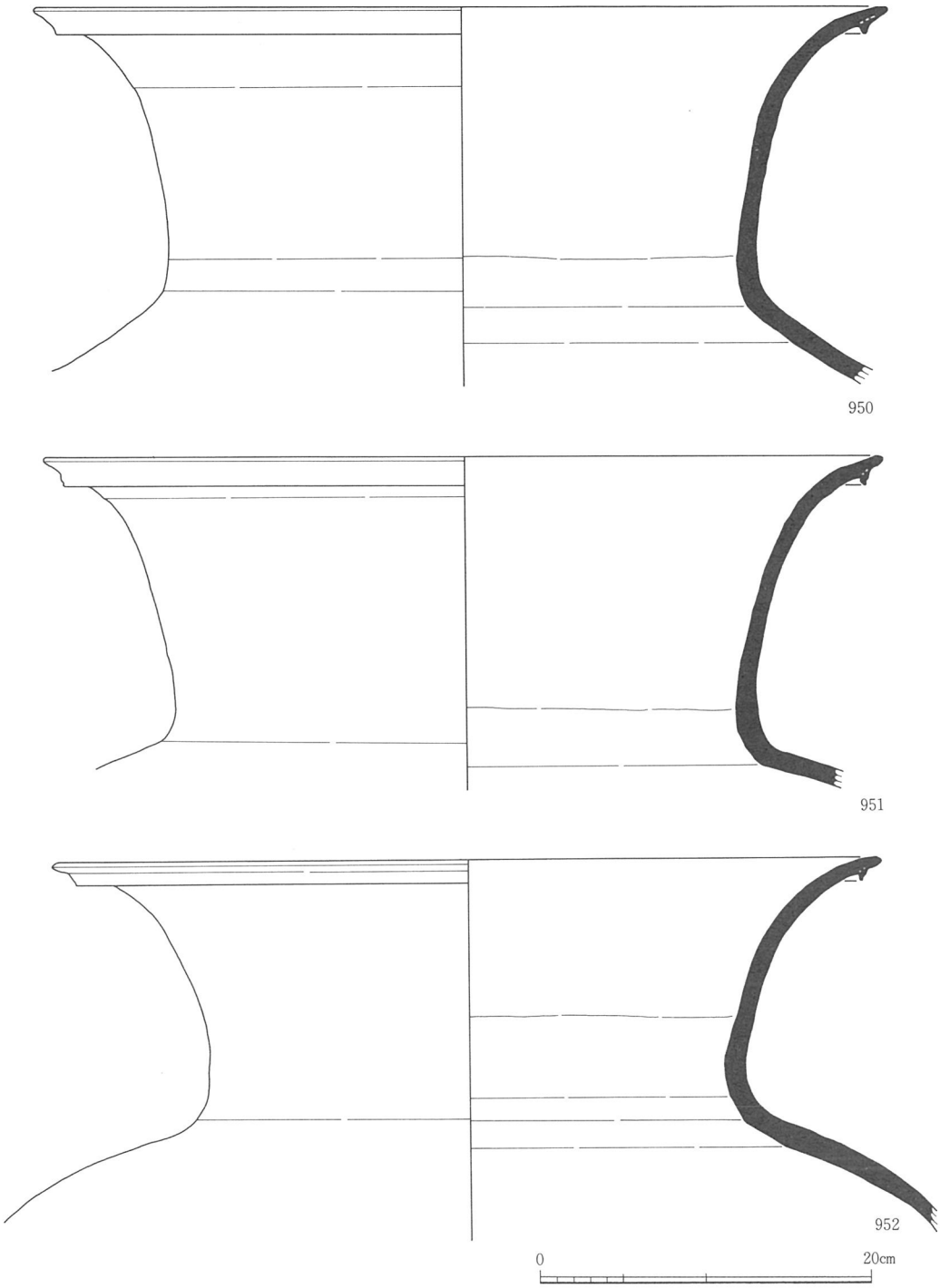
Ａ－２類（第157～160図，図版135～137）

凸帯の上側が口縁端部から直線的につながり，凸帯下側が鋭角的に上方に反り返るタイプである。出土点数は少なく，小片を含め20点余り約0.5％である。口径50㎝前後のものが多く，40㎝に満たないものは２点だけである。口頸部の高さは14～15㎝前後になるものが比較的多く，口頸部の低い959は，なで肩の体部をもち壺に類する形態である。

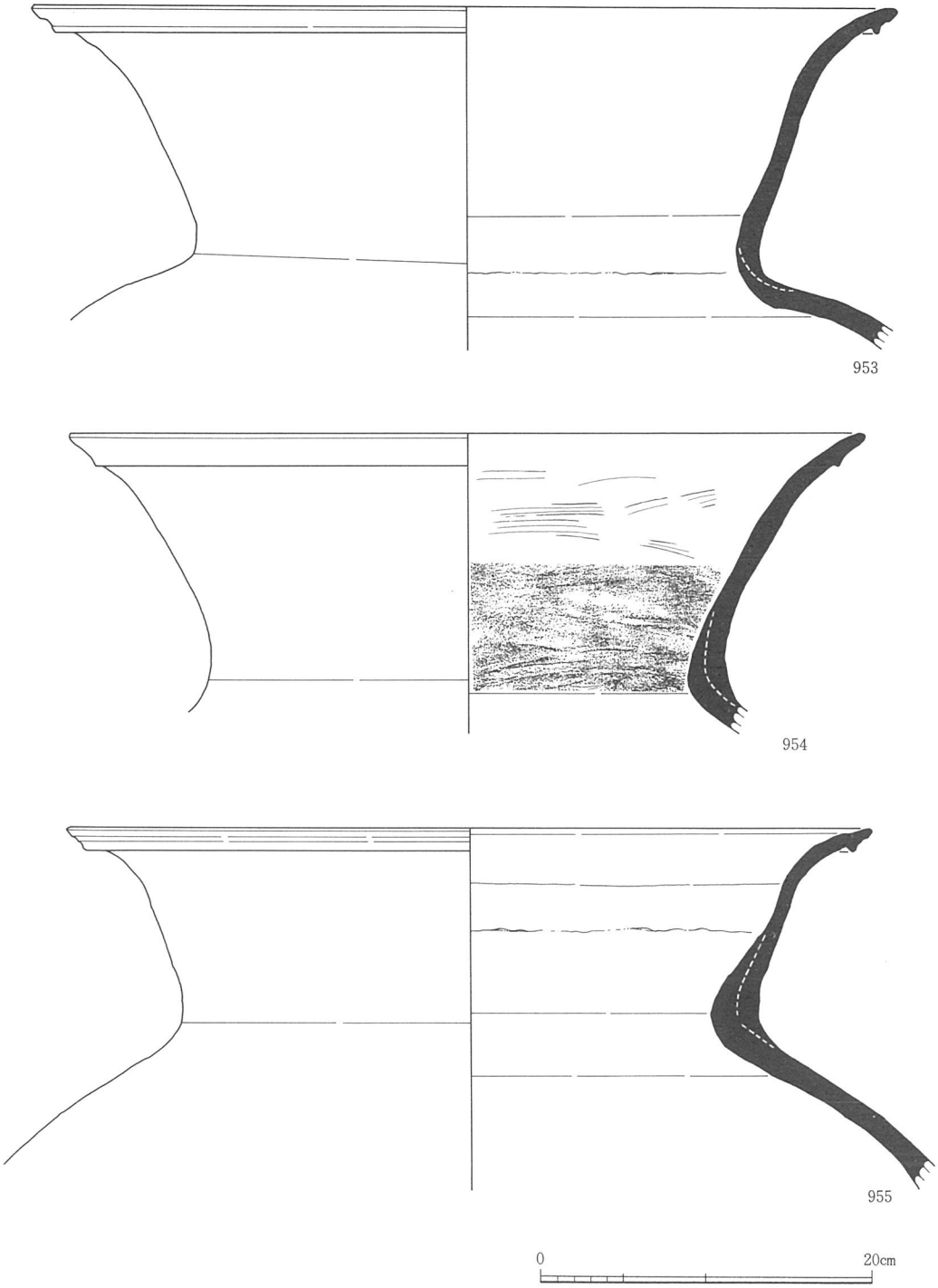
２類の凸帯形成を技法的に見ると，口縁端部形成時に薄くなった器壁を補うため外から凸帯を含めて粘土紐を貼り足し，貼り足された凸帯の粘土の余分を端部側にのばしておさめた結果，下部にのみ凸帯の形状が残るもののようである（950）。凸帯部だけを貼り付けたものでは，口縁部の傾きやその上縁のナデ方によってＡ－２類としたものがあり，Ａ－



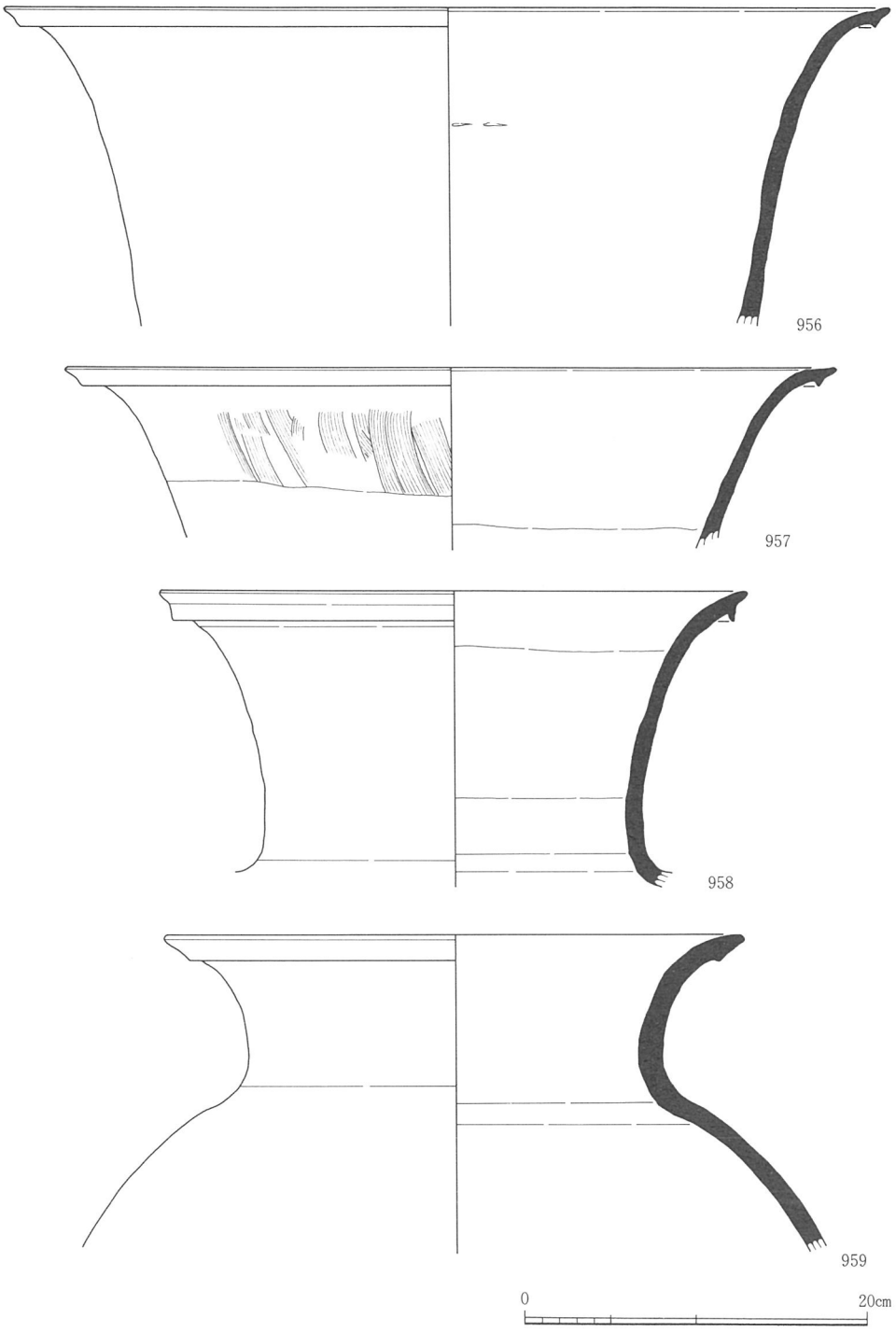
第157図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕25）Ｓ＝1/6



第158図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕26）Ｓ＝1/4



第159図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕27）Ｓ＝1/4



第160図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕28）Ｓ＝1/4

１類との識別は明瞭でない（951・952・957）。凸帯が高いもの（947・950）と低いもの（948・949など）の２種があり，凸帯の低い949は帯部を明示するためか，凸帯の下側をヘラ状の工具でナデて段差を際だたせている。

口頸部の最終器面調整は口縁端部は回転ナデ，上半は回転ナデを主とし，下半は静止ナデを主とする。タタキ目を残すものは少なく，平行タタキだけである。949は頸部に縦ハケの後回転ナデを施し，下端から体部にかけて平行タタキ目を残す。体部はその後にハケ目を加えている。Ａ－１類中で図示した937は頸部外面に縦ハケの後，ほぼ全面にカキ目を施している。頸部に紋様をもつものはない。

Ａ－３類（第161～163図，図版138・139）

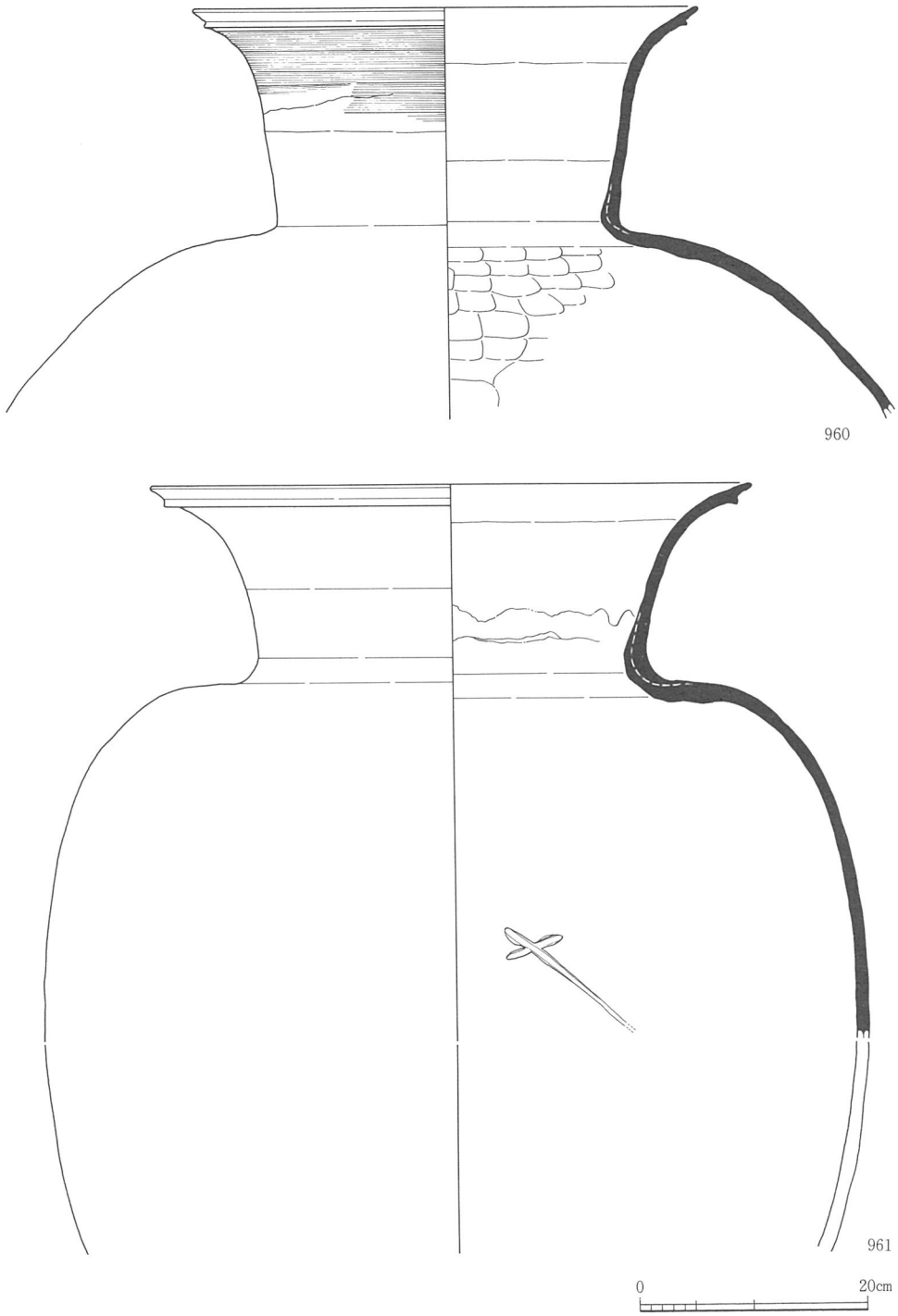
Ａ－２類とは逆に凸帯上縁で明確な段を成し，下方は緩やかに弧を描いて頸部に移行するものである。小片を含め約50点あり，Ａ類の12％を占める。口径50㎝前後のものが主体で，40㎝に満たないものは４点だけである。口頸部の高さは16㎝以上のものが多いようで，966の12㎝程度がもっとも低い。960は口径の割には体部の径が大きくなるようである。

Ａ－３類の凸帯は，基本的に凸帯部位のあたりで擬口縁風に一端ていねいにナデられ，さらに内傾手法によって粘土が継ぎ足され，外面の粘土の継ぎ目が段になって凸帯を形作るもののようである。しばしば凸帯の上方より下方の方が器壁が厚くなる。土師器の複合口縁の作り方に似ているが，細く凸帯を貼り付けたと思われるもの（962）も存在する。凸帯頂部のナデ方によってＡ－１類に見える部分もある。

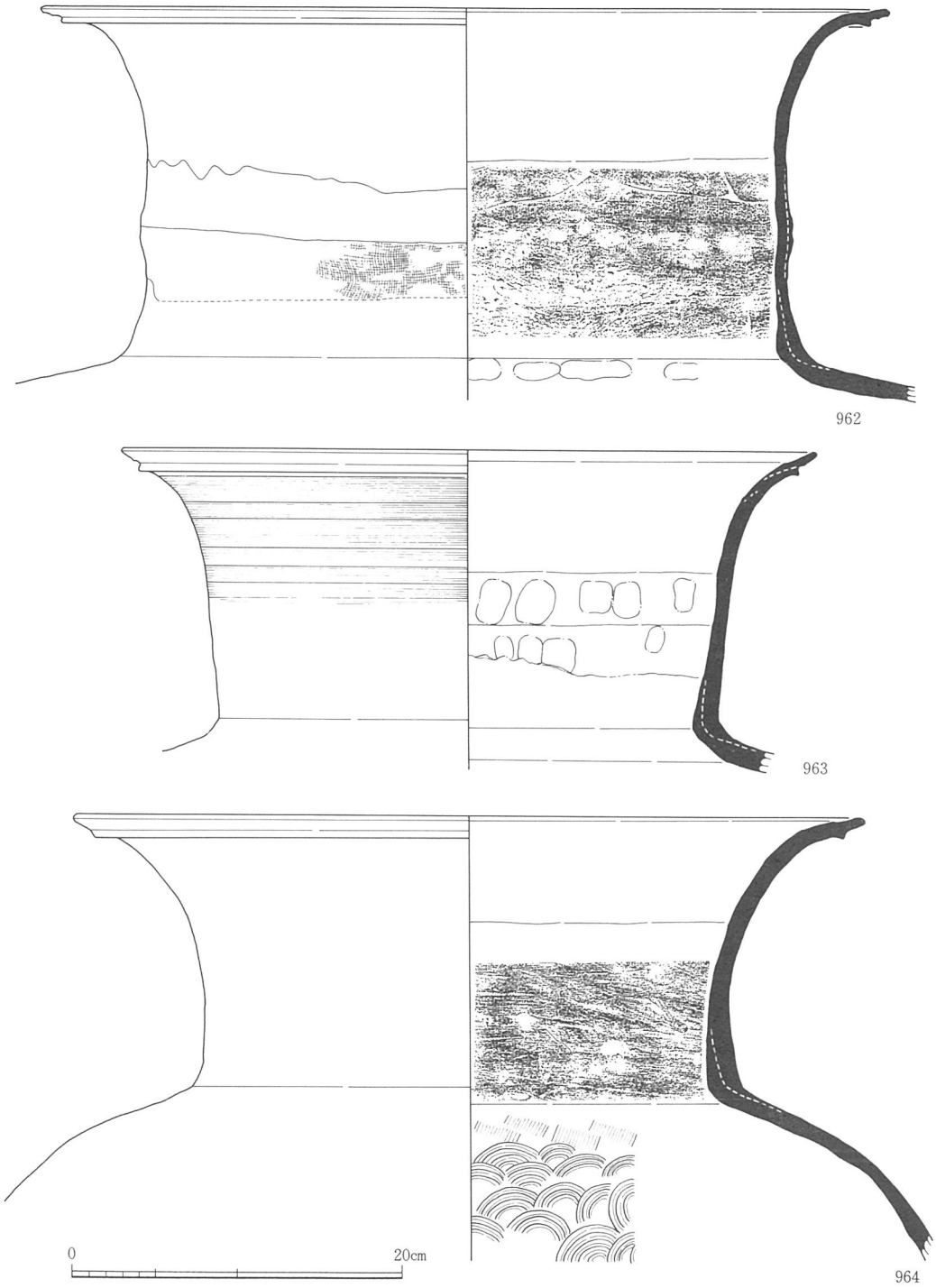
内外面の最終器面調整は，口頸部では外面が回転ナデを主体とし，カキ目がこれに続いている。内面は回転ナデ，下半は静止ナデを主体とする。整形時の痕跡である押圧痕を残すもの（961・962）もかなりある。体部は静止ナデによって平行タタキ目・同心円タタキ目・当て具の痕跡などを消している。964は同心円タタキの後，静止ナデを施しており，頸部近くに集中的にハケ目が残されている。確実な格子目タタキ・縄蓆紋タタキの痕跡は認められなかった。

頸部の紋様はヘラで上下を際だたせた低い凸帯が巡らされているものが１点（967）あっただけで，波状紋を施すものはない。961は通常では全く見ることのできない体部内面にヘラで×印を刻んだ痕がある。ヘラ記号と呼べる性質のものかどうか疑問である。962は頸部の下半を巡る大きな補修痕が観察される。

口縁端部は回転ナデによって，器壁が薄く，先端が尖り気味に作られるものが多いが，966・967のようにナデがていねいでＢ類に近い面をもつものもある。



第161図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕29）Ｓ＝1/6



第162図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕30）Ｓ＝1/4

第163図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕31）Ｓ＝1/4

Ｂ－１類（第164～173図，図版140～146）

Ｂ－１類は，口縁端部にナデによって面をもたせ，端部外下にＡ－１類と同様な断面三角形の凸帯をもつ一群である。Ｂ類の基本形をなすが，口縁部の傾きや凸帯のナデ具合によってＢ－２・３類と区別し難いものもある（970・974）。Ａ－１類に次いで数が多く，Ｂ群中の82％，大型甕全体の28％を占める。口径はＡ類よりやや大型になるようで，径55㎝，50㎝，45㎝前後のものが多い。口頸部の高さもＡ類より高く12㎝以上が８割を占める。

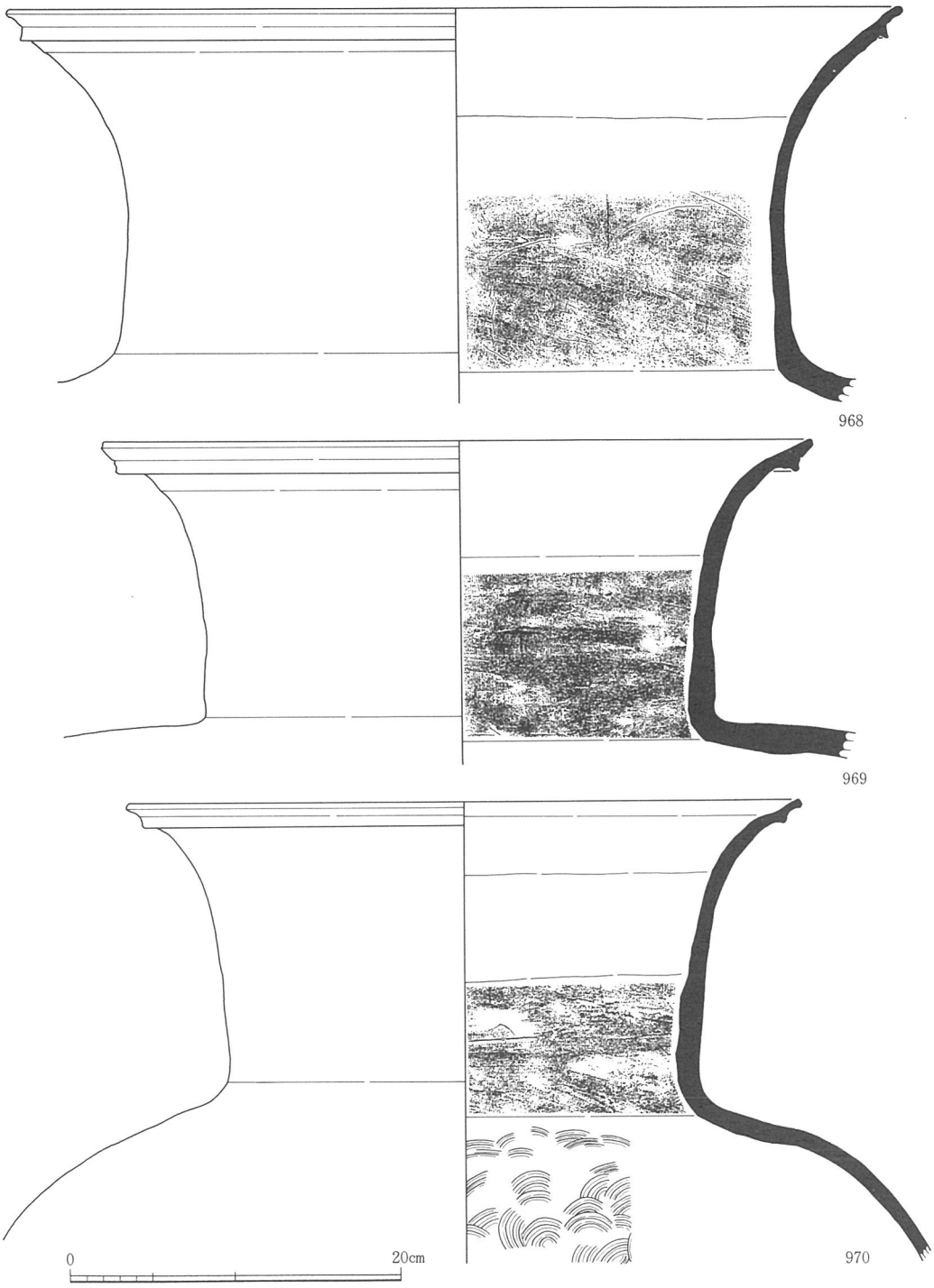
口縁端部の形は大きく２種に分かれ，端部のコーナーが丸みを帯びＡ類の一部と似たものと，ナデによってコーナーをシャープに作ったものがある。端部は凹面をなすことが多い。後者はさらに，それぞれのコーナーがほぼ90度になって断面「コ」の字型になるもの（972～974など）と上端が切り出しナイフのように鋭角になるもの（976・980など）に分かれる。鋭角になるものは口縁部が水平近くに開くタイプに多いようで，端部の凹みが著しい。器の傾きとナデを施す手の位置加減によって形作られたもののようである。

凸帯の形状はＡ－１類と同様３つのタイプに分かれるが，明瞭な断面三角形をなすものが圧倒的に多く，凸帯の低いもの（981），細く高いもの（980）は少ない。また，数点だけであるが，凸帯の上端をナデて高さの低い，断面形が「コ」の字型になるもの（977・996）もある。

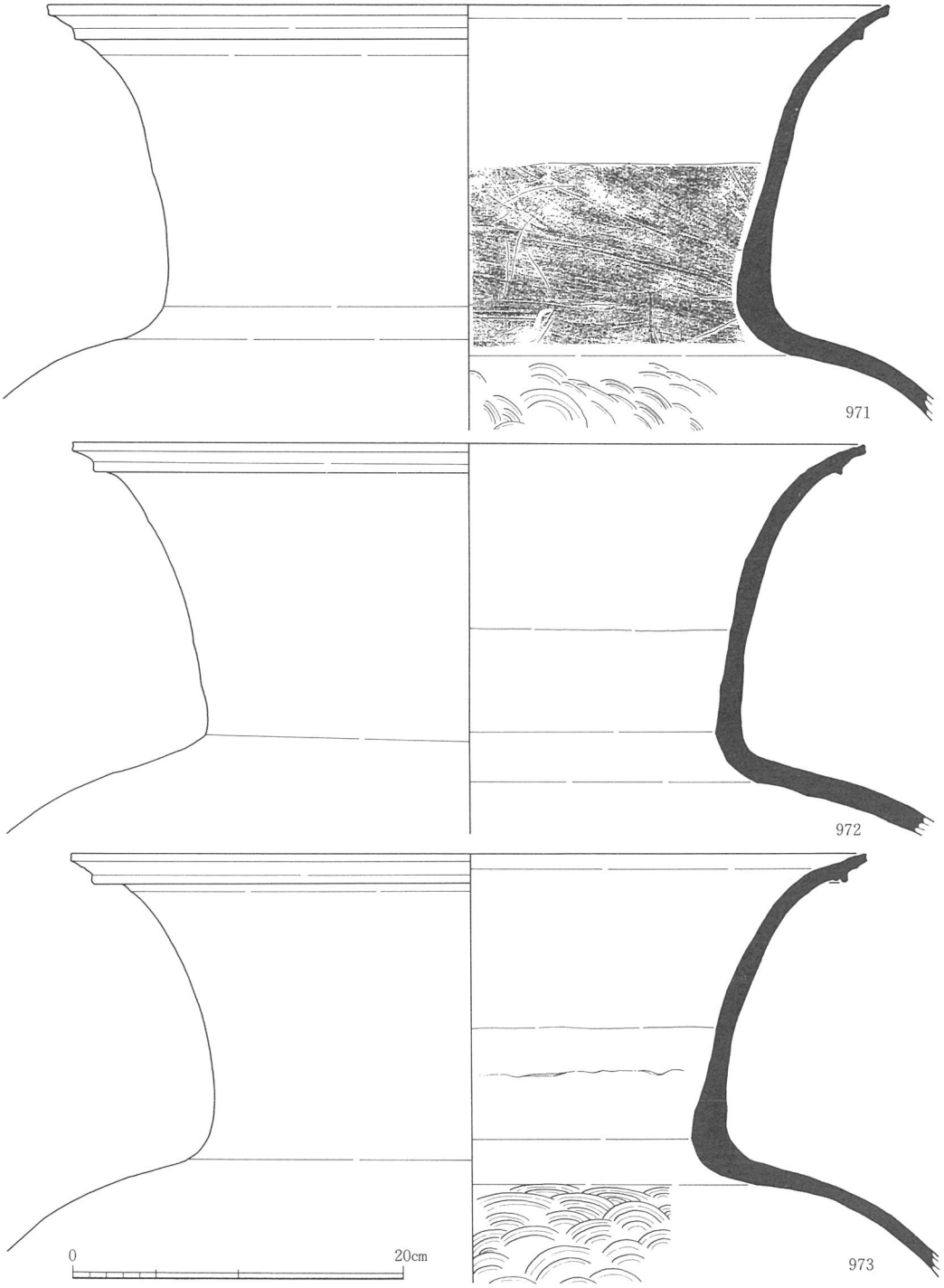
口頸部付近の調整は，口縁端部を均等に面取りをすることもあって，回転ナデを基本としている。回転ナデにカキ目ハケ目を併用するもの（975・985）が30点，Ｂ－１類中の約16％ある。口頸部上半では回転ナデ，静止ナデが比較的ていねいに施され，その前の調整痕や整形痕はあまり残っていない。ごくまれに縄蓆紋タタキ目（979・991）や，平行タタキ目の残るもの（976）があり，格子目タタキの残るものはない。

体部は静止ナデによって，内面の同心円タタキ（971・973など）あるいは無紋の当て具痕（977・988），外面の平行タタキ（988），縄蓆紋タタキ（975）を消している。格子目タタキは見られない。

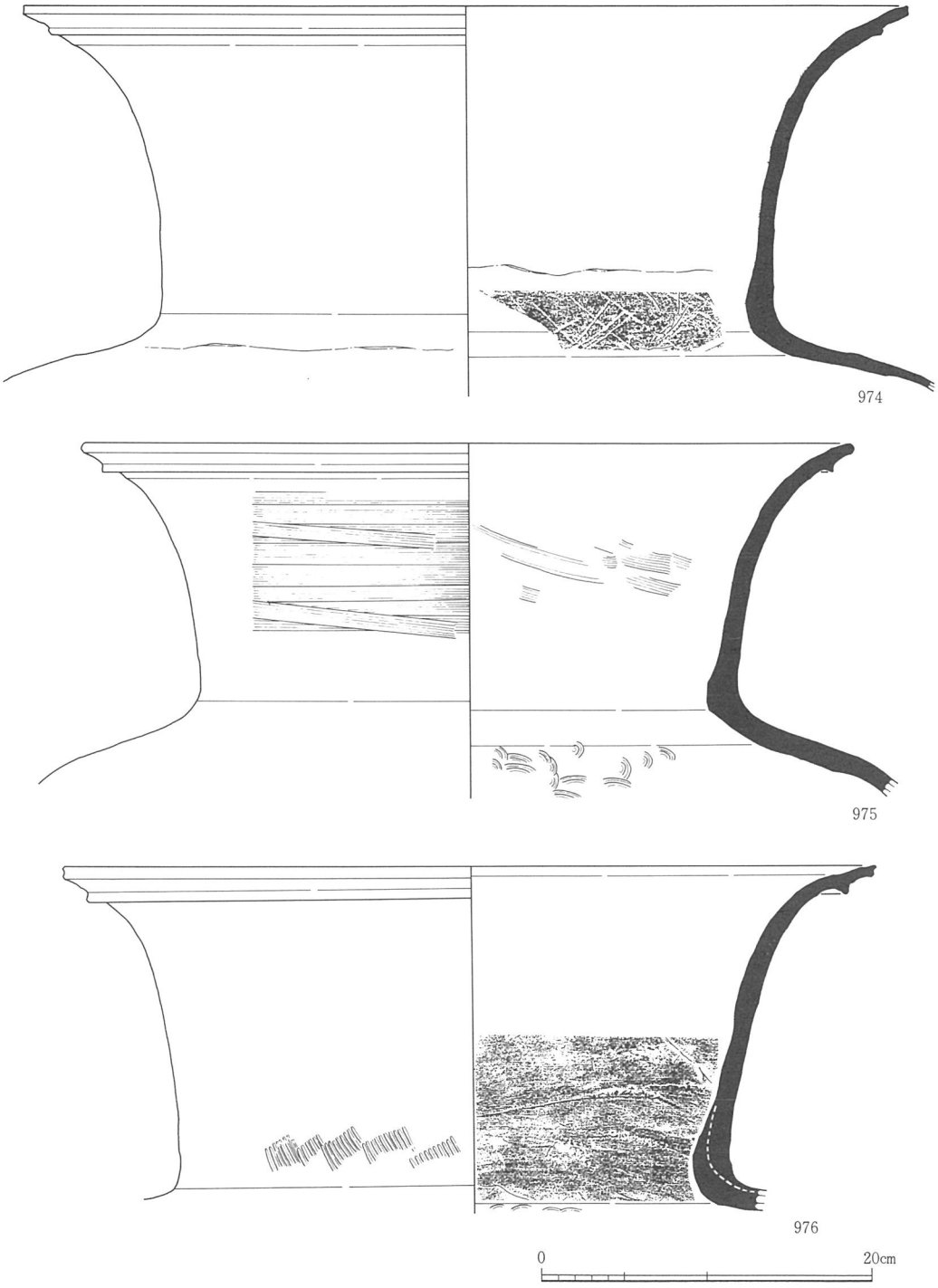
Ａ類に比べると頸部に紋様を付するものが多い。図示したものは２点だけであるが，波状紋をもつものが25点ある。また，紋様といえるかどうか疑問であるが，凸帯と口縁部との間に１本の細い沈線を巡らせたものも３点ある。波状紋は２帯一対を原則とし，波状紋帯の間に沈線や細く低い凸帯を加えている（990・991）。また，図示していないが，波状紋が１帯で，その上側に凸帯を巡らせるもの，上下に沈線を巡らせているものもそれぞれ１例認められた。



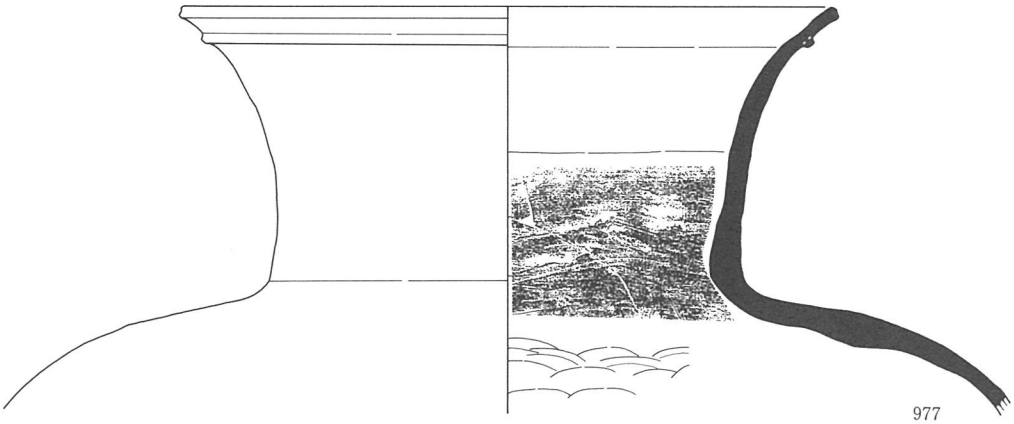
第164図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕32）Ｓ＝1/4

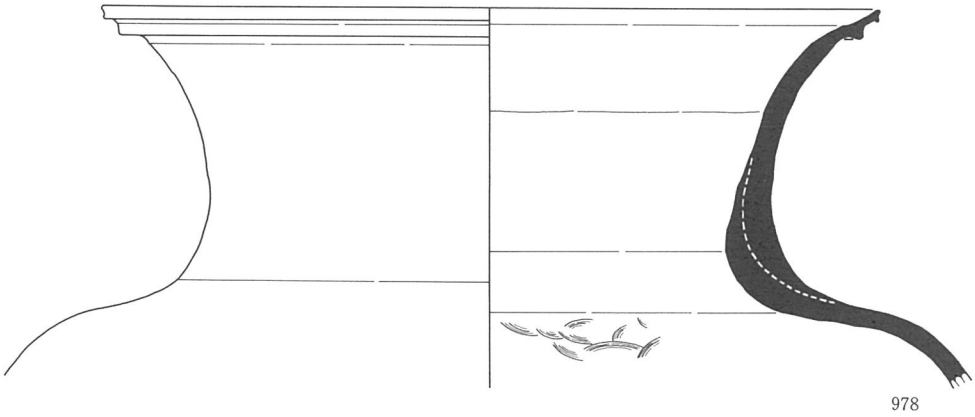


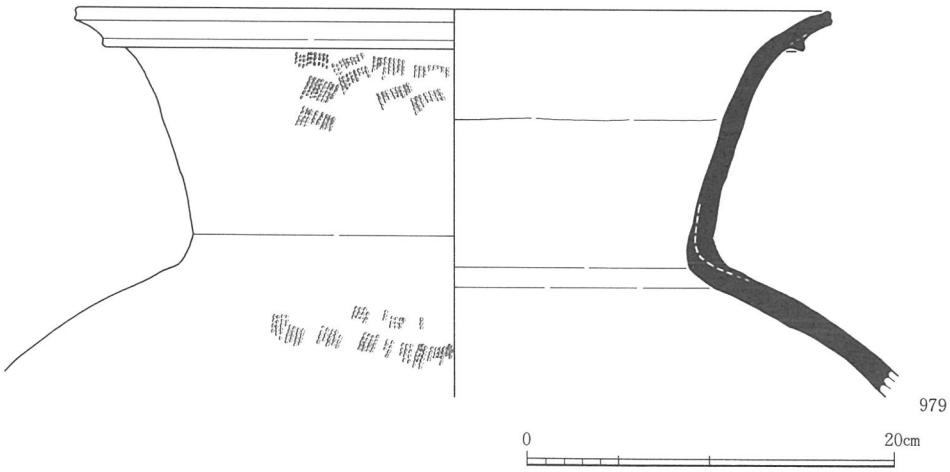
第165図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕33）Ｓ＝1/4



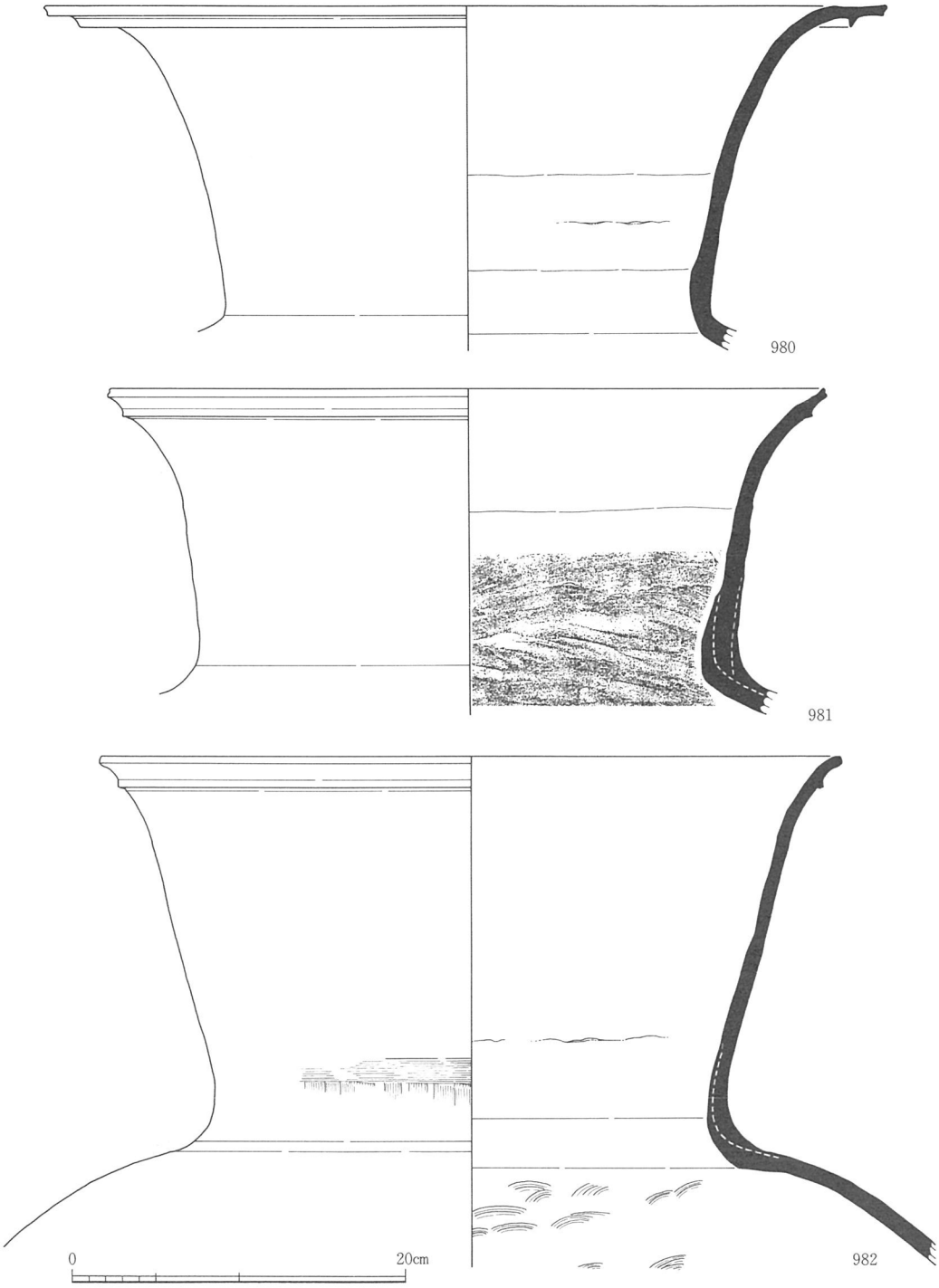
第166図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕34）Ｓ＝1/4



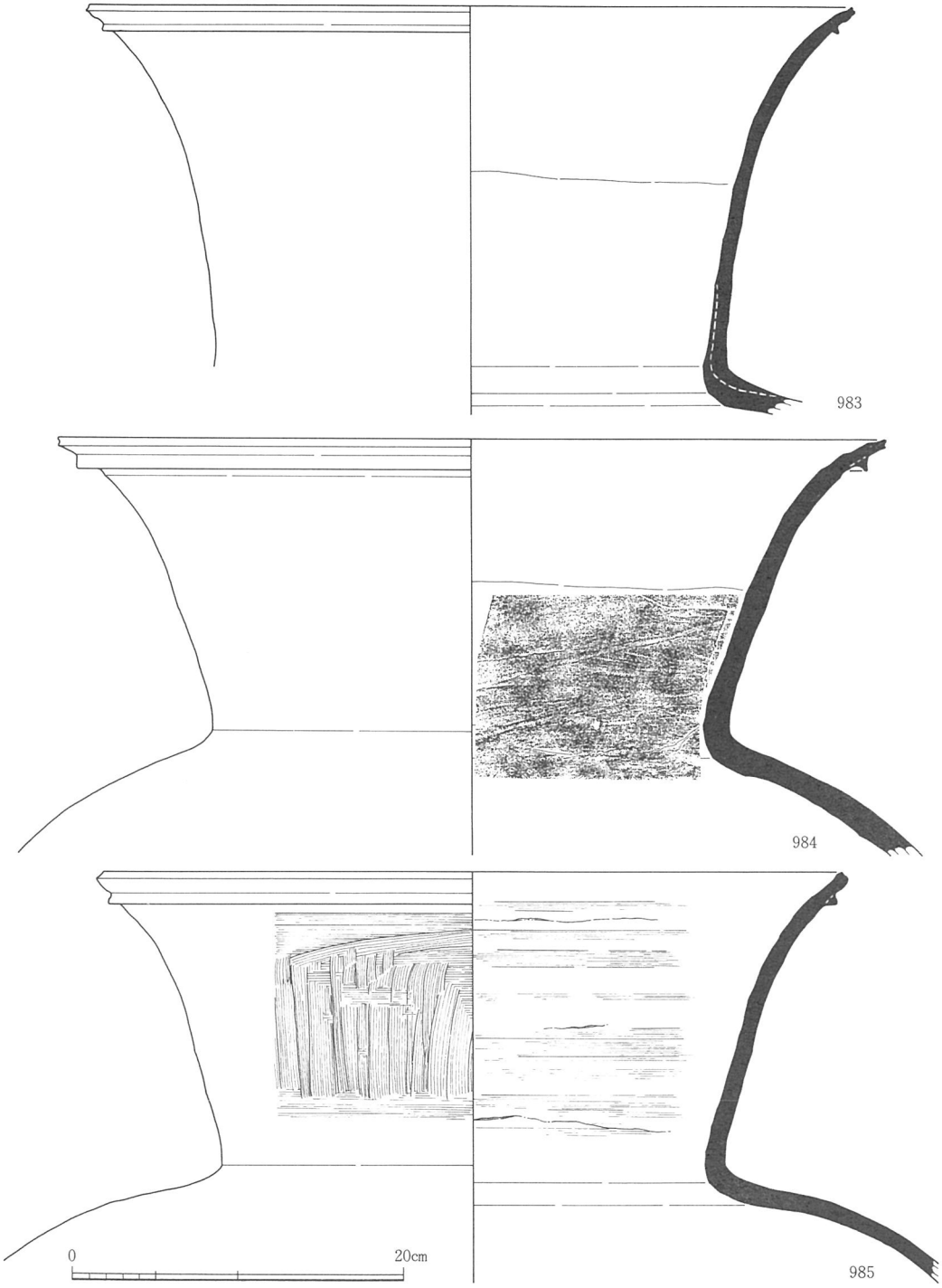




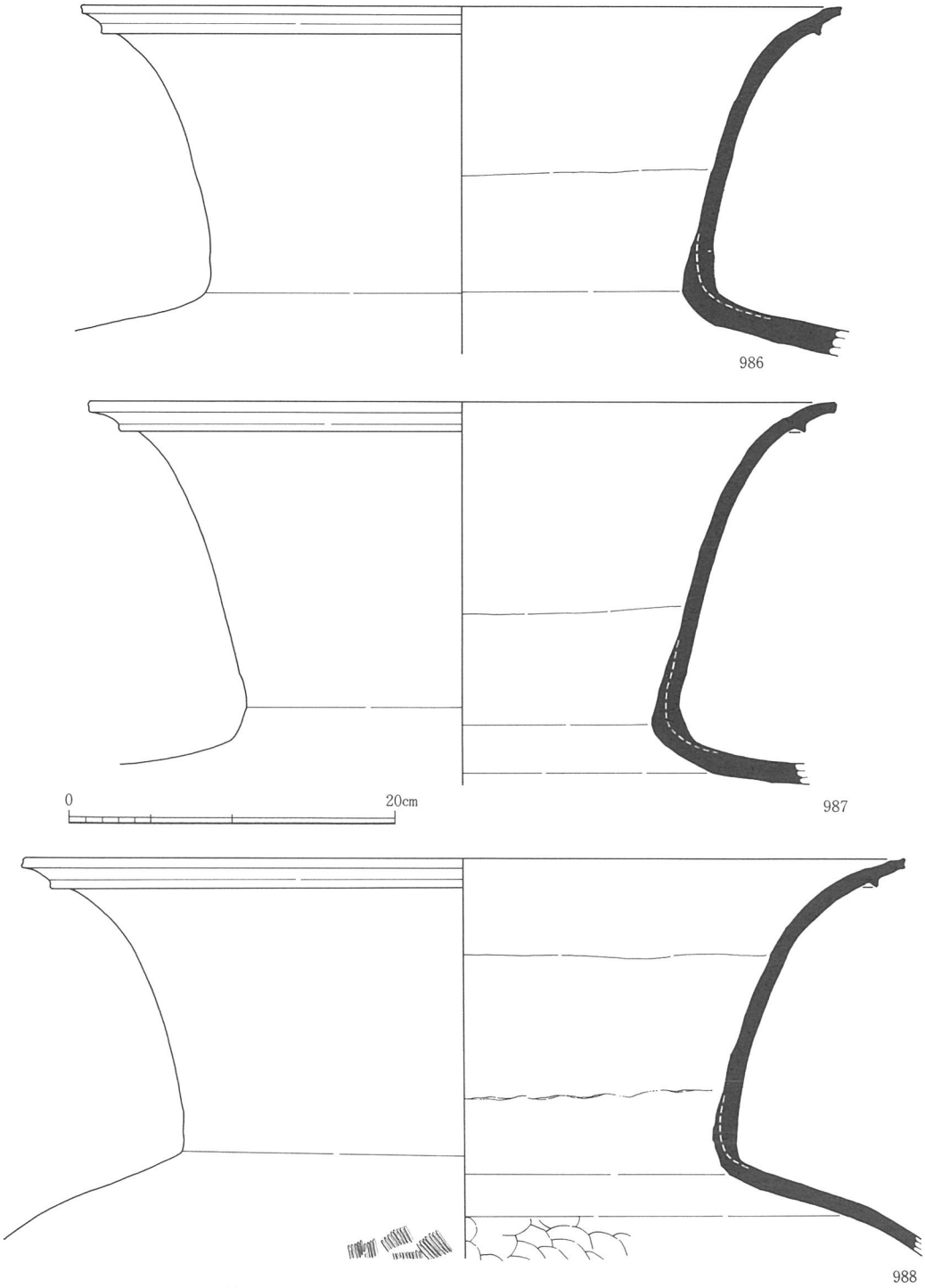
第167図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕35）Ｓ＝1/4



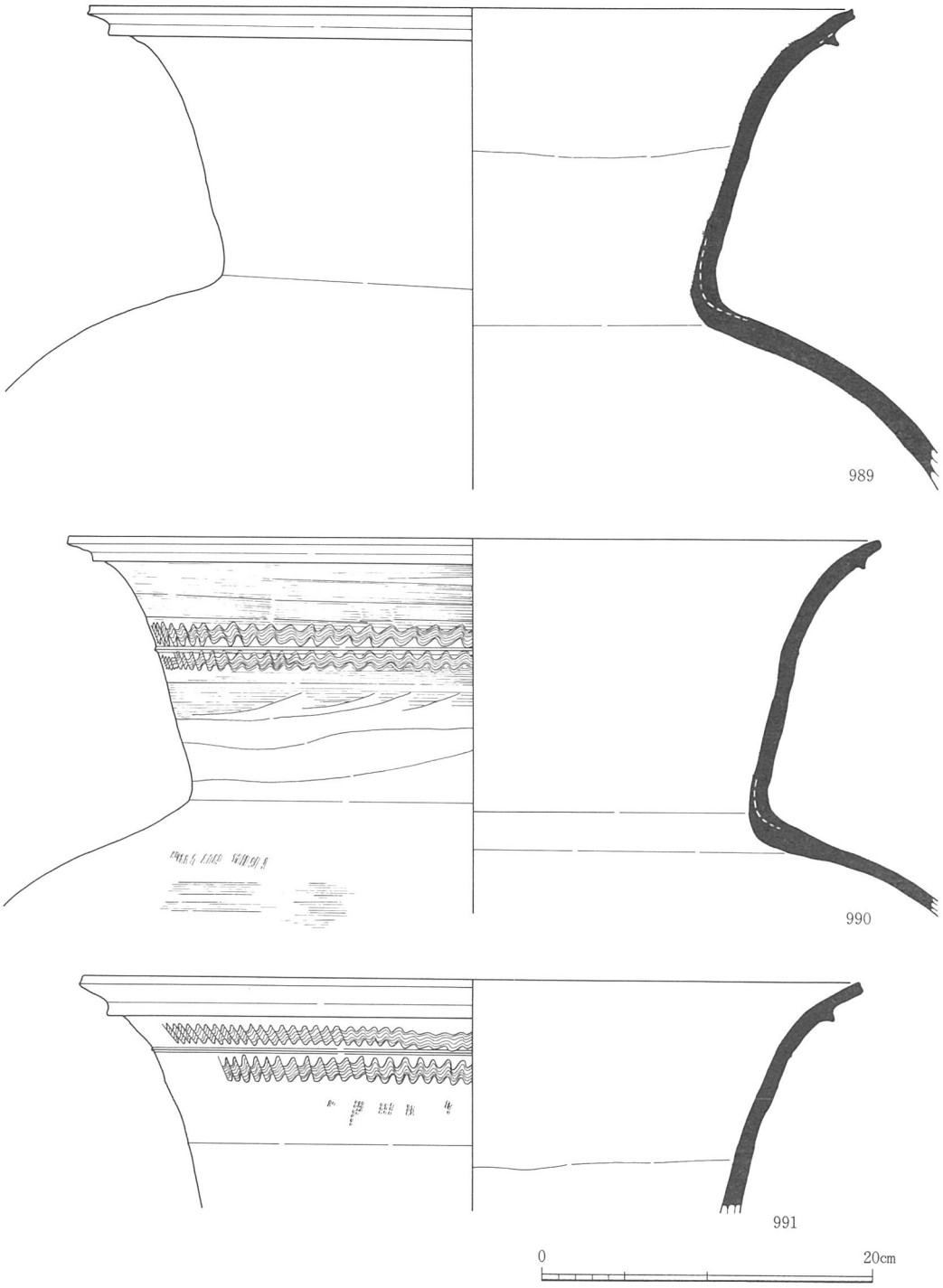
第168図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕36）Ｓ＝1/4



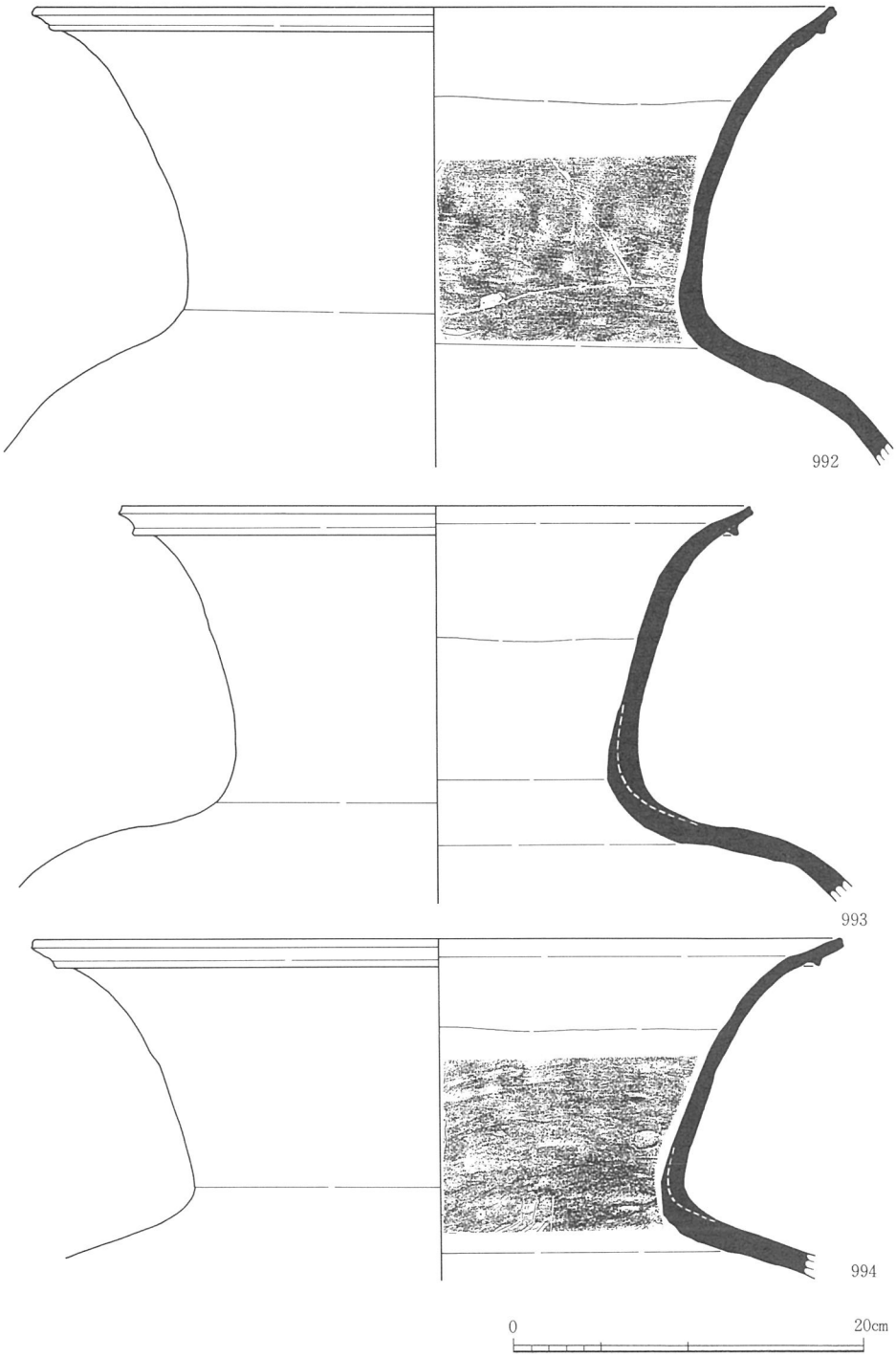
第169図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕37）Ｓ＝1/4



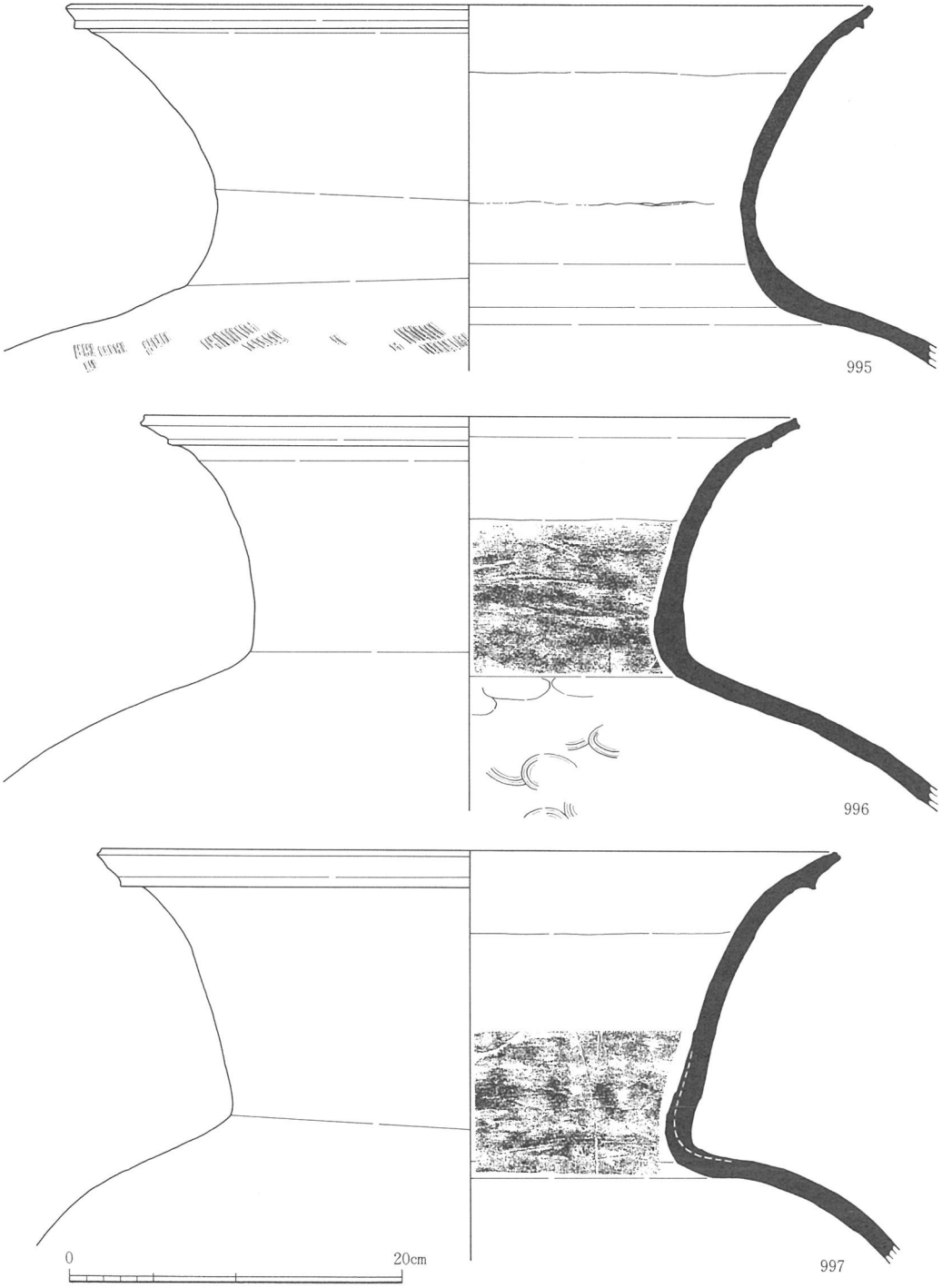
第170図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕38）Ｓ＝1/4



第171図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕39）Ｓ＝1/4



第172図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕40）Ｓ＝1/4



第173図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕41）Ｓ＝1/4

Ｂ－２類（第173図－997，図版146）

凸帯の上側が口縁端部から直線的につながり，凸帯下側が鋭角的に上方に返えるタイプである。図示したものを含め８点出土している。いずれも口径44㎝以上を測り，口頸部の高さは13㎝以上ある。口縁部の傾き具合によってＢ－１類と近似するものがある（997）。

口頸部付近の調整は回転ナデを基本とし，外面にカキ目を加えているものが３点ある。内面上半は全て回転ナデによって仕上げられている。肩部まで残る例品は少ないのでこの部分の調整痕の傾向を想定することはできないが，いずれも静止ナデによる調整が行われている。口頸部に紋様をもつものはない。

Ｂ－３類（第174～176図，図版147）

Ａ－３類の凸帯と同型のもので，小片を含め26点，Ｂ類中の12％弱を占める。Ａ類中の構成と似ている。口径50㎝前後，口頸部の高さは17㎝以上のものが多い。

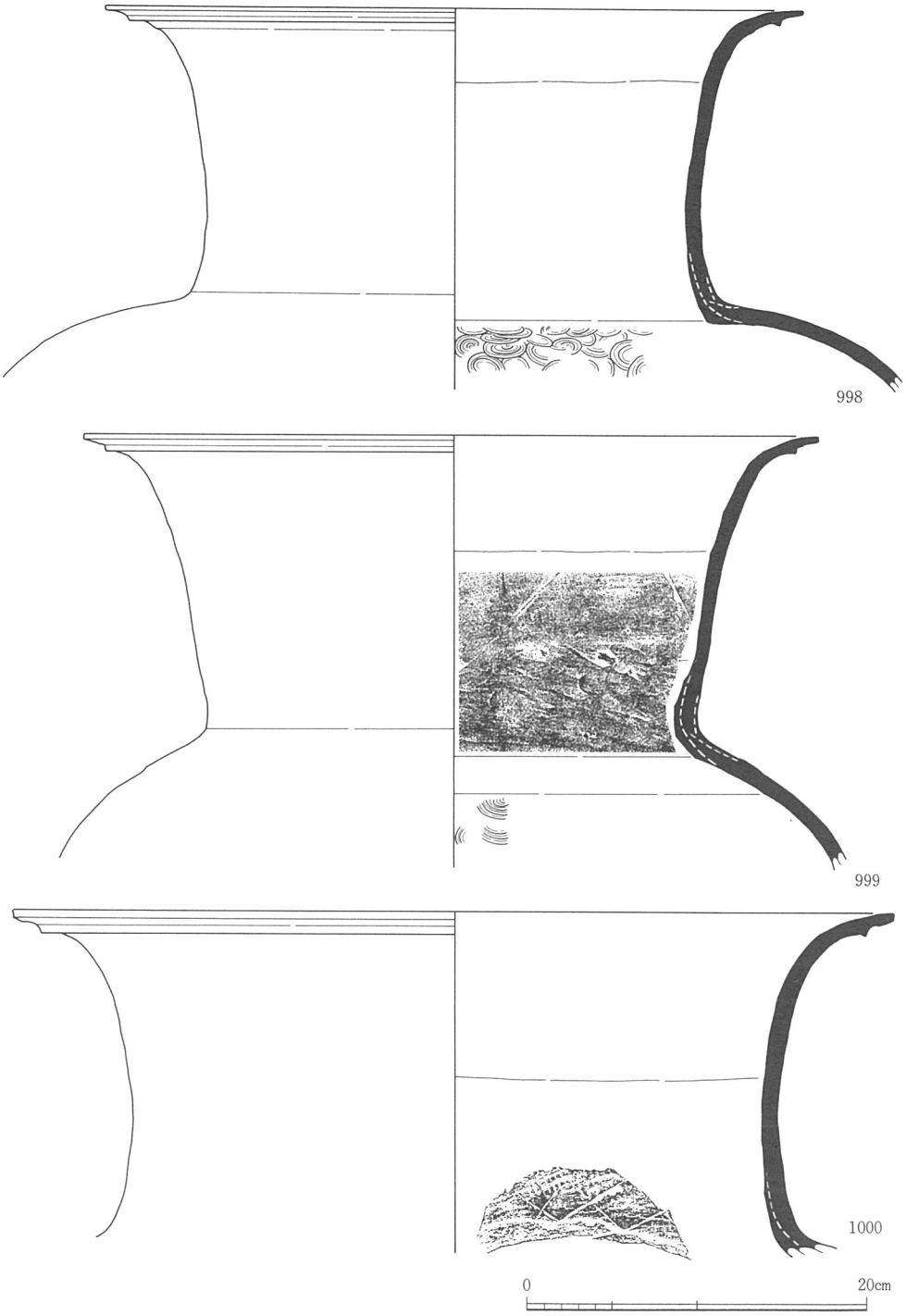
口頸部は回転ナデを多用しており，カキ目，縦ハケがみられるものが４点ある（1001・1006）。頸部にタタキ目が観察されるものは１点だけで，1003は格子目タタキ痕が部分的に残っている。体部内面は静止ナデがていねいに施されており，無紋の当て具痕（1003），同心円タタキ痕（998・999）が残るものは少ない。頸部に２帯一対の波状紋を施しているものが２点ある。いずれも波状紋帯間は沈線を巡らせている。

998は表現し得なかったが，補修痕が見られる。1001は頸部下端の接合面に斜格子目がヘラ先によって線刻されている。895と同様に，体部との接合の際に接合面の圧着を強めるために行ったものである。

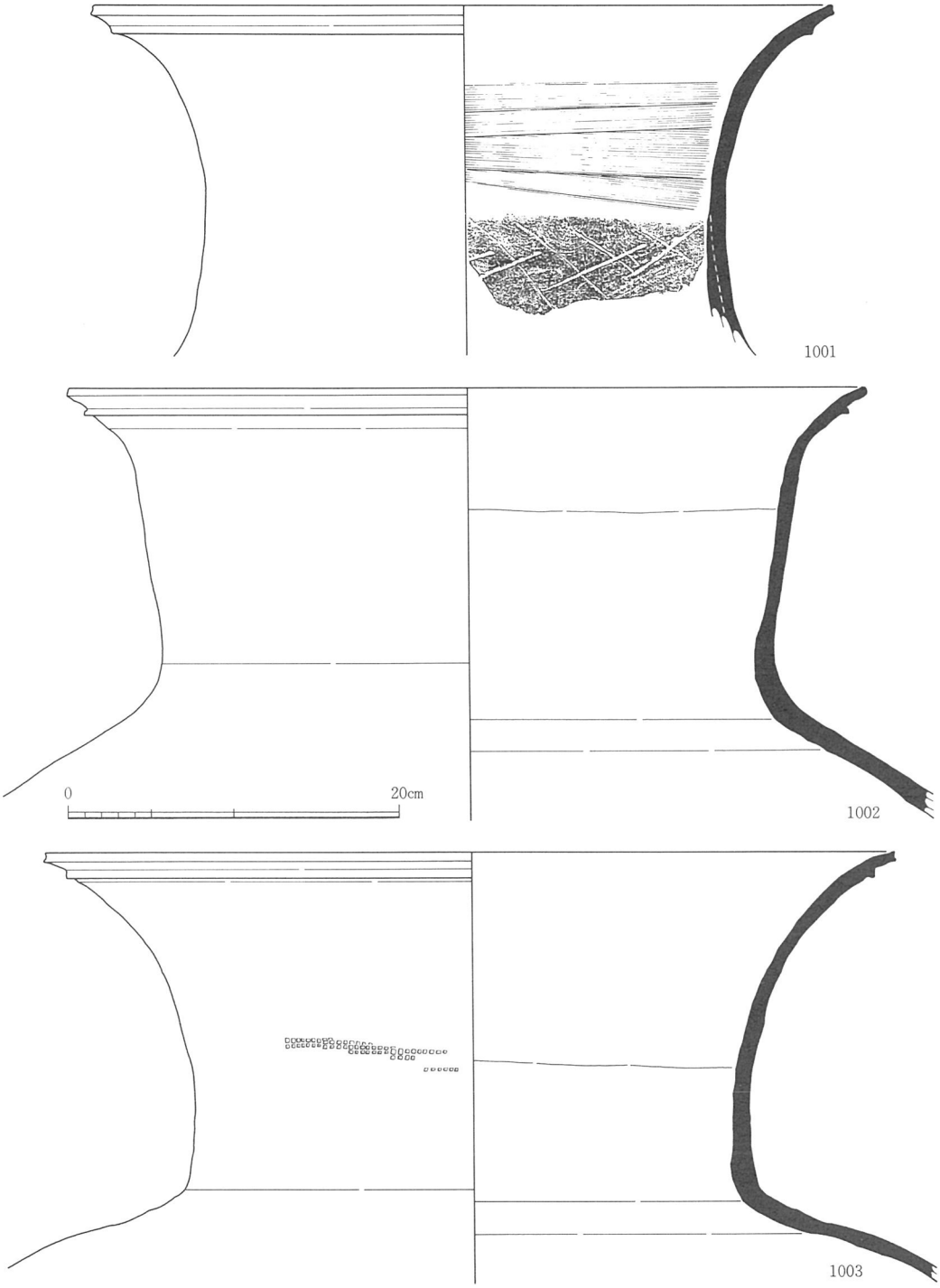
口縁端部を回転ナデで面取り調整を行う関係か，凸帯の下部にもナデが加えられ，１類の凸帯に似た形状になるものがある（1002・1003・1005）が，いずれも貼り付け凸帯ではなく，先述の擬口縁風の粘土の継ぎ方になっており，ナデによって凸帯１類のような形状になったものである。ただし1006は口縁外面に幅３㎝ほどの粘土帯を外接の手法で貼り足して，その上側をナデて凸帯３類の形を作り出したもので，３類の中では特異な凸帯の付け方である。

Ｃ類（第177・178図，図版148）

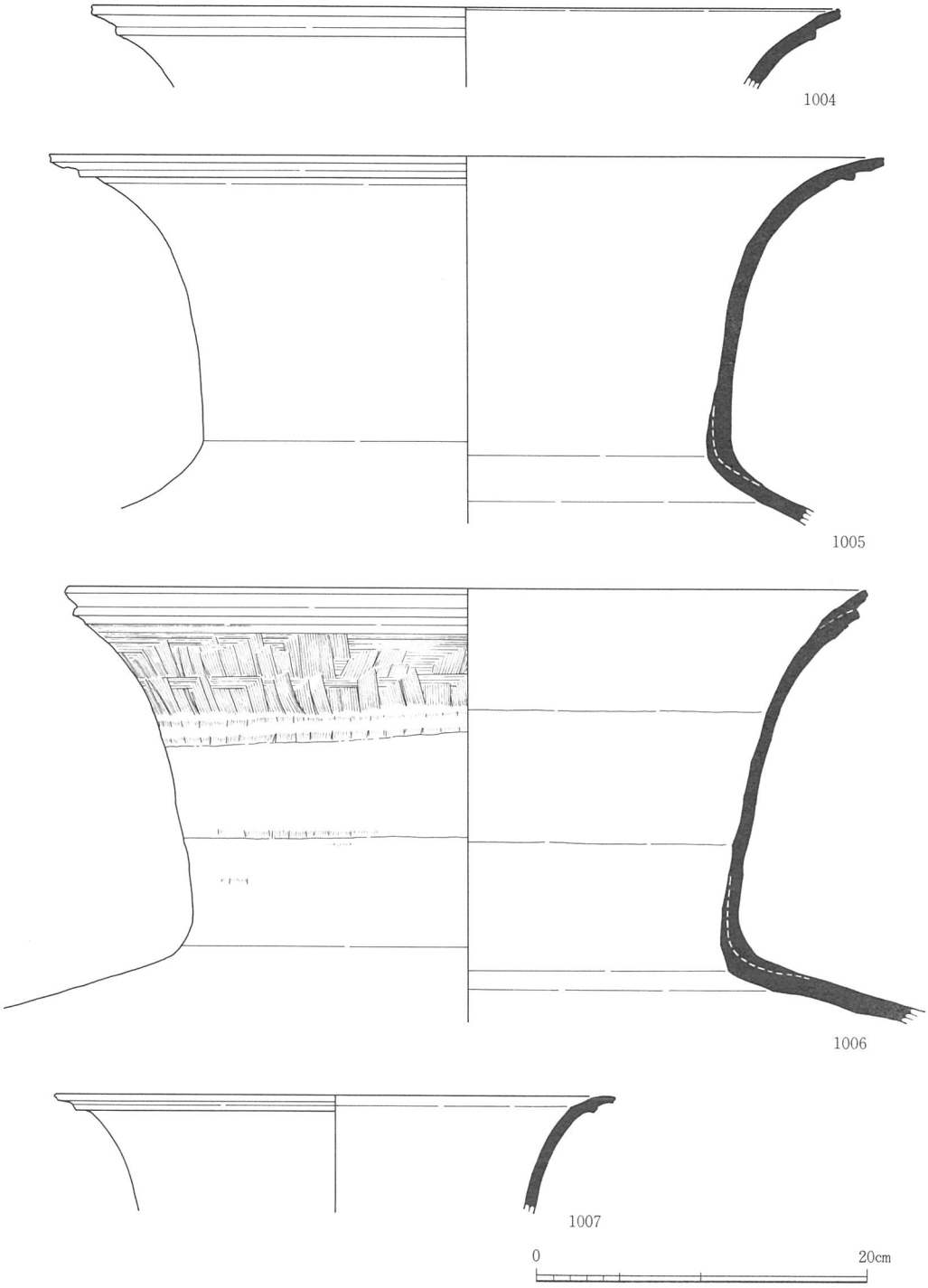
口縁端部はＡ類のように丸くおさめるが，小さな凸帯がその直下に付き，凸帯を含めて口縁端部を形成している一群である（1011・1013・1014）。壺Ｄ－２類，Ｅ類の一部の口縁に近似している。口径は30～50㎝までばらつきがある。口径の割に頸部の高さの低いものが多く，壺の形に近い。15点出土している。



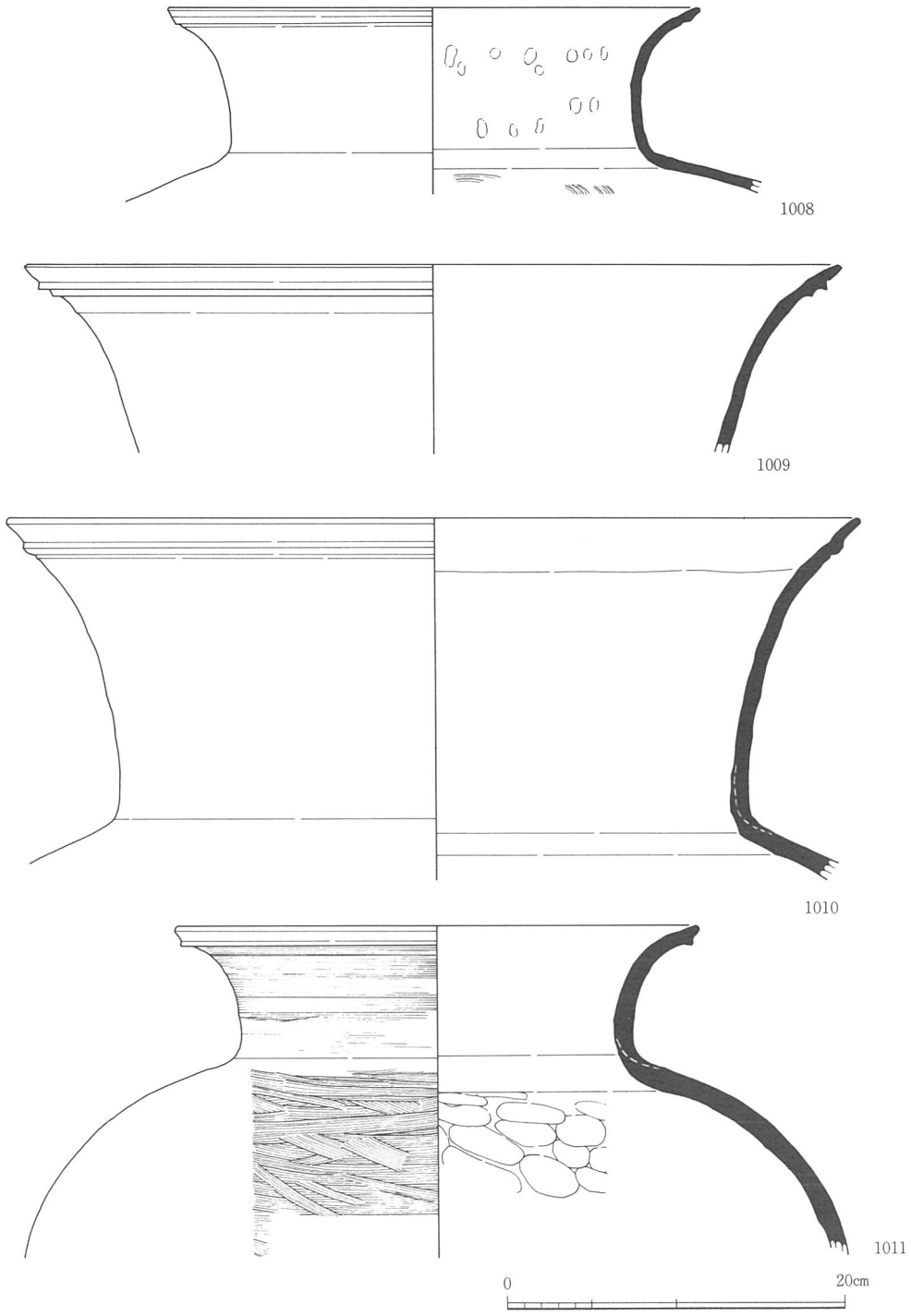
第174図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕42）Ｓ＝1/4



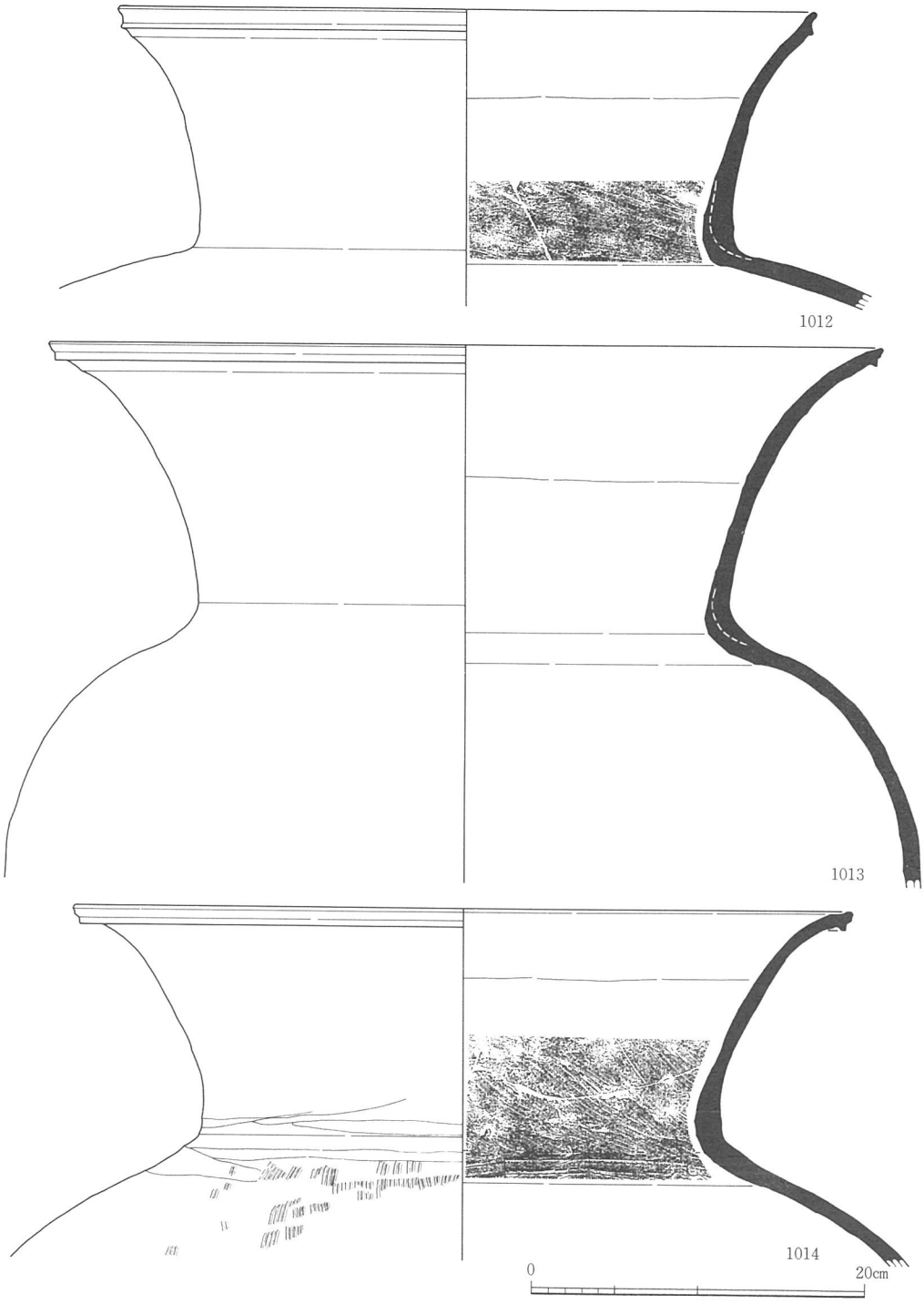
第175図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕43）Ｓ＝1/4



第176図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕44）Ｓ＝1/4



第177図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕45）Ｓ＝1/4



第178図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕46）Ｓ＝1/4

口頸部の調整は回転ナデを主体とし，カキ目を加えるものが３点ある。1008は頸部と体部外面にカキ目を施している。体部外面は斜め方向のハケ目が交錯しているが，これも回転力を利用したハケ目で縦ハケとは異なる。体部内面は無紋の当て具痕がほぼ全面に残っている。1014は体部内外面に静止ナデを施し，外面に平行タタキ目を残している。図示しなかったが，他に頸部に沈線を２条巡らせるものと，口縁部直下に細い沈線を１条巡らせるものがあった。

Ａ類中の特殊凸帯として扱うべき一群もここで図示している。1008はＡ－２類の口縁部に近い形態で，口径が小さく，全体に器壁が薄い。頸部内面に押圧痕が観察される。1009は２帯の断面三角形の凸帯を巡らせている。凸帯間にもていねいな回転ナデが施されている。凸帯上の回転ナデの際に指先あるいは爪先のはずみで部分的に２帯になるような凸帯も１・２点みられた。本例は口縁部の45％が残り，全面に均等に２帯の凸帯が巡っている。1010は凸帯頂部がナデられて面をもち，扁平な台形をなす。Ａ－１類の912，Ｂ－１類の996などとも異なった凸帯である。灰原以外の出土を含め他に１・２点あるだけである。頸部内外面に押圧痕が残されている。1012は口縁端部が凸帯部分で屈曲するように立ち上がり，外面をナデて凹面を形成している。横ナデ痕のような細いカキ目が口縁外面に巡らされている。これに似た口縁は他に１・２点ある。

Ｄ類（第179図－1015，図版148－1016）

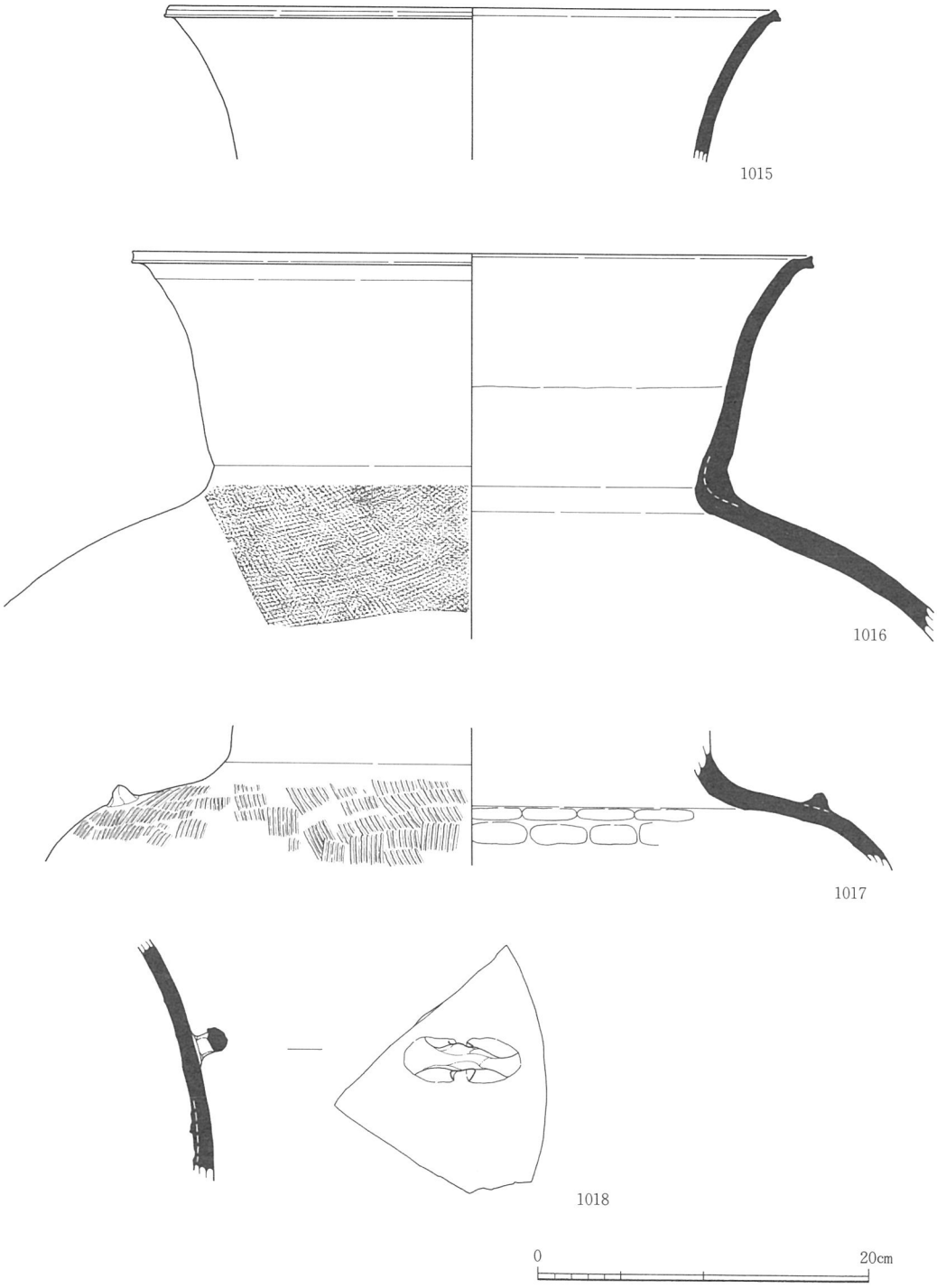
Ｄ類は凸帯をもたず，口縁端部をていねいにナデて面取りを行っているものである。壺Ｃ類の口縁に似ており，２点出土している。口縁はわずかに外反しながら直線的に立ち上がる。

1015は頸部外面に縄蓆紋が痕跡的に残る。1016は口頸部に回転ナデを施し，体部外面には格子目タタキ痕が残り，内面に無紋の当て具痕が残っている。

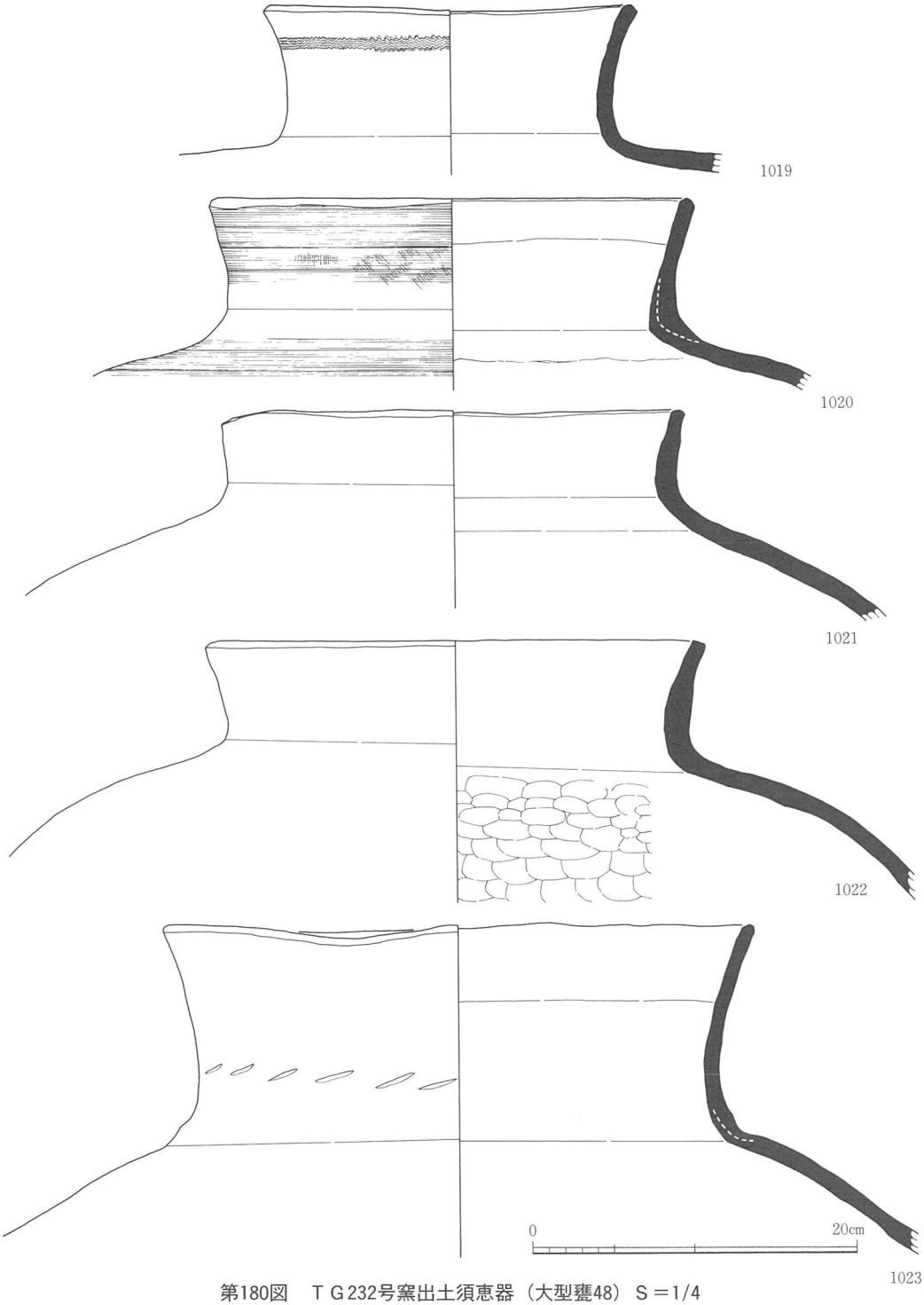
Ｅ類（第180図，図版149・150）

直口の壺に似たタイプで，端部をヘラで切り放しただけの簡単な調整痕をもつものである。壺Ｏ類とは端部の調整方法が異なり，口端部が波打っているものが多い。口径30㎝未満のものもここに含めた。口径の割に体部が張り，他の大型甕とは違った器形になると思われる。本来は壺として扱うべきかも知れない。７点出土している。口径は36㎝（1023）から19㎝までばらつきがある。

口頸部は回転ナデ，体部は静止ナデを施しているものが多く，1020はほぼ全面にカキ目が見られ，頸部には部分的に縦あるいは斜め方向のハケ目が残っている。1022の体部内面



第179図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕47）Ｓ＝1/4



第180図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕48）Ｓ＝1/4

は無紋の当て具痕が顕著に残る。1019の頸部外面には細い波状紋が１帯巡る。波状紋の振幅の狭いところと広いところが同時に存在する。1023の頸部外面には，斜め方向のヘラ圧痕が並んでいるが，装飾を意識したものかどうか不明である。口端部に補修痕がある。

その他の土器

大型甕の口縁部以外の特徴的な土器片についてここで記す。

突起（第179図－1017・1018）

1017は肩部の破片で乳状突起をもつ。復元想定図のため２個表現したが，現存部には１個しか残っていない。肩の張りが強い体部の頸部寄りに乳状突起を貼り付けており，外面に平行タタキ目，内面に無紋の当て具痕がよく残っている。

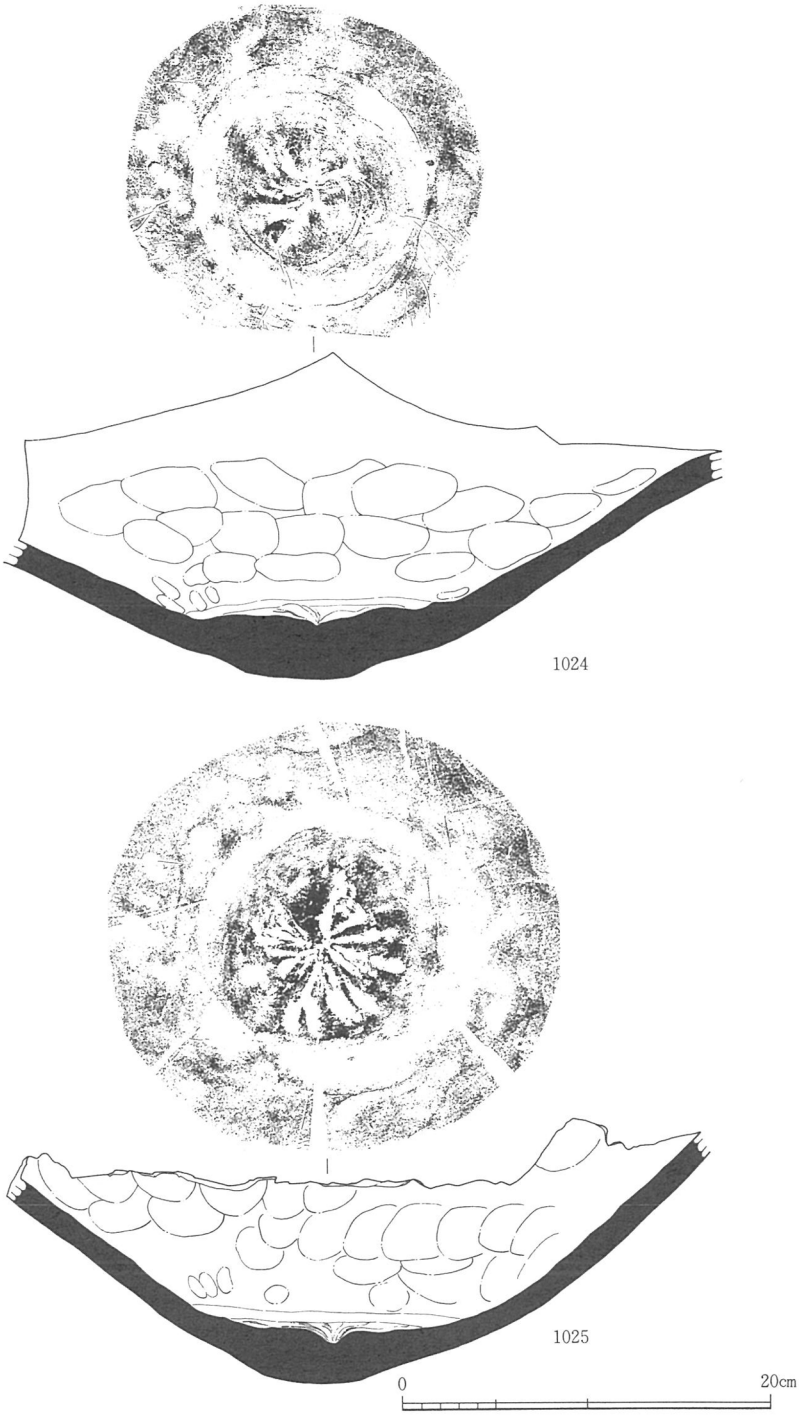
1018は肩部に環状乳を貼り付けた小片で，突起の向きなどは特定しがたい。大量にある大型甕体部片で突起をもつものはこの２点だけである。

底部（第181・182図，図版151）

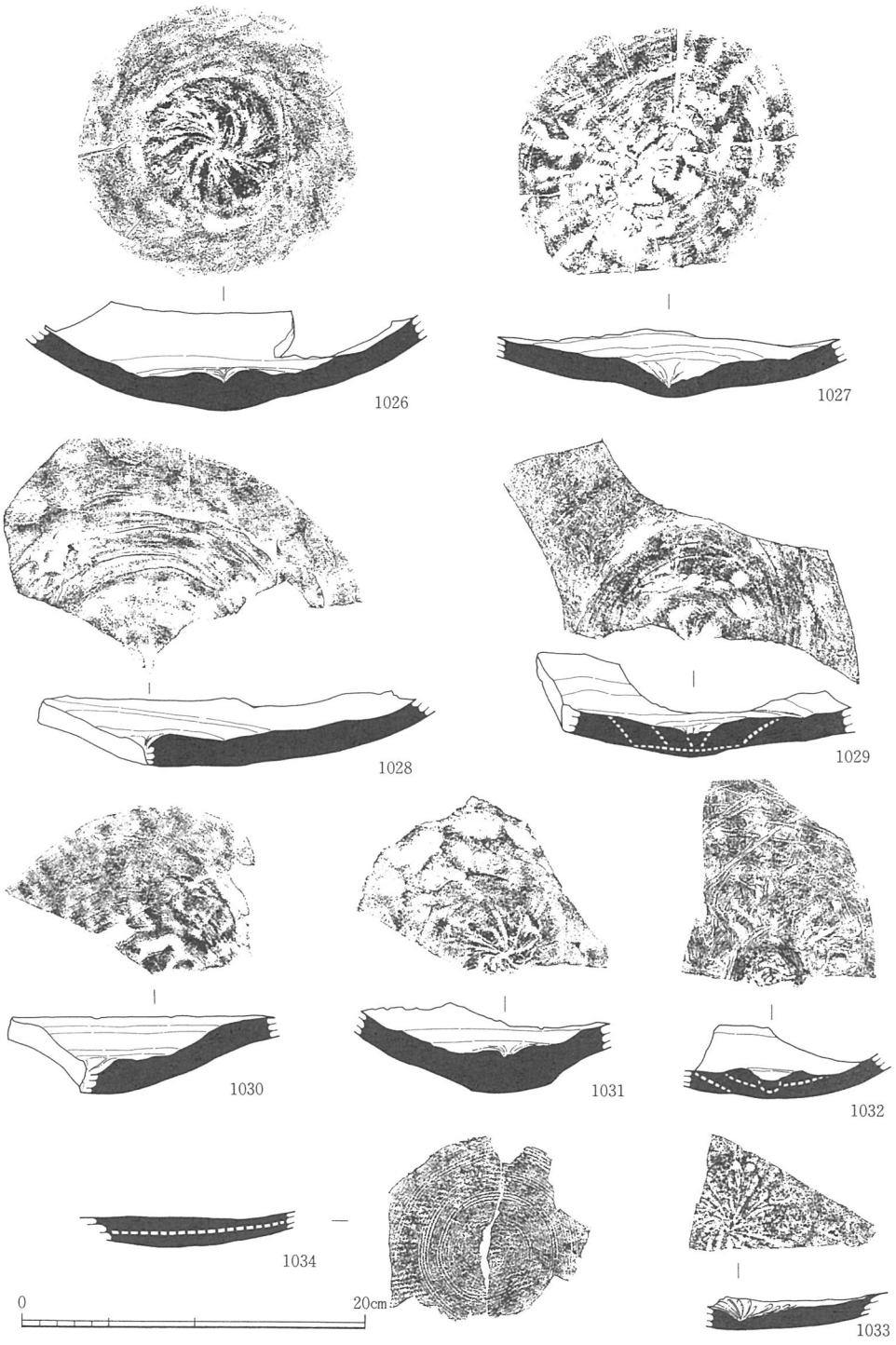
大型甕の底部近くは，別記の焼き台あるいは870に見られるようなすでに焼き損なった甕の体部などを再利用した焼き台の当りになるため，２・３カ所がしばしば大きく凹んでいる。そのため底部付近とは判断できても，確実に底部の中心になる部分を特定できるものは少なかった。底部を特定できたものは完形に復元できた土器の他，シボリ目の底になるもの10点ほどと，同心円状になるカキ目の中心が確認できた１点のみで図示したものがほとんど全てである。そのことは600個体に上る大型甕のほとんどの底部の作り方が，体部の作り調整手法と変わっていないことを示しており，大型甕の点数から見てＴＧ232号窯灰原出土須恵器と陶質土器との接点を語るひとつとなる。

1024～1033はシボリ目をもつ底部である。底部の先端が少し尖り気味になる1024・1025・1030・1031と体部下半と同じようなカーブをもつ1026・1028・1029・1033などがある。シボリ目は右回りに渦を巻くもの（1024・1030）と左回りに渦を巻くもの（1026・1031），放射状に広がるもの（1025・1033）がほぼ同数ある。1026は直径10㎝ばかりの左回りの円盤の外側では逆に右方向に粘土が捻れており，1028のように外側の粘土継ぎ足しの部分に薄く粘土をカキならしたもの，1031のように押圧痕を顕著に残すものなど体部への移行の仕方も変化に富んでいる。1032ではシボリ目の底の中心近くが環状に盛り上がっており，その中心にさらに粘土の小塊を充塡している。シボリ目の中心に粘土の小塊を充塡したものは1029でも観察された。

1034は平行タタキのあとカキ目を加えたもので，カキ目の円弧の中心が１点にあること



第181図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕49）Ｓ＝1/4



第182図　ＴＧ232号窯出土須恵器（大型甕50）Ｓ＝1/4

から，底部と判断したものである。最終調整の外見は後に作られる横瓶や提瓶の体部の調整に似ている。二重に粘土が貼り合わされており，外面が静止ナデによる最終調整であったら，底部とは判断できなかったであろう。

記述順序が逆になったが，項の終わりに口径の分布頻度と頸部の形状分類について記すことにする。

口径について

個別の分類項目では触れてきたが，各類別によって口径に微妙な差がある。推定復元に不安定な小片を除き，ほぼ誤りなく口径復元ができる約300点のデータをもとに記す。

口縁分類Ａ類では口径が50㎝・45㎝・40㎝前後になるものが多く，その分布密度でみれば45㎝前後のものがもっとも優位である。Ｂ類ではＡ類よりも口径が大きくなる傾向があり，55㎝・50㎝・45㎝前後のものが多く，50㎝前後のものが優位である。Ａ類とＢ類ではＢ類の方がおよそ５㎝ほど大きい傾向にある。これは甕の全体形にもある程度比例すると考えられ，Ｂ類の方がＡ類よりも大型になると考えられる。同じＡ類でも凸帯分類によって少し傾向が異なる。Ａ－１類では口径38㎝以下のものが約190点中40点余り，23％余りを占めるのに対し，Ａ－２・３類では口径38㎝以下のものは44点中４点で10％程度である。

頸部の形状について

頸部の形状すなわち口頸部の立ち上がり方について，山隈窯など北部九州の大型甕は陶邑の初期須恵器（ＴＫ73号窯など）に対して，口頸部があまり開かず立ち上がる傾向にあり，それが地域差ひいては時間差を示すとされていた節がある。ＴＧ232号窯灰原では両者が混在している。口頸部の立ち上がり方については，口縁部付近の反り具合によって観察者の主観が大きく影響すると思われるので，単純な数値化を試みた。体部との接合の関係で頸部の形状に若干の変化があると考えられるので別に詳論の機会をもちたい。とりあえず，その方法を紹介しておく。数値化の方法は単純で，口頸部の高さと，口縁部径と頸部最小径の差を比率化しただけである。口頸部の高さを１とし，頸部のすぼみ具合を数値化すると，口頸部が立ち気味とされていたものは１：0.41以下のものである。ＴＧ232号窯灰原出土大型甕のうち，約１/３は口頸部が立ち気味のものになっている。

（藤　田）

４．軟質系土器（第183・184図，図版152）

ＴＧ232号窯の灰原からは，量的には少ないが半島系の日常土器である軟質系土器が出土している。出土した主な器種には，平底鉢，長胴甕，堝，甑があり，以下器種毎にその特徴を示す。

平底鉢（第183図－1035～1039，図版152）14点〈口縁部・底部〉

平底鉢と認識できる破片は14点出土しているが，全体器形が把握されるものは少なく，口縁部～胴体部の上部片を中心に図示している。

器形・調整の特徴は，①短く外反させる口縁端部は面をもっておさめ端面は凹線状にくぼむ，②胴部の張りが小さい，③外面調整はナデ調整が多い，④底部付近は静止ヘラケズリで仕上げるなどがあげられる。ただ，外面調整の特徴については，器面の摩耗したものも多く曖昧である。また，ほぼ同時期と考えられる393－ＯＬ（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』で報告）出土品の外面調整にはカキ目やタタキ目を残存したものが多くみられ，当灰原出土品の中にもナデ以外の調整で仕上げるものが含まれている可能性は高い。

胎土は，細かい砂礫粒を含む特徴を有するが，これは通有軟質系土器で顕著に認められるものである。焼成は酸化焔焼成のみによるためか，軟質で色調は赤褐色や淡褐色を呈するものが多い。

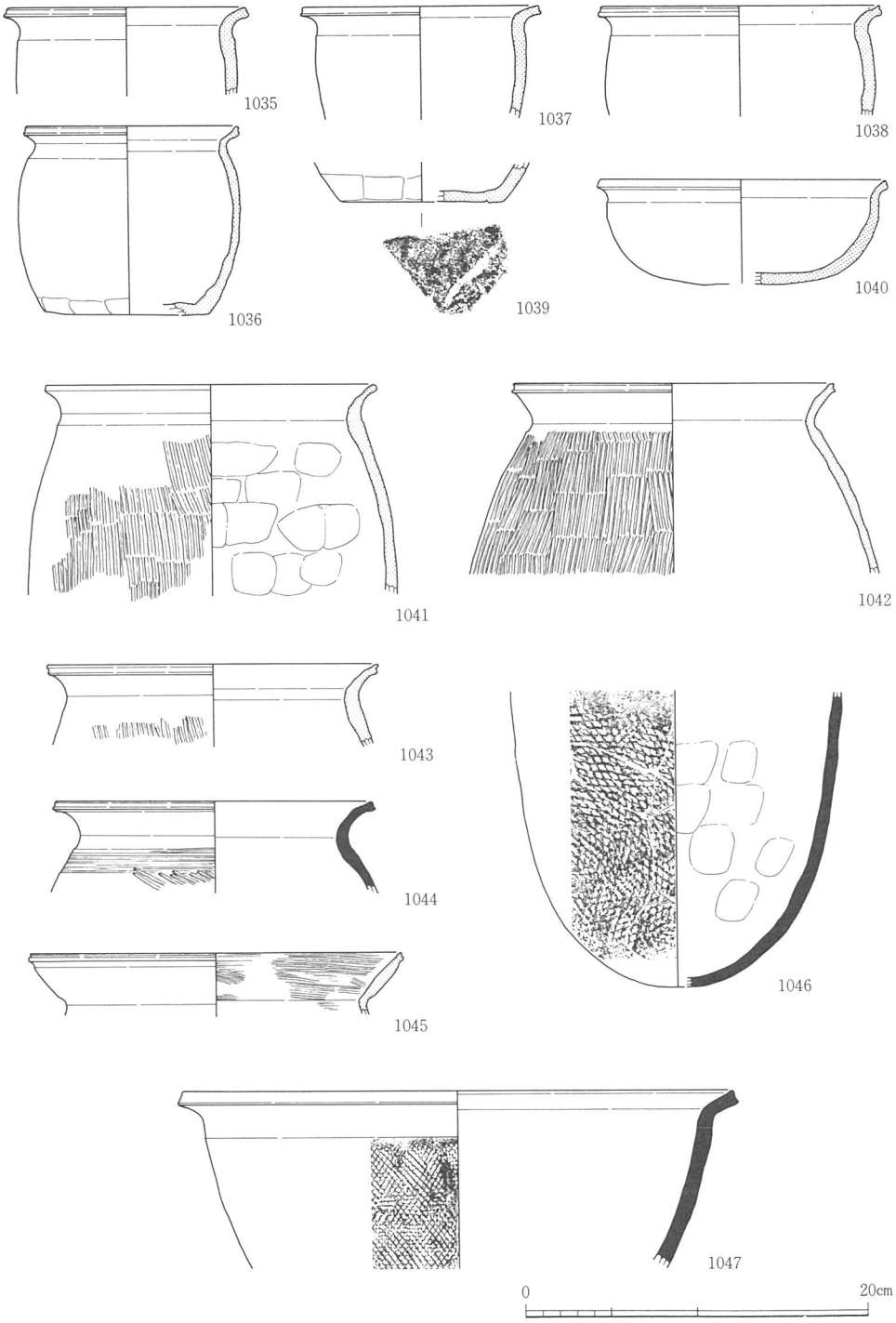
浅鉢（183図－1040，図版152）１点

底部に丸みを有する浅鉢である。口縁形態，調整，胎土，焼成の特徴は平底鉢と共通する。また，図示していないが底部付近は部分的に静止ヘラケズリで仕上げている。

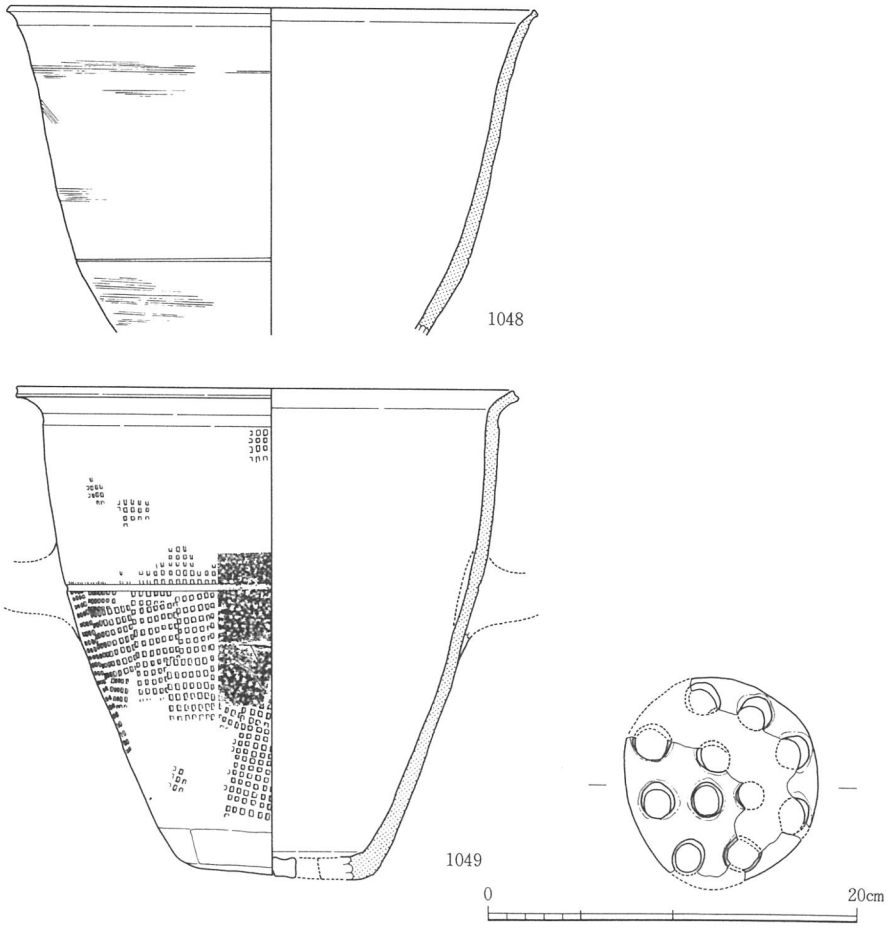
長胴甕（第189図－1041～1046，図版152）17点〈口縁部〉

口縁から胴部にかけての小破片ではあるが，胴部がラグビーボール状に大きく膨らむもの（1042）と膨らみの少ないもの（1041・1043・1044・1046）に分けられ，全体の出土は後者の形態のものが多いようである。口縁端部は，ほとんどのものは面をもっておさめ，端面はナデにより凹線状にくぼむ。胴部は，外面に平行タタキや格子タタキ目をそのまま残し内面は無紋の当て具痕が部分的に残存するものもあるが多くはナデ消している。また，当灰原では確認されていないが，393－ＯＬ（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』で報告）に類例のある螺旋状沈線を巡らせたもの縄席タタキのものなども焼成されていた可能性は高い。

胎土は平底鉢同様，砂礫粒を含むものが多い。焼成は軟質のもの，色調は褐色を呈し充分な還元焔焼成が行われていないが硬質に仕上がったもの，完全な還元焔焼成により硬質で青灰色を呈するものの三者が混在している。



第183図　ＴＧ232号窯出土軟質系土器（平底鉢・長胴甕）Ｓ＝1/4



第184図　ＴＧ232号窯出土軟質系土器（甑）Ｓ＝1/4

堝（第183図－1047）２点〈口縁部〉

小破片のため片口部の有無は不明である。全体的に器壁は厚く，胎土には砂礫粒を多く含んでいる。焼成は還元焔焼成により硬質で青灰色に仕上がっている。

甑（第184図－1048・1049，図版152）12点〈口縁部・把手・底部〉

甑も，把手（４点），底部（５点）の破片を含め12点出土しているが，全体が把握できるものは少なく，２点を図示した。1049は，口縁部を短く外反させ端部は面をもっておさめる。胴体部は比較的長細い逆台形を呈し，底部の蒸気孔は小円孔を多数配するものである。胎土は砂礫粒を多く含み，焼成は酸化焔焼成により赤褐色で軟質に仕上げる。1048は口縁の外反は緩やかで，胴体部は下半部で小さく屈曲させる。調整は外内面ともナデで仕上げ，胎土中の砂礫粒は1049に比べ少ない。焼成は軟質で色調は淡黄褐色を呈する。

５．窯道具（第185～187図－1050～1056，図版153～155）

ＴＧ232号窯では，窯体内の土器を固定させるために使用された「焼き台」と推定される製品が11点出土している。これらの，焼き台はその形状からＡ～Ｄ類に分類される。

Ａ類（1050・1051）２点

円環状を呈する須恵質製品ある。法量は直径約６㎝，内径約3.5㎝，高さ約２㎝を測る。調整は外面はナデ調整で，内面はヘラケズリとナデ調整で整えているが，中央付近には粘土紐の痕跡が観察される。この円環状のものは，時期は下るが大阪府大阪狭山市の窯跡に類例があり，甕などの焼き台として推定されている（大阪府史第１巻参照）。

Ｂ類（1052）２点

積み重ねた粘土ブロックの外面を，指オサエやナデ調整により平坦に整えたものである。ただ，成形・調整の程度は，部位によって異なっている。製品が接地する斜面部や天井部は比較的ていねいに整え，側面や底面は粗い成形・調整である。焼成は還元焔焼成により須恵質に仕上がっているが，道具として一度焼き上げたものか，焼き台として使用時に還元状態になったものかは不明である。またこの焼き台の胎土中には，砂礫粒が多く含まれているが，意図的なものかは不明である。

Ｃ類（1053～1055）６点

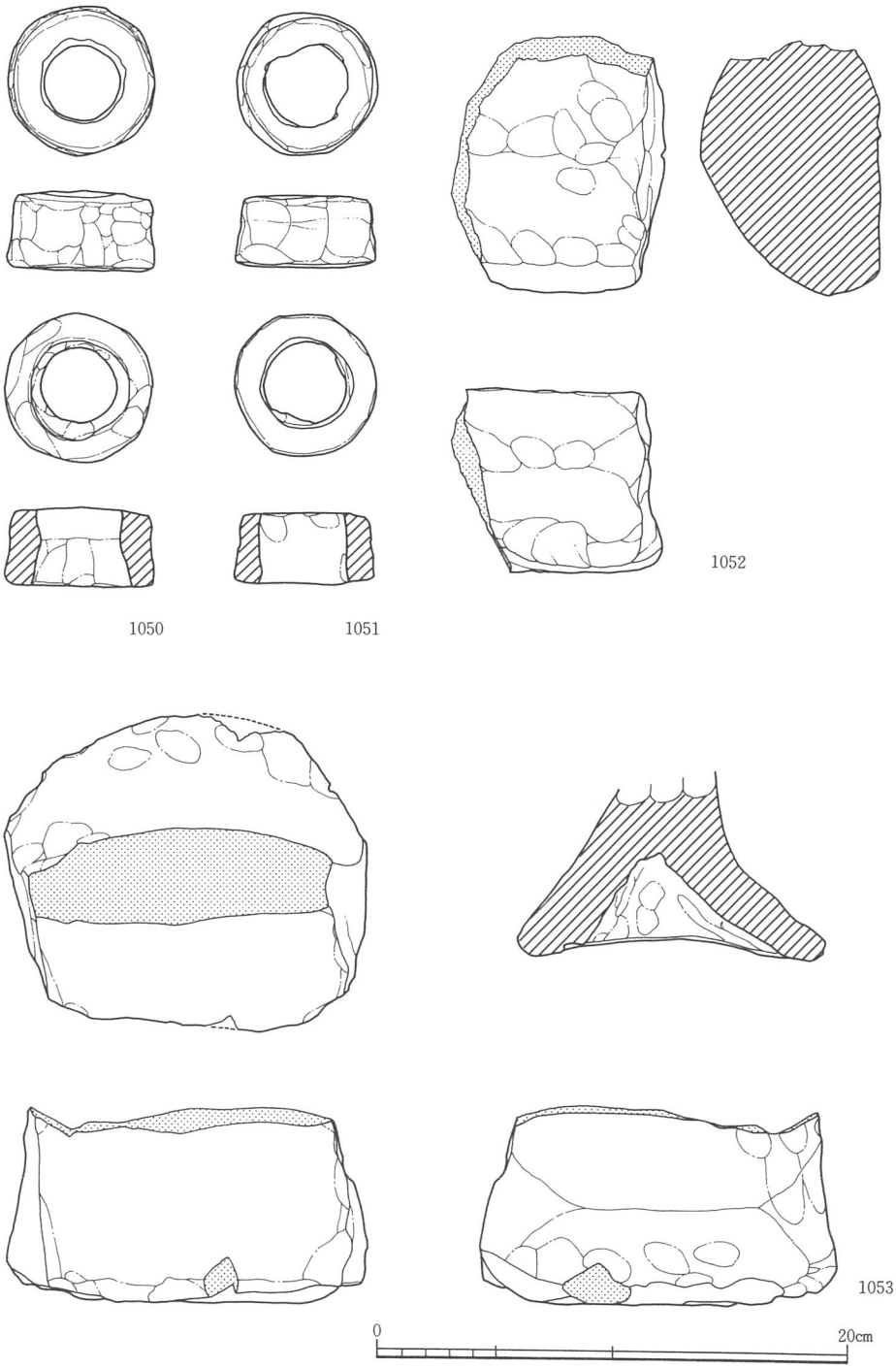
支脚状の須恵質製品で，出土数は最も多い。製品が接地する表面（傾斜面）は，ナデ調整により比較的ていねいに平滑に仕上げるが，側・裏・底面は指オサエの痕跡が残存し粗い調整である。また，側面・裏面には自然釉の付着が顕著に認められるが，表面は製品が接地していたためかほとんど付着していない。さらに，表面には製品が融着したため，分離させた痕跡も認められた（第186図濃い網掛）。

Ｄ類（1056）１点

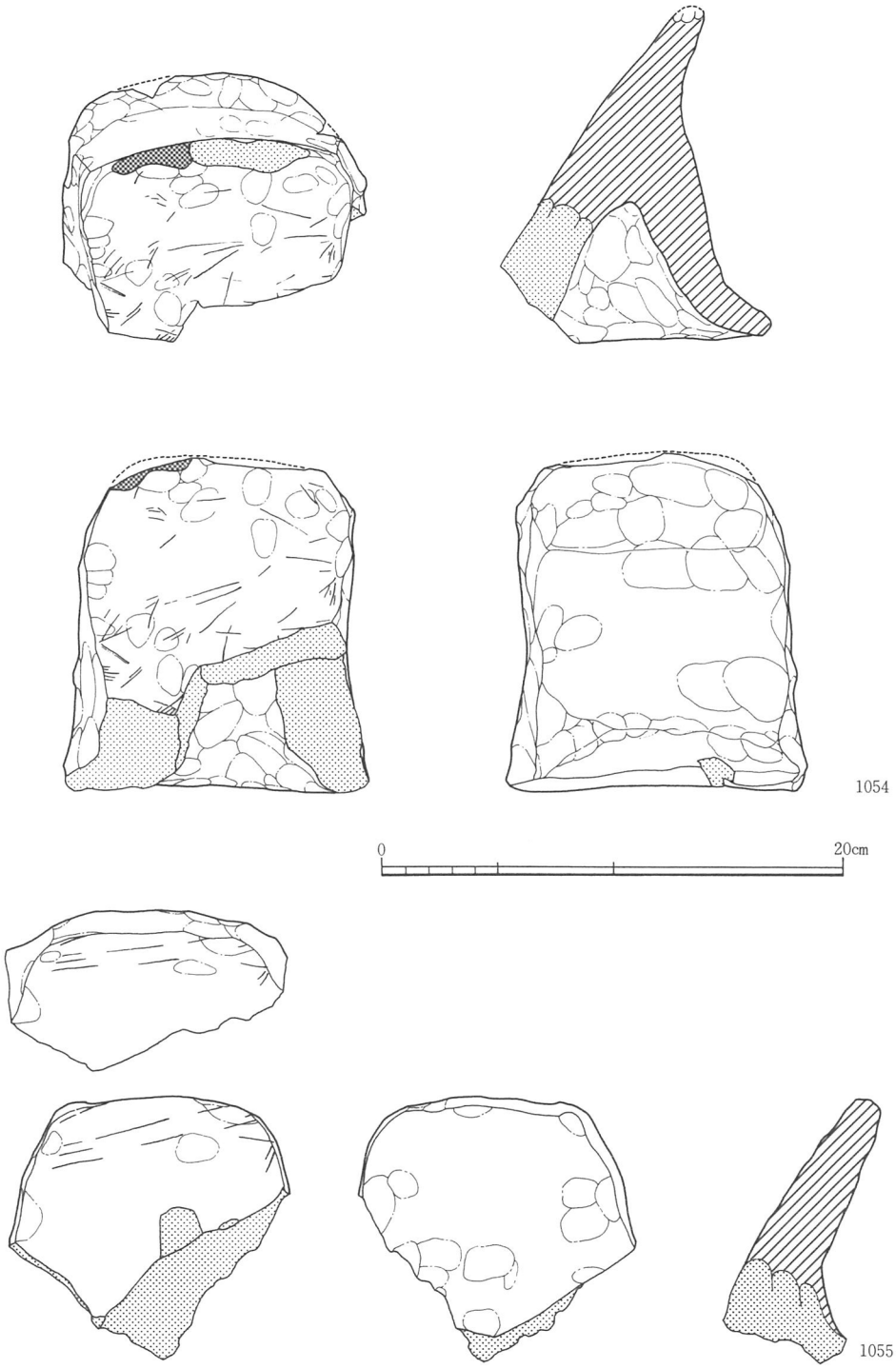
台形を呈する粘土塊の天井部に，甕の体部片を重ねて製品との接地する傾斜面を作り出している。粘土塊は，他の焼き台に比較すると大型で，長軸22㎝，短軸17㎝，高さ13㎝を測る。

その他

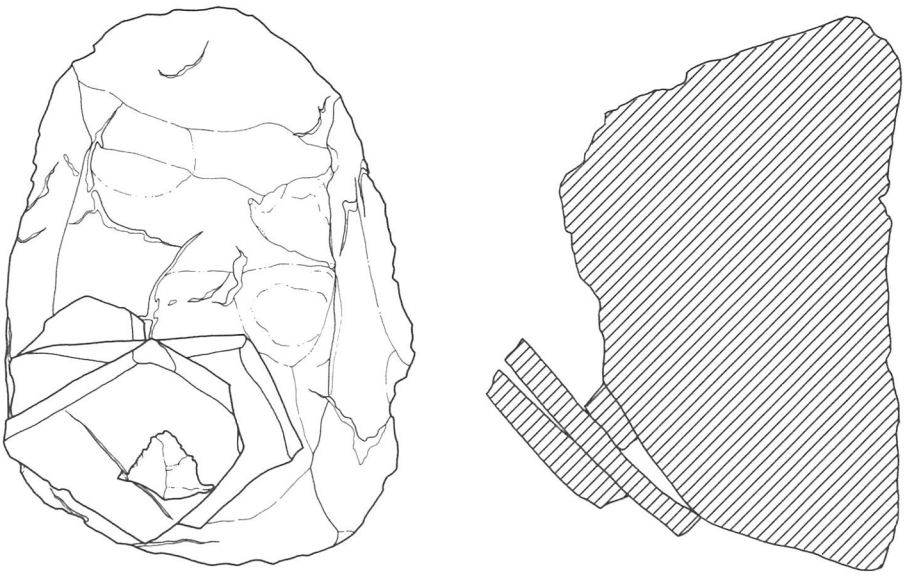
図示していないが，灰原では明確な「焼き台」として成形されていないが，製品を固定するための「詰め具」と考えられる大型甕の体部片が数多く出土している。例を示せば，体部片を２～３枚重ねたもの，体部の断面まで焼けるなど明らかに二次焼成を受けたもの，表面が焼成後に打ち欠けたものなどである。



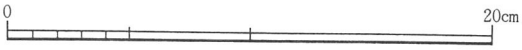
第185図　ＴＧ232号窯出土焼き台１　Ｓ＝1/3



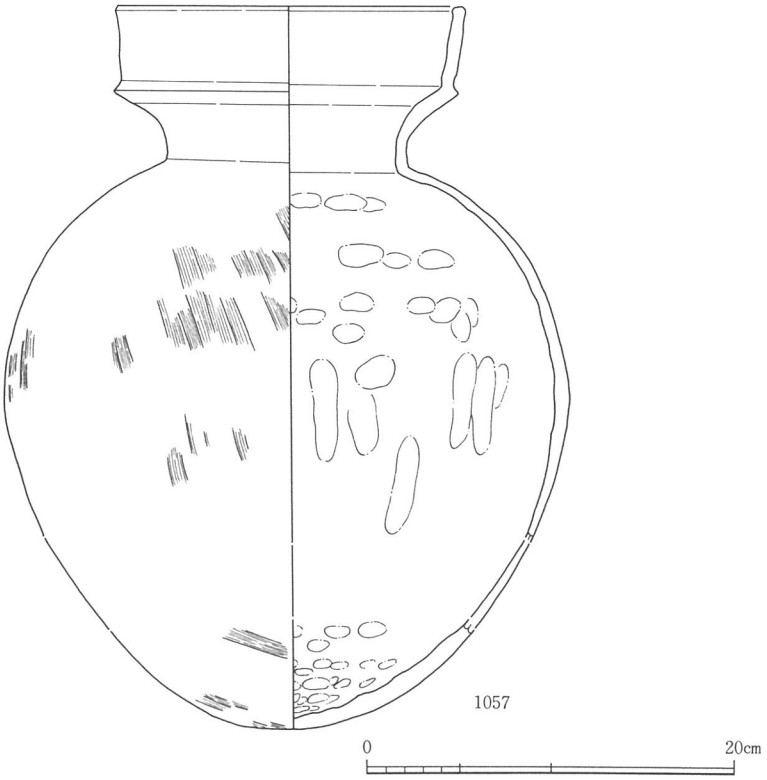
第186図　ＴＧ232号窯出土焼き台２　Ｓ＝1/3



1056



第187図　ＴＧ232号窯出土焼き台３　Ｓ＝1/3



第188図　ＴＧ232号窯出土土師器（壺）Ｓ＝1/4

６．土師器（第188図－1057，図版155）

灰原中から壺が１点出土している。出土層位は灰原の中では下層に当たり，破片は一箇所で集中して出土している。

出土した壺は，いわゆる二重口縁壺である。口縁部は，大きく開く頸部からほぼ直立してのび，端部は内側に若干ではあるが肥厚させる特徴を有する。胴体部については，底部まで接点がなく確実ではないが，復元によると，上半部は半球形を呈するが，全体的にはやや胴長になると推定される。調整は残存状況が悪く観察され難いが，外面にハケ目調整，内面には指オサエや粗い指ナデ調整が部分的に残存している。また，胴体部には黒斑も観察される。

当初，この壺は灰原からの出土のため須恵器壺Ｇ類の焼成不良品の可能性も指摘された。しかし焼成状態，胎土，外・内面の調整は通有の土師器にみられるものであり，壺Ｇ類の特徴とは明らかに異なっている。この窯の操業時に，窯場近くで使用されていたものが，投棄されたものと推定される。

第４節　ＴＧ232号窯灰原下層の調査

第１項　概要（第68図，図版30）

ＴＧ232号窯の灰原は丘陵２の斜面地から２－ＯＬ（谷地形）にかけて形成されているが，今回は，灰原が形成される以前の状況を把握するため，下層部分の調査もあわせて行っている。

これまでの調査では，２－ＯＬの堆積層から中期～後期の弥生土器片の出土が確認されており，下層に当期の遺構あるいは包含層の広がりが予想された。そのため調査は，灰原の広がる斜面地を中心として，下層遺構や遺物の確認に重点を置いて行っている。以下，下層の状況について記述する。

斜面地の層位関係は，第68図のＴＧ232号窯灰原断面図にあわせて図示している。古墳時代中期の灰原ＴＧ232号窯に伴う灰原の下層には，厚さ約10㎝で薄く堆積した第59層の存在が確認された。この層は灰原形成時の旧表土層に当たり，黒褐色を呈し有機物を含んでいた。また，この第59層（旧表土層）は，２－ＯＬほぼ全域に広がることが確認され，灰原形成の直前まで谷の斜面地やその周辺が湿地化していたことが予想された。

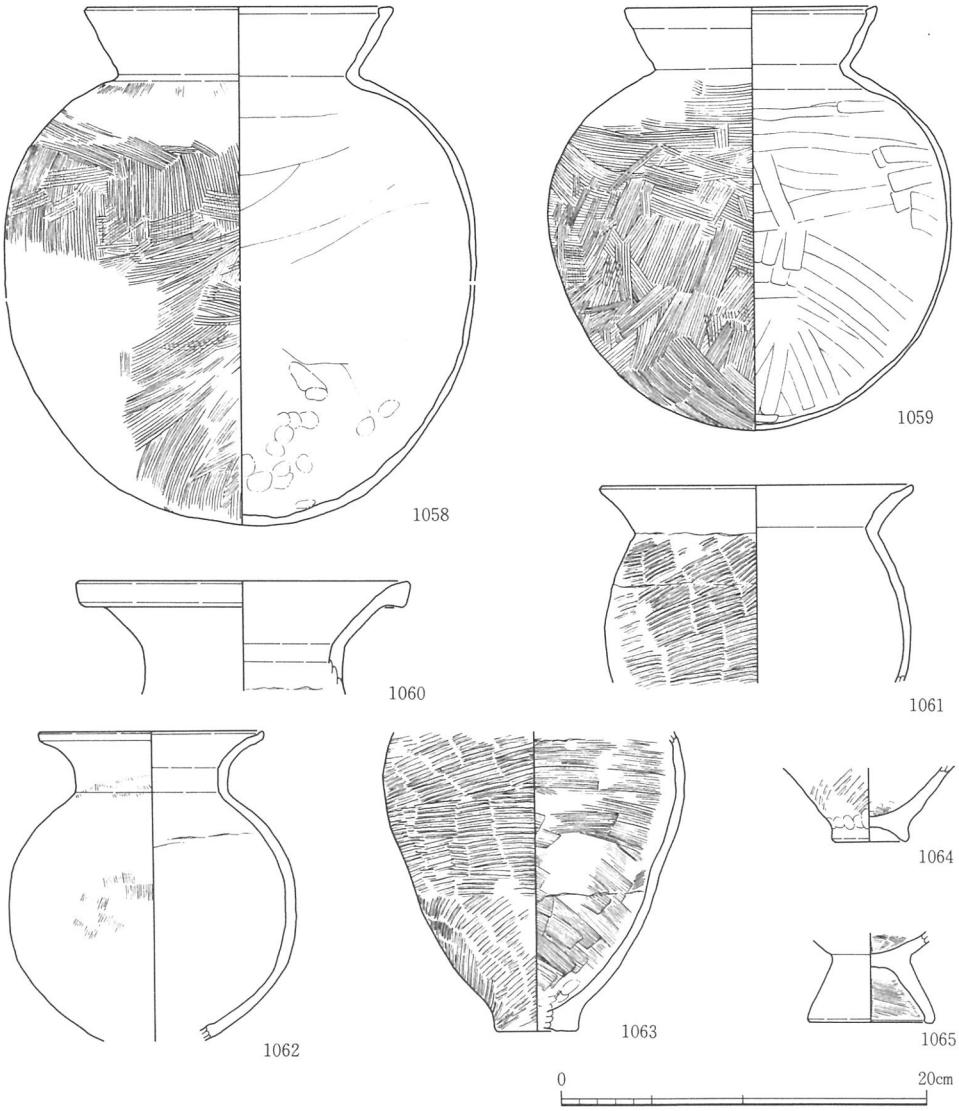
堆積層の時期は，層位関係からはその下限は灰原の形成直前とすることができ，上限は谷部で第59層の下層に弥生時代後期の砂礫層が確認されたことより弥生時代後期以降とされる。さらに出土遺物が参考となる。第59層では遺物は出土していないが，当層に接するように直上面から，いわゆる布留式と呼称される古墳時代前期に属する甕が，２個体（1058・1059）まとまって出土している。この土器の出土状況からは，これらの土器が投棄された古墳時代前期には当層が形成されていたことがうかがえよう。

第２項　出土遺物（第189図，図版155・156）

1058・1059が灰原下層の第59層直上面から出土した甕である。

1059は完形品に復元された。口縁部は体部から「く」の字状にのび，端部は肥厚させ内傾した端面を有する。体部は球形を呈し，外面はハケ調整で仕上げる。ハケ目は上部は横方向，下部は縦・斜め方向である。内面はケズリにより全体を薄く仕上げるが，頸部付近は器壁は厚く横ナデで仕上げている。

1058は体部中央に接点のない復元品である。1059に比較して大型で，口縁部の器壁も厚い。体部は球形からやや胴長の卵球形を呈する。外面はハケ調整で仕上げるが，上部付近



第189図　ＴＧ232号窯灰原の下層出土遺物　Ｓ＝1/4

は横ナデを施している。内面はケズリ調整により全体を薄く仕上げるが頸部付近は横ナデである。なお，これら土器２点は，層位関係からもＴＧ232号窯の須恵器との時期関係を示す良好な資料であり，時期については第Ⅶ章で検討を行う。

1060～1065は，第59層より下層の砂礫層から出土した弥生土器である。1060・1062は広口壺で，1062の体部には部分的にハケ目が残存する。1061・1063・1064は甕，1065は台付鉢である。他にも図示していないが長頸壺も出土している。遺物の時期は，弥生時代後期に比定される。

第Ⅵ章　ＴＧ231号窯の調査

第１節　概要（第55図，図版31）

大庭寺遺跡では，今回報告したＴＧ232号窯の他に，ＴＧ231号窯と呼称される初期須恵器窯を検出している。この窯も，ＴＧ232号窯同様に窯体は残存していなかったが，灰原を確認したことによって窯の存在が明らかとなった。以下，簡単に概要を示すが，窯の詳細な正報告については『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』の中で予定している。

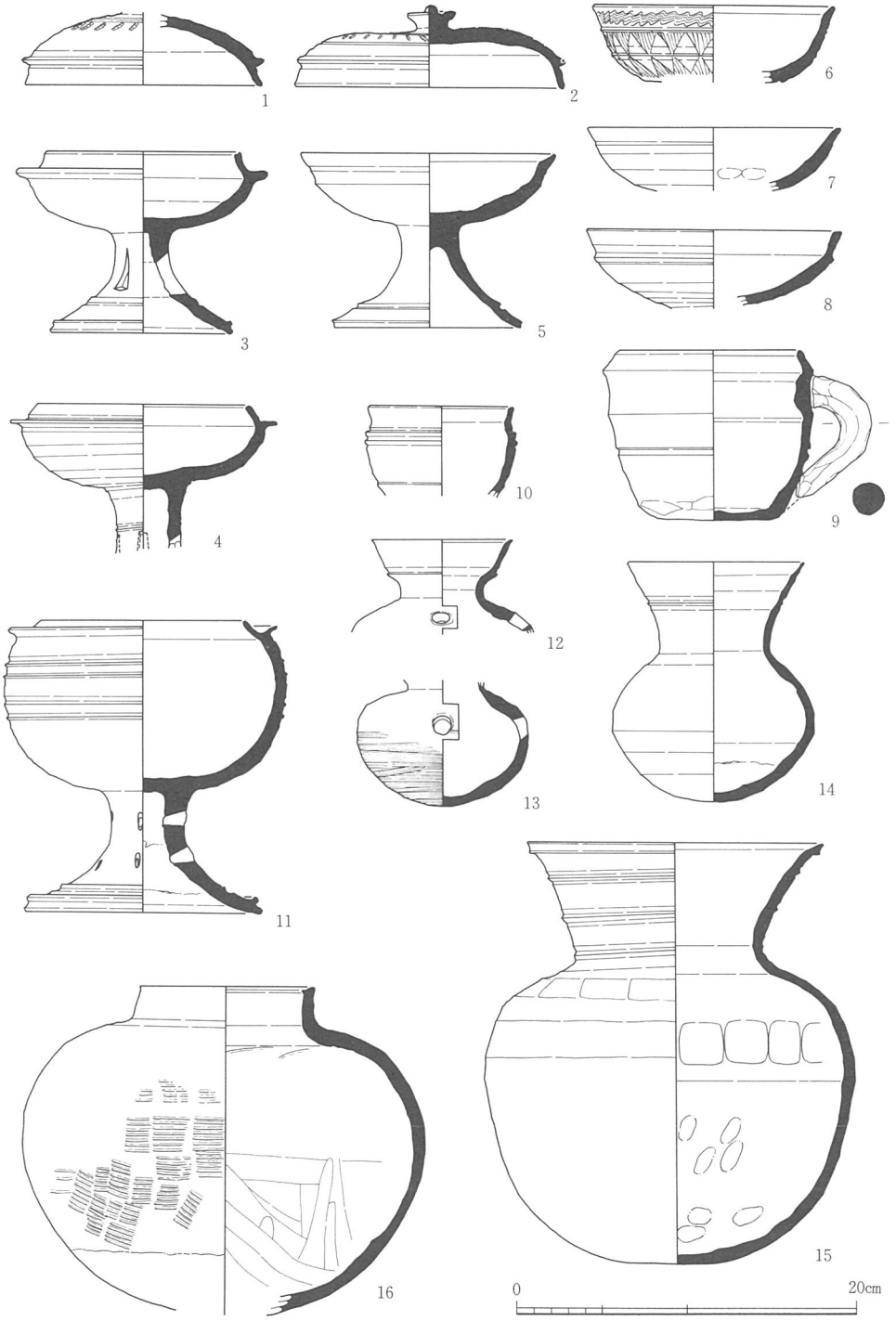
ＴＧ231号窯は，ＴＧ232号窯と同じ丘陵斜面地（丘陵２）に立地する。ＴＧ232号窯との位置関係は，ＴＧ232号窯から南に約５ｍの距離に位置し，近接して２基の窯は構築されていた。しかし，地形を観察すると，ＴＧ232号窯とＴＧ231号窯の灰原間には丘陵が小さく舌状に張り出し，２基の窯の灰原を分離させており，微地形を巧みに利用して窯が構築されたことがうかがえた（第55図参照）。

前述したように窯体は削平されていたが，灰原は良好な状況で検出された。扇状に広がる灰原規模は最大幅10ｍ，最大長５ｍ，最大厚0.5ｍで，ＴＧ232号窯の灰原に比べ小規模である。また，遺物の出土状況も異なっていた。ＴＧ232号窯では完形品に復元されるものやそれに近い大型破片の出土が顕著にみられたが，ＴＧ231号窯ではこのような大型破片が出土する傾向はなく，ほとんどの破片は小破片であった。

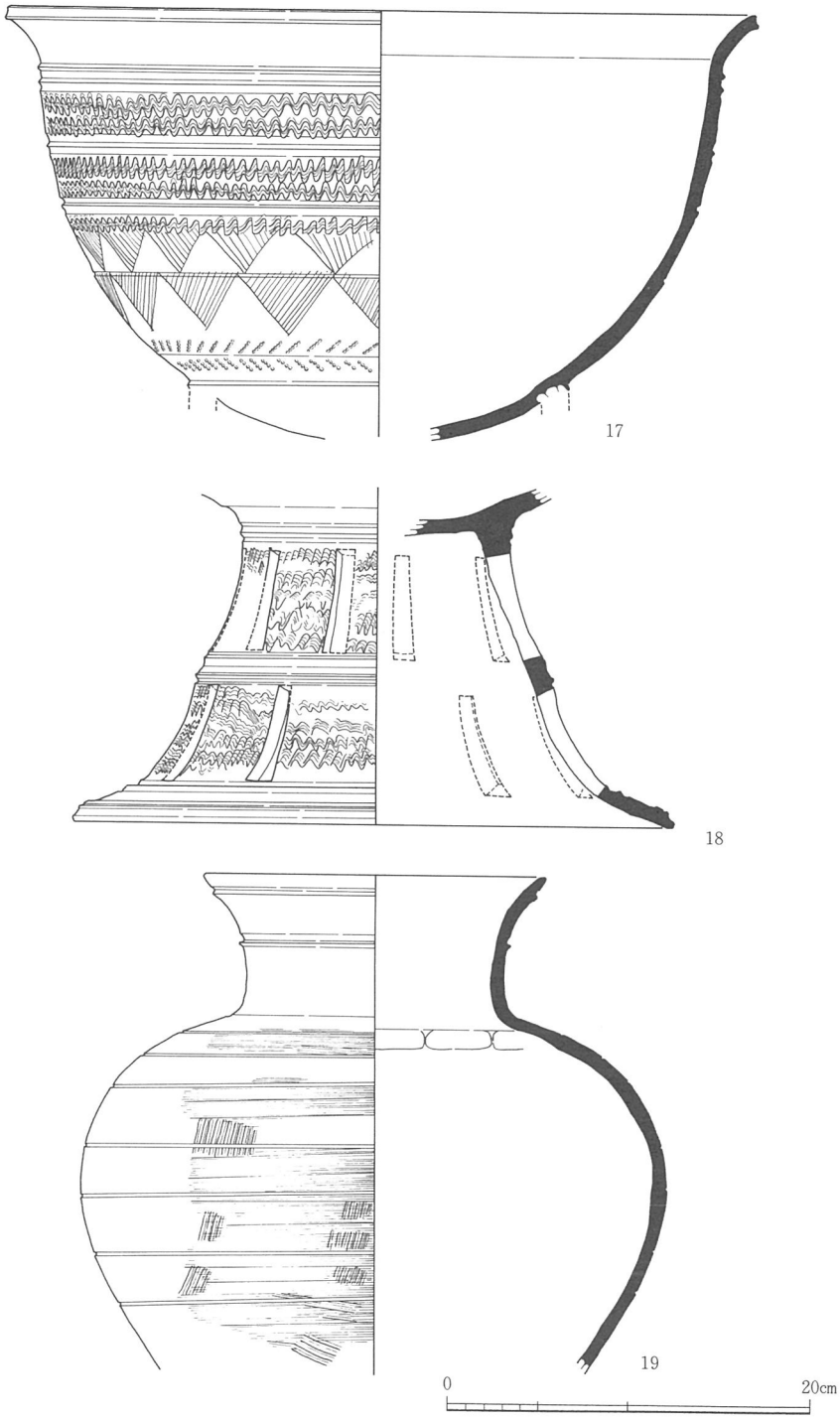
第２節　出土遺物（第190～192図）

灰原からは，数多くの須恵器や数は少ないながらも軟質系土器が出土しているが，ここでは代表的な須恵器を数点図示している。以下，簡単に概略を示しておく。なお，図示したものについても『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』で正式報告するため，今回は仮の土器番号で示している。

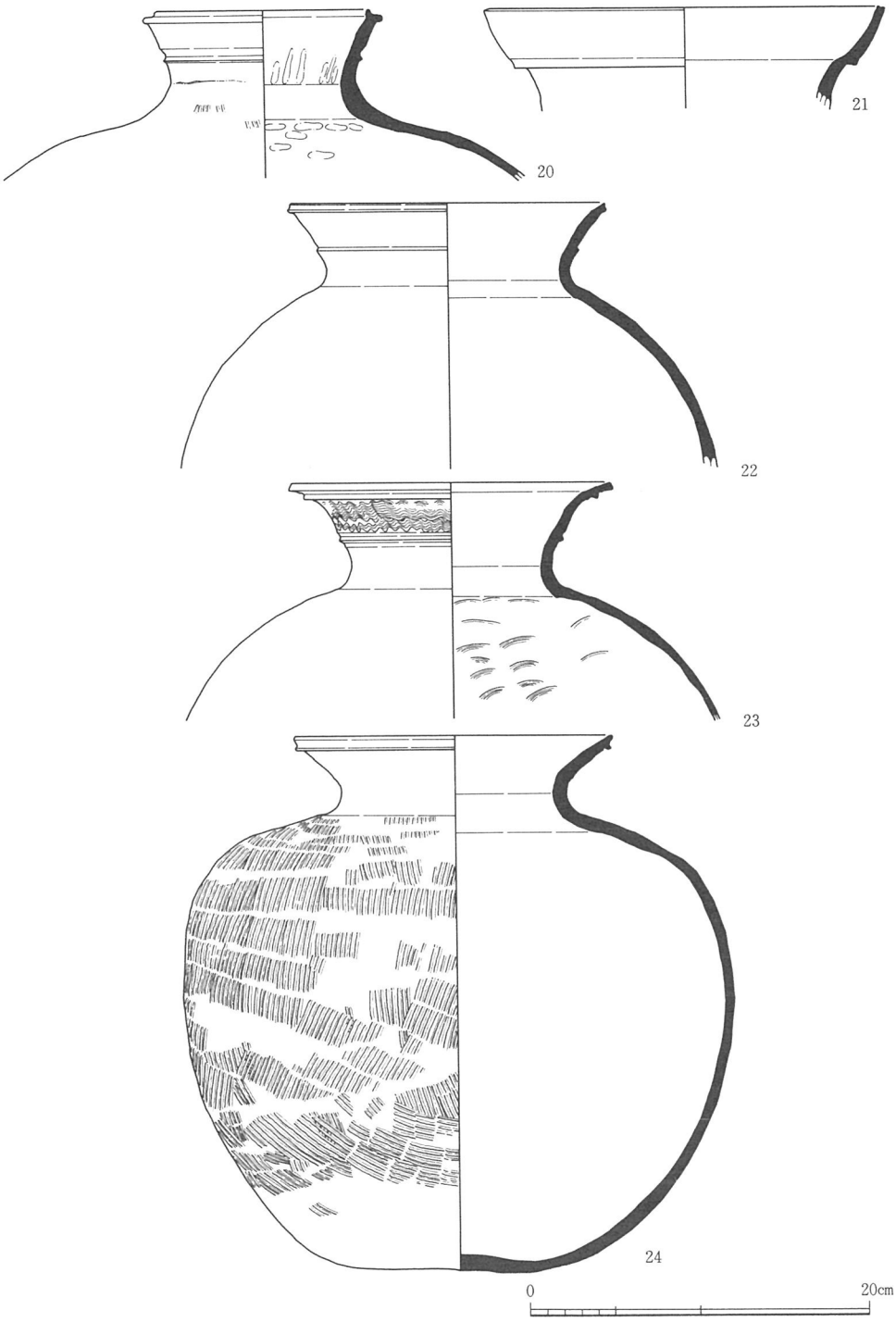
ＴＧ231号窯出土須恵器の器種構成や形態の特徴は，基本的にはＴＧ232号窯と同一で，ＴＧ232号窯と同型式として認定できる。しかし，若干異なる部分も存在し注目される。例をあげれば，脚台付鉢（11）の存在，口縁部に平坦面をもつ無蓋高杯（５）の存在，口縁端部に面をもち，紋様帯（鋸歯紋帯）を沈線によって区切る鉢形器台（17）の存在などである。現在は詳細な検討を行っていないので，これらの差異が何に起因するものかは明確にしていない。



第190図　ＴＧ231号窯出土須恵器（１）Ｓ＝1/4



第191図　ＴＧ231号窯出土須恵器（２）Ｓ＝1/4



第192図　ＴＧ231号窯出土須恵器（３）Ｓ＝1/4

第Ⅶ章　遺構・遺物の検討

今回の報告は大庭寺遺跡の中でも，一括性の高い多量の初期須恵器や軟質系土器が出土したＴＧ232号窯の灰原と１－ＯＬ土器溜りが中心である。特に，ＴＧ232号窯の初期須恵器資料には，陶質土器の系譜を色濃く反映したものが多く含まれ，須恵器生産開始の問題などを考える上で良好な資料となった。さらに，ＴＧ232号窯に比べると時期は下るが，１－ＯＬ土器溜りの遺物も，陶邑の発展，成立を考える上では良好な資料[(1)]となっている。

ここでは，質・量共に恵まれたこれらの資料の検討を中心に行い，須恵器生産の様々な問題について考える。なお，検討項目は，調査ならびに整理担当者がテーマを掲げて，それぞれで行っている。そのため，整理の視点や各項目から導かれる結果についても，それぞれで異なる部分がある。しかし，今回は統一した考えにまとめることなく，各担当者の責で，それぞれの考えを記述している。

第１節　ＴＧ232号窯の初期須恵器

第１項　ＴＧ232号窯出土初期須恵器の特徴

ＴＧ232号窯に伴う灰原から出土した最古段階の須恵器は，その出土数がコンテナ箱で約1400を数え，膨大な資料であった。これらの資料はその大半は小破片となって出土しているが，中には完形品に復元され，全体器形を把握できるものも多くみられた。また，灰原の残存状況も良好で，完全とは言えないが，当時この窯で焼成されていた器種構成も把握され，最も多く焼かれていた器は大型甕であったことも判明している。新技術によって生産が開始された須恵器，その中でも土師器では劣っていた貯蔵機能に優れた器，大型甕が重要視されたのであろう。

ただ，この大型甕は形態的特徴が単一的であり，形態変化にも乏しいため，ＴＧ232号窯の初期須恵器の特徴を明らかにするには良好な器種とは言い難い。一方，大型甕に比べると出土数は少ないが，高杯に代表される小型器種や器台，壺の形態的特徴はバラエティーに富み，その変化も捉えられ，特徴は把握しやすい。このような理由から大型甕の検討も必要不可欠ではあるが，まず，小型器種を中心として検討を行い，ＴＧ232号窯出土初期須恵器（以下ＴＧ232号窯出土初期須恵器はＴＧ232号窯と呼称する）の形態的・技法的特

徴を把握していく。

杯（第204図参照）

杯の出土点数はわずか４点で，当窯ではほとんど焼成されていないようである。

出土した杯のうち，Ｃ類（488）はＴＫ73号窯[2]などで出土している底部平底のいわゆる土釜形杯の系譜で捉えられる可能性のあるものである。しかし，１点のみの出土であること，立ち上がりが高く，蓋受部が極端に短いなどの差異もあり疑問は残る。

また，いわゆる土釜形杯の出土例は，大庭寺遺跡の中ではＩ区Ｅ調査区の包含層や１－ＯＬ土器溜り・56－ＯＲなどにあるが，いずれも器形の細部的な特徴は異なっている。Ｉ区Ｅ包含層出土杯の体部が深く直線的にのびる特徴はＴＧ232号窯と類似しており，56－ＯＲ・１－ＯＬ出土杯の立ち上がりや蓋受部の特徴はＴＫ73号窯やＴＫ85号窯[3]に類似した特徴が看取されよう。

Ｂ類については，陶邑の中でも出土例がない。

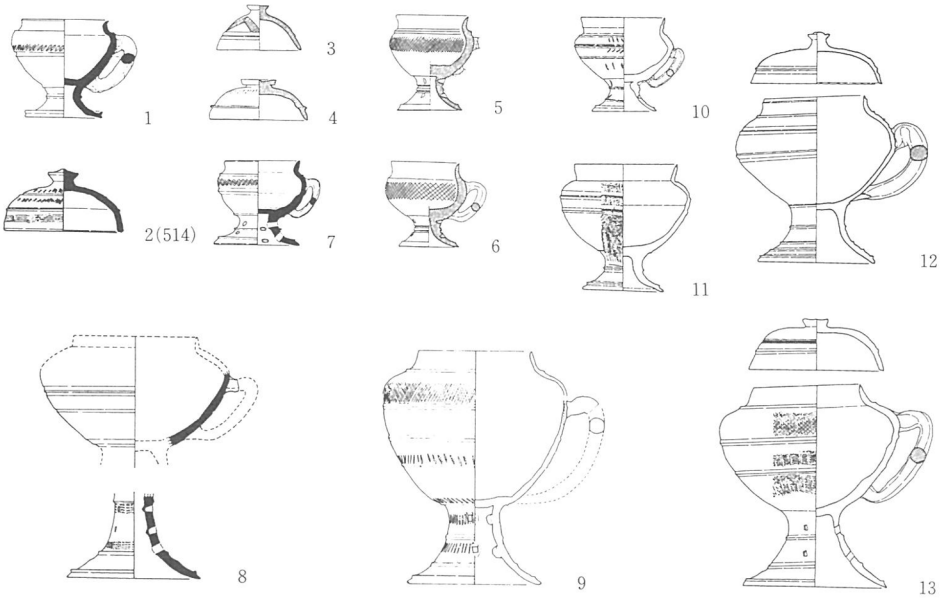
把手付椀

全体的な器形では直線的にのびるものと丸みをもつものが混在するが，両形態とも底部から体部上部にかけて大きく開かず，口径の割に器高が高い特徴を有する。口縁部は，外反もしくは屈曲して直立するもの，体部からそのままのびるものがあるが，いずれも短い。把手は，断面円形のものだけでなく板状のものが比較的多くみられる。このような形態の特徴は，陶質土器にもみられるものである。

技法的な特徴としては，底部付近の調整が注目される。495については部分的にヘラケズリが観察され強調して図示したが，ほとんどのものはヘラケズリの後ていねいにナデ調整で仕上げているようである。定型化した須恵器は，ヘラケズリ調整のみで，ナデ調整まで施すものはほとんどみられず，ＴＧ232号窯がよりていねいな調整によって仕上げられていることがわかる。また，把手の接合もていねいで，椀部を穿孔してその中に挿入するものもある。

有蓋脚付小型壺（第193図参照）

この器種は，陶質土器にも通有みられる器種である。大庭寺遺跡では，ＴＧ232号窯の他に393－ＯＬでも出土している。この２個体の特徴を示すと，まず小型品であることが



1　大庭寺Ⅰ区C 393－ＯＬ　3～6　大阪野中古墳　8　大阪持ノ木古墳（久半田方形墳）
10～13　東莢福泉洞53号墳主槨　2　大庭寺ＴＧ232号窯　7　福島南山田遺跡１号墳　9　広島池の内３号墳

第193図　有蓋脚付小型壺の比較　S＝1/6

あげられる。陶質土器では，韓国東莱福泉洞53号墳[(4)]などで小型品もみられるが，多くはこれらよりも大型品の出土が知られており，大庭寺遺跡の様相とは若干異なっている。ただ，実際には出土していないが，ＴＧ232号窯でも通有の大きさの製品に伴うと推定される蓋（514）も出土しており，小型品だけでなくやや大型のものも存在した可能性はある。

次に施紋状況，技法の特徴に注目してみる。ＴＧ232号窯は体部には紋様が施されていない，有紋の393－ＯＬでは紋様帯などを区画する凸帯が鈍いなどで，陶質土器に比較すると全体的に稚拙なつくりであることが看取される。

蓋

出土したほとんどは，高杯の蓋と考えられるもの（Ａ～Ｄ類）であったが，諸特徴には，陶質土器と多くの共通点が認められた。列挙すると，天井部は全体に緩やかな丸みをおびる，天井部と口縁部の境界には大きく張り出す凸帯を巡らす，口縁部は短い，つまみは頂部が円錐状に隆起するものがある，つまみ高は定型化以後のものに比べると高い，天井部は刺突紋や沈線によって飾られるなどである。さらに，蓋では焼成方法でも陶質土器との